

大正大学総合佛教研究所年報 抜刷
昭和 63 年 3 月 第 10 号

*Advayavajrasamgraha - New Critical Edition
and Japanese Translation (1)*

アドヴァヤヴァジュラ著作集

—梵文テキスト・和訳(1)—

"Annual of the Institute for Comprehensive
Studies of Buddhism, Taisho University"

No. 10 March 1988

密教聖典研究会

Mikkyo-Seiten Kenkyukai

(Study group for the Buddhist
Tantric Texts)

アドヴァヤヴァジュラ著作集

—梵文テキスト・和訳(1)—

密教聖典研究会

10世紀末から11世紀前半にヴィクラマンラー寺において活躍したと伝えられるアドヴァヤヴァジュラ (Advayavajra, 別名 Maitri pa または Avadhūti pa) は、顕密双方の教えに通じ、多くの著作を遺している。1927年、Hara-prasad Shastri は、当時 Nepal の Darbar Library に所蔵されていた梵文写本を用いて、アドヴァヤヴァジュラの著作 21 編を “Advayavajrasaṃgraha” のタイトルの下に校訂出版した (ただし、アドヴァヤヴァジュラの著作と確定しえないものも含む。また、作品の数え方には、問題が残る)。而来、多くの研究者によって取り上げられ、今日に至っている。しかしながら、Shastri の校訂本は多くの誤り、問題点を有しており、後述するように、古くは宇井伯寿氏、また近年では頼富本宏氏、あるいは、御牧克己氏によって、より正確なテキストを作成せんとする試みがなされている。

本研究会メンバー森口光俊は、1987年までに、National Archives Nepal 所蔵の、アドヴァヤヴァジュラの著作の梵文写本 3 本の写真を将来した。本研究会では、この 3 本、並びに東京大学図書館所蔵の梵文写本、さらにチベット大蔵経 sDe dge・北京両版を用いて、アドヴァヤヴァジュラの著作のより正確な梵文テキストを作成し、かつ和訳を付して、斯学の便に供せんと、昨年来作業を進めてきた。本稿はその成果を提出するものであるが、まず序文において、各写本・チベット語訳における、所在、題名の異同等を明らかにし、そのうえで森口光俊の担当による “Kudṛṣṭinirghātana” “Kudṛṣṭinirghātavākyatippinikā”, 高橋尚夫の担当による “Mūlāpatti” “Sthūlāpatti”, 前田

崇の担当による “Pañcatathāgatamudrāvivarāṇa” の梵文テキスト並びに和訳を挙げる。研究会においては、各担当が諸資料を用いて新たに梵文テキスト並びに和訳を作成し、それに対して参加者全員で検討を加えるという形で作業を行った。なお、テキスト中の偏には便宜上それぞれ通し番号を付した。

では以下にまず、使用写本・チベット語訳の略号一覧を挙げる。この略号は今後の発表の際にも共通して用いるものである。

刊本

Sh.: H. P. Shastri, “Advayavajrasaṅgraha”, Baroda, 1927, G. O. S. vol. 40.

梵文写本

N₁: National Archives Nepal 所蔵, Bṛhatsūcipatra vol. 1, p. 199, No. tr-360, listed as “Tattvadaśakam (Tattvadaśakādīśaṅgrahaḥ)”.

N₂: National Archives Nepal 所蔵, Bauddhasūcipatra vol. 4, p. 71, listed as “Tattvadaśakam”.

N₃: National Archives Nepal 所蔵, Bṛhatsūcipatra vol. 1, p. 169, No. ca-71, listed as “Guhyasiddhiḥ”. Saṃkṣiptasūcipatra p. 39, No. 1704, listed as “Guhyasiddhyādijñānasiddhisādhano-pāyikā”. fol. 47b3~fol. 49b.

T: 東京大学図書館所蔵, 松濤目録 No. 151, listed as “Tantra Works”. 欠落・破損がひんばんに生じているが、テキスト注記にはいちいち記すことを省いた。

チベット語訳 (Tib.)

D: チベット大蔵経 sDe dge 版 bsTan 'gyur, rGyud Wi 帙

P: 同 北京版 同 , rGyud 'grel Mi 帙

梵文写本中, N₁ は, Shastri が校訂に用いたものである。N₂ は N₁ を書写したものであるが, Shastri による校訂と部分的に一致するところがあり, Sh. の刊行に先立つ草稿もしくはそこから引き写しである可能性がある。N₃ は

“Guhyasiddhi” としてまとめられたものの中に, Kuddālapāda 著 “Acint-yādvayakramopadeśa” (大谷 No. 3072, 東北 No. 2228) に続いて, アドヴァヤヴァジュラの著作 2 編が含まれているのを森口が見出したものである。

T は不完全本であり, かつ中途に数葉の欠落がある。さらに, 入手した写真における各丁の順序が実際の順序と一致していない。以下に便宜のため写真の順序と実際の順序とを対照させ, 欠落を示した表を挙げる。

| Folio Number | 写真丁数 | Folio Number | 写真丁数 |
|--------------|------------|-----------------------------------|-------------|
| 1 a | 1 | 19 a ~ 33 b | 19 下 ~ 34 上 |
| 1 b | 2 上 | 34 | 欠 |
| 2 a | 40 上 | 35 ~ 36 | 不明 |
| 2 b | 39 下 | 37 | 欠 |
| 3 a | 3 下 | 38 a | 18 下 |
| 3 b | 4 上 | 38 b | 19 上 |
| 4 ~ 5 | 欠 | 39 a | 36 下 |
| 6 a | 2 下 | 39 b | 37 上 |
| 6 b | 3 上 | 40 a | 37 下 |
| 7 a ~ 15 b | 7 下 ~ 16 上 | 40 b | 38 上 |
| 16 | 欠 | 41 a | 38 下 |
| 17 a | 17 下 | 41 b (未完) | 39 上 |
| 17 b | 18 上 | unidentified | 4 下 ~ 5 上 |
| 18 a | 16 下 | [Sh. p. 50, 1. 14 ~ p. 51, 1. 15. | |
| 18 b | 17 上 | p. 56, 1. 1 ~ 3 に相当] | |

葉数不定の 1 葉は, fol. 35 または 36, あるいは fol. 43 以後に相当することになる。写真では, 5 下, 6 上下, 7 上, 34 下, 35 ~ 38 を欠としている。また, 写真 40 下 ~ 41 上 (実際の順序は 41 上 ~ 40 下) には, 『仏頂尊勝陀羅尼』が書かれている (40 下, 1. 1 ~ 2; Āryoṣṇiṣavijayo nāma dhāraṇī samāptā //)。なお, N₁ にも手許の写真の順序と実際の Folio Number が一致しないところがあるが (fols. 30 ~ 32), その対照はここでは略す。また, N₂ では各葉の上部

に記されている数字 (2~12 葉は見えない) が実際の葉数より 1 つ少なくなっている。

各資料における所在、また資料間での各作品の題名及び登場順序の異同については、別掲の Sh. を基準として対照した表により示した。表中、一の記号は当該資料にその作品が存在しないことを示す。D, P の項において、題名は、それぞれに音写タイトルとして記されているものをそのまま挙げた。ただし、表記上の変更が若干ある (dz>j, dzñ>jñ, ñts>ñc, b>v)。〔 〕内は、東北目録、大谷勘同目録に Sanskrit Title としてあげられたもの、() 内は、D, P 自身が冒頭に挙げているチベット意識の題名である。各資料の挙げる題名が Sh. のそれと同じである場合は、表に記すことを省いた。なお、本稿に梵文テキストを提出する著作においては、準備の都合上、N₂ 本を用いていない。

作品の登場順序には、N₁ と T との間にかかなりの相違がある (T; 1, 2, 3, 4, 5, 22, 17, 12, 11, 13, 14, 15, 6, 9, 21, 8, 不確定葉に 16, 19)。これがいかなる理由によるものであるのか、またいずれの順序が妥当であるのかは、現在のところ、不明である。

このうち、題名、作者等について問題のあるところを述べておく。

1. “Kudrṣṭinirghātana”, 2. “Kudrṣṭinirghātādivākyaṭippinikā”.

Sh. では 1. 及び 2. でひとつの著作とするが、写本においては各々末尾に題名が挙げられ、またチベット語訳では別立てにされていることにより、2つの著作とした。題名は、チベット音写では、“-nirghata-”としているが、チベット意識 “sel ba” により、“-nirghātana” もしくは“-nirghāta” が妥当であろう。ただし、1. で“-nirghātana” とあるのを 2. で“-nirghāta-”としており、この点については検討の余地であろう。2. の題名は、資料間に相異がみられ、現時点では確定しがたい。ここでは、とりあえず T に従っておく。なお、2. の作者をチベット語訳では gñis med pa (*Advayapāda) と記す。

3. “Mūlāpatti”, 4. “Sthūlāpatti”.

Sh. では 3. および 4. でひとつの著作とするが、チベット大蔵経では、一般に mūlāpatti を扱うものと sthūlāpatti を扱うものとは別立てにしているよ

うなので、ここでは 2つの著作とした。この 2編は Shastri も述べているように (Preface, p. viii), チベット語訳が確認されておらず、作者名も写本中に言及がなく、アドヴァヤヴァジュラの作であるとは確定しえない (cf. 頼富本宏「Āpatti 論書群について」p. 65, 67~68)。

7. “Sekanirṇaya”

チベット意識タイトル “dBañ [bskur ba] ñes par bstan pa” を参照すると “Sekanirdeśa” が妥当であるように思われるが、N₃ に “Sekanirṇaya” とあり、なお不確定。Shastri は、本論のチベット語訳を “Samkṣiptaseka-prakriyā (東北 No. 2244, 大谷 No. 3089)” に同定する (Preface, p. ix) が、誤りである。

8. “Caturmudrā”

梵文写本はいずれも章題を記すのみで、題名は不明である。“Caturmudrā” とは Shastri が自らつけたものである。チベット音写 “Caturmudrāṇiscaya” が妥当であろうか。Shastri は、本編のチベット語訳を、Advayavajra 著 “Caturmudropadeśa (Phyag rgya bñi’ i man ñag, 東北 No. 2295, 大谷 No. 3143)” に充てている (ibid.) が、誤りである。N₃ では作者を Śrināgarjunapāda とし、N₂ にも

「他の [写] 本には、『本 [書] はナーガールジュナ上足の御著作である』と [書いてある] (pustakāntare—krtir iyaṃ Nāgārjunapādānām iti)」との書き込みがある。Shastri も、彼の持つ別の写本中に、本編が、Nāgārjuna 著 “Caturmudropadeśa” として収められている旨を報告している (Preface, p. x)。N₂ および Shastri の言う「別の写本」が我々の N₃ にあたるかどうかは不明である (N₃ は題名を挙げていない)。一方チベット語訳では、Klugsgrub sñiñ po (*Nāgārjunagarbha) とする。

しかし本編の作者が Nāgārjuna であるとしても、いかなる理由でここに収められているのかは不明である。

9. “Sekatānvayasamgraha”

N₁, N₂ とチベット語訳とに相違があるが、N₁, N₂ の記す “Sekatātparyā-

(6)

saṃgraha” が妥当である。

10. “Pañcākāra”

チベット語訳では、音写、意識とも “Pañcasvabhāva” である。“Pañcasvabhāva” でも必ずしも不適當ではないが、“Pañcākāra” の方が妥当であろう。

12. “Svapnanirukti”

チベット音写では “-nirukti” を “-nirdeśa” とするが、その訳語 “bstan pa” は、11. “Māyānirukti” の “-nirukti” の訳語と同じであり、11. では音写タイトルも “-nirukti” を支持するため、“-nirukti” が適切であろう。

14. “Apratiṣṭhānaprakāśa”

写本の記す題名はチベット音写とはかなり相異なるが、チベット意識とは対応する。

17. “Tattvaviṃśikā”

チベット語は音写、意識とも “Tattvamahāyānaviṃśati” とするが、“-mahāyāna-” の語は必ずしも必要ではないように思われる。“-viṃśikā” は 18. “Mahāyānaviṃśikā” とともに、“-viṃśakā” もしくは“-viṃśatikā” が妥当か。

19. “Nirvedhapañcaka”

Shastri は、“Nirvedhapañcaka (Five verses on remorse, =N₂)” とすべきか、と考えている (Preface, p. xiii)。一方、チベット意識及びDの音写は “Nirbheda-” を示唆する。なお、チベット語訳では作者を Maitri pa という別名で記している。

20. “Madhyakaṣaṭka”

“Madhyaka-” はチベット音写の示す “Madhyama-” が適正か。作者は、チベット語訳では Maitri (P; Metri) と記している。

21. “Premapañcaka”

T, チベット音写・意識では、冒頭に “Prajñopāya” の語を付しており、これに従うのが妥当であろうと思われる。また、チベット音写ではともに

| | Sh. | Il. | N ₁ . | N ₂ . | N ₃ . | T | D | P |
|----|--|---|--|-------------------------------|------------------|--|---|---|
| 1 | p. 1~p. 11, l. 19 Kudrṣṭinirghātana | 1 b 1~7 a 5 | 1-1~6-15 | — | — | 1 b 1~11 a 3 | 東北 No. 2229-104 b 7 *nirgata[*nirghāta](lTa ba ṅan pa sel ba) | 大谷 No. 3073-113 a 7 |
| 2 | p. 11, l. 20~p. 12 Kudrṣṭinirghātādivākya- tippinikā | 7 a 5~8 a 3 | 6-16~6-32 | — | — | 11 a 3~12 a 3 *nirghātāvākya- tippinikā | No. 2231-110 a 6 *nirgataṭkā [*nirghātāṭkā]⑥ | No. 3075-119 b 6 *nirgatatiba [*nirghātacintā]⑥ |
| 3 | p. 13, l. 1~l. 15 Mūlapatti | 8 a 3~8 b 2 | 6-34~7-11 | — | — | 12 a 3~12 b 3 | — | — |
| 4 | p. 13, l. 16~l. 24 Sthūlapatti | 8 b 2~8 b 4 | 7-12~7-20 | — | — | 12 b 4~13 a 1 | — | — |
| 5 | p. 14~p. 22 Tattvaratnāvali | 8 b 4~14 b 1 | 7-22~13-8 | — | — | 13 a 1~20 b 5 Tatvaratnāli | No. 2240-115 a 6 Tattvaratna-avali | No. 3085-126 b 6 |
| 6 | p. 23~p. 27 Pañcatathāgatamudrā- vivarāṇa | 14 b 1~17 a 5 | 13-9~15-24 | — | — | 27 a 5~31 a 1 | No. 2242-120 b 3 Tathāgatapañcamudrāvivarāṇa⑥ | No. 3087-131 b 5 |
| 7 | p. 28~p. 31 Sekanirṇaya | 17 a 5~19 b 2 *nirḍdeśa | 15-25~18-17 Sekanirḍdeśa | 48 b 11~49 b 9 Sekanirṇaya | — | — | No. 2252-141 b 2 Ṣe (Se) kanirdeśa (dBaṅ bskur ba ṅes par bstan pa)⑥ | No. 3097-154 b 8 |
| 8 | p. 32~p. 35 [Caturmudrā] | 19 b 2~22 b 2 題名なし | 18-18~20-27 題名なし | 47 b 3~48 b 10 題名なし | — | 38 a 1~41 b 6 (incomplete, Sh. p. 32, l. 1~p. 35, l. 21) | No. 2225-77 a 3 Caturmudrāṅśicya (Phyag rgya bḥi gtan la dbab pa) | No. 3069-82 a 1 |
| 9 | p. 36~p. 39 Sekātānvayasamgraha | 22 b 2~25 b 3 Ṣekātāparya- samgraha | 20-28~23-2 Sekātāparya- samgraha | — | — | 31 a 1~33 b 6 (incomplete, Sh. p. 36, l. 1~p. 38, l. 19) | No. 2243-122 b 4 Ṣekātākāryasamgraha [Ṣekākāryasamgraha]⑥ | No. 3088-134 a 4 Ṣekātākāryasamgraha |
| 10 | p. 40~p. 43 Pañcakāra | 25 b 3~28 b 5 | 23-3~25-15 | — | — | — | No. 2245-134 b 3 Pañcasvabhāva (Raṅ bḥin lṅa pa)⑥ | No. 3090-147 a 8 |
| 11 | p. 44 Māyanirukti | 28 b 5~29 b 1 | 25-16~26-4 | — | — | 23 b 5~24 b 3 | No. 2234-111 b 6 | No. 3078-121 b 4 *niruktati |
| 12 | p. 45 Svapnanirukti | 29 b 1~30 a 1 | 26-5~26-24 | — | — | 23 a 2~23 b 5 | No. 2233-111 a 7 Svapnanirdeśa (rMi ram ṅes par bstan pa) | No. 3077-121 a 4 |
| 13 | p. 46~p. 47 Tattvapraḥkāśa | 30 a 1~30 b 4 | 26-25~27-18 | — | — | 24 b 3~25 b 5 | No. 2241-120 a 1 *prakasa | No. 3086-131 a 1 *pragasa |
| 14 | p. 48 Apratiṣṭhānapraḥkāśa | 30 b 4~31 a 5 | 27-19~28-9 | — | — | 25 b 5~26 b 2 | No. 2235-112 a 7 Aprasahapraḥkāśa [Aprasahapraḥkāśa] (Rab tu mi gnas pa gsal bar ston pa) | No. 3079-122 a 6 |
| 15 | p. 49 Yuganaddhapraḥkāśa | 31 a 5~32 a 1 | 28-10~28-30 | — | — | 26 b 3~27 a 5 | No. 2237-113 a 6 Yuganadhapraḥkāśa | No. 3081-123 a 8 Juganadvapraḥkāśa |
| 16 | p. 50~p. 51 Mahāsukhapraḥkāśa | 32 a 1~33 a 2 | 28-31~29-31 | — | — | Unidentified folio, a 1~b 5 (incomplete, Sh. p. 50, l. 14~) Mahānamahāsukha* | No. 2239-114 b 2 *prakasa | No. 3084-124 b 6 |
| 17 | p. 52~p. 53 Tattvamāyāṅśikā | 33 a 2~34 a 4 | 29-32~30-37 | — | — | 21 b 2~23 a 2 | No. 2250-140 a 5 Tattvamahāyāṅśikā [Tattvamahāyāṅśikā]⑥ | No. 3095-153 b 1 Tattvamahāyāṅśikā [Tattvamahāyāṅśikā]⑥ |
| 18 | p. 54~p. 55 Mahāyāṅśikā | 34 a 5~35 a 4 | 31-1~32-4 | — | — | — | No. 2248-137 b 7 Mahāyāṅśikā [Mahāyāṅśikā] | No. 3093-150 b 8 Mahāyāṅśikā |
| 19 | p. 56 Nirbedhapañcaka | 35 a 4~35 b 3 | 32-5~32-23 Nirvedhapañcaka | — | — | Unidentified folio, b 5~6 (incomplete, Sh. p. 56, l. 1~3) | No. 2238-114 a 3 Nirbhedapañcaka⑥ | No. 3083-124 a 6 Nirbete* [Nirbheda*]⑥ |
| 20 | p. 57 Madhyakaṣṭka | 35 b 3~36 a 3 | 32-24~33-4 | — | — | — | No. 2230-110 a 2 Madhyamaśata [*maṣaṭka] Madhyamaśata [*maṣaṭka] | No. 3074-119 a 8 Madhyamaśat [*maṣaṭka] |
| 21 | p. 58 Premapañcaka | 36 a 3~36 a 5 | 33-5~33-15 | — | — | 38 a 1 (title only) Prajñopāyaprema* | No. 2246-136 b 6 Prajñopāyabeyapañca [Prajñopāyakriḍāpañca]⑥ | No. 3091-149 b 6 Prajñopāyadayapañcaka [Prajñopāyadayapañcaka]⑥ |
| 22 | p. 59 Tattvadaśaka | 36 a 5~36 b 5 | 33-16~34-10 | — | — | 20 b 6~21 b 2 | No. 2236-112 b 7 | No. 3080-122 b 7 |
| 23 | p. 60~p. 62, l. 17 Amanasikārādhāra | 36 b 6~38 b 3 | 34-11~35-19 | — | — | — | No. 2249-138 b 4 Amanasikāra-udara [Amanasikāroddesa]⑥ | No. 3094-151 b 6 |
| | p. 62, l. 18~p. 63 結 頌 | 38 b 3~38 b 6 | 35-20~35-33 | — | — | — | — | — |

* チベット語訳タイトルに関する注記

①D: lTa ba ṅan pa sel ba'i dka' 'grel, P: lTa ba ṅan pa sel ba'i 'dran pa

②De bḥin gṣegs pa lṅa'i phyag rgya rnam par bśad pa,

[東北: Tathāgatapañcamudrāvivarāṇa],

[大谷: Pañcatathāgatamudrāvivarāṇa]

③P: dBaṅ ṅes par bstan pa

④dBaṅ gi dgos pa mdor bśdus pa ⑤D: Raṅ bḥin lṅa ma

⑥De kho na nid theg pa chen po fi śu pa

⑦Mi phyed pa lṅa pa

⑧Thabs daṅ ṅes rab rtse (大谷 brtse) ba lṅa pa

⑨Yid la mi byed pa ston pa

アドヴァヤヴァジュラ

“beyapañca” とあるのを、東北目録では意訳
“kriḍāpañca”, 大谷目録では “brtse (lit.
“dayāpañcaka” としている。しかしながら写本
でよいように思われる。Shastri は、チベット語
“Prajñopāyodayapañcaka” とする、と述べて
彼の依ったカタログが何であるかは不明。

23. “Amanasikārādhāra”

チベット意識によると東北・大谷両目録の挙
妥当であるように思えるが、チベット音写 “Am
全く一致しないわけではなく、なお検討の余地が
次いで、アドヴァヤヴァジュラに関するこれ
を挙げる。本編中の引用・関連文献等について

磯田熙文「Pāramitāyāna と Mantrayāna」『東
1978。

……“Tattvaratnāvali”, “Sekanirṇaya”

著作を挙げつつ、アドヴァヤヴァジュラ
宇井伯寿 Advayavajra Tattvaratnāvali, 『
哲学 I』, 1952。再録『大乘仏典の研究

……“Tattvaratnāvali” 梵文テキスト, 和訳

高田仁覚「不二金剛の灌頂決定論について」『印

……“Sekanirṇaya” 内容解説。

梶尾祥雲『理趣経の研究』pp. 426~431, 高野山
高野山, 1959, 京都, 1982。

……“Yuganaddhapraḥkāśa”, “Mahāsukha

羽田野伯猷 A Historical Study in the Pro
fusion of Tāntric Buddhism in In
Japan”, 1958。再録『チベット・自

| | D | P |
|--------------------|---|---|
| | 東北 No. 2229-104 b 7 nirgata[*nirghāta](Ta ba ñan pa sel ba) | 大谷 No. 3073-113 a 7 |
| ra- | No. 2231-110 a 6 *nirgataṭikā [*nighāṭaṭikā]Ⓞ | No. 3075-119 b 6 *nirgataṭiba [*nirghāṭacintā]Ⓞ |
| | — | — |
| | — | — |
| i l | No. 2240-115 a 6 Tattvaratna·avali | No. 3085-126 b 6 |
| l | No. 2242-120 b 3 TathāgatapañcamudrāvīparaⓄ | No. 3087-131 b 5 |
| | No. 2252-141 b 2 Ṣe (Se) kanirdeśa (dBañ bskur ba ñes par bstan pa)Ⓞ | No. 3097-154 b 8 |
| i p. 32,) | No. 2225-77 a 3 Caturmudrānīścaya (Phyag rgya bñi gtan la dbab pa) | No. 3069-82 a 1 |
| i p. 36, l) | No. 2243-122 b 4 Ṣekatākāryaṃsaṃgraha (Sekākāryasaṃgraha)Ⓞ | No. 3088-134 a 4 Ṣekatakāryaṃsaṃgraha (Sekākāryasaṃgraha)Ⓞ |
| | No. 2245-134 b 3 Pañcasvabhāva (Rañ bñin lña pa)Ⓞ | No. 3090-147 a 8 |
| | No. 2234-111 b 6 | No. 3078-121 b 4 *niruktati |
| | No. 2233-111 a 7 Svapnanirdeśa (rMi ram ñes par bstan pa) | No. 3077-121 a 4 |
| | No. 2241-120 a 1 *prakasa | No. 3086-131 a 1 *pragasa |
| | No. 2235-112 a 7 Aprasahaprakāsa [Aprasahaprakāśa] (Rab tu mi gnas pa gsal bar ston pa) | No. 3079-122 a 6 |
| | No. 2237-113 a 6 Yuganadaprakāsa | No. 3081-123 a 8 Juganadvaprakāsa |
| io, l-) cha* | No. 2239-114 b 2 *prakasa | No. 3084-124 b 6 |
| | No. 2250-140 a 5 Tāttvamahāyānaviṣṭi (Tāttvamahāyānaviṣṭi)Ⓞ | No. 3095-153 b 1 Tāttvamahāyānaviṣṭi (Tāttvamahāyānaviṣṭi)Ⓞ |
| | No. 2248-137 b 7 Mahāyānaviṣṭi (Mahāyānaviṣṭi) | No. 3093-150 b 8 Mahāyānaviṣṭi |
| io, -3) | No. 2238-114 a 3 NirbhedapañcakaⓄ | No. 3083-124 a 6 Nirbete* (Nirbheda*)Ⓞ |
| | No. 2230-110 a 2 Madhyamaśata [*maṣaṭka] | No. 3074-119 a 8 Madhyamaśata [*maṣaṭka] |
| ly) ma* | No. 2246-136 b 6 Prajñopāyabeyapañca [Prajñopāyakriḍāpañca]Ⓞ | No. 3091-149 b 6 PrajñopāyadayāpañcakaⓄ |
| | No. 2236-112 b 7 | No. 3080-122 b 7 |
| | No. 2249-138 b 4 Amanasikara·udara (Amanasikāroddeśa)Ⓞ | No. 3094-151 b 6 |
| | — | — |

i gi dgos pa mdor bsdus pa ⓄD: Rañ bñin lña ma
ho na ñid theg pa chen'po ñi śu pa
·hyed pa lña pa
s dañ śes rab rtse (大谷 brtse) ba lña pa
la mi byed pa ston pa

“-beyapañca” とあるのを、東北目録では意識 “rtse ba lña” に基づき
“-kriḍāpañca”, 大谷目録では “brtse (lit. “rtse”) ba lña” に基づき
“-dayāpañcaka” としている。しかしながら写本の挙げる “-premapañcaka”
でよいように思われる。Shastri は、チベット語訳カタログでは本書の題名を
“Prajñopāyodayapañcaka” とする、と述べている (Preface, p. xiv) が、
彼の依ったカタログが何であるかは不明。

23. “Amanasikārādhāra”

チベット意識によると東北・大谷両目録の挙げる “Amanasikāroddeśa” が
妥当であるように思えるが、チベット音写 “Amānasikara·udara” は N₁ と
全く一致しないわけではなく、なお検討の余地がある。

次いで、アドヴァヤヴァジュラに関するこれまでのテキスト研究、研究論文
を挙げる。本編中の引用・関連文献等についてはその都度記す。

磯田熙文「Pāramitāyāna と Mantrayāna」『東北大学文学部研究年報』28号、
1978。

……“Tattvaratnāvali”, “Sekanirṇaya” の部分訳、内容概説等、多くの
著作を挙げつつ、アドヴァヤヴァジュラと彼の弟子の思想を考察する。
宇井伯寿 Advayavajra Tattvaratnāvali, 『名古屋大学文学部研究論集Ⅲ,
哲学Ⅰ』, 1952。再録『大乘仏典の研究』東京, 1963, 再版1979。

……“Tattvaratnāvali” 梵文テキスト、和訳。再録には語彙を付す。
高田仁覚「不二金剛の灌頂決定論について」『印仏研』2-1, 1953。

……“Sekanirṇaya” 内容解説。
梅尾祥雲『理趣経の研究』pp. 426~431, 高野山, 1930。再版, 『梅尾全集Ⅴ』,
高野山, 1959, 京都, 1982。

……“Yuganaddhaprakāśa”, “Mahāsukhaprakāśa” 和訳。
羽田野伯猷 A Historical Study in the Problems Concerning the Dif-
fusion of Tāntric Buddhism in India, “Religious Studies in
Japan”, 1958。再録『チベット・インド学集成 第三巻 インド篇

I』, 京都, 1987。

……アドヴァヤヴァジュラについての歴史学的研究。

御牧克己 The Tattvaratnāvali of Advayavajra (Tibetan Text), 梶山雄
一・御牧克己編『経量部 (Sautrāntika) 研究』京都, 1986, pp. 1~20。

……“Tattvaratnāvali” チベット語訳テキスト。

頼富本宏「Āpatti 論書群について」『密教学』9号, 1972。

……“Mūlāpatti”, “Sthūlāpatti” への言及。

同 「Advayavajra 研究(I)」『密教学』13・14 合併号, 1977。

……“Pañcākāra” 梵文テキスト, 和訳。

D. L. Snellgrove ed. E. Conze, “Buddhist Texts through the Ages”,
London, 1954, pp. 249~252.

……“Pañcākāra” 英訳。

なお, 御牧氏上掲論文によれば, “Tattvaratnāvali” の梵文テキスト校訂,
並びに翻訳について, 氏が別稿を期しておられるとのことであり (p. 1), た
めに, 本研究会では “Tattvaratnāvali” については校訂・和訳を行っていな
い。

最後に, 昭和62年度の研究会参加者名を挙げておく。

指 導; 斎藤光純専任講師

参加者; 大塚伸夫, 木村秀明, 白石凌海, 高橋尚夫, 野口圭也, 前田 崇,
森口光俊, 矢板秀臣

(序文担当 野口圭也)

作品 No.

1. 森口光俊 : Kudṛṣṭinirghātana, p. (10)~(37)
2. 同 : Kudṛṣṭinirghātavākyaṭippinikā, p. (38)~(41)
3. 高橋尚夫 : Mūlāpatti, p. (42)~(43)
4. 同 : Sthūlāpatti p. (44)~(45)
5. Tattvaratnāvali 取り上げず。
6. 前田 崇 : Pañcatathāgatamudrāvivarāṇa, p. (46)~(57)

1. Kudṛṣṭinirghātana¹⁾

(Sh. 1) namo buddhāya /

vakṣye kudṛṣṭinirghātam ādikarmavidhānataḥ /

anenaiva vihārena yatnena labhate padam // 1 //

iha hi dvidhā²⁾ sattvāḥ śaikṣā³⁾ āśaikṣāś ca / tatrāśayo³⁾ dhimu-
ktiprayogo⁴⁾ bhūmiprapannaprayogaś⁵⁾ ca vaśitāptiparyanto⁶⁾ hetv-
avasthāsthitānām⁷⁾ śaikṣānām, suviśuddhādikarmavidhānena sambhāra-
dvayasambhṛtasamyaksambodhisampallābhāḥ / āśaikṣānām api nir-
astapratipakṣatattvaphalavikalpānām sākyamuner iva prañidhānavega-
sāmarthyād⁸⁾ yuganaddhānābhogayogataḥ sattvārthakriyālakṣaṇam avi-
cchinna⁹⁾ ādikarma pravartata eva / iti sthitaḥ /

tathā ca /

na te 'sti manyanā nātha na vikalpo na veñjanā /

anābhogena te loke buddhakṛtyam pravartate // 2 //

parārthasampad buddhānām phalaṃ mukhyatamaṃ matam¹¹⁾ /

buddhatvādi yad anyat tu tādarthiyāt phalam iṣyate // 3 //

cintāmaṇī¹⁴⁾ ivākāmpyaḥ sarvasaṃkalpavāyubhiḥ /

tathāpi sarvasattvānām aśeṣāśāprapūrakaḥ // 4 //

(Sh. 2) phalatattvavipakṣānām vidhyapohavivarjanāt /

sambodhir buddhyate dhanyā¹⁵⁾ tatpaścāt tv ādikarmaṇi // 5 //

- 1) Tib. nirgata 2) T °dhā 3) Sh. āśaya adhi°, N₁ āśaye, T °trāpiya /
4) T °yoga 5) N₁ °prayogo x nca 6) Tib. lña la dbaṅ thob par mthar
thug paḥi bar 7) N₁ °rmā° 8) T °dhānatvavasa° 9) Sh. °tam
10) N₁ trṭhā 11) N₁ mukhyatanam 12) N₁ anyas tu 13) Tib. gshan
don phun tshogs saṅs rgyas kyis(D kyī) / ḥbras bu gtso bo gshan ma yin / des
na saṅs rgyas ḥbras bur brjod / 14) Tib. dpag bsam śiṅ 15) Sh. dhanyo

1. 悪見破斥

仏陀に帰依したてまつる。

(1)初業の儀則に基づいて、悪見破斥を説かん。この(儀則)に住し、精勤することによりてのみ、人は(仏)位を得ん。

実に、この世において、衆生に二種あり。即ち有学、無学の者なり。このうち因位に住せる有学の意樂は、信解を行ずることと、(十)地(位)の成満を行ずることであり、究極には、自在力を得ることである。(即ち)妙淨なる初業の儀則により、(福智の)二資糧を積み、正等菩提を獲得することである。

(他方、)対治さるべきこと、(即ち)真実と果とに分別することを破斥せる無学の者も、釈迦牟尼と同じく、誓願威力の功能の故に、双運無功用の瑜伽により、衆生利益の行為を本質とせる不断の初業を実践する。以上は(初業に関する)定(義)である。

同様に、(頌に言う。)

(2)救護者よ、御身には(悪しき)思慮も分別も、動搖もあらず。無功用(双運の瑜伽)により、御身の仏事業は世間に転ず。

(3)諸仏にとりて、利他行の円成は最も主たる果なりと見なさる。仏果等その他のものも、それを目的とせる故に果なりと見なさる。

(4)劫樹は、(風によりて)微動だになし。その如く、全ての衆生の、全ての願いを満たされる御方は、一切の分別の風によりて、(微動もあらず)。

(5)果と真実とに(分別することを)対治する者は、(この)儀則を排斥しないので、その後に初業において、幸いなる覚りが知得せらる。

- 1) Tib. に従うと「利他の円成が、仏陀の主たる果であり、他はそうではない。従って仏陀(たること)が果と言われる。」となる。
2) Tib. による。

nanu śaikṣānām ādikarmavidhānaṃ yujyata eva / katham aśaikṣā-
nām api niḥsvabhāvabhāvinām ādikarmārambhaḥ / ayam api suvarṇa-
nigaḍabandhana eva / satyam / prajñāpāramitādhigamavirahāt / pra-
jñāpāramitā hi pañcapāramitānām svabhāvaḥ /

ata eva /

sarvākāravaropetā śūnyateti nigadyate / 6 /

uktaṃ ca bhagavatā /

“prajñāpāramitāvīrahitaḥ pañcapāramitāḥ pāramitānām adheyam
na labhante /”

Āryavimalakīrtinirdeśe cōktaṃ / “prajñārahita upāyo bandhaḥ,
upāyarahitā prajñā bandhaḥ, prajñārahita upāyo mokṣa upāyarahitā
prajñā mokṣaḥ //”

tādātmyam cānyoḥ sadgurūpadeśataḥ pradīpālokayor iva saha-
jasiddham evādhigamyate //

ata eva /

ādikarma yathoddiṣṭaṃ kartavyam sarvayogibhiḥ /

śūnyatākaraṇābhinnam yad bodhau jñānam iṣyate // 7 //

ādikarma ca /

pañcapāramitāḥ proktā ādikarmeti saṃjñayā /

prajñāpāramitā cāsām svabhāvo nābhīr iṣyate // 8 //

tathā cātra /

dānam śīlam kṣamāṃ vīryam dhyānam prajñāṃ ca sādaram /

satataṃ sevayan dhīmān sukhī sujñō 'pi jāyate // 9 //

saṃbhoganirmite hetur dānaśīlakṣamātrayam /

dhyānaprajñeti dharmasya vīryam tūbhayor matam // 10 //

1) N_1 °vyaḥ 2) N_1 °karmaṇ ca 3) N_1 proktāḥ 4) Tib. ŋo bo ŋid ni dpyad
mi bya 5) N_1 kṣamā 6) N_1 taya (?tatha) su (sa?) tataṃ 7) Sh. svastho
 N_1 svapno?, T sujñe, Tib. bde bar śes rab kyañ 8) N_1 , T hetu
9) N_1 °traya 10) Sh. tubha [ya] yor.

(問:) 初業の儀則は、有学の者達にこそふさわしいのではないか。無自性
成就の無学の者達にも、初業の実践(の必要)がどうしてあるのか。(若し必要
だと言うなら,)かの(無学の者)も、(無学でありながら,なお)金の足枷によ
って縛られているのに他ならない(ことになってしまうであろう)。

(答:) (無学の者も、初業を実践する必要があると言うのは)正しい。な
ぜならば、般若波羅蜜の理解を欠いているが故に。(というの)は般若波羅蜜
は(他の)五波羅蜜の自性であるからである。

であるからこそ、

(6)空性は、全ての最勝の相を具えていると説かる。

(と、偈に言い,)又、世尊は(「十万頌般若経」の中で、)

「般若波羅蜜を欠ける五波羅蜜は、波羅蜜と名づくるを得ず¹⁾。」と、説かれ
ている。『聖維摩詰所説(経)』にも、

「般若を欠ける方便は縛であり、方便を欠ける般若は縛である。般若を俱え
る方便は解脱であり、方便を俱える般若は解脱である²⁾。」と、説かれている。

両者の同一性は、良師の説示によりて、燈火と光とが同時に成立せるのと全
く等しと理解される。

それだからこそ、(頌に言わる)

(7)全ての瑜伽者によりて、説かれたとおりに初業は修さるべし。なんとなら
ば、空性と悲と不可分となっているのが悟における智と認められるのであ
るから。

又、初業とは、

(8)智見により、五波羅蜜は初業なりと説かる。しかして、般若波羅蜜がこれ
らの自性にして中樞なりと認めらる。

そこで、即ち、

(9)施、戒、忍、進、禪、智慧を常に恭しく行ずる賢者は、快樂ありて良く知
れる者ともならん。

(10)布施、持戒、忍辱の三は、報(身)と応(身)との因にして、禪定、智慧は
法(身)の、精進は兩者(法身、報・応身)の因なりと見なさる。

1) 『大般若波羅蜜多經』大正 No. 220, p. 803c. 若離般若波羅蜜多。布施等五不得名為
波羅蜜多。梵文写本; Śatasāhasri prajñāpāramitā, 東京大学図書館所蔵。松濤目
録 No. 382, D. 135b 11:

(Sh. 3) tasmād bodhisattvena suvisuddhādikarmavihāriṇā bhavitavyam / viparyaye ca *Nāstikavādaprasaṅgaḥ* /

tad uktam /

śubhāśubham yady api niḥsvabhāvakaṃ¹⁾

tathāpi kuryāc chubham eva nāśubham /⁽²⁻²⁾

jalendubimbopamalokasamvṛtau³⁾

sukham priyam duḥkham ajasram apriyam // 11 //

katham tarhi śaikṣeṣūnmattavratasthitānām nirvikalpatādhimukti-⁴⁾

vatām ādikarma pravartatām / ucyate / śarīradānaṃ kṛtvā caryām⁵⁾
kṛtavān /⁶⁾

śarīradānaṃ dattvā ca paścāc caryām samārabhet / 12 /⁷⁾

iti vacanāt / dānaṃ dattaṃ ca śarīrāvadhi / kāyavākcetasām sarva-⁽¹²⁻¹²⁾

sattvārthāya saṃvaraṇāc chilam / kṣāntiś ca krūrataptakarapatrādi-¹³⁾

ghātasahanatayā / vīryaṃ caṣṭhalokadharmābādhopasahanatayā / dhyā-¹⁴⁾

naṃ ca sarvasvabhāvānugatānābhogasvarasavāhitayā / prajñā ca¹⁵⁾

sarvadharmānupalabdhiḥlakṣaṇādhigamanatayā /⁽¹⁶⁻¹⁶⁾

anābhogarasāvedhe yasyājasraṃ pravartante sarvāḥ pāramitāḥ¹⁷⁾
parāḥ //⁽¹⁸⁻¹⁸⁾

tasmād unmattavratasthitānām apy ādikarma pravartata eva /

1) *N*₁ nisva° (2-2) *Sh.* kuryāt śubham 3) *N*₁ °*lendu 4) *N*₁ saiksū°
5) *T* °kalpādhi° 6) *T* ākāśa 7) *T* pravarttapravarttatān 8) *N*₁, *T* śarīraṃ
(n) 9) *N*₁ om. ca 10) *N*₁, *T* caryā 11) *T* samācared (12-12) *T*
samva xx ātsīlan 13) *T* kharatapta° 14) *T* °pasamanatayā, *Tib.* gnod ba las
mñam pa nid 15) *T* °gamatayā (16-16) *Tib.* ḥbad pa med paḥi (*D* par) ro
gcig paḥi ṅaṅ gis thams cad du ro gcig par ḥdod paḥi pha rol tu phyin pa
thams cad kyi mchog go, *Sh.* makes this passage a śloka 17) *Sh.*, *N*₁ °rasā-
vedhau, *T* °rāsāvidhau (18-18) *Sh.* yasyājasraṃ*****pra°, *T* damaged

この故に、菩薩は清浄なる初業に住せる者たるべし。(若し) そむかば、一切無存在論の過失に帰さん。

であるから(次の如くに頌に)、説かる。

(1)たとえ浄、不浄が無自性であろうとも、(菩薩)は浄をのみならず、不浄は(なす)べからず。水に映れる月の影像の如き世間世俗におきては、意に適うを快びとし適わざるは常に苦なり。

ところで、有学において、風狂を實踐し、無分別性を信解せる者にとりて、初業はいかに修さるべきであるのか。

(答えて)曰く、身施を作して、行を作す(べきである)。(偈に)、

(2)身体の奉施を作して後、作業に着手すべし。¹⁾

と説かれているからである。

(身)施とは、身体を切りきざんで与えることであり、身・語・心を一切有情のために律するが故に戒であり、はなはだ熱き鋸(にひかれるが如き)等の障害にも耐えるから忍辱であり、精進とは、世間の八法たる苦を克服するからであり、禪定は、一切の自性に随順する無功用の本質を引発するからであり、智慧は、一切法が不可得であるという特性を証得していることにより(智慧なので)ある。(これらが、初業の意味であるが)、[無功用の一味を本性とするため、常に一味と認められる波羅蜜は全てのうちで最勝である。²⁾

それ故に、風狂を實踐する者達にも、初業が修さるべきである。

←p. 15

prajñāpāramitāvīrahitatvāt pañcapāramitā na pāramitānamadhyāyaṃ prañāpāramitā // 本写本については、大正大学木村高尉氏の御教示をいただいた。
P. L. Vaidya, *Bodhicaryāvatāra of Śāntideva*, B. S. T., No. 12, Darbhanga, 1960, p. 168. 23-27: yathoktam āryaśatasāhasrāyām prajñāpāramitāyām,..... prajñāpāramitāvīrahitatvāt pañcapāramitāḥ pāramitānamadhyāyaṃ na labhante /

2) 『維摩詰所説経』大正, No. 475, p. 545b. 以方便物生菩薩解。又無方便慧縛。有方便慧解。無慧方便縛。有慧方便解。大鹿実秋「チベット文維摩経テキスト」*Acta Indologica* I. 成田, 1970, p. 183, 19-21.

G. Tucci, *Bhāvanākrama, Minor Buddhist texts*, Part II. Roma, 1958, p. 194.; prajñārahita (upāya) upāyarahitā ca prajñā bodhisattvānām bandhanam ity uktam / upāyasahitā prajñā prajñāsahitā upāyo mokṣatvena varṇitāḥ /

1) D. L. Snellgrove, *The Hevajra Tantra A Critical Study*, Pt. II, London, 1959, I-vi-19.

śarīraṃ dānaṃ datvā ca paścāc caryām samārabhet //

bhāgābhāgavīcāreṇa tasmād dānaṃ na diyate //

2) *Tib.* に従って訳出。

¹⁾
Cārvākaśaśor naṣṭaparalokasya vacanaṃ sarvathaiṅyuktatvād nodā-
hṛtam //

²⁾
tatra śaikṣaṃ prati bodhisattvasya

prathamam diyate pośadham tadanu śikṣāpadam daśam / ³⁻ 13 / ⁻³⁾
iti Śrīhevajravacanāt prathamam tu pośadhadānam /

samanvāhara bhadantācāryāham itthaṃnāmāmukanāmopāsako
buddham dharmam saṃgham śaranam gacchāmi yāvad ābodhi-
maṇḍataḥ / evaṃ dvir api trir api / evaṃ (Sh. 4) trisāraṇagataṃ
mām bhadanta dhārayantv iti / samanvāharācāryāham amukanāmo-
pāsaka imām velām upādāya yāvat śvaḥ sūryodayam ihāntare sarva-
prāṇibadhāt parasvahaṇād abrahmacaryāt tathā vāgbhedād anṛtād
madyopajananāt pānād vikālāsānād mālāvarṇakanṛtyagītalalitāt śaya-
nāsanocchritād adyāham virataḥ karomy aham tāvat tad guṇair aṣṭa-
bhiḥ / pośadhagāthā //

gr̥hapatibodhisattvas tu ratnatrayaśaraṇapurāḥsaram prāṇatipā-
tād adattādānāt kāmamithyācārād mṛṣāvādāt prakṛtisāvadyād madya-
pānāc ca pañcabhyo virataḥ / śrutivivekasampanno gr̥hapatibodhisat-
tvaḥ parihṛtadaśākuśalaḥ punarakaraṇasamvaravān kuśalakarmacāri /
prātaḥprahare samutthāya mukhaśaucādikam kṛtvā ratnatrayam anu-
smaran om āḥ hūm ity anenātmayogarakṣām kṛtvā yathādhigama-

1) Tib. tshu rol mthoñ pa (D par) grags pa ñams pa 2) Sh. bhūtaśai°,
Tib. de la slob ma brtul shugs can (3-3) Sh. śikṣopadeśa 4) Sh., N₁ °nto
5) N₁ °kaḥ 6) N₁ sva 7) N₁ vākebhe (8-8) N₁ °mado, Sh. anṛtātmatvopa°
9) N₁ vikālāsānā 10) N₁ °labhitāt 11) Sh. °āsanāducchi°, N₁ āśano° (12-12)
Tib. bdag yon tan brgyad gyis dgra bcom paḥi tshul du gnas par bgyiḥo / shes
bya ba ni gso sbyoñ sbyin paḥi tshig ste / 13) Tib. mos pa dañ spyod pa dañ
ldan paḥi 14) Tib. bdag dañ gnas dañ rnal ḥbyor bsrūñ ba (D bar) byas
pa

来世を否定する獸の如き唯物論者の言は、いかにしても道理に反するから（こ
こでは）説かない。

そのうち、有学の者に対して、

⑬菩薩の齋戒が、初めに授けらる。次いで、十学処が（授与さる）。

と説く『吉祥ヘーヴァジュラ（タントラ）』の（教え）に従って、初めに布薩の
授与が（作さる）。

（そこで、齋戒とは次の如くである。）

「大徳導師よ、（我を）護念したまえ。我、如是の名の、某甲なる優婆塞は、
仏と法と僧伽に大菩提道場に至るまで帰依したてまつる。」

と、かくの如く、二度、三度（帰依し）、「かくの如く三（宝）に帰依したて
まつる我を、大徳たちよ、摂受したまえ。」と（祈願して）、

「導師よ、護念したまえ。我、某甲なる優婆塞は、今から明日、太陽の昇る
まで、ここで①一切の生あるものを殺すこと、②他人のものを自分のものとし
て奪うこと（盗）、③非梵行（邪淫）、更に④非真実なる両舌、⑤酔をもたらず
飲酒、⑥非時に食をとること、⑦花環や顔料（で飾り）、舞踊や歌曲に戯れる
こと、⑧高き座床（地上に敷かざるものに坐臥すること）から、今日、我は離
れん。我は、この八徳によりて、（無学の道に住し得ん。）」（と誓う）。

（以上が、）齋戒の頌（による説明）である。

（次に、その修習次第を述べん。）

在家の菩薩は、三宝に帰依することより始めて、生命を害すること、与えら
れざるものを盗ること、邪淫をなすこと、妄語することという（四つの）根本
罪と飲酒（を加えた）五つ（の罪）を捨棄している。（又）在家の菩薩は、聞と
思を具え、十不善業を棄て、再び犯すことなき禁戒を保ち善業を行じ、（在家
の菩薩は）早朝に起き、洗顔などをすまし、三宝を念じつつ、オーン、アーハ、
フーンと（唱える真言）で、自らと行を守護し、理解したとおりの、

1) D. L. Snellgrove, *op. cit.*, II-viii-9.

pośadham diyate prathamam tadanu śikṣāpadam daśam //

vaibhāṣyam tatra deśeta-sūtrāntam vai punas tathā //

(2-2) L. de la Vallée Poussin, *Adikarmapradīpa, Bouddhisme, Études et Ma-
tériaux*, 2^{ème} partie, p. 188, 12-189, 16. «Upāsakaśikṣāsamvara»

(3-3) *Suttanipāta* (ed. Andersen-Smith, PTS) No. 400-401 に「八支の齋戒」と
して挙げられる。

dhyānajapasamstavādikaṃ¹⁾ kuryāt / *Nāmasaṅgītiṃ* ca triṣkālam āvar-
tayet /

tadanu /

oṃ jambhalajalendrāya svāhā /

ity anena parijaptvā²⁾ ṣṭottaraśatapanīyaculukāni jambhalāya dadyāt /
tataḥ /

namaḥ samantabuddhānāṃ sarvatathāgatāvalokite³⁾

oṃ sambhara sambhara hūṃ phaṭ svāhā /

iti mantram⁴⁾ saptavāraṇ āvartya prasāritadakṣiṇakarāṅgulipaṅcaka-
vinirgatāmṛtapaṅcadhārābhīḥ pūritadvāramūlaniveśitasajalabalibha-
ktasikthakāni⁶⁾ māgadhenā droṇena pravarttitāni paśyēt / sakalapreta-
piśācān⁷⁾ tarpayann acchaṭātrayaṃ dattvā⁸⁾ bodhisattvabaliṃ dadyāt /

idāniṃ⁹⁾ sarvasattveṣv ekaputrapremākārāṃ maitriṃ, duḥkhāduḥ-
khahetoḥ samsārasāgarāt samuddharaṇavāñchāsvabhāvāṃ karuṇāṃ,
ratnatrayasāraṇagamanāt¹⁰⁾ samullasanmanaḥprabhāvāṃ¹¹⁾ muditāṃ, adhy-
āsaṅga(Sh. 5)parilakṣaṇāṃ¹²⁾ upekṣāṃ ca vibhāvya sarvasattvā-
rthodyuktacetaḥ¹³⁾ pariśuddhena gomayena viśuddhena ca vāriṇā

oṃ āḥ vajrarekhe hūṃ /

iti maṅḍalādhiṣṭhitabhūbhāge caturasrādicaturṇāṃ anyatamam abhi-
matamaṅḍalakaṃ kṛtvā tanmadhye viśvavarṇāṣṭadalakamalavarāṭake
sūryamaṅḍalopari nilahūmkārapariniṣpannaṃ bhūsparsāmuḍrādharaṃ

1) *N*₁ °dikamkṣa 2) *N*₁ °pāṇīyaculurkāni 3) *Sh.*, *N*₁ °kini 4) *Tib.*
gtor maḥi sṅags 5) *N*₁ °aṅgula 6) *Sh.* śiktha°, *N*₁ °śikatakāni, *Tib.* gtor
maḥi zas chu dañ bcas pa zan ḥbru gcig (7—7) *Sh.* taryaghan, *Tib.* yi dgas
kyi tshogs ma lus pa la (8—8) *P om.* 9) *N*₁. °kārā 10) *N*₁ °llan
11) *N*₁ °ditāḥ / 12) *Tib.* mi bden pa la sogs (*D chags*) pa yoṅs su spon
paḥi mtshan fid 13) *Sh.*, *N*₁ °ceta

冥想と持誦と讚などを作すべし。更に、『ナーマサンギーテイ』を三度、唱う
べし。

次いで、

オーン、宝蔵神なる水主に、スヴァーハー²⁾

と言うこの(真言)を誦して、百八杯の水を宝蔵神に献ずべし。

次いで、

あまねき諸仏に帰依したてまつる。一切如来により視られたるもの(餓鬼)

よ。オーン、集まり来たれ、集まり来たれ、フーン、パット、スヴァーハー³⁾

という、真言を七度誦して、拡げた右手の五指より流出せる、五甘露の流れで
満ちた、門の基部に置かれたる、マダダ国(所用の)斗斛をもって計られた(量
の)、水と混ぜた供物や食物、飯などを観想すべし。(次いで、)全ての餓鬼や
食肉鬼を満足せしめつつ、三度、弾指して、菩薩の(心で)供物を施せ。

同時に、全ての衆生に対して、一人息子への慈愛を相とせる慈しみを(修習
し)、苦と非苦の因たる輪廻の大海から救い上げる願を自性とせる慰れみ(を修
習し)、三宝に帰依することから、輝く心の力である喜び(を修習し)、執を捨て
ることを相とする捨を修習して、(次に、)かくの如く一切衆生のために励む
心を持つもの(となれる者)は、清浄なる牛糞と浄水とをもって(浄地し)、

オーン、アーハ、金剛線よ、フーン

と(誦し)、(造)マンダラ加持の地に、四角など四種の(マンダラや)、意に
適った他のマンダラを造り、その中央、雑色の八つの花卉の蓮のうてな、日輪
の上に、青色のフーン字より変成せる、触地印を持せる青黒色の阿閼如来を、

1) (*Paramārtha*) *Nāmasaṅgīti*?, 大正, No. 1187. 『最勝妙吉祥根本智最上秘密一切名
義三摩地分』 etc.
2) L. de la Vallée Poussin, *op. cit.*, pp. 191-192 «Jambhalajaladānavidhi»
3) 『施諸餓鬼飲食及水法』大正 No. 1315. p. 467a. 『無量威徳自在光明勝妙之力加持飲
食陀羅尼』No. 1320. p. 480a. etc. 4) 大正 No. 1315. p. 467a-b.
5) 以下、五如来について、*Sh.* p. 40ff. Pancakāra; 頼富本宏, 前掲「Advayavajra 研
究(1)」参照。

kr̥ṣṇavarṇam akṣobhyaṃ, tadanu pūrvadale śukla-omkāraṇiṣpannam
 śuklavarṇam bodhya¹⁾grīmudrādharāṃ vairocanaṃ, tato dakṣiṇadale
 pitatrāṃkāraṃ pitavarṇam varadamudrādharāṃ ratnasambhavaṃ,
 tataḥ paścimadale raktahriḥkārasambhūtaṃ raktavarṇam samādhimu-
 drādharāṃ amitābhaṃ, tata uttaradale śyāmakhaṃkāraṃ śyāma-
 varṇam abhayamudrādharāṃ amoghasiddhiṃ ca bhāvayitvā

om āḥ²⁾ vajrapuṣṭe hūṃ /

ity anenābhimantrīya sarvaṃ iṣṭataraṃ dhaukayet / ete pañcatathā-
 gatāḥ kāśyavastra³⁾prāvṛtāḥ soṣṇiśāḥ śīrastuṇḍamuṇḍitāḥ sūryama-
 ṇḍalasthāḥ⁵⁾ / vairocanaḥ paraśaśimaṇḍali⁴⁾ tataś catvāro⁶⁾ kṣobhyaḥ
 mukhāḥ akṣobhyas tu sādha⁷⁾kābhimukhaḥ /

eṣāṃ⁸⁾ agrataḥ⁷⁾ triśaraṇagāthāṃ imāṃ yathādhigamam āmukhikur-
 van paṭhet / tatreyāṃ triśaraṇagāthā

namo buddhāya gurave namo dharmāya tāyine /
 namaḥ saṃghāya mahate tribhyo⁹⁾'pi satataṃ namaḥ // 14 //
 ratnatrayaṃ me śaraṇaṃ sarvaṃ pratidiśāmy agham /
 anumode jagatpuṇyaṃ buddhabodhau dadhe manaḥ // 15 //
 ā bodheḥ śaraṇaṃ yāmi buddhaṃ dharmaṃ gaṇottamam /
 bodhau cittaṃ karomy eṣa svaparārthaprasiddhaye // 16 //

utpādayāmi varabodhicittaṃ

nirmantrayāmy ahu sarvasattvān /¹⁰⁾

(Sh. 6) iṣṭāṃ cariṣye varabodhicārikāṃ¹¹⁾

buddho bhaveyaṃ jagato hitāya // 17 //

1) *N*₁ bodhagrī, Sh. bodhyaṅgī 2) *Tib. om.* 3) *N*₁ °ntrā (4—4) *Sh.*, *N*₁
 śīratu°, *Tib. om.* 5) *Sh.*, *N*₁ °rāvasthāḥ 6) *T* °mukhāni 7) *T* °grata
 8) *Sh.*, *N*₁ om. 9) *T* satan 10) *Sh.*, *N*₁ nimantra° 11) *Sh.* aham
 12) *N*₁ °cāraḥ

次いで、東方の花弁に白色のオン字より変成せる覚勝印を持せる白色の毘
 盧遮那（如来）を、

次いで、南方の花弁に、黄色のトラーン字より生ぜる、施願印を持せる黄色
 の宝生（如来）を、

次いで、西方の花弁に、赤色のフリー字より生ぜる、禪定印を持せる赤色の
 阿弥陀（如来）を、

次いで、北方の花弁に、暗（緑）色のクハン字より生ぜる、施無畏印を持せ
 る、暗（緑）色の不空成就（如来）を觀想して、（次に）

オン、アーハ、金剛華よ、フーン

と言う、この（真言）を誦して、全ての、より好ましき（供物を、五如来に）
 獻ぜよ。

これらの五如来は、袈裟を着け、頂髻あり、頭髮や白鬚を剃除しており、日
 輪に住している。毘盧遮那（如来）は、最勝月輪（の後背？）を持っており、
 又、四仏は阿閼（如来）に對面し、阿閼（如来）は成就者と面している。

（次いで）

これら（諸如来）の御前で、理解したとおりに、次の三婦の偈を（諸如来に）
 向って唱うべし。即ち、これが三婦の偈である。

①④尊き方、仏陀に帰依したてまつる。救護を作す法に帰依したてまつる。大
 いなる僧伽に帰依したてまつる。常に三（宝）に帰依したてまつる。

①⑤三宝は、我が帰依所なり。（我が）全ての罪を懺悔したてまつる。我は世
 間の福德に随喜し、（我が）心を仏菩提に決定せん。

①⑥覺りを得るに至るまで、我は、仏・法・最勝僧伽に帰依したてまつる。自
 と他との利益を成ぜんがために、これなる我は、菩提に心を起さん。

①⑦我は最勝なる菩提心を發起せん、

我は一切衆生を招請せん、

望ましき最勝菩提行を我は行ぜん、

世を利せんがために我、覺者とならん。⁻²⁾

1) Paraśaśimaṇḍali について、頼富 *op. cit.*, p.155, 注11 参照。
 L. de la Vallée Poussin, *op. cit.*, p.198, 19f. “vairocana tu candrāsanaś
 candraprabhaḥ”.
 (2—2) Cf. 氏家昭夫, 「ネパールの仏教儀礼の紹介」『密教文化』, 105号, p.91.
 B. Bhattacharya, *Sādhanaṃālā*. Vol. I Baroda, 1925, p.29.

deśanā sarvapāpānāṃ puṇyānāṃ cānumodanā /
kr̥topavāsāś¹⁾ carīṣyāmi āryāṣṭāṅgikapoṣadham // 18 //

tataḥ

śīlacandalīptāṅgā²⁾ dhyānaprāvaraṇāvṛtāḥ /
bodhyaṅgakusumākīrṇā³⁾ viharadhvaṃ yathāsukham // 19 //

iti paṭhitvā

oṃ vajramaṇḍala muḥ⁴⁾ /

ity anena visarjayet / evaṃ mañjuśrīprabhṛtin api yathopadeśaṃ
pūjayed //

// maṇḍalapūjāvidhiḥ⁵⁾ //

dānaṃ gomayam ambunā ca sahitāṃ śīlaṃ ca saṃmārjanam
kṣāntiḥ⁶⁾ kṣudrapipilikāpanayanam⁷⁾ vīryam⁸⁾ kriyothhāpanam /
dhyānam⁹⁾ tatkṣaṇam ekacittakaranam prajñā surekhojjvalā¹⁰⁾
etāḥ¹¹⁾ pāramitāḥ ṣaḍ eva labhate kṛtvā muner maṇḍalam // 20 //

bhavati kanakavarṇaḥ sarvarogair vimuktaḥ¹²⁾
suramanujaviśiṣṭaś¹³⁾ candravaddiptakāntiḥ /
dhanakanakasamṛddho¹⁴⁾ jāyate rājavamśe¹⁵⁾

sugatavaragr̥he 'smin kāyakarmāṇi kṛtvā // 21 //

// maṇḍalānuśamsā gāthā //

1) N_1 °sañca°, *T* damaged, *Tib.* sñuñ (*D* bsñuñ) bar bya ba 2) N_1 śīlañ ca°
3) N_1 °ṅgam, *T* °ṅgan 4) N_1 °rṇam 5) *Tib.* hūṃ muḥ 6) *Tib.* dkyil
h̄khor gyi cho gaḥo 7) N_1 pipyīlikā 8) *Sh.*, N_1 kriyāsthāpanam, *Tib.* h̄jug
paḥo 9) *Tib.* mtshon (*D* tshogs) sogs legs 10) N_1 eteḥ 11) N_1 munir
12) *T* viśiṣṭa ca° 13) *T* °diptikāntiḥ 14) N_1 °smṛddho, *T* °smṛddhe
15) N_1 °vaśe, *T* °varśa

18) 全ての罪の懺悔と、諸々の福德への随喜あり。断食を作し了えた我は聖なる八斎戒を行ぜん。

次いで

19) 戒なる香を身体に塗れる御方、禅定なる衣を着けられたる御方、菩提支分なる花で飾られたる御方、(五如来よ、) 御意のままに住したまえ。

と唱えて、

オーン、金剛マンドラよ、ムフ

と、この(真言)をもって、撻遣すべし。かくの如く、文殊師利(菩薩)等をも、また、示したとおりに供養すべし。

// (以上が) マンドラ供養の儀軌である //

20) 牛糞と水とを混ぜ合わせる布施、(これをもって地を) 浄潔する持戒、小さき蟻(をも) 除去する忍辱、行法に専念する精進、その刹那に心を一にする禅定、(マンドラの) 美しき絵画の如く輝ける智慧、これらの六波羅蜜を、(行者は) 牟尼のマンドラを造りて得る。

21) 身業を作し了えて、金色(に輝ける)者、全ての病患を離れし者、すぐれたる天・人、月のごとく清き輝きを持てる者となり、財宝・黄金に満てる者となりて、王家に属するこのすぐれた善逝の家に生まれん。

// マンドラ讚歎の偈 //

(1—1) Cf. 氏家, *op. cit.*, p.93; L. de la Vallée Poussin, *op. cit.*, p.196.

Subhāṣitaratnakaraṇḍaka, National Archives, Nepal 所蔵梵文写本 No.3-297, §11. *Maṇḍalakahā* 7a-7b (*Tib. P. No.* 5424, No.5668 (善説寶篋譚)).

bhavati kanakavarṇataḥ sarvarogair vimuktaḥ¹²⁾
suramanujaviśiṣṭaś¹³⁾ candravaddiptakāntiḥ /
dhanakanakasamṛddho¹⁴⁾ jāyate rājavamśe¹⁵⁾
sugatavaragr̥hasmin maṇḍalam yaḥ karoti //
dānaṃ gomayam ambunā ca sahitāṃ śīlaṃ ca saṃmārjanam
kṣāntiḥ kṣudrapipilikāpanayanam vīryam kriyothhāpanam /
dhyānam tatkṣaṇam ekacittakaranam prajñā surekhojjvalā
etā pāramitāḥ ṣaḍ eva labhate kṛtvā muner maṇḍalam //

pratyahaṃ maṇḍalaṃ kṛtvā puṣpagomayavāribhiḥ /
 triṣkālaṃ gurave kiṃ cid dattvā bhaktyā ca vandayet // 22 //
 pareṣāṃ manasas tuṣṭiṃ varjayed ātmacetasaḥ /
 sukhi prāsādiko dhanyaḥ sukhāvatyāṃ sa jāyate // 23 //
 (Sh. 7) syāt ṣaṭpāramitāpūri buddhādibhir adhiṣṭhitaḥ /
 anantaḡuṇasaṃpanno maṇḍalaṃ prakaroti yaḥ // 24 //
 iti //

// anuśaṃsā //

prajñāpāramitāṃ samyag maṇḍalādividhānataḥ /
 paṭhitvā pūjayed nityaṃ tadarthaṃ avagāhanam // 25 //
 ekagāthāṃ caturgāthāṃ gāthādivitayadhāraṇīm /
 ṣaṇmukhiṃ bhadracaryāṃ ca triṣkālaṃ ca trikālataḥ // 26 //
 ekākṣaram upādāya lakṣam yāvat samāhitaḥ /
 akhaṇḍitasamādāno yathālābhaṃ paṭhet sudhiḥ // 27 //
 buddhabodhisattvapaṭapustakapratimādimś ca pūjayet /
 // paṭapustakapūjāvidhiḥ //

idāniṃ Mahāmaṇḍalavyūhatanrānusāreṇa sañcakatāḍanavidhir
 atidiśyate /

1) *N*₁ guruve 2) *N*₁, *T* bhaktiṃ (3—3) *T* manasman tuṣ° 4) *Tib.* ḥphel
 bar byed (5—5) *Tib.* bde shiñ tshad med nor dañ ldan 6) *N*₁ °sāpamnā
 (7—7) *Tib.* shes bya ba la sogs pa phan yon rgyas par ḥbyuñ ba yin no
 8) *T* °naḥ 9) *N*₁ °raṇi, *T* °raṇ 10) *N*₁ triskatvañ 11) *Sh.* ekākṣarīm,
T ekākṣa [damaged] 12) *T* lakṣyaṃ 13) *Tib.* yid mñams pa med pa yi
 14) *N*₁, *T* sarvakaṭāda°, *Tib.* tsha tsha gdab paḥi cho ga 15) *N*₁ iti°

- 22) 日々、花と牛糞と水とをもちて、マンダラ（供養）を作して、三時（の時
 々）に些少なりとも導師に施を作し、信をもちて礼すべし。
 23) 他の人々に、心の満足を（与え）、自らの心（の楽しみ）は棄つべし。（か
 かる）快樂、深き恵みと、財を持てる者、そは極楽に生る。
 24) 無量の徳を具えたる、マンダラを造作せる者は、諸仏によりて加持せられ、
 六波羅蜜を成満せん。

//（以上がマンダラの）讚嘆である //

- 25) マンダラ等の儀則に従いて、『般若波羅蜜多（經）』を正しく誦して、供養
 すべし。常に、その（深）意を理解（すべし）。
 26) 一頌、四頌、或は二頌のダラニ、『六門（陀羅尼經）』や『普賢行（讚）』
 を、三時に三度、（誦誦すべし）。
 27) 禪定にある間、一字の（呪を）十万返取りて、不断に、（呪を）受持する賢
 者は、（經、ダラニを）得るがままに誦誦すべし。
 （この頌に説かれたる如く）仏、菩薩の画や經や像等を供養すべし。

// 画や經の供養の儀則 //

次いで、『大曼荼羅莊嚴タントラ』に従って、輒仏造（塔）の儀則が説かる。

1) Cf. *Ṣaṇmukhināmādhāraṇī*; 『六門陀羅尼經』大正 No. 1360
 2) Cf. *Tsha tsha ḥdebs paḥi cho ga*, *Tib. D. No. 2846*. Lokesh Chandra; *Tibetan
 Sanskrit Dictionary*. p. 1924, sāccha, prapātika, sañcaka. L. de la Vallée
 Poussin, *op. cit.*, p. 218, sajjaka? 以下, L. de la Vallée Poussin, *op. cit.*,
 p. 193, 13-194, 3 “Sarvakaṭādanavidhi”

namaḥ samantabuddhānām /

oṃ vajrapuṣpe svāhā / mṛttikāgrahaṇamantraḥ /

oṃ vajrodbhavāya svāhā / bimbavalanamantraḥ /

oṃ araje viraje svāhā / tailamrakṣaṇamantraḥ /

oṃ dharmadhātugarbhe svāhā / mudrākṣepanamantraḥ /

oṃ vajramudgarākoṭana svāhā / ākoṭanamantraḥ /

oṃ dharmarate svāhā / ākarṣaṇamantraḥ /

oṃ supraṭiṣṭhitavajre svāhā / sthāpanamantraḥ /

oṃ sarvatathāgatamaṇiśatadipte jvala jvala dharmadhātugarbhe svāhā / praṭiṣṭhāmantraḥ /

(Sh. 8) oṃ svabhāvasūddhe ā hara ā hara ā gaccha ā gaccha dharmadhātugarbhe svāhā / visarjaṇamantraḥ /

oṃ ākāśadhātugarbhe svāhā / kṣamāpaṇamantraḥ / iti /

// sañcakatāḍanavidhiḥ //

oṃ namo bhagavate vairocanaḥprabhārājāya tathāgatāyārhatē samyakṣambuddhāya / tadyathā oṃ sūkṣme sūkṣme same samaye śānte dānte samārope anālambe tarambe yaśovati mahāteje nirākulanirvāṇe sarvabuddhādhiṣṭhānādhiṣṭhite svāhā /

anayā dhāraṇyā mṛtṭiṇḍaṃ vālukāṇḍaṃ vaikaviṃśativārāṇ pariṇipya caityaṃ kuryāt / yāvantaḥ tasmin paramāṇavas tāvantiyaḥ koṭyaḥ caityāni kṛtāni bhavanti paramāṇusamkhyātāni puṇyāni pra-

1) T °valamantraḥ, Tib. ḥbi ḥbi bya ba 2) N₁ tela° 3) Tib. rgyar gshug pa° 4) Tib. akoṭaya 5) Tib. dharmāyuṣe 6) Sh., N₁, T aprati° (7—7) Tib. ahara ahara agaccha agaccha (D āgaccha āgaccha) 8) T ākāśagarbhe garbhe, Tib. ākāśadharmadhātu° 9) N₁, T sarvakaṭāḍa° (10—10) T samāropeṇālambe 11) T carambe 12) T yaśobhavati 13) N₁, T nirākule° (N₁ °ākule?) 14) T dhāriṇyā 15) N₁ yāvanta 16) T tesmin 17) N₁, T koṭya 18) T °samkhyāni

普き諸仏に帰依したてまつる。

オーン、金剛華に、スヴァーハー。粘土を受得する真言

オーン、金剛を出生するものよ、スヴァーハー。影像を出現する真言

オーン、穢れなきもの、離垢なるものよ、スヴァーハー。塗胡麻油の真言

オーン、法界を胎藏せるものよ、スヴァーハー。印を能引する真言

オーン、金剛なる槌打よ、スヴァーハー。打真言

オーン、法を楽しめるものよ、スヴァーハー。鉤引真言

オーン、善安住金剛よ、スヴァーハー。安住真言

オーン、一切如来の百の宝珠の輝きを持てる者よ。輝け、輝け、法界を胎藏せるものよ、スヴァーハー。建立真言

オーン、自性清浄なる者よ、アー、去りたまえ、アー、去りたまえ、アー、往きたまえ、アー、往きたまえ。法界を胎藏せる者に、スヴァーハー。撓遣真言

オーン、虚空界を胎藏せるものよ、スヴァーハー。乞許真言

// 輒仏造(塔)の儀軌 //

(1—
オーン、世尊・毘盧遮那なる光明王、如来、阿羅漢、正等覚者に帰依したてまつる。即ち、オーン、微細なるもの、微細なるもの、平等なるもの、本誓をもてるもの、寂静なるもの、統御せるもの、増益するもの、依所なきもの(? 著依なき)、救度するもの、栄誉あるもの、大威光あるもの、静穩なる涅槃あるもの、一切諸仏の神力により加持せられたるものよ、スヴァーハー。

このダラニをもって、粘土の塊り、あるいは砂の塊りを二十一遍呪して(加持し)、塔を造るべし。

その間に、そこにて、極微の数と同じ数の億数の塔を造るならば、(それに応じた)極微数の福德を得、

(1—1) L. de la Vallée Poussin, *op. cit.*, p. 192, 17-193, 2 “Caityakaraṇavidhi”

tilabhate daśabhūmiśvaro bhavati kṣipraṃ cānuttarāṃ samyaksaṃ-
bodhim abhisambhotsyate / idam¹⁾ avocad bhagavān vairocanaś ta-
thāgataḥ /

// mahānuśamsādhāraṇī²⁾ //

ye dharmā hetuprabhavā hetuṃ teṣāṃ tathāgataḥ /
hy avadat teṣāṃ ca yo nirodha evaṃvādī mahāśramaṇaḥ³⁾ //28//
iti gāthayā pratiṣṭhāṃ kṛtvā⁴⁾
oṃ namo bhagavate ratnaketurājāya tathāgatāyārhatē
samyaksambuddhāya / tadyathā / oṃ ratne ratne mahāratne⁵⁾
ratnavijaye svāhā /
ity anena caityavandanāṃ kuryāt / anayā dhāraṇyaikacaitiyavanda-⁶⁾
nayā koṭīcāityavandanā bhavati /

// mṛttikāsikatādicaitiyakaraṇavidhiḥ //

etat sarvaviśiṣṭaparīṇāmanayā parīṇāmyamānaṃ viśiṣṭa (Sh. 9)
phalāvāhakaṃ bhavatīti Prajñāpāramitoktena mahāparīṇāmena pari-⁷⁾
ṇāmayet /⁸⁾

tadyathā yathā te tathāgatā arhantaḥ samyaksaṃbuddhā
buddhajñānena buddhacakṣuṣā jānanti paśyanti tat kuśalamūlaṃ yaj
jātikam yan nikāyaṃ yādṛśaṃ yal lakṣaṇaṃ yat svabhāvaṃ⁹⁾
dharmatayā saṃvidyate tathāham anumode tat kuśalamūlaṃ /¹⁰⁾
yathā ca te tathāgatā arhantaḥ samyaksaṃbuddhā abhyanujānanti¹¹⁻¹²⁾

1) Sh. °syata idam 2) Tib. gzuñs ḥdi ni phan yon dpag tu med do

3) N₁ °śravaṇaḥ 4) P om. oṃ 5) Tib. ratnabodhi 6) T dhāriṇyā eka°

7) Tib. om. 8) T °pāramitājñāna 9) N₁ yasvabhāvaṃ 10) Sh., N₁

tathā anu° (11—11) T yathācābhyanujānanti 13) Tib. om. abhyanujānanti

十地において自在なる者となり、速やかに、無上正等菩提を現等覚するを得ん。
かく、世尊・毘盧遮那如来は説かれたり。

// 大功德ダラニ //

諸法は因(縁)生なり、それらの因を如来は説きたまえり。又、これらの
法には滅ありと、大沙門はかくの如く説きたまえり。¹⁾

という偈をもって(塔の)建立をなして、

オーン、世尊宝幢王如来、阿羅漢、正等覚者に帰依したてまつる。

すなわち、オーン、宝よ、宝よ、大宝よ、最勝宝よ、スヴァーハー

という、この(真言)をもって塔を礼拝せよ。このダラニをもって一塔を礼拝
するは、億数の塔を拜するに(等しき)ものなり。²⁾

// 泥砂等による造塔の儀則 //

ここに(廻向を説かん。)

「全てに勝れたる廻向をもって、廻向せば、勝れたる果をもたらすこととな
らん。」と言う、『般若波羅蜜多(経)』に説かれている大いなる廻向をもって
廻向すべし。

例えば即ち、³⁻「かの如来、阿羅漢、正等覚者方は、仏智により、仏眼によっ
て、その善根がいかなる種姓で、いかなる部派で、どのようであって、いかな
る特徴で、いかなる自性で、いかなる本質であるかを、知り見ておられる。」⁻³⁾
その様にそれと同じ善根に我は随喜す。

また、「かの如来、阿羅漢、正等覚者方が、無上正等菩提に向けて、

1) Cf. L. de la Vallée Poussin, *op. cit.*, p. 193, 3-4, 氏家, *op. cit.*, p. 85;
E. Senart, *Le Mahāvastu*, Part III, Paris, 1897, p. 461. Cf. 木村高尉「壞爐偈
考」豊山教学大会紀要, 1号.

(2-2) L. de la Vallée Poussin, *op. cit.*, p. 193, 10-13.

(3-3) Wogihara and Tsuchida; *Saddharmapuṇḍarikasūtram*, Tokyo, 1935. §2,
p. 29, 3-7: sarvadharmān api thathāgata eva jānāti / ye ca yathā ca
yādṛśās ca yal lakṣaṇās ca yat svabhāvās ca te dharmā iti /
氏家, *op. cit.*, pp. 91-92. L. de la Vallée Poussin, *op. cit.*, p. 201, 4-9.

pariṇāmyamānaṃ¹⁾ tat kuśalamūlam anuttarāyāṃ samyaksambodhau
tathāhaṃ pariṇāmyāmi / iti / aparam

anena cāhaṃ kuśalena karmaṇā²⁾

bhaveya buddho na cireṇa loke /

deśeya dharmāṃ jagato hitāya³⁾

moceya sattvān bahuduḥkhaṇḍitān // 29 //

// puṇyānumodanāpariṇāmaṇḍiḥ //⁴⁾

yasya yasya yad ājivyam śuddhājivyas tad arjayet⁵⁾ /

kṣutyarthaṃ⁶⁾ vyādhiśāntyarthaṃ bhaiṣajyam iva cintayet // 30 //

tato yathāmilitāneṣu⁷⁾

om akāro mukhaṃ sarvadharmāṇāṃ ādyanutpannatvāt om

āḥ hūṃ phaṭ svāhā /

ity anena balim dadyāt /

om āḥ sarvabuddhabodhisattvebhyo vajranaivedye hūṃ

ity anena naivedyam dadyāt /

om hāriti mahāyakṣiṇi hara hara sarvapāpān⁸⁾ kṣim svāhā /

iti paṭhitvā hāritibhaktapiṇḍadvayam dadyāt /⁹⁾

om agrapiṇḍāśibhyaḥ svāhā /¹⁰⁾ ¹¹⁾

ity agrapiṇḍadānam /

tadanu /

om āḥ hūṃ

ity anena svapātrabhaktam adhiṣṭhāya yāvad

1) *T om.* 2) *T karmānā* 3) *N₁ dharmā* 4) *T °nāmanāvi°* 5) *Tib. rgyal ba*
6) *Sh. kṣāntyarthaṃ°, N₁ kṣantarthaṃ°, Tib. bkres dañ skom sogs shi byaḥi*
phyir / sman bshin tu ni bsam par bya / 7) *Sh. °militāneṣu, Tib. sñed*
(D rñed) paḥi zas la 8) *N₁ °pāpāṃ, Tib. °ām naśrini (D naśina)*
9) *Tib. om. hāriti* 10) *Sh., T, N₁ om. om* 11) *T °ḍāśebhyaḥ*

廻向しつつある彼の（本質的な）善根を了知しておられる。」そのように、我
も又、廻向せん、と（説かれており）、更に他（の偈にも説かれている。）

29) 我はこの善なる行為により、久しからずして（この）生にて覺者とならん。

我は、世間の利益のために法を示さん、多くの苦に悩める衆生を救わん。

// 福德に随喜し、廻向する儀則 //

30) それぞれの者に資食があるが、それを、清浄なる生活をする者は飢を（癒
さんがために）獲べし。あたかも病を癒さんがための薬の如しと想うべし。

そこで、集められたるがままの食に対して、

オーン、ア字は一切諸法の門なり、（一切諸法は）本不生なるが故に。オー
ン、アーハ、フーン、パット、スヴァーハー¹⁾

と言うこの（真言）によって、供物を施すべし。

オーン、アーハ、一切の仏菩薩に（帰依したてまつる）。金剛妙食のため
に、フーン

と言うこの（真言）をもって、妙食を施せ。

オーン、鬼子母（神）よ、大薬叉女よ、破せ、破せ、一切の悪を、クシー
ン、スヴァーハー

と呪して、鬼子母の粥飯と団食との二を施せ。

オーン、上妙の団食を食する者に（帰命す）、スヴァーハー

これは、施上妙団食の（真言）である。

次いで、

オーン、アーハ、フーン

と言うこの（真言）をもって、自らの鉢の食物を加持し、乃至、

1) 本不生偈については“*Amanasikārādhāra*”, *Sh. p. 61, 26-62, 3* 参照。
氏家, *op. cit.*, p. 85. 大正大学密教聖典研究会「*Vajradhātumahāmaṇḍalopāyikā-*
Sarvavajrodaya—梵文テキストと和訳—(II)」, 『大正大学総合仏教研究所年報』,
9号, p. 80.

2) *Tib. zan chañ bu gñis.* (飲食と酒の二つ)

viśādidośasāntaye¹⁾ prathamato'nāmānguṣṭhābhyām upaspr̥śya bhuñjita
 tadanu yathāsukhaṃ bhuktvotsr̥ṣṭam annam,²⁾
 om utsr̥ṣṭapiṇḍāsanebhyaḥ svāhā / utsr̥ṣṭapiṇḍam dadyāt /
 pariśiṣṭam annam anabhisamdhānenaiva parityajet /
 tathā ca
 (Sh. 10) baliṃ dadyād naivedyam ca hāritim agrapiṇḍakam^{4) 5-} /⁻⁵⁾
 mahāphalopabhogyāya⁶⁾ utsr̥ṣṭam pañcamam dadet // 31 //
 iti /
 tadanv ācamanādikaṃ kṛtvā pariśuddhabuddhiviśiṣṭasukhasaman-
 vāgataḥ⁷⁾ sarvasattvahitasukhāyedaṃ tridhāvartayet /⁸⁾
 rājā dānapatiś caiva ye cānye⁹⁾ sattvarāśayaḥ /
 prāpnuvantu sadā saukhyam āyurārogyasampadaḥ¹⁰⁾ // 32 //
 iti /
 tadanu pariśuddhakāyavāñmanaḥkarmā yathecchaṃ viharet /
 anantaram upaviśya jātakanidānāvādānakathayā¹¹⁾ kalyānamitraiḥ¹²⁾ saha-
 gatair vā sārddham¹³⁻ dīnam⁻¹³⁾ anudinam⁽¹⁴⁻ vātivāhayet /⁻¹⁴⁾
 tato vikālasamdhayāyām api dhyānajapasamstavādikaṃ yathādhi-
 gamākhinnamānaṣam¹⁵⁾ kuryāt / yugakārādīmantreṇa¹⁶⁾ dattabalir yoga-
 nidrayā supyāt /
 upāsakaśabdaḥ¹⁸⁾ katham jñātavyaḥ /

1) Sh. śāntyarthaṃ, N₁ śāntayā 2) N₁, T °nnaḥ 3) Tib. byin gyis ma brlabs
 pa ni (4—4) Sh., N₁ om. ca (5—5) Sh., N₁, T hāritim°, Tib. ḥphrog ma
 dañ po chan bu 6) T °bhogyaye 7) Sh. °vāgata (8—8) N₁ tidhā°
 9) T cā sa° 10) N₁, T °pada 11) Sh. °nidānoktadā°, N₁ °nidānāttadādāna°,
 T °nidāvādāna° 12) N₁ °mitaiḥ (13—13) N₁ dinamuddinam,
 T dinamaddīnam (14—14) N₁ vāmativā, T ativāhayet
 15) Tib. yi ge a 16) Tib. om. mantrena 17) N₁, T °baliyo°
 18) Sh. °tavyaḥ? (u iti), N₁ °tavyam

毒などの患いを鎮めるために、初めに無名指と拇指で（食を）つまんで食せよ。
 次いで、好むがままに食べ、残された食に、
 オーン、残食に、スヴァーハー
 と（誦して）、残食を施せ。残された食を無作意に散ぜよ。
 また、
 ㊸鬼子母（神）に、上妙団食と妙食を供物として奉施せん。大いなる果を享
 受せんがために、第五の残食を奉ぜん。
 と（言って）、
 次いで、漱口等をなして、極清浄の智慧と最勝の安樂を具せる者は、一切衆
 生の利益と安樂のために、次の（偈）を三度、誦すべし。
 ㊸王と施主と、また他の（多くの）衆生聚は、長寿と無病を具せる者となっ
 て常に安樂を得よかし。
 と、
 次いで、身・語・意の業が極浄なる者は、好むままに住すべし。
 間断なく坐して、本生・因縁・譬喩譚を語り、善友とあるいは伴の者と共に
 日々を過すべし。
 次いで、夕刻にも静慮、誦持、讚嘆等を、理解せる如く怠心なくすべし。
 （次いで、睡眠時に、行者は）
 ユガ字を初めとするマントラを唱えて、供物を施して、ヨーガの眠り（を）
 眠るべし。
 （このような初業をなす者たる）Upāsakaの語は、いかなる（意を持つも
 の）と知らるべきか。

udyukto buddhapūjāyāṃ upasāntopasāyakaḥ /
upakārāya sattvānām upāyenānvito bhavet // 33 //

pā, iti /

pāpānām varjayed nityaṃ pāpiṣṭhaiḥ saha saṃgatim /
(3— 4) pāpān nivārayej jantoḥ pāpaṃ sarvatra deśayet // 34 //

sa, iti /

samāropavinirmuktaḥ samādhau susamāhitaḥ /
sarvadā paramānandi saṃbodhiṃ sādhyed budhaḥ // 35 //

ka, iti /

karoti sarvadā yatnaṃ karuṇāṃ paripālayet /
kaṣṭhēnāpi na cāniṣṭaṃ karoty upakṛtiṃ parāṃ // 36 //

iti vacanāt /

(Sh. 11) akṣaracatuṣṭayānvito 'yam upāsakaḥ parihṛtākuśalakar-
mopacitapuṇyasambhāro 'bhyāsavaśāj jāgraddaśāvat svapne'pi kuśa-
lāny eva karoti /

pratibimbanibhaṃ paśyañ jagac chuddham anāvilam /
māyāpuruṣavat sarvaṃ kuryād anupalambhataḥ // 37 //

ataś cāvaivarttika ity abhidhiyate / evam ahorātraṃ satatasami-
taṃ puṇyasambhāram upārjayann ā bodhimaṇḍaparyantaṃ sattvahi-
tāhetoḥ saṃtiṣṭhet /

1) P dge bsñen te, D shi bahi dag bsnen te 2) Sh. pāpān āva°,
Tib. sdig pa can dan ḥgrog pa spañ (3—3) Tib. skyes bus sdig pa spoñ
bar byed / kun tu sdig pa bsags byed paḥo / 4) N₁ nivāraṇa, T nivāraṇam
5) P pa sgro brtags las, D sgro btags thams cad 6) Tib. mkhas pas
7) Tib. ḥbad med 8) T parihṛtāñku° 9) T puṇyām 10) N₁ °daśā vata(?)sva°,
T °draśāvasva° 11) N₁ eka, T ekañka 12) T °nimbham
13) T ataḥ vai 14) T satasami° 15) T om. maṇḍa

(Uとは),

33 仏陀の供養に精勤し (udyukta), 寂まりて (upasānta) 善く眠れる者
(upasāyaka) であり, 衆生の利益 (upakāra) のために, 方便 (upāya)
を具足せる者たるべし。

Pā とは,

34 常に諸悪 (pāpa) を斥けん, 極悪なる者 (pāpistha) との交りを (斥くべ
し)。生類の諸悪 (pāpa) を破さん, あらゆる処で悪 (pāpa) を懺悔せん。

Sa とは,

35 (意味を) 付託すること (samāropa) から離れている者, 三昧 (samādhi)
に深く入れる (samāhita) 者, 常に (sarvadā) 最勝歓喜に (住せる) 者
である智者は, 正覚 (saṃbodhi) を得べし。

Ka とは,

36 常に精勤して (karoti), 悲 (karuṇā) (の心) を守護せん。苦しくも
(kaṣṭa) 正しからざるをなさず, 最勝の利益をなさん (karoti)。

ということばによって (知るべし)。

四字 (の義趣を) 具えたこの在家の者は, 悪しき行いを遠離し福智(二)資糧
を積集し修習の力により, 目ざめてある時と同じように眠れる時も, 諸々の善
(根) のみをなす。

(又, 次に)

37 世間は, 清浄無所依にして, 影像の如しと見なしつつ, 又, 不可得なるが
故に一切は幻人の如しとなすべし。

ゆえに, 不退転と呼べる。このようにして昼夜, 常に福德の資糧を積みつつ,
菩提道場にいたるまで, 衆生利益のために住すべし。

(頌に言う,)

nāmnā gaganagarbho'sau madhyamārthaparāyaṇaḥ¹⁾ /
 samādānaṃ karoty eva ādikarmasamāhitaḥ²⁾ // 38 //
 vajrapīṭhāt samāyāto viprajanyaḥ³⁾ sadāsayāḥ⁴⁾ /
 tasyābhyarthanayā caitad ādikarma kṛtaṃ mayā // 39 //
⁵⁻īha hi gaganagarbhābhyarthanāto mayoktaḥ
 katipayapadamātreṇādikarmābhīdhānataḥ⁻⁵⁾ /
⁶⁻aghatimiram⁷⁾ apāsya kleśanirghāta eṣaḥ⁸⁾
 aciram amalabuddher bodhaye'bhyāsataḥ⁻⁶⁾ syāt // 40 //
 ādikarma vidhāyaitad yad alābhi śubhaṃ mayā /
 ādikarma vidhāyaitad utkr̥ṣṭaṃ labhatāṃ jagat⁹⁾ // 47 //
 // kudṛṣṭinirghātanaṃ samāptam iti //

1) *N*₁ °yañcaḥ, *T* °yañca2) *N*₁ samādānakoro°3) *N*₁, *T* °janya4) *N*₁, *T* sadāsayāḥ(5—5) *Tib.* nam mkaḥi sñiñ pos gsol btab bdag gis dañ poḥi las (*P* dños po yi)/
 cho gaḥi tshig ḥgaḥ tsam shig bstan pa yis /(6—6) *Tib.* byañ chub goms par byas nas myur du ñon moñs paḥi / sdig paḥi
 blo yis dri maḥi rab rib ḥdis sel śog7) *N*₁, *T* °timalam8) *Sh.* eṣa9) *N*₁ labhantāṃ, *T* labhantāñ, *Tib.* °gñis med thob par śog

- ③⑧御名からして、虚空を胎藏される、この方は、中道の義理に通達し、初業に専念しておられ、(常に、衆生の) 摂受をなさる。
- ③⑨金剛座より来たれる御方、聡明なる生れの、正しき意樂を持たれる御方、かの御方に、(深く) おたずねして、我はこの初業の(儀則) を書きたり。
- ④⑩ここに、まさに、虚空を胎藏せる御方におたずねすることにより、わずか若干の句をもちて、初業を詮することについて我は説けり。(こを聞く) 者は、罪という眼翳を除き煩惱を破して、(初業の) 修習により久しからずして無垢の覺を悟らん。
- ④⑪この初業を行じて、我によりて善福は得られたり。この初業を行じて、(諸々の) 衆生は勝利を得よかし。

// 『悪見破斥、終る』 //

(森口 光俊)

2. Kudṛṣṭinirghātavākyāṭippinikā

tatrāvasthāḥ trayāḥ¹⁾ / hetvavasthā²⁾ nāma bodhicittāt prabhṛti bodhi-
maṇḍaniśadanam³⁾ yāvat / phalāvasthā nāma samyaksambodhijñānot-
pattau sarvakleśaguṇaprahāṇiprāptyavasthā / sattvārthakriyāvasthā⁴⁾
nāma prathamadharmacakrapravartanāt prabhṛty āśāsanāntardhānam⁵⁾
yāvat /

(Sh. 12) tatra hetvavasthā trividhā, āśayāvasthā, prayogāvasthā,
vaśitāvasthā ceti / tatrāśayāvasthā⁶⁾ sattvanirmokṣapraṇidhānam⁷⁾
taddhetavaś catvārah / tadyathā⁸⁻⁹⁾ /

gotrasanmitrakārūnyaduḥkhābhīrutvāhetavaḥ /

caturbhiḥ⁹⁻¹⁰⁾ pratyayair ebhir¹⁰⁾ bodhicittaḥ prajāyate // 1 //

1) Tib. rdo rje ḥdsin pa (P ḥdsin) la phyag ḥtshal lo / de la gnas skabs ni
rnam pa gsum ste / rgyuḥi gnas skabs dañ / ḥbras buḥi gnas skabs dañ /
sems can gyi don byed paḥi gnas skabs so /

2) N₁, T hetuvavasthāphalāvasthā 3) Sh., N₁, T nivedanam, Tib. gnas

4) T om. guṇa 5) T °śamśanā° 6) Sh., N₁, T vasitā°

7) Tib. inserts deḥi ñe baḥi dkaḥ ba bshi ni ḥdi lta ste / (D inserts gshan gyi)
sdug bśnal ñe bar gsal ba las so sor rtogs pa dañ / dgos pa las so sor
rtogs pa dañ / grogs las so sor rtogs pa dañ / loṅs spyod las so sor rtogs
paḥo / de la thabs su ḥgro ba byañ chub smon pa ste /

(8—8) N₁, T taddhetas..., Tib. deḥi rjes su tshol ba bshi ni ḥdi lta ste /

(9—9) N₁ pratyayor ebhi

10) Sh., N₁ °cittam

2. 積悪見破斥

ここに、住位は三（種）である。（そのうち）因位とは、発菩提心より始めて、菩提道場に座するまでの（位）である。果（位）とは、正覚の知の生起のために、全ての煩惱を破し、福德を得る（にいたるまでの）位である。作衆生利益位とは、初転法輪より始めて、教令の終熄にいたるまでの（位）である。

このうち因位に三種あり、心行位と加行位と自在位とである。このうち、心行位は衆生の解脱を誓願する位であり、その因は四種である。

即ち次の如し。

(1)種姓と正友と悲と無畏苦性という因があり、これら四の縁により、菩提心は生起す。

(1-
iti vacanāt / daśabhir arthair āśayāvasthā /
tatra prayogo dvidhā / adhimukticitṭasya pāramitāḥ sapta /
tatrādhimukticaritasya pāramitā daśa /
dānaṃ śīlaṃ kṣamā vīryaṃ dhyānaṃ prajñā upāyatā /
prañidhānaṃ balaṃ jñānaṃ etāḥ pāramitā daśa // 2 //

bhūmiprāptasya catasrbhiḥ sampadbhiḥ sampannam āśayaprayoga-
pratigrāhakadeyasampadbhir iti / dānaśīlakṣāntivīryadhyānaprajñopā-
yā etāḥ saptapāramitāḥ / adhimukticyācaritapāramitābhyo viśiṣyata
iti dvidhā prayogāvasthā /
tatra vaśitāḥ pañca, tadyathā kleśopapattikarmopāyasattvapari-
pākāvasthā ceti /
tatra hetvavasthāsthītena sarvam ādikarma kartavyaṃ / phalā-
vasthāsattvārthakriyāvasthāsthitasya ca śākyamuner ivānābhogena
ādikarma pravartata eveti / vistareṇa kudrṣṭinirghāte jñeyam /
// kudrṣṭinirghātavākyaṭippinikeyaṃ śrīmatpaṇḍitāvadhūtādvaya-
vajrapādānāṃ kṛtir iyaṃ //

(1—1) Tib. shes bya baḥi tshig bcu po ḥdi dag gis sten te / lhag paḥi bsam
paḥi gnas skabs so / lhag par mos paḥi sbyor bas sbyod lam pa rol tu
phyin pa bcu daṅ / sa thob paḥi pha rol tu phyin pa bdun no / de la lhag
par mos paḥi pha rol tu phyin pa bcu ni /

2) N_1 , T prayogā 3) $Sh.$ °mukta° 4) N_1 , T saptāḥ

(5—5) $Sh.$ dānaṃ śīlaṃ kṣāntir vīryaṃ dhyānaṃ prajñā upāyaḥ saptāḥ

6) T adhimukta° 7) N_1 °careta° 8) N_1 °pāritā°

9) N_1 viśiṣyantaiti, T viśeṣyantaiti 10) $Sh.$, N_1 °ghātādivā°

11) N_1 °ṭippinikeya, P ṭiba, D ṭikā

と、説かれていることから（四種なのである）。十の意味によって、心行（意
樂）位がある。

（因位の）うち、加行（位）は二種である。信解心の者には七波羅蜜が、そ
の（加行位の）うち願樂（勝解）（位）を行ずる者には十波羅蜜がある。

(2)施, 戒, 忍, 進, 禅, 慧, 方便, 願, 力, 智, これらが十波羅蜜である。

又、（菩薩の）地（位）を得たる者には、四種の完成をそなえるということが
ある。即ち意樂と加行と受施と施作の完成（の四）である。と（説かる。）

七波羅蜜は、施, 戒, 忍, 進, 禅, 慧と方便とである。

（これは）信解を行ずる者が行じる（十）波羅蜜等とは、区別されるという
ことから、加行位には二種があるのである。

（因位の）うち、自在位は五（種）である。即ち、煩惱（より自在）、生起
（自在）、業（より自在）、方便（自在）、衆生成熟（自在）の（五自在）位で
ある。

このうち、因位に住せる者によりては、全ての初業がなされるべきである。果
位の作衆生利益位に住せる者には（既に）釈迦牟尼がなされた如き、無功用（自
在）による初業がなされる。と（説かる。）

詳しくは、悪見破斥の（儀則）において理解されるべきである。

// これは、『悪見破斥の語句注釈』であり、吉祥なる学者にして、哲人た
るアドヴァヤヴァジュラ上足の御著である。//

（森口 光俊）

3. Mūlāpatti /

(Sh. 13) apratiṣṭhitanirvāṇaṃ jagadānandasundaram /
 natvā mañjuśriyaṃ vaksye mūlāpattīś caturdaśa // 1 //
 ācāryeṣv avamānena sugatājñāvilāṅghane /
 dveṣād²⁾ gotraguṇākhyāne mahāmaitrīvivarjane // 2 //
 bodhicittaparityāge yānatritayanindane /
 guhyākhyāne jane pakṣe jinātmaskandhadūṣaṇe // 3 //
 śuddhātmadharmasandehe duṣṭamaitrīvirāgataḥ /
 dharmeṣv anadvayārope śrāddhacittapradūṣaṇe // 4 //
 samayāsevane⁵⁾ 'prāptau⁶⁾ prajñātmastripadūṣaṇe /
 mūlāpattir bhavet tena mantrinaḥ samayaḥkṣatīḥ // 5 //
 tatkr̥tau siddhaya na syur māro duḥkhasya sañcayaḥ /
 nirayagatiṃ ca bhūṃkte 'sau tivrāṃ⁸⁾ vividhavedanām // 6 //
 guror yathāptitaḥ pūjāṃ vidhāya maṇḍale tataḥ /
 gr̥hṇīyād¹¹⁾ bodhicittaṃ ca ratnatrayādīsaṃvaram // 7 //
 mūlāpattayaḥ samāptāḥ // //

1) *N*₁ vakṣe2) *Sh.*, *N*₁ °ṣāt3) *Sh.* iṣṭa-4) *T* maitryavi°5) *N*₁, *T* °āsevane6) *Sh.*, *N*₁, *T* prāptau7) *Sh.* °kr̥tiḥ8) *N*₁, *T* °gatiṃ9) *Sh.*, *N*₁ tivrā10) *Sh.* °vedanāḥ11) *Sh.* °yāt

3. 根本罪

- (1)涅槃に住せず、世間の喜びをよしとする
 文殊師利に頂礼し、我は十四の根本罪を語らん。
 (2)阿闍梨たちに対する不敬、善逝の教令を誹謗すること、
 瞋恚から種族を誇る³⁾こと、大いなる慈しみを捨てる⁴⁾こと。
 (3)菩提心を捨てる⁵⁾こと、三乗をそしる⁶⁾こと、
 徒党に秘密を説く⁷⁾こと、仏性たる(五)蘊を傷つける⁸⁾こと。
 (4)本体は清らかである法を疑う⁹⁾こと、悪人に対する慈しみを離れる¹⁰⁾こと、
 (不二なる)諸法について非不二と忘想する¹¹⁾こと、信ある者の心を損なう¹²⁾
 と。
 (5)三昧耶の修習を為さない¹³⁾こと、知恵を本体とする女性を損なう¹⁴⁾こと、(以
 上の十四において)根本罪となる。それ(を犯すこと)によって真言行者
 は三昧耶を毀損する。
 (6)それを犯せば、決して成就は無いであろう。苦の集まりである魔が(取り付
 くであろう)。又、彼は地獄に行き、恐ろしい様々な苦痛を受けるのである。
 (7)師を如実に獲得した後、曼荼羅において供養を為し、しかる後、菩提心と
 三宝(皈依)を始めとする律儀を掌握すべし。

『根本罪』終わり

(高橋 尚夫)

注記 序にしるした頼富氏の論稿は Aśvaghōṣa に帰せられる “Mūlāpattisaṃgraha” (S. Lévi; *Autour d'Aśvaghōṣa*, *J.A.* Tome 215, 1929, pp. 266~267) を基本資料として、タントラ仏教の倫理観について考究されたものであるが、Aśvaghōṣa の説く戒相の内容と本稿に説かれるものと若干の相違が見られるので参考までに掲載させていただく。頼富氏：「Āpatti 論書群について」 p. 61.

- 1) 師を敬わないこと。 2) 仏の教命に背くこと。 3) 兄弟弟子が相い争うこと。
 4) 有情への慈悲心を捨てること。 5) 菩提心を捨てること。 6) 自・他の教えを誹謗すること。 7) 未熟の者に秘密の教えを説くこと。 8) (本来五仏である)五蘊を毀損すること。 9) 本性清浄なる諸法を疑うこと。 10) 悪逆なる者を(誤って)慈しむこと。 11) 無自性空である諸存在を(誤って)分別すること。 12) 正しく信じている者に異なった教えを説くこと。 13) 三昧耶を(正しく)保たないこと。 14) (知恵の当体である)女性を軽蔑すること。

4. Sthūlapatti /

vidyāyāḥ¹⁾ sevane prityā samayānām ayogataḥ /
 gaṇacakre vivādaṃ ca guhyadharmaprakāśanāt // 1 //
 śrāddhasattveṣu saddharmadeśanā anyathā bhramāt /
 saptāhaṃ vasan madhye śrāvakanāḃ²⁾ mahakṛte³⁾ // 2 //
 yogābhyañiscite⁴⁾ yogy abhājane guhyadeśanāt /
 sthūlapattir⁵⁾ bhavet tena yoginaḥ samvarakṣatiḥ⁶⁾ // 3 //
 pūjayitvā mahācāryaṃ yathāśaktyupacārataḥ /
 apraticchannacittena deśayet⁷⁾ tatkr̥tau vrati⁸⁾ // 5 //
 sthūlapattayaḥ samāptāḥ⁹⁾ // //

- 1) $N_1, T^\circ dyāyā$
 2) $N_1, T^\circ kānā$
 3) $Sh., N_1 mahakṛte$
 4) $Sh. yogāt pati[ta]ś cet$
 5) $N_1 yogi$
 6) $N_1, T^\circ patriyo$
 7) $Sh., N_1, T^\circ kṛtiḥ$
 8) $T yathāśapa^\circ$
 9) $Sh. deśayet tu, N_1 deśayetta$
 10) $N_1^\circ ptaḥ$

4. 麁 罪

- (1) 嬉々として明妃と戯れること¹⁾、諸々の三昧耶を守らないこと²⁾、
 集会において論争を為すこと³⁾、秘密の法を顕示すること⁴⁾。
 (2) 信ある人々に誤って悪しく正法を説示すること⁵⁾、
 重大事において、声聞たちの間に七日（以上）住すること⁶⁾。
 (3) 瑜伽を体得していないのに瑜伽者（であると言うこと）⁷⁾、
 器でない者に秘密を示すこと⁸⁾。
 （以上の八を犯した場合に）麁罪となる。それ（を犯すこと）によって、瑜
 伽者は律儀を毀損する。
 (4) 能う限りの承事により、大阿闍梨を供養して、誓戒者は覆われざる心を以
 て、（己が）行為にさんげを為すべし。

『麁罪』終わり。

（高橋 尚夫）

- 1) (大印たる) 女性を暴力で犯すこと。
 2) 修行の場で口論すること。
 3) 三昧耶を忌み嫌うこと。
 4) 信心を持つ者に誤った教えを説くこと。
 5) 正しくない方法で五甘露を享受すること。
 6) 声聞と七日（以上）共に住すること。
 7) (正しい) 瑜伽行者のふりをすること。
 8) 器でない者に秘密の教えを説くこと。

6. ⁽¹⁻ Pañcatathāgatamudrāvivarāṇa / ⁻¹⁾(Sh. 23) ⁽²⁻ namo vajrasattvāya / ⁻²⁾

pratītyajātāḥ parikalpaśūnyāḥ

śūnyāḥ svabhāvena na vastusantaḥ /

nocchedīnāś citracidekarūpā

rūpādayaḥ pañcajinā jayanti // 1 //

pañcaskandhāḥ pañcatathāgatās, tatra catvāro vijñānamātratā-
 pratipādanāya akṣobhyaena mudryante / etena bāhyākārāṇām citta-
 mātratvāt grāhyābhāve grāhakaśūnyatayā grāhyagrāhakarāhitam
 paramārthasat samvinmātram vijñānam eva tiṣṭhate / idam eva
 śaradamalamadhyāhnagaganāyāmaṃ nirākāravādīnām maulam jñā-
 nam sādhyam / tathā cuktam /

śūnyam kalpitarūpeṇa nirābhāsam anākṛti /

satsamvitsātamātram vai prṣṭhākāracyākulam // (2)

tad uktam /

rūpakāyau tu paścimāv

iti, api ca /

niṣprapañco nirābhāso dharmakāyo mahāmuneḥ /

rūpakāyau tadudbhūtau prṣṭhe māyeva tiṣṭhataḥ // 3 //

(1—1) Tib. ta thā ga ta pa fca (2—2) N₁ namaḥ sarvavide3) N₁ °taḥ /, Sh. °tāḥ / 4) N₁ kiṃ jñā° 5) N₁ °ṇa 6) T °ti7) N₁ °ya (8—8) N₁ bhāve

(9—9) T satsātasamva(i?)n, Tib. mchog tu ṅams su myon ba

10) T om. mala 11) Sh., N₁, T °nayamānaṃ, Tib. om. 12) T mādhyaṃ13) N₁ tathāmā 14) T °pañco 15) N₁ °yaiva 16) N₁, T tiṣṭhate

6. 五如来印についての解説

金剛薩埵に帰命し奉る

(1)色等(の五蘊)は縁より生じ、虚妄分別がなく、自性がなく、事物として存在するものでなく、断滅することなく、多様な心を一つの实体としてもち、五勝者として栄光あれかし。

五蘊とは五如来である。そのうち(色受想行の)四(蘊)が、識のみであると言つために阿閼の印によって印契せられる。このようにして外界の形相は唯心であるから、所取がなければ能取もないが故に、所取能取を離れた勝義の实在たるただ知覚作用のみである識だけが存在する。まさにこの、秋の汚れない日中の空の広がり如き根本の識が、無相(唯識)論者にとっての所成である。同様にまた(次のように)云われる。

(2)(識は)分別相がなく、無顕現であり、無相であり、

实在であり、智であり、喜びのみであるが、後得の相の集まりにより迷乱されているものである。

だから『宝性論』に云われる。

後の二つの色身(は法身によって現れる。)

と。さらに又、

(3)大牟尼の法身は無戲論であり、無顕現である。

それ(法身)より生ずる二つの色身が後得に幻の如く住する。

1) Tによると「实在であり、喜びである」

2) =Ratnagotravibhāga II-v.61b (E. H. Johnston “The Ratnagotravibhāga Mahāyānottaratantrasāstra”, Patna, 1950 p.88) : 磯田氏前掲論文 p.131 に指摘される。Cf. J. Takasaki “A study on the Ratnagotravibhāga”, Roma, 1966, p.331

3) Advayavajra “Tattvaratnāvali” (宇井博士前掲論文 v.18, Sh. p.18-17) にも引用されている。そこでは無相唯識派(Nirākāravādiyogācāra)の教義として引用されていることに注意。

1) iti //

nanv akṣobhyamudrayaiva siddhatvāt^(2- -2) kimarthaṃ tarhi “akṣobhyo vajrasattvena mudryate” ity āgamaḥ, yāvat kalpitākārasūnyatāpra-
tipādanāyeti cet / tan na / pūrvamudrayaiva siddhatvāt / tasmād
yathā ’kṣobhyamudrayaiva³⁾ jñānaṃ maulam prṣṭham anyat tathā
vajrasattvamudrayā vijñānam api prṣṭham maulam vajram iti syāt /
uktaṃ ca Vajrasekhare /

4) dṛḍhaṃ sāram asaśīryam acchedyābhedyalakṣaṇam /
5) 6) adāhi avināśi ca sūnyatā vajram ucyate // 4 //

(Sh. 24) iti //

7) 8-8) prṣṭhe rūpādīm cet maulajñānād akṣobhyamudrayā / tad vajra-
9) mudrayā sattvaṃ prṣṭhe^(10- -10) ’ham tanna kim(?) / sattvam¹¹⁾ api prṣṭha
iti cet tarhi karuṇābhāvād ucchedavādaprasaṅgaḥ / iṣyate ca /

vajreṇa sūnyatā proktā sattvena jñānamātratā /
tādātmyam anayoḥ siddhaṃ vajrasattvasvabhāvataḥ // 5 //
sūnyatākṛpayor bhedaḥ pradīpālokayor iva /
sūnyatākṛpayor aikiyaṃ pradīpālokayor iva // 6 //
12- -12) bhāvebhyaḥ sūnyatā nānyā na ca bhāvo ’sti tāṃ vinā /
13) avinābhāvānyamam kṛtakānityayor iva // 7 //
kathyamāne yathā tattve ucchedo naiva samvṛteḥ /
14) samvṛtivyatirekeṇa na tattvam upalabhyate // 8 //

ityādi vistaraḥ //

evam akṣobhyavajrasattvayor aikiyam iti cet tarhi vijñānarūpā-

1) T om. iti (2-2) T om. 3) T mudrayā 4) Tib. khoṅ ston med
5) N₁ °hi, T °hiṣu 6) N₁ avināśi, T vināśi 7) N₁ °ādikaṃ
(8-8) N₁ unclear 9) N₁ om. mudra (10-10) N₁ unclear, Tib. cis mi ḥthob
11) N₁ iti (12-12) Tib. mi phyed dños po nes pa ste
13) N₁ °niyat, T °niyamat 14) T °na

(問:) まさに阿闍の印を以てすでに成就しているのであるから、「阿闍が金剛薩埵によって印契される」という教えは何のためにあるのか? 虚妄分別相はないことを説かんとするためか? (答:) そうではない。まさに先行せる印によってすでに成就している故である。それ故にまさに阿闍の印によっては識が根本であり、他は後得となるように、金剛薩埵の印によっては識もまた¹⁾後得であり、金剛が根本であるということになる。『金剛頂タントラ』に(次のように)述べられている。

(4)堅固で、心髄で、頑丈にして、不断・不可分の相をもち、
不燃で、また不滅なる金剛(杵)が、空性と云われる。
と。

(問:) 根本識に基いて阿闍の印によって色等が後得に印づけられるならば、それゆえに、(同じように)金剛印によって後得において薩埵をどうして得ないだろうか。(否、後得に得る。)薩埵もまた後得である。(答:) 悲 [= 薩埵] がないから断見論者の過失になってしまう。だから(次のように)主張される。

- (5)「金剛薩埵」という語のうち「金剛」によっては空性が説かれて、「薩埵」によっては唯智性(が説かれる。)
金剛薩埵の自性より両者の同一性は成り立っている。
(6)空性と悲との相違は燈火と光明の(その)如くであり、
空性と悲との同一はまた燈火と光明の(その)如くである。
(7)空性は諸々の有に他ならず、それ[空性]がなければ、有もまたない。
(有と空とは)必然関係の定則がある。作られたものと無常のものとの
(間の関係の)如くである。
(8)真実が語られているとき、俗諦は決して断滅しないように
俗諦を離れては、真実は理解されない。

云々と詳細に(語られている。)

(問:) 同じようにして阿闍と金剛薩埵が同一になるだろう。(答:) それ

1) P. No. 113, fol. 170a3. “Yogaratanmālā” に引用されている (D. L. Snellgrove “The Hevajra Tantra, A Critical Study” Part II, London, 1959, p. 104~105).

dyaparityāge citrādvaitavādo¹⁾ / yad uktam /
²⁾ sacitracitmātram aśeṣakalpa-
 śūnyaṃ hi sākāramataṃ mataṃ me /
 gacchatrṇasparśasamānam anye
³⁾ tan madhyamārthaṃ pravādanti santaḥ // 9 //
 citrādvaitavādināṃ⁴⁾ tu paramārthasad iti vijñānam apeśalam /
 grāhyagrāhakaśūnyacitrādvaitākṣobhyarūpajñānasya vajrasattvamud-
 rayā vastusattānirastatvāt / tad uktam /
⁵⁾ rūpādikalpaśūnyaṃ cet jñānam akśobhyamudrayā /
 tad vajrasattvamudrāto vastusattā nirasyate // 10 //
 na ca vijñaptimātrasya kalpitākāraśūnyatā /
 kriyate vajrasattvena pūrvam tasyānavasthiteḥ // 11 //
 (Sh. 25) tad evaṃ paramārthasad iti śalyāpagame sarvatrāprati-
 ṣṭhānarūpānābhogayuganaddhādvayavādisamvedanasiddhamādhyamika⁶⁾-
 siddhāntaḥ⁷⁾ śreyān / ayaṃ ca sadgurupādaprasādād avagamyate /
 nanv atra samvedanasiddhau māyopamādvayavādaprasaṅge⁸⁾ na sarva-
 trāpratiṣṭhānam iti cet / tan na /
 yat pratityasamutpannan
^(10- -10) notpannan tat svabhāvataḥ /
 svabhāvena yan notpannam
 utpannam nāma tat katham // 12 //
 iti // samvedanam ca pratityasamutpannam tasmāt samvedanam

1) N_1 tad 2) N_1 , T saccid° 3) N_1 °ye 4) N_1 om. vi
 5) T °ādīm 6) N_1 °maka° 7) N_1 preyān 8) $Sh.$ ṇa
 (9-9) N_1 om. (10-10) N_1 om.

では識が色等と離れないことになるので、多様不二説〔＝有相唯識説〕がまさ
 ってしまう。そのことが（つぎのように）云われる。

(9)種々の相を伴う唯心はすべての分別を欠いているという有相の説が私の
 考えである。

（ところが、）他の人々は、動いている草に触れるに等しい¹⁾、かの中観
 の義を説いている。

しかし、多様不二説論者達が「究極的存在である」と（主張している）識は
 劣っている。（何故ならば、）所取と能取がなく、多様不二説なる阿閼の相をと
 った智は金剛薩埵印による（後得であるから）実有としての存在性は破されて
 いるので（劣っている。）だから、云われる。

(10)もし色等の分別のない智が阿閼の印によって（生ずるなら）、
 それ故に金剛薩埵印による実有としての存在性は論破される。

(11)また唯識（説）では分別された相が空性であるとするのは、

金剛薩埵によりそれ〔唯識〕が（先に）決定していないのでなされない。

以上のようにそれは勝義であるという弓矢〔誤り〕が除かれた時、全てのとこ
 ろに住しないという性質をもつ無功用双運不二論者²⁾の知覚によって完成した中
 観の教えはすぐれている。またこれは正しい師範下の恩恵より知られる。（問：）
 今（汝が述べたように）この場合（も）知覚があるのだったら、幻喩不二説に
 陥り、すべてのところで無住处であるのではない。（答；） そうではなくて、

(12)縁より生ずるものは自性として生じたものではなく、

自性として生じたのではないものが、どうして出じたものといえようか。³⁾
 と（いわれる。）また知覚は縁より生じるものであるから、それ故に知

1) 意味不詳。

2) Cf. “Tattvaratnāvalī” Sh. p.20, 6 ff. 宇井前掲論文—中観派の項—参照。

3) Cf. P.No.5225 “Yuktiṣaṣṭikākārikā” 23a1; 山口益『中観仏教論攷』（1975年）
 p.62f; 瓜生津隆真訳『六十頌如理論』（大乘仏典14, 龍樹論集, 東京, 1978年）p.44
 -45; Ch. Lindtner, Nagarjuniana, Copenhagen, 1982, p.108-109.

evāpratiṣṭhitam ajātapadam / tathā ca /

samvedanam ajātaṃ¹⁾ vai vastusattā 'pi tāḍṣī /

vajrasattvasvarūpam tu jagad eva jagau munih²⁾ // 13 //

kiṃ ca mañjuśrī tathāgatena pṛṣṭaḥ / “katamo 'sāv acintya-
dhātuḥ” / mañjuśrī āha / “yo dhātur³⁾ niścintyo na cittagamaniyo na
cittaprameyo na cittacetanayā prativeditavyaḥ / asāv ucyate, acintya-
dhātuḥ / atha ca punar bhagavat cittam evācintyadhātuḥ / tat kasya
hetoḥ / na hi acitte⁴⁾ cittaṃ samvidyate / niścintyatā hi cittaṃ⁵⁾
cittasya yathārthāvabodhāt / atha ca sarvākāro bhagavato 'cintya-
dhātuḥ” / anyatrāpy uktam /

avikalpitasāṅkalpa apratiṣṭhitamānasa /

asmṛty amanasikāra nirālamba namo 'stu te // 14 //

⁶⁾ Candrapṛdipe /

yaḥ pratyayair jāyati sa hy ajāto

na tasya utpāda⁽⁷⁻ svabhāvato 'sti /

yaḥ pratyayādhīna sa śūnya uktāḥ

yaḥ śūnyatām jānāti so 'pramattaḥ // 15 //

- 1) T ca
2) T eka
3) N₁ niścito
4) N₁ °tte citte
5) N₁ niścitto
6) Sh. Catuḥ
(7-7) T om.

覚とは無住処のもので、不生のものである。同様にまた

(13) 知覚は不生なるものであり、事物の存在も同様（に不生）である。

世間の人々こそ金剛薩埵を自相とすると牟尼は称える。

更にまた文殊師利に如来が尋ねられた。「この不可思議なる界とは如何なるものか。」文殊師利が答えた。「不思惟にして、心によって観察されるべきではなく、心によって量れなく、心と思惟によって分別されない界が不可思議界であると云われます。さらにまた、世尊よ、心こそまさに不可思議界であります。それは何故かというならば、無心においては心は存在しないからです。なぜならば、心は不思惟性なのであります。心は義のあるがままに悟るからであります。また世尊の一切相も不可思議界であります。」他の（ところでも）説かれている。

(14) 虚妄分別されず思惟しない、無住処の意をもてるかたよ。

思念することなく、無作意無所縁なるおかた、あなたに帰命する。¹⁾

また、『チャンドラプラディーパ』において、

(15) 諸々の（因）縁により生じる人は生まれ（たもので）なく、そのものの出生は自性からではない。

（因）縁によるものが空といわれ、空性を知る人が不放逸である。²⁾

- 1) 無所思惟無分別、淨意亦復無所住、無諸作意無念生、無所縁尊今讚礼『入諸仏境界智光明莊嚴經』大正12卷 p. 262c, 磯田氏前掲論文 p. 109 注4 に指摘されている。“Caturmudrā” (Sh. p. 34), “Amanasikārādhāra” (Sh. p. 60) にも引用されている。
- 2) 縁生彼無生、是不与自然、善縁斯亦空、知空彼無欲『弘道広頭三昧經』大正15卷p. 497b. Candrakīrti の Prasannapadā (L. de la Vallée Poussin, “Mūlamadhyamakakārikās”, Bibliotheca Buddhica 4, Petersburg, 1903-1913 p. 239, 491, 500, 504) と Bodhicaryāvatārapañjikā (P. L. Vaidya, “Bodhicaryāvatāra of Śāntideva”, Darbhanga, 1960, p. 172) に引用される。Cf. J. May “Candrakīrti, Prasannapadā Madhyamakavṛtti” (Paris, 1959) p. 224. なお、Advayavajra はこの偈の典拠を “Candrapradīpa” としているが、どのようなものであるのか不明。

(Sh. 26) āryaLaṅkāvatāre /
 bhrāntim vidhūya sarvām hi nimittam jāyati yadi¹⁾ /
 saiva tasya bhaved bhrāntir aśuddham timiram yathā // 16 //
 tathā ca /
 mā bhūt samvitpratiṣṭhānam ata eva munir bhayāt /
 bhinatti deśanādharmam uktvoktā sūnyatātmanā // 17 //
 uktam ca Hevajre /
 svabhāvaś caivādyanutpannam na satyam na mṛṣeti ca // 18 //
 kiñ ca /
 sarvaḥ samānapratibhāyamānaḥ^{6) 7)}
 sūkṣmām vikāṃkṣām adhipā^{8) -8)} kṛtāntaḥ /
 baudhasya bāhyasya vibhāgakartri
 na syād ihaikā yadi sūnyatoktiḥ // 19 //
 āha ca, ucchedaśūnyatām apanayan /
 tathatām ye tu paśyanti madhyamārthānusārataḥ /
 te vai tattvavido dhanyāḥ pratyakṣam yadi samvidāḥ¹⁰⁾ // 20 //
 tad uktam Dākinivajrapañjare /
 sūnyatākaruṇābhinnam yatra cittam prabhāvīyate /
 sā hi buddhasya dharmasya saṅghasyāpi hi deśanā // 21 //
 tasmāt pañcākārāṇām pratityasamutpannānām pañcatathāgatavas-
 bhāvatvāt¹²⁾, svabhāvasya ca sūnyatākaruṇābhinnatvāt sūnyatākaruṇā-
 bhinnam jagad iti sthitam / etad eva sadguror upadeśato dhyānam¹³⁾
 avicchinam /
 nadisrotapravāhena dipajyotiprabandhavat /^{14) 15) 16)}

1) *N*₁ °hi 2) *N*₁ °vṛti (3-3) *Sh.* uktā hya°, *P* brjod dañ brjod pa yin, *D* ston pa fiid du yañ dag bstan 4) *T* °va (5-5) *Sh.* mṛṣā tathā
 6) *N*₁ °naḥ 7) *T* pravī° (8-8) *Sh.* sūnyoktikāṃkṣām adhiyā, *Tib.* blo ldan phra bas lta baḥi grub paḥi mthaḥ 9) *N*₁ ikā 10) *T* °dā
 11) *N*₁ so 12) *T* rūpa° 13) *T* °va° 14) *T* °taḥ 15) *N*₁ pravāyā°
 16) *Sh.* °tiḥ pra°

また聖『楞伽經』において、
 ⑩すべての迷乱を取り除いても、もしも相が生じるなら
 まさにそれがその人の迷乱となるであろう。翳膜が(その迷いから)不清浄であるように。
 同様にまた、
 ⑪理解していると(執すること)なかれ。まさにこの怖畏から牟尼は説法を分けて説いて、御自身で空性を示した。
 また、『ヘーヴァジュラタントラ』において
 ⑫自性はまた本不生であり、真実でもなければ、虚偽でもない。
 また、
 ⑬すべては平等と分別されるのだが、賢なるものは微細な願いをなしてもし空性という一つの言葉がそこになら、仏と外道を分けるのである。
 また云う、断見としての空性を除いて、
 ⑭中観の義に従って真如を見るものは、
 もしも直接的に知覚するならば、真実を知り、富める人々である³⁾。
 『ダーキニーヴァジュラパンジャラ(タントラ)』においてそれは云われる。
 ⑮そこにおいて空悲の不可分なる心があらわれているのが、
 実に仏・法・僧の説示である。
 それ故に因縁生たる五(蘊の)相が五如来を本性としているから、また(五如来の)自性は空悲の不可分なるものであるから、世間は空悲の不可分となっているものと決定する。まさにこのことを正しい師の教授によって、まさに不断に静慮すべきである。
 ⑯川の流れの相続のように、燈火の明りが間断ないように、

5) B. Nanjo ed. "The Laṅkāvatārasūtra" Kyoto, 1923. p.109 (cf. p.281), 大正16卷 p.535b
 2) D. L. Snellgrove op. cit., II-iii-36
 3) =Sekanirṇaya v. no. 31 (Sh. p. 30, 19-20). 磯田氏前掲論文 p.113 に訳されている。

(56)

mantratattvānusārataḥ^{1) 2)} // 22 //
 tathā³⁾ cāhur Nāgārjunapādāḥ /
 (Sh. 27) kūṭāgāram idam na yat tribhuvanaṃ na prāṇino⁴⁾ 'mī janāḥ
 cakreśo 'smin na mānuṣo⁵⁾ na viṣayā nākṣāṇi na hyādayaḥ /
 rūpādyā na ca dharimatmakatayā te māṇḍaleyā ime
 viśvaṃ maṇḍalacakram ākalayataś cetaḥ kim udhhrāmyasi
 // 23 //
 pratīyasambhavād eva gandharvapurvavat sphuṭam /
 na svabhāvasthitam viśvaṃ nākāśāmbhojasannibham // 24 //
 uktam ca Hevajre /
 amī dharmas tu nirvāṇaṃ mohāt saṃsārarūpiṇaḥ / 25 //
 iti.
 Pañcatathāgatamudrāvivaraṇaṃ samāptam iti //

- 1) T °reṇaḥ
 2) Tib. adds rgyun mi ḥchad paḥ bsam gdan thob
 3) T āhur
 4) T ji°
 5) N₁ om. na

真言の真実に随順することから、(絶えることのない静慮を得る。)同様に龍樹猊下のお言葉より、
 ②③三界そのものである楼閣はなく、生ある人々もない。この(世に)世界の支配者もなく、人間もなく、境もなく、感覚器官もなく、始めというもなく、
 法性を自体とすることによって色等(の五蘊)はまたない。これらはマンダラに属するものたちである。すべてをマンダラの輪と観察するものの心を何故汝は動かすのか。
 ②④まさに縁より生まれるからこそガンダルヴァの城のように明瞭であるが、すべてのものは自性として存在しない。(また)虚空の華のように(全くもって存在しないものでも)ない。¹⁾
 また『ヘーヴァジュラタントラ』²⁾において、
 ②⑤これらの諸法は涅槃であるが、痴故に輪廻の姿をしている。
 と説かれている。

『五如来印についての解説』終る

(前田 崇)

- 1) 出典不明。
 2) Snellgrove, *op. cit.*, II-iv-34.

大正大学総合仏教研究所年報 抜刷

平成元年3月 第11号

11

*Advayavajrasamgraha - New Critical
Edition with Japanese Translation (2) -*

アドヴァヤヴァジュラ著作集

—梵文テキスト・和訳(2)—

"Annual of the Institute for
Comprehensive Studies of
Buddhism, Taisho University"

No. 11 March 1989

密教聖典研究会

アドヴァヤヴァジュラ著作集

—梵文テキスト・和訳(2)—

密教聖典研究会

今回は、白石凌海の担当による 8. “Caturmudrānīścaya”, 野口圭也の担当による 9. “Sekatātparyasaṃgraha” および 24. “Sahajaṣaṭka”, 大塚伸夫の担当による 10. “Pañcākāra”, 矢板秀臣の担当による 23. “Amanasikārādhāra” を収める。前回提出した著作・写本・チベット語訳の一覧表に訂正・加筆があるので、それを記す。

① 23. “Amanasikārādhāra” に続く 6 偈を前回の表では「結頌」としていたが、東北大学の奥山直司氏の御教示により、東北 No. 2232, 大谷 No. 3076, Maitri pa 造 “Sahajaṣaṭka” であることを知った。従ってこの「結頌」を、24. “Sahajaṣaṭka” と改める。

② 21. “Prajñopāyabeyapañca” のチベット語訳は、表に挙げた東北 No. 2246, 大谷 No. 3091 の他に、東北 No. 2237', 大谷 No. 3082, “Prajñopāyabeyapañca” が存在することを、やはり奥山氏のご教示により知った。東北目録ではこの著作は当初見落とされていたのだが、酒井紫朗(真典)博士が補訂し、上記の番号を付したものである(酒井博士「デルゲ版西藏大藏經東北目録補遺」、『文化』第 9 卷第 3 号, 1942, p. 104)。

なお、No. 2246/3091 は著者 Avadhūtipa Advayavajra, 訳者 Vajrapāṇi 及び mTshur Jñānākara, No. 2237'/3082 は、著者 Maitri pa, 訳者 Phyang na 及び rMa ban である。

③ アメリカの The Institute for Advanced Studies of World Religions (IASWR) 所蔵の梵文写本フィルム中に、1. “Kudrṣṭinirghātana” から 18.

“Mahāyānaviṃśikā” の途中までが存在することを、本研究会参加者森口光俊が見出した。これは IASWR 所蔵写本目録には MBB-I-50 “Tattvadeśaka” として記載されている (Ch. S. George: *Buddhist Sanskrit Manuscripts, A Title List of the Microfilm Collection of The Institute*

| | IASWR 写本(略号 I) | D | P |
|----|--|--|---|
| 1 | 1 b 1~6 b 3° nirghāna | | |
| 2 | 6 b 3~7 a 5 | | |
| 3 | 7 a 5~7 a 9 | | |
| 4 | 7 a 9~7 b 3 | | |
| 5 | 7 b 3~12 a 2 | | |
| 6 | 12 a 2~14 a 1 | | |
| 7 | 14 a 1~15 b 3 °nirdeśa | | |
| 8 | 15 b 3~17 b 5 題名なし | | |
| 9 | 17 b 6~19 b 7 | | |
| 10 | 19 b 8~22 a 1 | | |
| 11 | 22 a 1~22 a 9 | | |
| 12 | 22 a 9~22 b 6 | | |
| 13 | 22 b 6~23 a 6 | | |
| 14 | 23 a 7~23 b 5 | | |
| 15 | 23 b 5~24 a 3 | | |
| 16 | 24 a 4~24 b 7 | | |
| 17 | 24 b 8~25 b 5 | | |
| 18 | 25 b 5~26 a 9 incomplete, Sh. p. 54, l. 1~p. 55, l. 16 | | |
| 21 | | No. 2237' · 113 b 6 Prajñopāyabeyapañca [Prajñopāyabeyapañca] dGa' gcugs lña pa | No. 3082 · 124 a 1 Prajñopāyabeyapañca [Prajñopāyabeyapañca] dGa' bcugs lña pa |
| | | No. 2246 · 136 b 6 | No. 3091 · 149 b 6 |
| | | Prajñopāyabeyapañca [Prajñopāyabeyapañca]® | [Prajñopāyabeyapañca]® |
| 24 | | No. 2232 · 111 a 3 Sahajaṣaṭka | No. 3076 · 120 b 6 |

for *Advanced Studies of World Religions*, New York, 1975, p. 3)。著作の列挙順序は前表の番号と一致している。22. “Tattvadaśaka” とよく似た題名でカタログに記載されていることにより、18. の残りから 22. までの部分も同 collection 中に含まれている可能性が高い。しかし現時点では確認し得ていない。

以上の三点により、前回の表を前ページの様に訂正する。

また、7. “Sekanirṇaya”, 22. “Tattvadaśaka” には注釈書がチベット大蔵経中に存在する。それぞれ東北 No. 2253, 大谷 No. 3098, Rāmapāla 造 “Sekanirdeśapañjikā”, 及び東北 No. 2254, 大谷 No. 3099, Sahajavajra 造 “Tattvadaśakaṭikā” である。

次いで、略号について以下のごとく補訂をする。

改正 (テキスト注記略号)

Sh. → Sh

Tib. → Tib

補足

① テキスト注記略号

I : The Institute for Advanced Studies of World Religions フィルム所蔵本。

George 目録 MBB-I-50。

Y : 頼富本宏「Advayavajra 研究(1)」『密教学』13・14 合併号, 1977。

『密教仏の研究』京都, 1989 (予定), に再録。

……10. “Pañcākāra” の梵文テキスト・和訳。

② 引用・関連文献略号

GS : *Guhyasamājantra*. ed. 松長有慶, 『秘密集会タントラ校訂梵本』, 大阪, 1978。

HV : *Hevajatantra*. ed. D. L. Snellgrove, *The Hevajra Tantra, A Critical Study*, London, 1959, part II.

漢訳 : 宋・法護訳『大悲空智金剛大教王儀軌經』大正第18巻, No. 892。

YRM: *Yogaratanmālā*. ed. D. L. Snellgrove, *op. cit.*

VS : *Vajradhātumahāmaṇḍalopāyika Sarvavajrodaya*, ed. 密教聖典研究会 1986, 1987 (下記)。

密教聖典研究会(1986) : 「Vajradhātumahāmaṇḍalopāyikā-Sarvavajrodaya—梵文テキストと和訳—(I)」『大正大学総合仏教研究所年報』第8号, 1986。

密教聖典研究会(1987) : 「Vajradhātumahāmaṇḍalopāyika-Sarvavajrodaya—梵文テキストと和訳—(II) 完」『大正大学総合仏教研究所年報』第9号, 1987。

密教聖典研究会(1988) : 「アドヴァヤヴァジュラ著作集—梵文テキスト・和訳(1)」『大正大学総合仏教研究所年報』第10号, 1988。

また、参照論文として以下のものを補足する。

酒井真典 : 『増補修訂チベット密教教理の研究(一)』高野山, 1956, repr. 東京, 1974, p. 168~177。

……9. “Sekatātparyasaṃgraha” の内容概説。

H. V. Guenther, “Yuganaddha The Tantric View of Life”, Varanasi, 1969, p. 26, 40, 62, 98~102, 125, 129~130, 135, 180, 182, 191, 193, 195, 197.

……1. “Kudrṣṭīnirghātana”, 6. “Pañcatathāgatamudrāvivarāṇa”, 8. “Caturmudrānīścaya”, 9. “Sekatātparyasaṃgraha”, 10. “Yuganaddhaprakāśa”, 16. “Mahāsukhaprakāśa”, 17. “Tattvaviṃśikā”, 18. “Mahāvānaviṃśikā” より、断片的な英訳 (一部はテキスト共) を挙げ、あるいは言及をする。

なお、Nepal National Archives の目録 “Bṛhatsūcipatra” VII—1, p. 152~153 には、1697, pra ka 1 の番号で、“Caturmudrānvaya” の題で8. “Caturmudrānīścaya” の写本が挙げられ、さらに、それに続いて別の文献も収められている旨が記されている。この写本のフィルムは未見であるが、我々の N₈ 写本が1面に13行であるのに対し、これは7行とされているので、もう

1 本別の写本があるものとひとまず考えておく。

次いで今年度の研究会参加者を記す。研究会においては、前回と同様、各担当者が作成した梵文テキスト・和訳に対し、参加者全員で検討を加えた。

指 導：斎藤光純専任講師

研究代表者：矢板秀臣

参加者：大塚伸夫，木村秀明，白石凌海，高橋尚夫，野口圭也，前田 崇，
森口光俊

末筆ながら，貴重な御教示を頂いた東北大学の奥山直司氏に，あらためて甚
深の謝意を表する次第である。 (序文担当：野口圭也)

作品 No.

- 8. 白石凌海：Caturmudrānīścaya p. (92)～(107)
- 9. 野口圭也：Sekatātparyasaṃgraha p. (108)～(121)
- 10. 大塚伸夫：Pañcākāra p. (122)～(135)
- 23. 矢板秀臣：Amanasikārādhāra p. (136)～(143)
- 24. 野口圭也：Sahajaṣaṭka p. (144)～(145)

8. Caturmudrānīścaya¹⁾// Om namaḥ śrīvajrasattvāya²⁾ //[Sh. p. 32] EVAM³⁾ /

vajrasattvaṃ praṇamyādau viśuddhajñānatanmayam /

mudrānvayaḥ samāsenā kriyate ātmabuddhaye //

iḥa hi mudrānvayavibhrānti⁴⁾ mūḍhamanaso bhramanti bhavār-
nave duḥkhitāḥ / teṣāṃ sukheṇa caturmudrārthapratipattaye tantrā-
nusāreṇa mahāsukhasādhanaṃ prasādhyate //caturmudreti karmamudrā dharmamudrā⁸⁾ mahāmudrā samaya-
mudrā / tatra karmamudrāyāḥ svarūpaṃ nirūpyate / karma kāya-
vākcittacintā tatpradhānā mudrā kalpanāsvarūpā / tasyāṃ karma-
mudrāyām ānandā jāyante kṣaṇabhedena bheditāḥ /

kṣaṇajñānāt sukhajñānaṃ EVAM-kāre pratiṣṭhitam //

1) *N₁ I om., Sh gives "Caturmudrā" as the title of this work., N₂ Caturmudrānvayaḥ / It, written in the margin, may be a title for this work. But we follow the tibetan transliteration "Caturmudrānīścaya" at present.*2) *This form of salutation is given only in N₃.*3) *N₃ Tib om. 4) N₃ mudrānvaye vibhrāntā, I °ntyo (5—5) N₁ I.....duḥkhitā, N₃ bhavārṇaduḥkhitāḥ 6) I, tantrā° 7) Tib bde ba chen poḥi sgrub paḥi thabs 8) N₁ om. 9) N₃ om. 10) N₃ I °yā 11) Tib om. (12—12) Sh N₁ I karmayā kāya°, N₂ written in the margin karmakāya cintapradhānā, N₃ karmakāyavākcittacettāpradhānya, Tib las kyi lus daṅ / ṅag daṅ yid kyi bsaṃ pa ste / gtso boḥo / 13) N₃ °yatta, I °yate 14) N₃ °tā 15) I kāra*8. 四 印 決 定¹⁾「オーン、吉祥なる金剛薩埵に帰命し奉る。²⁾エーヴェン³⁾ (とは羯磨印の種字である)。

「清浄なる智よりなれる金剛薩埵に、まず敬礼して、

(四) 印の次第が自らの理解の為に、要約して著される。」

実に、この世においては、愚かな心を持った者達が印の次第に関して混乱している為に迷い、有(輪廻)の大海で苦しんでいる。彼らが、容易に四印の意味を理解するように、タントラに随順して大楽の成就法が完成される。

四印とは、羯磨印、法印、大印、そして三昧耶印である。このうちで、羯磨印の本体が(まず)考察される。(すなわち、「羯磨印」という言葉のうち)「羯磨」とは身語心についての思惟で、その(うちで)最も勝れたものが「印」であって、分別を本体としている。かの羯磨印(すなわちエーヴェン字)において、「(四) 刹那の差別によって区別された(四) 歓喜が生じる」⁴⁾。

「(四) 刹那を知ることにより楽智が“エーヴェン”字に安立する。⁵⁾

1) Tib 音写タイトル—Caturmudrānīścaya,

同意訳—Phyag rgya bñi gtan la dbab pa

2) Tib 帰敬文は「尊者、文殊師利法王子に帰命し奉る。」

(bcom ldan ḥdas ḥjam dpal gñon nur gyur pa la phyag ḥtshal lo)

3) EVAM の HV における説明は、II-iii-2 以下参照 (HV p.52)。また HV の註釈書 YRM では *Evam mayā.....* の *Evam* に関連して「E字は、女陰と言われ、VAM 字は男根である。」(E-kāraṃ bhagam ity uktaṃ VAM-kāraṃ kuliṣaṃ smṛtaṃ) と説明される。また、E 字は羯磨印、VAM 字は法印とも説明される。(YRM p.103-104.)

4) Cf. HV II-iii-5ab, p.52: ānandās tatra jāyante kṣaṇabhedena bheditāḥ /

5) HV II-iii-5cd, p.52 この部分に対応する漢訳は「於初喜等分別刹那住妙樂智」(596 -a)

ānandās catvārah / ānandaḥ paramānandaḥ saha-jānando viramā-
nandaḥ /
anyathā /
paramaviramamayor¹⁾ madhye lakṣyaṃ vikṣya²⁾ dṛḍhikuru /
iti yad uktaṃ tat saṃgataṃ na bhavati /
catvārah kṣaṇāḥ / vicitravipākavilakṣaṇavimardāḥ / madhye vila-
kṣaṇaṃ datvā seke boddhavyam / haṭhayoge punaḥ saha-javilakṣaṇa-
yor ante sthitir boddhavyā /
seke haṭhayoge cedaṃ nirdiṣṭaṃ bhagavatā /
saha-jam sat sarvaṃ saha-jacchāyānukāritvāt saha-jam ity abhi-
dhiyate / saha-jacchāyā saha-jasadṛśaṃ jñānaṃ pratipādaya-
titi /
saha-jam prajñā-jñānaṃ / ata eva prajñā-jñāne saha-jasyotpattir nā-
sti / yasmāt saha-jam nāma svarūpaṃ sarvadharmānām akṛtrimalakṣa-
ṇam iti yāvat / tasmāt karmamudrāṃ prāpya nisyandaphalam ut-
padyate /

1) *N*₃ paramaviramaviramayor 2) *N*₁ *N*₂ *I* °kṣyaṃ 3) *N*₃ tatra 4) *N*₁ °nā
5) *Sh* *N*₁ *N*₂ *I* °rdā, *N*₃ °vimudā 6) *Tib* bstan pa 7) *N*₃ °yogena, *I* °yoga,
Tib dbaṅ btsan thabs kyi sbyor ba ni 8) *N*₁ °vyāḥ (9—9) *Sh* *N*₁ sekahaṭha-
yoge, *N*₂ °yoga, *Tib* dbaṅ btsan thabs kyi sbyor bas (10—10) *N*₃ caite nirdi-
ṣṭaḥ, *I* vedānnirdiṣṭaṃ, *Tib* om. cedaṃ 11) *N*₃ °je (12—12) *N*₃ tatsarva, *Tib*
de thams cad 13) *N*₃ avavidhiyate (14—14) *Tib* lhan cig skyes paḥi rgyu
ḥthun paḥi ye shes 15) *N*₃ °tititi 16) *N*₁ *I* °na (17—17) *N*₃ °nā, *I* om.
18) *Sh* *N*₁ *N*₂ yasyāḥ 19) *N*₁ °ja 20) *N*₃ rūpaṃ 21) *N*₃ akṛttimmasvalakṣa-
ṇam, *Tib* ma bcos paḥi raṅ gi mtshan fid 22) *Tib* brten nas 28) *Tib* thob
par byed do

歓喜とは四つであり、歓喜、最勝歓喜、俱生歓喜、そして離喜歓喜である。
もしその（順序で）ないならば、

「最勝（歓喜）と離喜（歓喜）の中間に於いて、所相（すなわち俱生歓喜）
を觀察して堅固になせ。」

と、（以上）説かれることが適切でなくなる。

（また）四刹那とは、多様、異熟、離相、そして作観である。（異熟と作観の）
中間に、離相を置くことは、（正しくは）灌頂において知られるべきである。す
なわち（灌頂）とハタ・ヨーガ（の説）では、俱生（歓喜）と離相の後に（そ
れぞれ離喜歓喜と作観の）位置があると知られるべきである。

そして、灌頂とハタ・ヨーガにおいて次のことが世尊によって説かれた。

「ありとあらゆるものは、俱生である。共に生じる影に似ているから俱生
と言われるのである。共に生じる影というのは、俱生と似た知識を理解せ
しめる、と。」

俱生とは般若の智である。この故にこそ、（第三の）般若智（灌頂）において
俱生が生じるのではない。俱生と名づけられる本体は、一切諸法の無為相であ
るという意味である。これ故に、羯磨印を得て等流果が生じるのである。

- 1) 典拠不明。HVにおける四歓喜の順序は、歓喜、最勝歓喜、離喜歓喜、俱生歓喜 (HV I-iii-30~34, p. 28, 漢訳「喜、勝喜、離喜、俱生喜」[593-a]) でありそれらに対応する四刹那は、多様、異熟、作観、離相 (HV II-iii-6ab, p. 52, 漢訳「莊嚴、果報、作観、離相」[596-a]) である。また Advayavajra 著 “Tattvavimśikā” 第 1 偈 (*Sh* p. 52) 所説の四刹那もこれと同順である。然るに、ここでの所説は後二者の順位が入れ替わり俱生歓喜、離喜歓喜であり従って対応する刹那も離相、作観である。（磯田氏前掲論文 p. 112 以下参照）
- 2) 四刹那については、HV II-iii-5, p. 52 以下参照。Guenther op. cit., p. 100, では、この二者の順位を “Sekoddeśaṭika” の説に従って作観、離相と訂正している。
- 3) Guenther は Kālacakra の Seka 派と理解している。(Guenther op. cit., p. 100)
- 4) Tib では sekahaṭhayoga である。“Sekoddeśaṭika” (ed. Oriental Institute Baroda, 1941) p. 46 では、Haṭhayoga が説かれる、とした後 Kālacakratātra の第IV-196~197 が引かれていることから、Guenther の如く Kālacakra との関係も推察されようが、書名を指すのか？ 意味不明。
- 5) Tib 「俱生の等流智」
- 6) 典拠不明。
- 7) Tib 「羯磨印に依って」

sadrśasyando¹⁾ nisyandaḥ²⁾ / sādṛśyaṃ³⁾ yathā darpaṇārpitaṃ⁴⁾ mukha-
 sya⁵⁾ pratibimbaṃ mukhaṃ na bhavati / na pūrvasiddhaṃ⁶⁾ nāpy adhu-
 nā⁷⁾ [Sh. p. 33] siddham / tad eva mukhapratibimbaṃ⁸⁾ sādṛśyamātram⁹⁾
 āpādayati¹¹⁾ tathāpi¹²⁾ lokāḥ svamukhaṃ¹³⁾ dṛṣṭam iti kṛtvā bhrāntīyā¹⁴⁾ sam-
 tuṣṭā bhavanti / tathaivācāryāḥ¹⁵⁾ kumatayaḥ¹⁶⁾ prajñājñānam āsādyā
 saha¹⁷⁾jam anubhūtam iti kṛtvā¹⁸⁾ samtoṣam utpādayanti / samtusṭās¹⁹⁾ ca
 santo dharmamudrāyā²⁰⁾ vārttām api na jānanti / dharmamudrām ajā-
 natām²¹⁾ kevalayā²²⁾ karmamudrayā²³⁾ kṛtrimayā²⁴⁾ katham akṛtrimabhūtam²⁵⁾
 saha²⁶⁾jākhyam utpadyate /
 svajātiyāt²⁷⁾ kāraṇāt²⁸⁾ svajātiyasyaiva²⁹⁾ kāryasyotpattir bhavati³⁰⁾ na
 tu vijātiyāt³¹⁾ / yathā śālibijāt³²⁾ śālyānkurotpattir bhavati³³⁾ nanu kodra-
 vasya / tathā dharmamudrāyā³⁴⁾ akṛtrimāyāḥ³⁵⁾ sakāśād³⁶⁾ akṛtrimaṃ sa-
 hajam utpadyate / tasmād³⁷⁾ dharmamudraiva³⁸⁾ kāraṇam abhede³⁹⁾ bhe-
 dopacāreṇa mahāmudrāyāḥ⁴⁰⁾ /

1) N_3 sadṛśaṃ spando 2) N_3 °nda 3) N_1 °śya 4) N_3 darpaṇārpitaṃ mu-
 khatam 5) N_3 om. 6) N_3 °ddhir, I °ddhin 7) Tib om. adhunā 8) T starts
 here 9) N_3 mukhapratimukhapratibimbaṃ 10) N_3 °dṛsyam, T °trām, Tib
 rgyu bthun tsam 11) N_3 °yanti 12) N_3 °kā 13) N_3 T om. 14) Sh °tadāḥ,
 N_2 kuvmatamaḥ?, Tib blo gros dman pa rnam kyaṅ 15) Tib lhan cig skyes
 paḥi raṅ bzin 16) Tib de la dgaḥ zin mgu bas 17) T Tib om. 18) Sh N_1
 N_2 T I ajānānā, N_3 ajānānām, It should be ajānatām or ajānānānām 19) I
 akṛtibhū°, T akṛtrimamanubhūta, Tib om. bhūtam 20) N_3 T °jākhyajñānam
 21) Sh saajā° 22) Sh saajā°, N_1 N_2 svajātiya 23) T kāryakārya° (24—24) T na tv
 anyasya vijātiyatvāt 25) I śālyabijāt? 26) N_3 śālyakurasyo°, I śālamkuro°,
 T śālyakurasyo° 27) Sh kodravasya 28) N_1 °trimayāḥ, N_3 akṛkṛisāyāḥ? 29)
 N_3 akṛtrimaṃ 30) N_3 T om. (31—31) T repeats.

等流とは、同じように流れることである。¹⁾同じように、と言うのは鏡によっ
 て(生じる)顔の影像是、顔(そのもの)ではない如くである。既に成就した
 のでもなく、また現に成就しているものでもない。それは、顔そのものと似て
 いるのにすぎない顔の影像を示しているのである。けれども世間の人々は、自
 分の(本当の)顔が見えたと考えて迷乱により満足するのである。全く同様に
 愚鈍な阿闍梨達は、般若智(灌頂)を経て俱生が感得されたと考えて満足する
 のである。(このように)満足している人々は、法印の働きも知らない。法印を
 知らない人達にとって、ただ作られたものにすぎない羯磨印によってどうして
 無為なる俱生と言われるものが生じようか。²⁾

同種の原因から同種の結果が生じるのであって、決して異種のものからでは
 ない。(それは)稲の種から稲の芽が生じ、決して稗の(生じることは)ない如
 くである。このように、無為の法印に基づいて³⁾無為の俱生が生じる。それ故に、
 (本来)無差別なるものに仮に(大印、法印という)区別をなすことにより、法
 印こそが大印の原因となる。⁴⁾

1) Tib 「等流とは、原因と同じように生じるならば、等流なのであり、」 (rgyu ḥthun
 pa ni rgyu daṅ ḥdra bar ḥbyuṅ bas na rgyu ḥthun pa ste)
 2) 磯田氏前掲論文 p.131 参照。
 3) Tib 「……法印の自性から」 (……chos gyi phyag rgyaḥi raṅ bzin las)
 4) Tib (deḥi phyir chos kyi phyag rgyaḥi rgyu nid la dbyed med par spyod
 pas phyag rgya chen poḥi rgyur ḥgyur ro) 参照。

kasmāt / tarhi bhagavatoktam /

E-kārākṛti yad divyaṃ madhye VAM-kārabhūṣitam /
ālayaṃ sarvasaukhyānāṃ buddharatnakaraṇḍakam //

iti /

buddhacchāyānukāritvāt karaṇḍakam sthānam ādhāraḥ / tasmāt
karmāṅganāyā ānandasandoharatnākaram saroruham /
tatra manthamānthānabolakakolarasasamyogēnāvadhūtyā saṃ-
vṛtibodhicittamaṅyantargataṃ yadā bhavet tadā kṣaṇikanāmāparasa-
hajākhyam jñānam utpadyate / na tat sahanisyaṇḍaḥ /

tat svarūpeṇa prajñājñānānandatrayakṣaṇacatuṣṭayānviṭam seke
haṭhayoge ca karmamudrāyā nisyandaphalam uktam /

// karmamudrānisyandaphalanirdeśaḥ prathamah //

1) Tib om. kāra 2) HV ālayaḥ (3—3) N₁ I repeat this phrase. 4) Sh N₁ °ddham 5) N₃ āsādhāram 6) N₁ N₃ T °ganāyāḥ, I °ganāḥ, Tib las kyi phyag rgya yan lag can las 7) T ānandaḥ sandoharatnākara, Tib dgaḥ ba yid du ḥoṅ ba ni rin chen ḥbyuṅ gnas (8—8) Sh tat svaccham āsthānam bola....., N₁ tat manthamānthānam bola....., N₂ tat.....bolakankola....., N₃.....bolakaṅ-kolaṃ sarasayogena, I tat manya*nyānam.....illegible, Tib de ni rdo rje daṅ padma sruḥ cid bsru bas paḥi yaṅ dag paḥi sbyor bas / (9—9) Tib P kun rdsob byaṅ chub kyi sems (D kun rdsob byaṅ sems) a va dhū ti nas ji srid nor buḥi naṅ du soṅ ba de ni / 10) N₁ °ntagamtam., T °ntargata 11) N₂ kṣaṇikaṃ nā°, N₃ kṣaṇikaṃ nāmāparaṃ paraṃ sahajākhyāṃ, I kṣaṇikanāmā-paraṃ sahajākhyam, Tib deḥi skad cig ma źes bya ste / de lhan cig skyes pa źes bya baḥi..... 12) Tib ye shes skad cig tsam 13) N₁ N₂ T °nda, N₃ sahaḥam niṣpandaṃ 14) Sh °yaḥ 15) T °traya lakṣana 16) N₃ sekahaṭhayo-gena, T seke haṭhayogena, I seke haṭhayogam, Tib dbaṅ btsan thabs kyi sbyor ba las 17) N₃ T om. ca 18) I °yāḥ 19) N₃ karmamudrāsekanirdeśaḥ, Sh N₁ N₂ I °niṣyandaḥ nirdeśaḥ, Tib.....dbaṅ nes par bsten pa ste.....

何故か。そこで世尊は説く。

「E字の相貌は天妙であり、中央で VAM 字にて莊嚴されている。(それはまた)一切安樂の藏処であり、仏陀の宝篋である。」

と。

(そして) 仏陀の影に一致することから、(宝) 篋とは場所であり容器である。それ故に、羯磨(印)たる女性の歡喜を蓄積する宝篋は、(池に生じる)蓮華(の如く)である。

すなわち、そこに於いて混淆し攪拌するポーラとカッコーラの等味として結合していることにより、アヴァドゥーティを用いて世俗菩提心が宝珠の中に入ったものとなった時、刹那性という名の劣った俱生と称される知識が生じる。(しかし)その(知識)は、俱生の等流ではない。

その(知識)は、本体としては般若智(灌頂)における三歡喜と四刹那をそなえており、灌頂とハタ・ヨーガにおいては羯磨印の等流果と言われる。

「第一章、羯磨印の等流果の説示」(終わる)

1) HV II -iii-4, p. 52.

「仏言是中鑿字唯一体性最上莊嚴。為阿頼耶諸仏宝藏」(596-a)

2) Tib 「羯磨印を支分として持つものより」

3) Tib 「快心の歡喜」

4) ポーラは金剛杵で、カッコーラは蓮華 (HV II -iii-60cd, p. 60), すなわち男性器と女性器を意味する。また、HV には他に manthamānthāyogena (II -v-14a, p. 78 等, 漢訳「滿他那相応三摩地」599-a), bolakakolayogena (I -x-38a, p. 38 等, 漢訳欠) の記述がある。及び磯田氏前掲論文 p. 126 参照。

Tib 「それは(法印である)金剛と(羯磨印である)蓮を結合して manthamānthāna の正瑜伽によって、」

5) Tib 「それは俱生ではない。原因が同じではない(からである。)」

(de lhan cig skyes pa ni ma yin te / rgyu mi mthun paḥo)

OM dharmamudrā¹⁾ / dharmadhātusvarūpā niṣprapañcā nirvika-
 lpākṛtrimotpādarahitā karuṇāsvabhāvā paramānandaikasundaropāya-
 bhūtā pravāhanityatvena sahasvasabhāvā²⁾ yā (Sh. p.34) prajñāyāḥ³⁾
 sahadodayatvenābhinnā⁴⁾ yā sā dharmamudrety abhidhiyate /
 anyal⁵⁾ lakṣaṇam tasyāḥ samkulājñānāndhakāre⁶⁾ taraṇikiraṇasadr-
 śam⁷⁾ gurūpadeśataḥ tṛṇatuśamātrabhrāntiśalyavarjitam⁸⁾ boddhavyam /
 sakalakṣitijalapavanahutāsānair mahāsamvalitam⁹⁾ trailokyaikasvabhā-
 vam¹⁰⁾ / nistarāṅgaśūnyatākaruṇābhinnam¹¹⁾ ca boddhavyam /
 uktam¹²⁾ ca bhagavatā /
 lalanā prajñāsvabhāvena rasanopāyasamsthitā¹³⁾ /
 avadhūti¹⁴⁾ madhyadeśe tu grāhyagrāhakavarjitā //
 etannipunenāpi¹⁵⁾ tathatākāreṇa samnikṛṣṭakāraṇatvena¹⁶⁾ mārgo jñā-
 tavyaḥ / mārgajñāne¹⁷⁾ sādaranirantaram¹⁸⁾ mārgābhyāsān nirodhasya sa-
 hasvasvabhāvasya sāksātkṛtitvam¹⁹⁾ bhavati /

1) *N*₃ repeats this word 2) *N*₃ °ndaka° (3—3) *N*₁ *I* °bhāva yā, *N*₂ °bhāyā
 yāḥ, *N*₃ °bhāva pya? 4) *N*₁ *N*₃ *T* yā (5—5) *N*₃ °tvena bhinnā, *I* °tva bhin-
 naka? (6—6) *N*₁ *N*₂ *I* sārddham urddhe° 7) *I* anya 8) *N*₃ °ra, *Tib* mun pas
 kun tu ḥkhrugs pa la / om. ajñāna 9) *N*₁, *N*₂ °śā 10) *Sh* tṛṇatu(śa)samā
 tatrāpi bhrā°, *N*₁ tṛṇatusamā tatrāpi bhrā°, *N*₂ tṛṇatuśamā (ta)tropi bhrā°,
I bhūśatusamo tatrāpi bhrā° 11) *N*₃ °tā, *Tib* mi shes paḥi mun pas kun
 nas ḥkhrul paḥi ḥkhrul ba rtsa rdul tsam gyi zug rdu rnas par spaṅs nas /
 12) *Sh* *N*₁ *N*₂ bodhyavyam, *N*₃ °bodam, *I* bodhavyam, *T* boyam 13) *N*₃ °neḥ
 14) *Sh* °śavalitam, *N*₃ °savalitam 15) *N*₃ °vaḥ 16) *N*₃ nirsta° 17) *I* °nnaś
 18) *T* om. ca 19) *Sh* *N*₁ *N*₂ *N*₃ *T* bodhyavyam, *I* bodhyaya 20) *N*₃ om. ca
 21) *T* °pāyanasam° 22) *Sh* °dhuti 23) *Sh* *N*₁ *N*₂ *I* °puṇenāpi 24) *N*₃ °kāra-
 tvena, *Tib* ŋe baḥi rgyur gyur pa 25) *N*₃ °rgam 26) *N*₃ °nā 27) *N*₂ *N*₃ °ra
 28) *Tib* om. abhyāsān 29) *N*₃ °kāritvam

オーン、(というのは)法印(の種子)である。法界を本体としており無戲論、
 無分別、無為、離出生であり、悲を自性としており、最勝歡喜により唯一すば
 らしい方便となっており、¹⁾流れが常なることによって俱生を自性としており、
 俱生として生じることによって般若と別ではないものが法印であると説かれて
 いる。

またその(法印の)他の特徴は、無知に満たされた闇における日輪の光明の
 如くである。師の教誡によれば、草や糞程(多くの)迷乱の刺が取り除かれて
 いると知られるべきである。(さらに法印の特徴は)一切の地、水、風、火と大
 和合しており、三界に属するものの唯一の自性である。²⁾また静寂にして空性と
 悲とが不可分となっていると知られるべきである。

また世尊は説く。

「ララナーは般若を自性として(存在し)、ラサナーは方便としてある。一
 方、中央部にあるアヴァドゥーティーは、所取能取(と言った二元性)を
 離れている。³⁾」

真如を相とするこの(ナーディーとチャクラの実践の)熟達によって、(菩提
 心が)上昇したり下降したりすることの原因たることとして、(修行)道が知ら
 れるべきである。道を知って、専念して不断に道を修習することにより俱生を
 本性とする滅が現前する。

- 1) Tib (mchog tu dgaḥ bas gcig tu mdses paḥi thabs su ḥgyur ba) 参照。
 2) Tib 「地、水、火、風という四界の力により縛された一切の三界の唯一の自性であ
 る。」(sa dañ cu dañ me dañ rluñ ste / khams bñiḥi nus pas bcīns paḥi
 ḥjig rten gsum po ma lus pa gcig gi rañ bñin)
 3) HV I-i-14, p. 4 漢訳「羅羅拏者即勝慧自性。辣娑拏者謂善方便。阿嚩低者是中
 説。離能取所取。」(588-a) 同偈は“Jñānodaya Tantram”にも引用されている。
 (ed. S. Rinpoche and V. Dwivedi, Rare Buddhist Text Series-2, 1988,
 p.10)

tathā cōktam /
 nāpaneyam¹⁾ ataḥ kiñcit prakṣeptavyam na kiñcana /
 draṣṭavyam²⁾ bhūta³⁾ bhūtam⁽⁵⁻⁴⁾ bhūta⁴⁾ darśi vimucyate⁻⁵⁾ //
 lalanā rasanā tayor madhyadeśe nivāsiny⁽⁶⁻⁷⁾ avadhūti⁻⁶⁾ saivādhigata⁷⁾-
 sakalapadārthasahajasvabhāvaikacittavṛtteḥ⁸⁾ sadgurūpadeśato / dha-
 rmamudrā⁹⁾ mahāmudrāyā abhedena¹⁰⁾ hetubhūtā /
 // dharmamudrāvīpākaphalanirdeśo dvitīyaḥ //

ĀḤ mahāmudreti / mahatī¹¹⁾ cāsau mudrā ceti mahāmudrā / ma-
 hāmudrā¹³⁾ niḥsvabhāvā¹⁴⁾ jñeyādyāvaraṇavivarjitā¹⁵⁾ śaradamalamadhyāhna-
 gaganasamkāsā sakalasampadādhārabhūtā¹⁷⁾ bhavanīrvāṇaikasvarūpā
 anāmbanakarūṇāsārīrā mahāsukhaikarūpā / tathā ca /
 amanasikārā¹⁸⁾ dharmāḥ¹⁹⁾ kuśalā²⁰⁾ manasikārā²¹⁾ dharmā²¹⁾ akuśalāḥ /
 pravacane ca /
 avikalpitasāṅkalpa²³⁾ apratiṣṭhitamānasa /
 asmṛtyamanasikāra²⁴⁾ nirālamba²⁵⁾ namo'stu te //
 (Sh p. 35) iti yā sā mahāmudrety⁽²⁶⁻²⁶⁾ abhidhiyate / tayā mahāmudrayā-
 cintyasvarūpayā²⁷⁾ samayamudrākhyaphalam²⁸⁾ jāyate /
 // mahāmudrāvaimalyaphalanirdeśas tṛtīyaḥ //

1) N_3 nopa° 2) N_1 °bhūtate, I °bhūtene 3) N_1 N_2 I °ta, T °tā 4) N_1 N_2 I om. bhūta (5-5) Tib yañ dag mthoñ nas rnam par (P. repeats rnam par) grol / (6-6) N_3 °deśa vivāsiny 7) N_3 sevāvdhigatā° 8) N_3 °dguropa° 9) N_3 om. 10) N_3 °tāḥ 11) Sh °ti, N_1 I °tā, N_2 N_3 °timu? 12) Sh N_1 N_2 insert ceti 13) N_3 T I Tib om. 14) I te svabhāvā 15) N_3 jñānājñeyā° 16) N_1 illegible, N_3 °dhyāhnāna°, I °dhyāna° 17) I °nirmānaika° 18) Sh °rmā 19) N_3 T °lāḥ 20) N_1 I °rmāḥ 21) Sh N_2 I °lā (22-22) N_3 °canam api, T °canena ca 23) N_3 °saḥ 24) N_1 I °raḥ, N_3 °kāro 25) N_3 nilālamba (26-26) N_1 yā yā, I yoṣā 27) I °rūpyā 28) N_2 T °ākhyam pha° 29) Sh N_1 N_2 N_3 I om. phala

また次のように説かれている。

「それ故に、何ものも決して得られず、また何ものも捨てられない。存在するものはあるがままに観られるべきである。(このように) 存在するものを見る人は解脱する。」¹⁾

(般若である)ララナーがあり、(方便である)ラサナーがあり、またその両者の中間部にアヴァドゥーティー²⁾がある。理解されたあらゆるものが俱生なる自性をもつ一つの心となって活動するから、それこそが最勝なる師の教示によって(証得するようになる。)法印は、大印と別ではないので(大印の)原因となる。

「第二章、法印の異熟果の説示」(終わる)

(4-
 アーハ、(というのは)大印(の種字)である。それが大であり且つ印であるという訳で大印といわれる。大印は無自性にして、所知などの障礙を離れ、秋の無垢なる日中の虚空のごとく(に浄らか)で、一切を具足しているものであり、有(輪廻)と涅槃とを一つの自体としており、無所縁の悲を身体とし、大楽と同一体である。同様にまた、

「不作意の諸法は善であり、作意の諸法は不善である。」⁵⁾

そして(世尊の)言葉に、

「思惟を分別しないものよ、無住処の意を持てるものよ、⁶⁾
 無念、不作意なるものよ、無所縁なるものよ、汝に帰命す。」

という(以上の)ことが大印である、と説かれる。⁴⁾
 不思議の本体を持つかの大印によって三昧耶印と言われる果が生じる。

「第三章、大印の無垢果の説示」(終わる)

- 1) 典拠不明。
- 2) Tib 訳 mdses ma ro ma dag gi dbus su gnas pa ni sdig spañs maḥo /
- 3) Tib 訳参照。.....rtogs par hgyur ro /
- 4) Guenther op. cit., p. 129, 130 に英訳されている。
- 5) “Amanasikārādhāra” (本書 p. (136)-(137)) に “Āryasarvabuddhaviṣayāvātārajñānālokālaṅkāramahāyānasūtra” (『仏説大乘入諸佛境界智光明莊嚴經』大正藏 12 卷 No. 359) として引用されているが漢訳該当箇所不明。磯田氏前掲論文 p. 109 注 4) 参照。
- 6) 上注 5) 掲經大正藏 12 卷 p. 262-c 2-3. “Pañcatathāgatamudrāvivarāṇa” (密教聖典研究会 1988, p. (52)) 及び “Amanasikārādhāra” (本書 p. (136)-(137)) に引用されている。磯田氏前掲論文 p. 109 注 4) 参照。

(104)

HŪM samayamudreti / sambhoganirmāṇakāyākārasvabhāvena
 svacchākāreṇa ca sattvārthāya vajradharasya herukākāreṇa visphu-
 raṇaṃ yat sā samayamudreti vyapadiśyate /
 tāṃ ca samayamudrāṃ gṛhītvā cakrākāreṇa pañcavidhaṃ jñā-
 naṃ pañcavidhaṃ parikalpyādarśasamatāpratyaivekṣaṇākṛtyānuṣṭhā-
 nasuviśuddhadharmadhātubhir ādiyogamaṇḍalarājāgrikarmarājāgri-
 nduyogasūkṣmayogaiḥ samayamudrācakraṃ bhāvayanty ācāryāḥ /
 tena te kṛtapuṇyā bhavanti / tataś ca na dharmamudrāphalalābhino
 bhavanti /
 niyatārthakāraṇāt niyatasyaiva kāryasya utpattir //
 iti vacanāt /
 tasmāt sahasiddharasād vedhena sthiraalādayo bhāvā bālapa-
 rikalpitās te sambodhikāraṇatām upayānti / etena trailokyacakraṃ
 subhāṣitaṃ bhavati /

1) N_3 °cchāyākā°, I °kāre, *Tib om.* 2) N_3 vajradharmararusya? 3) N_3 heru-
 kāreṇa 4) N_3 yatam? 5) *Sh* copa°, N_3 abhidhiyate (6—6) N_2 *om.* ca, N_3 I
 tāś ca (7—7) N_3 samayagrīta? 8) N_1 °dha 9) *Sh* T °jāsrika°, I °jagrikaka°
 10) *Sh* T °jāsribi°, N_3 *om.* karmarājāgri 11) T °gaḥ 12) T *om.* sūkṣmayo-
 gaiḥ, I °ga 13) I °vayety 14) N_3 *om.* na 15) N_3 niyartartakā° 16) *Sh* N_1
 N_2 T I *Tib add* na (17—17) *Sh* N_1 N_2 T I °dayo yena vā 18) *Sh* N_1 °tā, N_2
 cālayapari° 19) N_1 °kānakām, N_3 °kāścananām, T °ktācotām?, I °kārnatām
 (20—20) *Sh* N_1 N_2 I *om. this passage* 21) *Tib* yaṅ dag par bsgoms par ḥgyur
 te /

フーン, というのは三昧耶印 (の種字) である。衆生利益の為に持金剛が,
 報身と応身の姿を (根本) 自性とし清浄なる相を持つへールカの姿をとって遍
 満する, というのが三昧耶印であると説かれる。

そして阿闍梨達は, その三昧耶印を撰受して輪の相で五種の智を五種 (の三
 摩地) に分ける, (すなわち, 大) 円鏡 (智), 平等性 (智), 妙観察 (智), 成所
 作 (智) そして清浄法界 (智) によって, (それぞれそれらに対応する) 初瑜伽,
 曼荼羅最勝王, 羯磨最勝王, 滴瑜伽, 微細瑜伽によって三昧耶印の輪を修習す
 る。これによって彼ら (阿闍梨) は福德を得る。然るにそれにより法印の果
 (大印) を獲得した者とはならない。

「特定の事物を因として, 特定の果のみが生じる。」³⁾

と言われるからである。

それ故に, 俱生を成就した (等) 味により洞察すれば, 凡夫により妄分別さ
 れる不動と動の諸事物が菩提の原因となる。それによって, 三界の輪が善説さ
 れている。⁴⁾

1) *Tib* (raṅ bzin dan poḥi no bo ṅid) 参照。

2) 五智の記述 HV p.68 参照。

ādarśajñānarūpā sā samatājñānabhāvinī /
 sadbhūtapratyaivekṣā ca kṛtyānuṣṭhāna saiva tu // II-iv-46
 suviśuddhadharmadhātu..... / II-iv-47a

漢訳, (598-a)

3) 典拠不明。

4) *Tib* 「善く修習されたものとなる。」

(1-⁻¹)
 tathā coktaṃ bhagavatā /
 na mantrajāpo na tapo na homo²⁾
 na māṇḍaleyaṃ na ca maṇḍalaṃ ca /
 sa mantrajāpaḥ sa tapaḥ sa homas³⁾
 tan māṇḍaleyaṃ tan maṇḍalaṃ ca //^{4) 5)}
 samāsataś cittaṃ samājarūpī / iti /
 samāsataḥ sarvadharmāṇām ekākārato yad uta mahāsukhākārataḥ /
 cittaṃ iti bodhicittaṃ / samājarūpiti dharmamudrāmahāmudrābhiṣe-
 karūpaṃ jñānaṃ satsamājety abhidhiyate /^{9) -7)10) 11)}
 // samayamudrāpuruṣakārāphalanirdeśāś caturthaḥ samāptaḥ//^{12) 13) 14)}

(1-1) Sh N₁ N₂ I om. this passage. 2) T °ma 3) Sh °maḥ, N₂ °mam, I °man 4) N₁ °lan, T °la, I °laś 5) T co 6) Sh °taḥ, N₁ °ta (7-7) N₃ om. this passage 8) N₁ N₂ T °tta 9) I dharmamudrābhiṣekaṃ rūpaṃ, Tib om. rūpaṃ 10) Sh N₁ I vā jñānaṃ, N₂ yajñānaṃ 11) N₁ °jaty, N₃ ttatsamājat, I satsamoktaty 12) Sh N₁ T °śaḥ 13) I °tha 14) N₃ °ta iti, N₂ adds pustakāntare kṛtir iyaṃ nāgārjunapādānām iti, N₃ adds Hūm kṛtir iyaṃ śrī nāgārjunapādānām iti

また同様に世尊は説かれる。

「真言の誦持はなく、苦行はなく、護摩もなく、
 曼荼羅の諸尊¹⁾もないし曼荼羅もない。
 彼（自身）が真言の誦持であり、苦行であり、護摩であり、
 それが曼荼羅の諸尊であり曼荼羅でもある。
 略説すると、心は集会を体とする。」²⁾と。

略説すると、とは一切諸法が単一の姿として、であり、即ち大楽の姿から、と言ふことである。心は、というのは菩提心であり、集会を体とする、とは法印と大印の灌頂の姿をした智である。すなわち真実の集会と言われる。

「第四章、三昧耶印の土用果の説示、³⁾終了。」

「ナーガールジュナガルバ大師著『四印決定』完結⁴⁾

(白石凌海)

- 1) YRM p.135. には maṇḍalamadhyavartino māṇḍaleyaḥ とある。
- 2) HV I-x-43, p.40. HV では、māṇḍaleyaṃ を maṇḍaleyaṃ とし、cittaṃ samājarūpī を cittasamājarūpī とする。漢訳とは不一致「設不護魔粉布輪壇。猶於色相心心平等。」(594-b)
- 3) N₃ の奥書は「フーン、本「書」は吉祥なるナーガールジュナ上足の御著書である。」であり、N₂ の奥書は「他の(写)本には、本「書」はナーガールジュナ上足の御著書である。と(書いてある。)」である。
 従って N₂ で言う“他の(写)本”とは N₃ 等を指している可能性がある。
- 4) Tib では、著者を slob dpon chen po Klu sgrub sniñ po (Mahācārya Nāgārjunagarbha) とする。

以上の如く、本書では「四印」が羯磨印、法印、大印、三昧耶印の順序で説示されている。この点に関して、スネルグロブは「前三者は具体化の一定の課程と見なされるが、最後(の三昧耶印)は他(の印の説明)といかなる全体的な関連もなしに加えられたように思われる。」としている。尚、スネルグロブは本書の著者をアドヴァヤ・ヴァジュラの師である大成者ナーガールジュナとする。(D. L. Snellgrove, op. cit., Part I. p.137 参照。)

9. Sekatātparyasaṃgraha

[Sh p. 36] namo buddhāya¹⁾ /
 kalyāṇamitravācā²⁾ ko³⁾ pi⁴⁾ samahimā⁵⁾ jayaty⁶⁾ anavagāhyaḥ /
 karatalagatam⁷⁾ iva⁸⁾ tattvaṃ⁹⁾ yad¹⁰⁾ vācām¹¹⁾ aviṣayaṃ¹²⁾ dhatte // 1 //
 vajrācāryottamajñānāḥ¹³⁾ sekatātparyasaṃgraham /
 viditvā¹⁴⁾ kurmahe 'nekasekagranthād¹⁵⁾ yathāgamam // 2 //
 prathamam¹⁶⁾ kalaśābhīṣeko¹⁷⁾ dvitīyaṃ¹⁸⁾ guhyam¹⁹⁾ uttamam /
 prajñājñānaṃ²⁰⁾ tṛtīyaṃ²¹⁾ vai²²⁾ caturthaṃ²³⁾ tat²⁴⁾ punas²⁵⁾ tathā // 3 //
 asyārthaḥ / prathamam²⁶⁾ kalaśābhīṣeka²⁷⁾ iti / udakamukuṭavajra-
 ghaṇṭānāmācāryalakṣaṇāḥ²⁸⁾ ṣaṭ²⁹⁾ kalaśābhīṣekāḥ / bāhyavariṇeva³⁰⁾ bāhya-
 malasyāvīdyāmalakṣālanāya³¹⁾ sicyate³²⁾ 'neneti³³⁾ sekaḥ / eṣāṃ³⁴⁾ sarveṣāṃ³⁵⁾
 kalaśavyāpārāt³⁶⁾ kalaśābhīṣekasaṃjñā³⁷⁾ / avaiartikābhīṣekās³⁸⁾ caite³⁹⁾ ṣaṭ-
 tathāgatasvabhāvatvāt⁴⁰⁾ / tathā⁴¹⁾ hi / udakābhīṣeka⁴²⁾ ādarsājñānātmako⁴³⁾

* danḍa 及び sandhi の訂正に関する注記は、特に必要な場合を除き、省いた。

- 1) *T* namaḥ sarvajñāya, *Tib* adds 'jam dpal g'zon nur gyur (*P* omits) pa la phyag 'tshal lo. 2) *Sh* N_1 °vārānko, N_2 I °vācānko, T °vācānko, *Tib* bka'
 3) *Tib* che ba'i bdag ŋid gañ yin de ni rgyal gyur cig 4) *Sh* samādhimāja°, N_1 N_2 I samāhimāja° 5) *Sh* N_1 N_2 °pa° 6) *Sh* N_1 N_2 I °vagrāhyaḥ, T [damaged]gāhyaḥ, *Tib* rtogs dka' bas 7) TI °talamiva, P lag pa'i mthil du son pa, D log pa'i lam du ston pa 8) *Sh* ṣaṭpañcam aviṣamaṃ, N_1 yadvāñcamaviṣamaṃ, N_2 matpañcamavidhaṃ, I padmañcamaviṣamaṃ, *Tib* tshig gi lam ma yin pa gañ yin pa'i 9) N_2 napatte 10) *Sh* °cāryyāt tu saṃjñānaseka°, N_1 °cāryottamajñā // // naśeka°, N_2 °cāryāXXstu saṃjñā / naseka°, T °cāryottamajñātaseka, I °cāryye tamajñānaśeka°, *Tib* rdo rje slob dpon chog (>mchog?) śes pas 11) N_1 °tātparṣa°, I °tātmarṣa°, *Tib* dbaṅ bskur dgos pa mdor bsdus pa 12) T °haḥ 13) *Sh* T °nthānya°, N_1 N_2 I °nthānaya°, *Tib* g'zūn ni du ma las 14) T °kaṃ 15) *Sh* °vāriṇaiva, N_1 N_2 °variṇaiva, *Tib* phyi rol gyi chus ni phyi rol gyi dri ma 'khrud pa ltar 16) *Sh* siñcate, N_1 siñcyate, N_2 I siñcyate 17) *Tib* omits. 18) I ṣaṭbhūtathāgataḥ

9. 灌頂主旨綱要¹⁾

仏陀に帰命し奉る。²⁾

- (1) 善友のことばによって、どんな〔人〕も、あたかもことばの対象とはならない真実を手中にする様に、測り知れない〔程〕偉大な者となる。³⁾
 (2) 私、最上の知識ある金剛阿闍梨は、〔本書〕『灌頂主旨綱要』を、多くの灌頂についての書物より伝承のままに知って、著す。⁴⁾
 (3) 第一には瓶灌頂、第二は最高の秘密〔灌頂〕、第三は般若智〔灌頂〕、第四には、さらにそれが同様にある。⁵⁾

この〔第三偈の〕意味は〔次の通りである〕。「第一には瓶灌頂」とは、水・冠・金剛杵・鈴・名・阿闍梨を特徴とする六〔種〕の瓶灌頂である。外的な水により外的な汚れを〔洗除する〕ように、無明という汚れを洗除するためにそれによって灌水する、というわけで、「灌頂」〔と言う〕のである。この〔六種の〕すべてに瓶を用いるので、「瓶灌頂」の名がある。またこれらは六如来を本性とするが故に不退転灌頂〔とも言う〕。すなわち水灌頂は大円鏡智を本体とし

* 本編は、酒井眞典『修訂増補チベット密教教理の研究(一)秘密集会龍樹系』(高野山, 1956, repr. 東京, 1974) p.168-177 に、「無上瑜伽乗の灌頂」としてその内容が概説されている。同書において酒井博士は Advayavajra 著 *Samkṣiptasekaprakriyā* (北京 No. 3089), Nandivajra 著 *Sekaparakriyā* (北京 No. 2750), Vāgīśvarakīrti 著 *Saptāṅga* (北京 No. 2752), さらに Tsoñ kha pa 著 *shags rim chen mo* (北京 No. 6210) を参照して四種灌頂の各々に説明を加えている。

- 1) *Tib* 音写タイトル “Sekatā(ta)kāryasaṃgraha” によれば『〔灌頂において行われる儀式が〕灌頂であるために必要とされることのまとめ』の意か。
 2) *Tib* では、「童子形文殊に帰命し奉る」が付加される。また *T* 本では「一切知者に帰命し奉る」である。
 3) *Tib* は、「理解し難き善友のことばにより、……偉大なる者はジナとなれかし」である。
 4) *Tib* では、「満足せる」。
 5) Cf. *GS* XVIII-113: “kalaśābhīṣekaṃ prathamam dvitīyaṃ guhyābhīṣekataḥ / prajñājñānaṃ tṛtīyaṃ tu caturthaṃ tat punas tathā //”, *HV* II-iii-10ab: “ācārya guhya prajñā ca caturthaṃ tat punas tathā //”, *Samvarodayatantra* (ed. 津田真一, *The Samvarodayatantra Selected Chapters*, 東京, 1974) XVIII-28 “ācāryābhīṣeka sampūrṇam dvitīyaṃ guhyam uttamam / prajñājñāna-tṛtīyaṃ tu caturthan tat punas tathā //”, *Sampūṭodbhava-tantra* (ed. 津田真一, 「サンヴェラ系密教に於ける灌頂の一例—Sampūṭodbhava-tantra 菩提心灌頂品—」→p. (111)

'kṣobhyasvabhāvaḥ / mukuṭābhiṣekaḥ samatājñānātmako ratnasam-
bhavasvabhāvaḥ / vajrābhiṣekaḥ pratyavekṣaṇājñānātmako¹⁾ mitābha-
svabhāvaḥ / adhipatyabhiṣekaḥ kṛtyānuṣṭhānarūpo 'moghasiddhisva-
bhāvaḥ / nāmābhiṣeko 'vidyānirodhād vidyānugatasuvisuddhadharma-
dhātujñānātmako vairocanasvarūpaḥ / ācāryābhiṣekas tu vajrasattva-
svabhāvaḥ //

atra ca⁽⁵⁻ pañcābhiṣeko vidyābhiṣekaḥ pañcasu locanādividyāyāḥ⁻⁵⁾
vyāpārāt //

atra cāvīdyāmalakṣālanāyākṣobhyarūpeṇa vajrācāryeṇa vairoca-
narūpālambini śiṣye salilābhiṣeko deyaḥ / evaṃ sarvatrāhaṃkāraḥ /
āgāmibuddhabhāvaś citoṣṇiṣabijabhūto (Sh p.37) mukuṭābhiṣe-
kaḥ /

1) Sh °jñānā(tmakah) ami°, N₁ N₂ T jñānāmi°, I °kṣaṇāntānābhitābha°, Tib
ye śes kyi bdag ŋid 2) Sh °patyā°, Tib bdag po'i dbaṅ 3) Sh N₁ N₂ I omit
su. T °nugosuvi°, Tib śin tu rnam par dag pa'i 4) Sh N₁ N₂ I vajrajñā-
nasva°, Tib rdo rje sems dpa'i 5) Sh pañcābhiṣekaḥ pañcasu locanā°, and
in his "comparative readings" (p.67), he reads his ms. (N₁) as follows; pa-
ñcābhiṣeko 'vidyārbhiṣekaḥ (dyānugataviśuddhadharmadhātujñānātmako vai-
rocanasvarūpaḥ, ā) pañcasu pañcābhiṣekaḥ pañcasu, N₁ pañcābhiṣeko 'vidyā-
bhiṣeko vidyānugataviśuddhadharmadhātujñānātmako vairocanasvarūpaḥ / ā
pañcāṃsu locanādividyāyāḥ, N₂ pañcā' bhiṣeko 'vidyābhiṣekaḥ / pañcasu loca-
nādi[vidyāyā], T pañcābhiṣeko vidyābhiṣekaḥ / pañcasu locanādividyāvvyā°, I
pañcābhiṣeko 'vidyānirodhāvidyānugatathīśuddham dharmadhātujñānatmako
vairocanasvarūpa pañcasu locanādividyāyāḥ, Tib 'di dag las dbaṅ bskur ba
lña ni rig pa'i dbaṅ bskur ba śes bya ste / saṅs rgyas spyān la sogs pa rig
ma lña'i bya ba 6) T °bhyasvarūpeṇa 7) Sh N₁ N₂ °pāvala°, Tib dmigs pa
8) I deśaḥ 9) Sh °vo acitto°, N₁ °vo citto°, N₂ °vo 'citto°, Tib ma 'oṅs pa
na saṅs rgyas kyi dbu gtsug tor gyi ŋo bo sa bon du gyur pa'i

阿閼〔如来〕を本性としている。冠灌頂は平等性智を本体とし、宝生〔如来〕
を本性としている。金剛杵灌頂は妙観察智を本体とし、無量光〔如来〕を本性
としている。主灌頂は成所作智を本体とし、不空成就〔如来〕を本性としてい
る。名灌頂は無明を滅するので明〔智〕に随順せる清浄法界智を本体とし、毘
盧遮那〔如来〕を本性としている。阿闍梨灌頂は〔第六仏たる〕金剛薩埵を本
性としている。

このうち、〔水乃至名の〕五灌頂は、〔この〕五〔種それぞれ〕においてロー
チャナーなどの明妃が用いられるので明灌頂〔とも言われる〕。

またここで、無明という汚れを洗除するために、阿閼の姿をした金剛阿闍梨
は、毘盧遮那の姿をとった弟子に、水の灌頂を与えよ。同じ様に、〔以下の五
種の〕あらゆる〔灌頂〕において〔阿闍梨はそれぞれの灌頂の本性の如来の〕
自覚〔を持つべし〕。

〔弟子が〕これからなる仏陀の〔本〕性が、頂髻において種子となるのが冠灌
頂である。

- 1) 最初は「鈴」であったのが、ここで「主」となっている理由は不明。
- 2) Tib では「ブッダローチャナーらの五明妃」。五明妃とは、Locanā (Buddhalocanā),
Māmaki, Pāṇḍarā (Pāṇḍaravāsini), Tārā 及び Vajradhātviśvari であろう。
Cf. Advayavajra 著『五如来の形相 (Pañcākāra)』, 本書 p. (132)~(135)。
- 3) Tib によれば、「将来において仏陀の頂髻の本性が種子となる冠灌頂」。

→p. (109) 注5) つづき

梵文テキスト並に和訳—『奥田慈応教授喜寿記念仏教学論文集』京都, 1976) II-i-
46cd-47ab: "prathamam kalasābhiṣekam dvitīyam guhyābhiṣekam // pra-
jñāñānam tṛtīyam tu caturtham tat punas tathā //", *Caṇḍamahāroṣaṇatantra*
(ed. Ch. S. George, *The Caṇḍamahāroṣaṇatantra Chapters i-viii*, New Ha-
ven, 1974) III-1.6 "tataḥ pañcābhiṣekan tu guhyam prajñāñ ca śeṣataḥ //".
Caṇḍamahāroṣaṇatantra では第四の灌頂を挙げない。また GS では、「このタント
ラでは灌頂は3種の区別が考えられている (abhiṣekam tridhā bhedaṃ asmin
tante prakalpitam)」として、四種を列挙している。

dvādaśāṅguliparimāṇena dvādaśāṅgapratityasamutpādaviśuddhyā
 vajram / yatra madhyavṛtte¹⁾ niruttaradharmatāsūcako²⁾ hūmkāraḥ /
 tasyārthaḥ / ha iti hetuviyuktaḥ / ū ity ūhāpagataḥ / aṃ ity apra-
 tiṣṭhitaḥ⁷⁾ sarvadharma iti / yatra bhavasarojamukhāt sphuranti pa-
 ṅcārārūpiṇo⁹⁾ munayaḥ¹⁰⁾ pañcaskandhaviśuddhyā¹¹⁾ niṣkrāntā bhavaśari-
 reṇa / iha ca madhyārābhimukhatayā¹²⁾ paryantārāṇāṃ¹³⁾ sarvarūpādayo¹⁴⁾
 vijñānātmakā iti sūcyante / ete ca sarve sarvātmakā iti nivedayitum¹⁵⁾
 sarvatraiva¹⁶⁾ caturaśrī //
 atha te dharmasya¹⁷⁾ budhā hūmnādaniveditātmarūpasya¹⁸⁾ pañcāsi-
 muktakāyāḥ paryante cānyatra visphuritāḥ / sūnyatānimittāpraṇi-
 tatāvabodhanārthaṃ¹⁹⁾ sarvatra phullakātrayam / ete cādarśasamatā-
 pratyavekṣaṇākṛtyānuṣṭhānasuviśuddhadharmadhātulakṣaṇapañcājñā-
 nātmakā gurūpadeśato jñeyāḥ //
 abhedyajñānasūcakam ca samudāyārthaḥ /

1) *Sh* °vṛtterni°, *Tib* dbus kyi lte ba zlum po'i nañ du 2) *N*₁ *T* *I* °sūciko, *N*₂ °sūviko, *Tib* mtshon par byed pa'i 3) *N*₂ *I* °vimukta 4) *N*₁ *N*₂ *I* omit ū. *Tib* u 5) *Sh* and All MSS. iti 6) *TD* a, *IP* om 7) *Sh* °tasa° 8) *Sh* °sarodbha[va]mu°, *N*₁ *N*₂ *I* °sarodbhamu° 9) *T* pañcākāra°, *Tib* rtse lña ba'i 10) *Tib* omits. 11) *I* °ddhyati krā° 12) *Sh* °khata uparyadhareṇa, *N*₁ °khatoparyadharaṇā, *N*₂ °khatāpūrvadharaṇā, *T* °khatayā paryantāra XX, *I* °khatoparyadharaṇā, *Tib* phyogs kyi rtse mo rnam dbus kyi rtse mo la phyogs pa ni 13) *Sh* °rvve rū° 14) *N*₁ *I* °veyi°, *N*₂ °ve[da] yi° 15) *N*₁ °treḥ, *T* °treva, *I* °trevarantaragrā 16) *Tib* rdo rje chos thams cad (*P* omits thams cad) 17) *Sh* and All MSS. buddhā, *Tib* rtogs pa 'i mkhas pas 18) *T* pañcāpi vi°, *Tib* rnam par grol ba sku lña'i 19) *Sh* °tā sū° 20) *Sh* °ttā[h] pra° 21) *Sh* °praṇihi(hi)tatāva°, *N*₁ °prāṇihitātāva°, *N*₂ *I* °prāṇihitātāva°, *T* praṇihitāto'va°, *Tib* smon pa med pa ñid du 22) *Sh* hullikā°, *N*₂ hallikā, *I* phulikā°, *Tib* me tog 23) *T* vāda° 24) *Sh* °kṛtvā°

金剛杵は12指量の大きさをもって、十二支縁起¹⁾という清浄〔なる本質を表わしている〕。中央の円には無上なる法性を表わすフーン字が〔記される〕。その意味は〔次の通りである〕。²⁾ハ(ha)は因(hetu)を離れている〔ことを示している〕。ウー(ū)は構想作用(ūha)のない〔ことを示している〕。アン(am)は、一切法が無所依(apraṭiṣṭhita)である〔ことを示している〕。ここでは輪廻の大海に生じる〔衆生の方を〕向くがゆえに五鈷の形をして、牟尼らが五蘊の清浄〔なる本質〕として輪廻の身体をして出現し遍満している。またそこで、周辺の〔四〕鈷が〔わん曲して〕中央の鈷を向いていることによっては、色等〔の四蘊〕はすべて識〔蘊〕を本体としている、ということが表わされている。また、これらすべてが、あらゆるものを本体としている、ということを示すためにどんな場合でも四角⁴⁾なのである。

さらに、彼ら、フーン音によりその本体の姿が知らしめられた〔諸〕存在〔の本質〕を知る者らは、五つの剣⁵⁾を離れた身体をもって、周縁まで、さらに他の〔いたる〕ところへとひろがっている。〔諸存在は悟りの境地においては〕空、無相、無願であることを理解させるために、いかなる場合でも三つの花が〔記される〕。これらは大円鏡、平等性、妙観察、成所作、清浄法界という様相を持つ五つの智を本体としていることを師の教えにより知るべし。

〔金剛杵が〕不可分なる知識を表わしている、〔ということを〕集約した意味は〔次の通りである〕。

- 1) 酒井博士は前掲書において「秘密相経巻中 大正蔵十八卷四六六c 参照」と注記するが、(p. 171, 176), 『秘密相経』(大正 No. 884)の当該箇所では、「即是如来金剛杵。十二指量五股。而作善妙之相。無其光焰金等所成。其金剛薩埵金剛杵者。予定分量五股而作。有其威猛熾盛光焰鉢訥摩囉誑等諸寶所成。其金剛王等大執金剛者。及金剛忿怒金剛藥叉等。如是諸杵皆十二指量三分亭等。」(l. 5~11)とあり、十二指量に十二支縁起をあてはめているわけではない。
- 2) 空海は『卍字義』において Hūm 字を①「賀(ha)」②「阿(a)」③「汗(u)」④「麼(ma)」の4字に分解し、そのそれぞれに次のような意義を配している。①詞(=賀)字門一切諸法因不可得故、②阿字門一切諸法本不生、③汗字門一切諸法損減不可得故、④麼(=麼)字門一切諸法吾不可得故(『弘法大師全集』第一輯, p. 535-537, 539, 545)。
- 3) Tib には欠く。
- 4) 五鈷金剛杵を中央の鈷の方向から見た時の形か。あるいは鈷一本ずつの断面の形であろうか。
- 5) 「剣」とは「鈷」のことか。

¹⁾ ṛḍḥaṃ sāram asauśiryam acchedyābhedyalakṣaṇam /
²⁾ adāhī ³⁾ avināśī ca sūnyatā vajram ucyate // (=Sh p.23)
⁴⁾ abhedyam vajram iti *Hevajre* (I-i-4a) / asya ca vajrābhīṣekasya
⁵⁾ vidhānam utpadyamānābhedyajñānabijādhānam eva ⁶⁾ vidhātum //
⁷⁾ evam vajraghaṇṭāpi pūrvābhisamdhānena dvādaśāṅguliparimānā-
⁸⁾ dhomukhāmbhojavajrasamāpattir niḥsvabhāvena sarvadharmasvabhā-
⁹⁾ vam pratipādayitum / abhedyajñānanidānatām ¹⁰⁾ dharmodayasya ¹¹⁾ bodha-
¹²⁾ yitum ūrdhvādhobhāge ca vajrāvali ¹³⁾ yugalamālini / tridhātukasvabhā-
¹⁴⁾ vakūṭāgāratām asya khyāpayitum hārārdhahārāprakārah / ata eva
¹⁵⁾ pañcatathāgatāṅkitāḥ / sūnyatākaraṇābhinnajñānakāraṇatām āvedayi-
¹⁶⁾ tum upari ¹⁷⁾ prajñāmukhākhyānam / asya ca dharmadhātusvarūpasya
¹⁸⁾ jñānasya vairocānādipañcatathāgatātmakatām ca (Sh p.38) rūpādi-
¹⁹⁾ pañcaskandhasvabhāvatām ca pṛthivyādipañcadhāturūpatām ca katha-
²⁰⁾ yitum ūrdhvaṃ pañcāraviracānā / atrāpi ²¹⁾ madhyasthitārābhimukhā-
²²⁾ dyabhisamdhānam pūrvavat / athābhīṣekam anayā ²³⁾ svanantya ²⁴⁾ vajra-
²⁵⁾ ghaṇṭayā kurvitānuttarāśeṣadharmabodhyadhikārakam / iha prādhā-

1) $N_1 N_2 I$ °dhasā°, T damaged. 2) Sh °hi 3) Sh °śi 4) $N_2 T$ °dyava° 5) Sh and *All MSS.* °tpāśya°, Tib skyed pa'i 6) $Sh N_1 N_2 T$ °namiva vi°, I °navi°, Tib gnas dañ 'dra ba ñid 7) I vajrayopi, Tib omits "vajra". 8) Sh °ttini° 9) T °yitri 10) $Sh N_1 N_2$ °nigadatām, I jñānajñānanigadatām, Tib ye śes kyi gnas 11) Tib chos kyi 'byuñ gnas 12) $Sh N_2$ °tum mūrddhādho°, $N_1 I$ °tum mūrddhādho°, T °tum mūrddhādho°, Tib steñ dañ 'og gi 13) Sh °liyu° 14) $N_1 N_2 T$ °rah pra°, I °hārāhūmkārapra° 15) N_2 °kāraṇamāve°, T °jñānakāratāmāve°, Tib dbyer med pa'i ye śes kyi byed pa ñid kyi (D kyis) dbyer med par bstan pa'i phyir 16) Sh °tum upari(ṇata)pra°, $N_1 I$ °tum maparipra°, N_2 °tum saporipra°, Tib de'i (D omits) steñ du 17) P 'di yañ, D de lta bu'i 18) P de la, D de yañ 19) T °sthitārābhisandhān pū°, Tib dbyer med pa'i sgra dañ / bla na med pa'i chos ñid ma lus pa rtogs par byed pa'i rgyur gyur pa'i dril bu'o // 20) Tib de lta bas na 'di lta 21) N_1 °nantmā, T °nanbhyā 22) $N_1 N_2$ °ghaṇṭayā, T °ghaṇṭhayā, I °khaṇṭayā 23) Sh °bodhād vika°, N_1 °boddhādvika°, N_2 °boddhādhikā°, I °boddhodvikā° 24) $N_1 I$ pra°

→p.(115) 注6) つづき

うと「不可分なる知識のかたちをしていることを示すために」。

7) Tib では、「こういうわけでこのように語る音〔を出し?〕無上にして余すところなき法性を知らしめる因となっている鈴である。」

「金剛杵は堅固であり、精髓であり、頑丈で、不断、不可分という特徴があり、不燃者、不滅者、空性であると言われる。」

「金剛は不可分である。」とヘーヴァジュラタントラにも〔説かれている〕。この金剛灌頂の儀則は、生じつつある不可分なる知識の種子の基盤を置くためにこそ〔ある〕。

同様に金剛鈴もまた、先〔に述べたのと同じ〕意図によって、十二指量〔の大きさ〕である。下向きの蓮花と金剛杵が一体になっているのは一切の存在の自性は無自性として〔ある〕ということを理解させるためである。〔諸〕存在の生起は不可分なる知識をゆかりとしている、ということを理解させるために〔蓮華の部分の〕上方と下方とに一对の金剛鬘がとりまいている。その〔蓮華〕が三界に属するものの本性〔を表わす〕楼閣であることを説示するために、嬰珞・半嬰珞の類がある。であるからこそ、五如来により印づけられているのである。空性と悲とが不可分となっている知識の原因である、ということを知らしめるために、上に般若母の顔を示すのである。またこの法界を本体とする知識が毘盧遮那等の五如来を自体としていること、また色等の五蘊の本性であること、地等の五界の〔本〕体であることを説くために、上方に五鈷があしらわれている。またここでも〔周辺の四鈷がわん曲して〕中央にある鈷を向いている〔こと〕等の含意していることは、先に〔金剛杵灌頂の項で説いたのと〕同様である。そして、この〔妙〕音を発する金剛鈴によって、無上にして余すところなき理法の悟りに有効な灌頂をなすべきである。この場合、主たるものであることを

- 1) Advayavajra 著『五如来印についての解説 (*Pañcatathāgatamudrāvivarāṇa*)』(密教聖典研究会 (1988), p. (48)-(49)) に同じ偈が『金剛頂タントラ』からの引用として引かれている。所在等については上掲箇所を参照されたい。
- 2) *HV* I-i-4; "abhedyam vajram ity uktam sattvam tribhavasyaikatā / anayā prajñayā yuktyā vajrasattva iti smṛtaḥ //".
- 3) 写本に従うと「観察しつつある」。
- 4) Tib 「この儀式により……種子の住処と全く同等のものを授ける。(cho ga 'dis..... sa bon gyi gnas dañ 'dra ba ñid ster ba'o)』
- 5) Tib では「十二指量であり、蓮華であって口が下を向いている。音を発するのは金剛杵と同等となるのであり、一切法無自性を理解させるためである。」(bcu gñis kyi tshad tsam ste / pa dma yin pas kha thur du bltas pa'o // sgra sgrog (D sgrog pa ni rdo rje dañ sñoms par 'jug pa ste / chos thams cad rañ bñin med par rab tu rtogs par bya ba'i phyir ro //)
- 6) Tib では、「不可分なる知識をなすことが不可分であると示すために」また T 本に従

p. (114)→

nyakhyāpanāya¹⁾ hetukatāpratipādanāya²⁾ ca kāraṇabhūtam⁽³⁻ api vajra-
ghaṇṭābhīsekam⁻³⁾ ullaṅghya⁴⁾ prathamam⁵⁾ vajrābhīsekadānam⁶⁾ /

sarvadharmā⁷⁾ nāmatā⁽⁸⁻ iti pratipādanārtham⁸⁻ bhaviṣyanmunindrapa-
docitanāmanidānāvādānārtham⁹⁾¹⁰⁾ ca pūrvanāmavyapanayena^{11) -8)} svadevatā-
kulagoṭrānusāreṇa¹²⁾ nāmābhīsekaḥ¹³⁾ /

ācāryābhīsekaś¹⁴⁾ ca vajrasamayaghaṇṭāsamayamudrāsamayabhavya-
tānujñāvratāvyākaraṇāśvāsalaḥ^{15) 16)} / itaḥ¹⁷⁾ prabhṛty¹⁸⁾¹⁹⁻ asaṃskṛtābhe-
dayuganaddhavāhibodhasamayasa⁻¹⁹⁾ tvam²⁰⁾ iti bodhayitum²¹⁾ vajrasamayaḥ²²⁾ /
caturāśītidharmaskandhasahasraparas²³⁾ tvam²⁴⁾ iti pratipādanāya²⁵⁾ ghaṇṭā-
samayaḥ²⁶⁾ / sveṣṭadevatāsvabhāvas²⁷⁾ tvam²⁸⁻ iti khyāpayitum²⁹⁾ mudrāsa-
mayaḥ³⁰⁻ / maṇḍalatattvaṃ³¹⁾³²⁾ maṇḍalaviśuddhilakṣaṇam³³⁾ devatātattvaṃ³⁴⁾ de-
vatāviśuddhilakṣaṇam³⁵⁾ ācāryaparikarma³⁶⁾ ca maṇḍalasādhanajñānam³⁷⁾
pañcapradīpapañcāmṛtabhākṣaṇam³⁸⁾ ca bhavyatā³⁹⁾ / tattvaṃ⁴⁰⁾ ca naiḥsvā-
bhāvyaṃ⁴¹⁾ eṣāṃ⁴²⁾ utpannakramapakṣataḥ⁴³⁾ / dharmacakrapravartanārtham⁴⁴⁾
anujñā⁴⁵⁾ /

1) N_1 °nāyo, N_2 °nayā, T °nāyā, I °nyayā 2) T °katatvampra° 3) N_1 °ghaṇṭābhīḥ ṣe°, N_2 °ghaṇṭābhīḥ seka[bhīseka], T °ghaṇṭābhīḥ°, I vajrayānābhīḥ°, Tib omits “vajra”. 4) N_1 °llaghyam, T °llaghya, I °llaghyam, Tib bṣag nas 5) I °thamava° 6) I °kaṃ 7) I °rmo nā°, Tib . chos thams cad miñ med pa 8) Tib phyis 'byuñ ba'i thub pa'i dbaṅ po'i miñ thob par bya ba'i phyir 9) N_1 °paṭoci°, I °paṭhovita° 10) N_2 °tam 11) T °nidāvadhānārtha° 12) T °pa[damaged]nena 13) N_2 °saraṇa, D omits “anusāreṇa”. 14) T nāmyabhi° 15) N_1 N_2 °nāḥ T °ṇam, I °nā 16) Tib inserts legs par lus 'dus byas pa. 17) Sh N_1 N_2 I °to bhe°, Tib dbyer med ciñ 18) N_2 °vāha°, 19) Sh °bo[dhi]dharmmasama°, N_1 I °bodharmmasama°, N_2 °bodharmmama-yastva(tva)°, Tib rtogs pa ni khyod kyi dam tshig go 20) N_1 N_2 I °rā° 21) T °rme° 22) T °ndhe° 23) N_2 °stva(tva)°, Tib khyod kyi(P khyed kyi) bsgrags par bya'o 24) N_2 °stva(tva)°, D khyod kyi, P khyed ŋid 25) D omits “devatā”. 26) D slob dpon gyi mtshan ŋid, P slob dpon gyi las 27) Tib sgrub pa'i thabs (*sādhanopāyikā) 28) Sh °dīpaṃ cāmī°, N_1 N_2 °dīpañcāmī°, Tib sgron ma lña dañ bdud rtsi lña 29) Sh °vyatātattvam, N_1 N_2 I omit daṇḍa. 30) T °bhāvvyātmatayā utpa°, Tib dños po(D por) med par ñes par byas pa'o 31) Tib rdzogs pa'i rim pa phyogs la ni 32) Sh N_1 I omit daṇḍa. 33) P rjes su snañ ba for rjes su gnañ ba

知らしめるために、また原因あるものであることを理解させるために、原因となってもいる金剛鈴灌頂をとびこえ、最初に(先に)金剛杵灌頂を授ける。

一切の存在は名称〔のみ〕であることを理解させるために、また〔自分が〕これからなる仏陀の位にふさわしい名前のゆかりといわれとのために、以前の¹⁾名前を捨て去って、本尊の部族と種姓に従って名灌頂が〔授けられる〕。

阿闍梨灌頂はまた、金剛杵の本誓、鈴の本誓、印の本誓、所器、²⁾許可、誓戒、授記、³⁾安慰といった諸相がある。〔このうち、〕これより汝〔弟子〕は無為かつ〔空悲〕不可分にして双運なる〔ことを〕理解することを本誓として持つものである、ということ⁴⁾を了解させるために、金剛杵の本誓がある。汝〔弟子〕は八万四千の法蘊に専心する、ということ⁵⁾を理解させるために、鈴の本誓がある。汝〔弟子〕は本尊の本性をもつということ⁶⁾を知らしめるために、印の本誓がある。マンダラの真実〔の意味〕すなわちマンダラの清淨〔なる本質〕を表わしているもの、〔マンダラに登場する〕尊格の真実〔の意味〕すなわち尊格の清淨〔なる本質〕を表わしているもの、⁷⁾師匠への奉仕、マンダラ成就法の知識、⁸⁾五灯明と五甘露を食すること〔を教示するの〕が所器である。またそれら〔もろもろの事項〕の真実は無自性であるということが、究竟次第の方面より〔知らしめられる〕。法輪を転ずるために許可がある。

1) Tib では「将来なるであろう仏陀の名を得るために」。
2) “bhavyatā” に対する「所器」の訳語は、酒井 *op. cit.*, p. 172 に従った。「真実としてあらしめらるべき事項」という程の意味であろう。また “āsvāsa” に対する「安慰」の訳語は *Śrīparamādymahātāntrakalpakaṇḍa* (北京 No.120) の漢訳『佛說最上根本大樂金剛不空三昧大教王經』(大正 No. 244, vol. 8, p. 815b) による。Cf. 密教聖典研究会 (1987), p. (79)。なお、酒井博士は「蘇息」(*op. cit.*, p. 173)、また桜井宗信氏は「蘇息」と訳す(桜井「Kriyāsamgrahapañjikā の灌頂論(1)―瓶灌頂の梵文校訂テキスト及び考察―」『智山学報』第37輯, p. 26-29, 37-38)。
3) Tib によれば、「八万四千の法蘊が汝によって告げられる」。
4) Tib では “tattva” と “viśuddhilakṣaṇa” を並列する。
5) D によれば「師匠の特徴」、 P によれば、「師匠の行ない」。
6) 「五甘露」とは、*HV* に、「gūḍa (砂糖), madya (酒), viṣa (毒), nimba [の実], prasūtaja」と挙げられている(II-iii-46ab)。これらは同 II-iii-59~60 に言う「gūṭha (糞), mūtra (尿), svayambhu (血液), śukla (精液), mahāmāṃṣa (人肉)」と同じである。また酒井 *op. cit.*, p. 40-41 参照。なお、Advayaavajra 著『五如来の形相』では、五甘露を次の様に五仏に配当する。阿闍一金剛水(尿)、毘盧遮那一糞、宝生一血、無量光一精液、不空成就一肉(本書 p. (126)-(129))。頼富教 p. (118)→

bāhyavratānirākaraṇārthaṃ vajravratadānam / pṛthivyādisvabhāvātā-
 sūcanāya vyākaraṇam / tathā hi bhuvo dharādeḥ svaḥ svarūpaṃ
 bhūr bhūyā iti hi bhūr bhuvāḥ svar ity asyārthaḥ / sarvāvaraṇa-
 vinirmuktaḥ sarvabuddhabodhisattvasamas tvam itaḥ prabhṛti bodha-
 nārtham āśvāsaḥ /

prajñāśradhākṣetrikaraṇārtham samayarakṣaṇārtham ca samāna-
 kālobhayasampādītābodhicittapradānam guhyābhiṣekaḥ / prajñopāya-
 guhyābhyāṃ dāpayata iti vyutpattiḥ /

prajñājñānam ity atra (Sh p.39) vyutpattidvayam / prajñāyā
 jñānam, prajñāiva bāhyā jñānam / tatra grāhyagrāhakākāradhāraṇi
 buddhiś caturdhātupañcaskandharūpādiṣaḍviṣayātmikāṅganāsvabhāvā
 prajñā / tasyā nimittabhūtāyā bodhicittajñānam iti pūrvā vyutpat-
 tiḥ / ākāradvayaśūnyā saiva vijñānam ity aparā vyutpattiḥ /

1) *T missing the following folio.* 2) *Tib* bhur ni sa 'dzin pa la sogs pa'o //
 sa ni rañ gi no bo ste bhu sa ste / bhur bhu(D wa) swa zes bya ba 3) *Sh*
 °de(h) svaḥ svarū°, *N*₁ °denveḥ(?) svaḥ rū°, *N*₂ °deḥ sva svarū° 4) *I* dvi
 5) *N*₁ *N*₂ *I* °ktaṃ 6) *Sh* °sama[ya]stva°, *N*₁ °sammaḥ stva°, *I* °samaḥ stva°,
Tib khyod la(P omits) bzed pa'o 7) *I* °śuddhā° 8) *Sh* *N*₁ *N*₂ dipa°, *I*
 dāpavyaya 9) *Sh* prajñāyā, *I* prajñā, *Tib* śes rab kyi 10) *Sh* bāhyajñā°,
I vāhyojñā°, *Tib* śes rab ſid ye(P ya) śes so, omits "bāhyā". 11) *Sh* *N*₁ *N*₂
I °ndhasvarūpaṣaḍvi°, *Tib* gzugs la sogs pa yul drug 12) *Sh* °tmakā°→
 °tmikā° (p.69), *N*₁ *N*₂ °tmikā°, *I* °tmakāṃṅga 13) *D* yan lag dañ / ſiñ lag
 gyi no bo, *P* yan lag dañ / yan lag can gyi no bo 14) *I* °bhāva 15) *Tib*
 de rgyu mtshan du gyur pa las byuñ ba byañ chub kyi sems so 16) *P* gzan
 dag ni ſid rnam pa gñis pos stoñ pa ſid stoñ pa ſid don dam pa'i rnam par
 śes pa, *D* gzan dag ni de ſid rnam pa gñis pos (? illegible) stoñ pa nid don
 dam pa'i rnam par śes pas

→p.(117) 注6) つづき

- 授によれば、五甘露を五仏に配当した例は珍しいとのことである (op. cit., p.541)。
 7) *T*本に従うと、「無自性であることを本体としているため究竟次第の方面より真実[を
 教示する]」、*Tib*によれば、「究竟次第の方面においてはそれら同じものが (de dag
 ſid) 無自性であると確定する」となる。
 8) 「法輪を転ずる」とは、「弟子が、他の者に法を説くこと」の意であろう。Cf. 桜井
 op. cit., p. 36. なお、*Sh* *N*₁ *I* では、「utpannakramapakṣataḥ」と「dharma-
 cakra°」の間の daṇḍa を欠く。これに従うと、「……無自性であることを究竟次第
 の方面より法輪を転ずるために」となるが、不適當と思われる。

外的な誓戒を斥けるために金剛杵の誓戒を授与する。〔汝自身が〕地等の本性
 である〔ということ〕を〕教示するために授記がある。すなわち、「空」とは「大
 地等の」〔ということであり〕、「天」とは「本体」〔ということであり〕、「地」
 とは「汝はなれかし」ということである。〔すなわち、「汝は大地等の本体とな
 れかし」〕というのが、『〔汝は〕地・空・天〔と平等なり』〕というこの〔授記
 の真言の〕意味である。汝〔弟子〕は今後一切の障礙より解き放たれ、一切の
 仏菩薩と等しい〔ということ〕を〕了解させるために安慰がある。

〔弟子を〕般若と信〔を育くむ〕田地となすために、また本誓を護らせるため
 に、同時に〔男女〕双方より生みだされた菩提心を与える〔という〕のが、秘
 密灌頂である。般若〔すなわち女性〕と方便〔すなわち男性〕の双方の秘〔技〕
 により与えしめられるべきである、というのが〔「秘密」ということの〕語義解
 釈である。

〔第三番目の灌頂は〕般若智〔灌頂〕と〔言うが〕これに対しては二通りの語
 義解釈がある。「般若の知識」と「外的な般若(=女性)にして知識」³⁾とであ
 る。このうち、対象と主体という〔二元的な〕形象を保持し、四界・五蘊とい
 ろかたち等の六境を本体とし、女性を本性とする知が般若であって、その〔菩
 提心を生じる〕原因となっている〔般若〕を菩提心として知ることであり、と
 いうのが、前者の語義解釈である。その同じ〔般若〕が、〔主客の〕二形象を欠
 いており、〔勝義の〕認識⁵⁾である、というのが、後者の語義解釈である。⁶⁾

- 1) Cf. 密教聖典研究会 (1987), p. (76)–(77). 桜井 op. cit., p. 37. 「授記の真言」とは、
 “om eṣo 'haṃ vyākaroṃi tvāṃ vajrasattvas tathāgato bhavadurgatita ud-
 dhṛtyātyantabhavaṃ siddhayat / he vajranāmatathāgata siddhya samayas
 tvāṃ bhūr bhuvāḥ svaḥ //”.
 2) *Tib* では「一切の仏菩薩が汝をうけいれる」。
 3) *Tib* では「外的な」を欠く。
 4) *Tib* では、「それを原因として生じるのが菩提心である」。
 5) *Tib* により補う。
 6) Cf. Guenther op. cit., p. 125–126. *Sekoddesaṭṭikā* (ed. M. E. Carelli, *Sekodde-
 saṭṭikā of Nāḍapāda (Nāropā)*, Baroda, 1941, G. O. S. vol. 90), p. 46.

prajñāñānalakṣitasaptāṅgayuktasādhyam caturthārtham ity eke /
 prajñāñānam evābhyasamānaśaradamalagaganasamkāsam caturthā-
 rtham ity apare / prajñāñānam eva prakṛtirūpaṃ vikārarūpaṃ pra-
 kṛtisamutpādātmakam yuganaddhāvayavāhisuviuddhasvabhāvam ca-
 turthārtham ity apare / pakṣāntarāṇi ca vistarabhayād nocyante //
 atiguhyasekasamgrahavidhānamilitena puṇyayutaślokena /
 nikhilajagato 'stu vimalasphuṭasugatasubhāṣite kṣāntiḥ // 4 //

// samāptaś cāyam sekatātparyasamgraha iti // kṛtir iyaṃ pañ-
 cītāvadhūtaśryadvayavajrapādānām iti //

1) *D ye śes kyis, P ye śes kyī* 2) *N₁ repeats this phrase in the upper margin of the next page (fol. 25a).* 3) *Tib śes rab ye śes kyī rañ bzin gñug mar ni (D ma'i)* 4) *Tib rten ciñ 'brel bar 'byuñ ba'i* 5) *Sh °bhayā nocyā°, I °bhayānocyā°* 6) *Tib cho ga bsdus pa las* 7) *Sh °yutaślo(ke)na, N₁ °yutaślena, N₂ °yutaślo(ke)na, I °puṇyeṣu yutaślena, Tib bdag gis (P gi) bsod nams gañ rñed (D sñed) thob pa des* 8) *D 'gro ba kun gis, P 'gro ba kun gyi* 9) *Tib bsod pa thob par śog* 10) *N₁ °nti, N₂ °nti(h), I °kṣāmti*
 11) *Tib dbaṅ gi dgos pa* 12) *P adds dbaṅ gi bya ba mdor bsdus pa i ba dhū ti śabs kyis mdzad pa bñugs so //*

→p. (121) 注4) つづき

第8 foot が不調である。
 5) Tib ではこの後訳者名 (Vajrapāni と mTshur ston) を挙げるが、さらに P のみ、書名 (dbaṅ gi bya ba mdor bsdus, *Sekakāryasamgraha) と著者名 (I (>A)-vadhūti pa) を再度記している。この書名は冒頭で挙げるチベット語訳タイトル (dbaṅ gi dgos pa mdor bsdus) とは一致しないが、音写タイトル (Sekatākāryasamgraha) に近い。

〔第四灌頂の語義解釈は次の様に諸説がある。〕ある者は、般若智〔灌頂〕により経験されたものが、〔真実の〕七支を備えたものとして完成さるべきである、というのが第四〔灌頂〕の意義である、と〔言う〕。別の者は、同じ般若智が、〔それを〕反復して修してゆくことにより、秋の淨らかな虚空のように〔すぐれたものとなる〕というのが、第四〔灌頂〕の意義である、と〔言う〕。〔また〕他の者は、同じ般若智が、〔第四灌頂においては〕本質的な姿をし、変化した姿をし、本質として生じている〔ということを〕本性とし、双運不二なる極めて清浄な本性をもつ〔ものとなる〕というのが、第四〔灌頂〕の意義である、と〔言う〕。〔その〕他の諸説は、〔紙数が〕大きくなることを恐れて、〔ここでは〕説かない。

(4) 非常に秘密なる、灌頂の要略の儀則を具えた、福德を備えた〔本書第三〕偈により、全ての世人は、汚れなく明瞭な善逝のよきことば〔を受け入れるの〕に耐えよかし。

これなる『灌頂主旨綱要』終り。本〔書〕は、教師・〔脈管〕アヴァドゥーテ
 ィー〔の実践に通達した者〕・吉祥アドヴァヤヴァジュラ上足の御著作である。

(野口 圭也)

- 1) 「七覚支」ではなく、第四灌頂において師よりことばによって授けられる真実の内容たる「七支」のことであろう。「七支」については、吉水千鶴子氏により詳細な研究がなされている（『ツォンカパ『秘密道次第大論』における灌頂論』、山口瑞鳳監修『チベットの仏教と社会』東京、1986 所収）。それによると「七支」とは、GS の Jñānapāda 流において、Vitapāda (Jñānapāda—8 世紀後半—の弟子) により、Yogasāpianāma caturabhiṣekaparakarāṇa (北京 No. 2738) で提唱され、さらに11世紀に Vāgīśvarakīrti により Saptāṅga (北京 No. 2752) で詳細に解説され、Tsoñ kha pa に継承される。その内容は①完全なる享受、②結合、③大衆、④無自性、⑤圓滿なる慈悲、⑥不断なる相統、⑦不滅の七である。
- 2) Tib では「縁により生じる」。
- 3) ここに挙げる三通りの第四灌頂解釈は、いずれも、第三段階の般若智灌頂に基き、それが真実の教示を伴ったもの、あるいは、程度の高くなったもの、とする解釈である。Cf. 野口圭也「無上瑜伽密教の灌頂について」、『南都仏教』54号、p. 58, 66。
- 4) Tib に従うと、「極めて〔秘密な〕灌頂の儀則の要略により私は福德を得た。その〔福德〕により、すべての世人は善逝の汚れなき明瞭な福德を得よかし」となる。この方が意味が理解しやすい。Sh はここを散文にしているが、Tib は1句9音節の偈文にしており、Āryā 調の偈にするのが妥当と思われる。ただし現状では前半の第7、

10. Pañcākāra¹⁾[Sh p. 40] namo buddhāya /²⁾vajrasattvaṃ namaskṛtya niṣprapañcam anuttaram /³⁾pañcākāram ahaṃ vakṣye samākṣipya ca bodhaye // 1 //^{4) (5—5)}om āḥ hūṃ ity anena sthānātmayogarakṣāṃ kṛtvā sugandhādi-⁶⁾
liptabhūbhāge caturasrādimaṇḍalamadhye pañcatathāgatāḥ pañcayogi-⁷⁾
nyaḥ pūjanīyāḥ /^{8) 9)}tatra madhye viśvavarṇapaṃkārapariṇataviśvāṣṭadalavikasitaka-^{10) 11)}
malavaraṭākopari raktarephapariṇatasūryamaṇḍalasthanilahūmkāra-¹²⁾
niṣpanno dvibhuja ekamukho bhūsparśamudrādhāro vajraparyāṅki^{13) 14) 15)}
dvātrimśallakṣaṇāśītyanuvyañjanālamkṛtaśarīro daśabalavaiśāradyādi-^{16) 17) 18) 19)}
guṇagaṇaikaṇīyāḥ sauśīryamāmsāsthiraḥitaḥ pratibhāsamātradar-²⁰⁾
paṇapratibimbāsamo na satyaṃ na mṛṣātīmāitrātmakātvāt kṛṣṇavar-^{(21—21) —21) (22—22) —22)}
ṇaḥ kṛṣṇavajracihnaḥ suviśuddhadharmadhātuvijñānaskandhasvabhā-²³⁾
vaḥ śīratuṇḍamuṇḍitakāśyāvaguṇḥhitavīgraho vajrasattvāṅkitaśīra-²⁴⁾
vajrasattvasvabhāvaḥ śūnyatākaruṇābhinnāḥ /^(25—25) —25)

1) Tib pa ũca sva bhā va 2) Tib dpal rdo rje sems dpaḥ la 3) P spos pa med pa 4) N₁ I vakṣe (5—5) N₁ samākṣipya, I samāchīṣyasya, Tib mdor bsdus slob mas 6) I ā 7) N₂ °maṇḍale° 8) Y °yaś ca 9) I pūjani 10) I °ṇatāvi° 11) I om. dala 12) N₁ °reha°, D r, P raṃ 13) Tib inserts mi bskyod pa 14) N₂ ekamukhyā 15) N₂ bhūsparsa(rga)°, Tib gnon(P; mnon) gyi phyag rgya 16) N₁ I °trisa° 17) N₁ N₂ °anavya° 18) I °śarīrā 19) Y °vaiśādyā° 20) Sh N₁ N₂ I Y sauśīrya, Tib bu ga dañ (21—21) N₁ °saromonna satyanna, N₂ °saromānna satyaṃ na, I °saromānna samyakānna, Tib mtshuñs pa / bden pa ma yin (22—22) Sh °maitryātmyaka°, Y °maitryātmya° 23) Tib phuñ po lñaḥi rañ bshin 24) I °tuṇḍā° (25—25) Followed Y. Sh śīratuṇḍamuṇḍitakāḥ, N₁ śīratuṇḍamuṇḍatakāḥ, N₂ śīratuṇḍamuṇḍitakāḥ, I śīratuṇḍamuṇḍitakā, Tib stoñ pa ũid dañ / sñiñ rje dbyer med paḥo //

10. 五(如来)の形相¹⁾仏陀に帰命し奉る²⁾

(1) 無戲論にして最勝なる金剛薩埵に帰命して、

我れは五(如来)の形相を(弟子に³⁾)理解させるために、撰して説こう。オーン アーハ フーン⁴⁾ というこの(真言)によって住処と自己と行を護持して、よき香等が塗られた地面の四角形等の曼荼羅の中央で、五如来と五瑜伽女を供養すべし。

その中央において、雑色の PAM 字が変じた八花卉すべての開花せる蓮華のうてなの上に、赤色の RA 字が変じた日輪にある青い HŪM 字より現われた(阿閼如来⁵⁾)がいる。(それは)一面二臂にして触地印をとり、金剛結跏座にて坐している。(その)身体は三十二相・八十種好によって莊嚴され、十力・(四)無所畏等の功德聚の一所住処であり、(無用な九)孔・肉・骨がなく、ただ顕現に過ぎない鏡(に写る)影像のようであり、真実でもなく虚偽でもない。甚深なる慈愛を本性とするものなるが故に青黒色であり、青黒色の金剛杵を標幟とし、清浄法界(智)と識蘊を自性とするものである。頭髮とひげを剃り、身体に袈裟をまとい、頭に金剛薩埵をしるし、金剛薩埵を自性とし、空性と悲を不可分とするものである。⁽⁶⁾

- 1) Tib 音写タイトル 'Pa ũca sva bhā va', 同意訳タイトル 'Rañ bshin lña pa' によれば、「五自性」とされる。
2) Tib は「吉祥なる金剛薩埵に帰命し奉る」とされている。
3) Tib により補う。
4) この真言は、VS では、行者の障碍を除く作業の前に誦する真言として説かれている(密教聖典研究会(1987), p. (45))。GS では、om āḥ hūṃ の各々が仏の身口意と対応されて説かれている(GS, XI-6)。HV では、身口意の加持真言として説かれている(HV, I-ii-10)。また、Advayavajra 著 'Kudrṣṭinirghātana' においては、曼荼羅供養に先駆けての自己、及び行の護持真言や後の供物加持の真言として説かれている(Sh p. 4, p. 9, 密教聖典研究会(1988), p. (17), p. (31))。
5) Tib により補う。
6) Sh, 全写本は「頭髮、ひげを剃ったものである。」とあるが、重複しているので、Tib に基づく Y 本に従った。

1) ata eva hetuphalātmakaḥ sarvākāvaropetaśūnyatālakṣaṇo 'saṃ-
 2) skṛtatathatātmakatvād dharmakāyaḥ pratibhāsamātratvāt sambhoga-
 kāyaḥ 3) kalpitanirmāṇakāyatvād 4) 3) 4) 5) 6) 7) 8) 9) 10) 11) 12) 13) 14) 15) 16) 17) 18) 19) 20) 21) 22) 23) 24) 25)
 svābhāvikaḥ /
 tad uktam /

asamskṛtamano dharmo bodhaḥ sambhogalakṣaṇaḥ /
 tad eva nirmitaś citraḥ sarvasvabhāvataḥ // 2 //
 iti / vikalpāder asprśyatvād vajrakulī / vajrakulaś ca lokair na
 sprśyate / deveṣavajrodakaśīśīramadhyāhnaḥ (Sh p.41)ākāśa-
 śabdacavargā akṣobhyaviśuddhā amī bāhyādhyātmikavyavasthā iti /
 kāyacatuṣṭayavyavasthā cātrāpi pūrvavat /
 om āḥ vajradhṛk hūṃ /
 asya jāpamantraḥ /

1) Y sa 2) Sh N₁ N₂ I °tathāgatā° (3—3) Sh kalpitanirmāṇakāyaṃ, N₁ alpitanirmāṇakāyaṃ, N₂ a(ka)lpitanirmāṇakāyaṃ, I alpitanirmāṇakāya, Y kalpitavijñānātmakatvān, Tib brtags paḥi rnam par śes paḥi ḥo bo yin paḥi phyir (4—4) Tib om. (5—5) I om. 6) Sh copa[ḥ], I bodhiḥ, D rtags pa, P brtags pa 7) Sh N₁ N₂ I nirmitaṃ 8) Sh N₂ citraṃ, N₁, I citra 9) Sh bījaḥ 10) I °svabhāvakaḥ 11) N₁ N₂ I °pādīra° 12) I °kali 13) N₂ I loke 14) N₁ °teḥ 15) Followed Y. Sh °vajraś ca, N₁ N₂ °vajrasvaḥ, I °vajrasva° 16) Tib draṅ ba 17) I °kaśruti° 18) Sh Y °vargo 19) Sh Y °viśuddho 20) N₁ bāhkā° 21) Sh N₁ N₂ °stheyam, I °stheyem 22) I °ṣṭavyava° 23) I om. api 24) Sh om. om 25) N₂ vajradhṛka

この故に、因と果を本性とするものにして、一切の最勝なる形相を備えた空性を特相とし、無為なる真如を本性とする故に法身であり、ただ顕現に過ぎない故に報身であり、構想された変化を身体とする故に化身であり、三身を同一味とする故に自性身である。

次のように言われている。

(2) 無為なる心が法(身)であり、知覚が報(身)の特相である。

従って、種々なるものが化(身)である。一切(即ち三身の)自性であるため、本有のもの(自性身)である。

と。(阿閼如来は)分別などではおよびもつかない故に、金剛部族に属するものである。(何故なら)金剛部族は世間の者達によって知られ得ないからである。(また、阿閼如来は)瞋恚と金剛水と寒冷期と真昼と辛さと聴聞と虚空と音声と CA 行であり、(これ等は)阿閼(如来)の清浄(なる本質を示している)のである。それ等が(阿閼如来の)外と内との安立である。四種身の安立は、ここでもまた前の如くである。

オーン アーハ ヴァジュラドフリクよ フーン。

がその(阿閼如来の)持誦真言である。

- 1) Sh, 全写本は「如来(tathāgata)」とあるが、Tib には「真如(de bshin nid)」とある。また、後述される同一趣意の四身を説く箇所においても同様に「真如(tathata)」と説かれ(本書, p. (130)), 文脈上妥当である故に、それ等に従った。
 (2—2) Tib では、この化身の一文が、「分別された識の自性である故に化身である。」とされている。
 (3—3) Tib では、この自性身の一文が欠けている。
 4) 典拠不明。尚、この偈は“Advayavajrasaṃgraha”の18. ‘Mahāyānaviṃśikā’ (Sh No. 16) 中の第19偈 (Sh p. 55) としても引用されており、そこでの偈は以下の如くである。

asamskṛta[ma]nā dharmo bodhaḥ sambhogalakṣaṇaḥ /
 tad eva nirmitaś citraḥ nijaḥ sarvasvabhāvataḥ //

- 5) Tib では、「召請」とある。
 6) 頼富氏によれば、五仏の真言はGSと同系統とされる (p. 152, p. 155)。尚、この持誦真言の Vajradhṛk は、日本における密教の修習法の一つである真言宗の「十八道次第」中にも、金剛部本尊召請呪 (om vajradhṛk ehy ehi svāhā) に見られる(種智院大学密教学会編『梵字大鑑』, 東京, 1983, p. 715)。

vajrasattvas tu hūmkārajanmā śuklo dvibhuja ekavaktro vajra-
 vajraghaṇṭādharo manasvabhāvaḥ kāṣāyaraśārirāḥ śaradṭuviśud-
 dho yaralavādyātmake 'rdharātrataḥ prabhātakālaparyanto dharmā-
 dhātuparanāmā /

ataḥ pūrvadale candramaṇḍalopary omkārajaḥ śuklavarnavairoca-
 naḥ śuklacakracihno bodhyagrīmudrādhāro rūpaskandhasvabhāvo mo-
 hasvarūpo viṣṭāviśuddhas tathāgataḥ ādarśatvena pratiṣṭhito hema-
 tartuviśuddho madhurarasaśārirāḥ kavargavyāpī prabhātasandhyātma-
 kāyasvabhāvaḥ /

om āḥ jinajik hūm /

ity asya jāpamantraḥ /

dakṣiṇadale sūryamaṇḍalopari trāmkārajaḥ pītavārṇo ratnasam-
 bhavo ratnacihno varadamudrādhāro vedanāskandhasvabhāvaḥ piśu-
 naśāriro raktātmako ratnakulī samatājñānavān vasantarturūpo

1) N_1 śuklai, I śukla 2) I °bhujam 3) N_1 °vaktro (4—4) *Tib* rdo rje dril bu
 5) I manasva° 6) *Tib* inserts stoñ paḥi rgyas btab pa 7) Y kaṣāya° 8) N_2
 I śaradatu° 9) I °ddhā 10) N_1 N_2 yaralāvā° 11) I prabhātaḥ 12) *Tib*
om. “paryanto” 13) N_1 N_2 °nāmāḥ, Y °nāma 14) *Tib om.* ataḥ 15) N_1
 pūrvadadale, N_2 pūrvadala, I pūrvādidale 16) Sh śuklacakra(vajra)°, N_1 N_2
 I śuklavajra° 17) Sh bodhyaṅgi°, I bodhyaṅgri° 18) I mohāḥ svarūpā
 19) Sh N_1 N_2 I viṣṭāviśuddhaḥ, Y viṣṭāviśuddhas, *Tib* bśaṅ baḥi rnam par
 dag pa dañ (20—20) Y ādarśajñānapratiṣṭhito, *Tib* me loñ lta buḥi ye śes
 rab tu gnas pa dañ 21) I °viśuddhiḥ 22) N_1 °rasasararaḥ 23) N_2 I °vyāpī,
Tib om. “vyāpī” 24) Sh I jinajika, N_2 jinajina 25) Sh N_2 [i]ty asya, N_1
 tyasya, I svātma 26) I °jam 27) Sh °cihnavara° N_2 varamu°, I varadacihna-
 varadamu° 28) Sh $Y om.$ skandha 29) Sh °vapi° 30) N_1 I °ātmavo
 31) Sh °pala°, D rnam par dag pa, P rañ bshin

また、金剛薩埵は HŪM 字より生じ、白色、一面二臂にして、金剛杵と金剛
 鈴とを持つ。意を自性とし、渋味を体とし、秋の季節として確定しており、
 YA RA LA VA 等を本性とするものであり、真夜中から明け方までの時分
 であり、法界の別名をもつものである。

次に、東の花弁において、月輪の上に（住する）OM 字より生ぜる白色の毘
 盧遮那は、白色の輪を標幟とし、覚勝印（智拳印）をとり、色蘊を自性として
 おり、愚癡を本体とし、大便として確定しており、如来部族に属し、（大）円鏡
 （智）として住し、冬の季節として確定しており、甘味を体とし、KA 行を満
 し、夜明けの薄明かりを本性とする身体を自性としているのである。

オーン アーハ ジナジクよ フーン。

というのがその（毘盧遮那如来の）持誦真言である。

南の花弁において、日輪の上に（住する）TRĀM 字より生ぜる黄色の宝生
 （如来）は、宝を標幟とし、施願印をとり、受蘊を自性とし、両舌を身体とし、
 血を本性とし、宝部族に属し、平等性智を有しており、春の季節の姿をとり、

1) *Tib* では、この箇所「虚空のしるしがつけられたもの」という一文が挿入されてい
 る。
 2) この持誦真言の Jinajik は、前述の「十八道次第」では仏部本尊召請呪 (om jinajik
 ehy ehi svāhā) に見られる（前掲『梵字大鑑』, p. 715）。
 3) 頼富氏によれば、部族名 (kula) は HV 等の般若・母タントラ系のものであると指摘
 されている。（ Y , p. 152）

lavaṅṣārīraṣ ṭavargavyāpī ṭṭriyacaturthapraharātmakāḥ /
 oṃ āḥ ratnadhṛk hūṃ /

asya jāpamantraḥ /

tataḥ paścimadale ravimaṅḍalopari raktahriḥkārasambhūto rak-
 tavarṇo 'mitābhāḥ padmacihnaḥ samādhimudrādharāḥ saṃjñāskan-
 dhasvabhāvo rāgaśarīraḥ śukrātmakāḥ padmakulī pratyavekṣaṇājñā-
 nalakṣaṇo grīṣmarturūpa āmlarasāśarīras tavargātmā pradoṣavān /

jāpamantraś cāyam /

oṃ āḥ ārolīk hūṃ /

tata uttaradale sūryamaṅḍalopari śyāmakhaṃkārajāḥ don yod
 grub pa ljaṅ gu piśītāmaḥ ral griḥi phyag mtshan daṅ / mi ḥjigs
 paḥi phyag rgya ḥdsin pa / ḥdu byed kyi phuṅ poḥi bdag ṅid daṅ /
 las kyi rigs daṅ / phrag dog gi raṅ bshin bya ba nan tan du grub
 paḥi ye śes daṅ / char gyi dus kyi raṅ bshin daṅ / tiktarasātmakāḥ
 (Sh p.42) pavargaviśuddho 'rdharātrasvabhāvaḥ /

asya ca mantraḥ /

oṃ āḥ prajñādhṛk hūṃ /

iti /

1) *I lakṣaṇa*° 2) *N₁ ṭavargtavyā*°, *I ṭavargjavyā*° 3) *I*°ātmaḥ 4) *I ā*
 5) *N₂ ratnadhṛka*, *I ratnādhṛka* 6) *I paścime* 7) *Sh*°hriḥkāra° 8) *I*
lakṣaṇā 9) *I*°rūpaṃ 10) *N₁°rasarīraḥ* 11) *N₁ tavargtātmā*, *I tavargjātmā*
 12) *N₁ cāyaḥ* 13) *N₂ ā* 14) *Sh I ārolīka*, *N₁ N₂ āronīka*, *D arolīk*, *P arolīk*
 (15—15) *All manuscripts om.*, *Sh śyāmavarṇo'moghasiddhiḥ*, *Y śyāmavarṇo*
'moghasiddhir 16) *Sh N₁ I piśītāpaḥ* (17—17) *All manuscripts om.*, *Sh viś-*
vavajracihnābhayamudrādharāḥ saṃskāraskandhasvabhāvo varṣārturūpaḥ, *Y*
viśvavajracihno 'bhayamudrādharāḥ saṃskāraskandhasvabhāvaḥ karmakulīrṣ-
yāsvabhāvaḥ kṛtyanuṣṭhānājñānavān varṣārturūpaḥ (18—18) *P tan gyi*

鹹(味)を体とし、TA 行を満たし、(一日の内の)第三更と第四更を本性とし
 ているのである。

オーン アーハ ラトナドリックよ フーン。

がその(宝生如来の)持誦真言である。

次に、西の花弁において、日輪の上に(住する)赤色の HRIḤ 字より生ぜ
 る赤色の無量光(如来)は、蓮華を幟幟とし、禪定印をとり、想蘊を自性とし、
 食欲を身体とし、精液を本性とし、蓮華部族に属し、妙観察智を特相としてお
 り、夏の季節の姿をとり、酸味を体とし、TA 行を本性とし、夕方(の本性)
 を有しているのである。

この(無量光如来の)持誦真言は次のとおりである。

オーン アーハ アーローリックよ フーン。

次に、北の花弁において、日輪の上に(住する)暗緑色の KHAM 字より
 生ぜる暗緑色の不空成就(如来)は、肉を本性とし、剣を幟幟とし、施無畏印
 をとり、行蘊を本性とし、羯磨部族に属し、慳吝を自性とし、成所作智を有し、
 雨季を自性とし、苦味を本性とし、PA 行として確定しており、真夜中を自性
 としているのである。

この(不空成就如来の持誦)真言は、

オーン アーハ ブラジュニヤードリックよ フーン。

という。

1) この持誦真言の Ārolīk は、前述の「十八道次第」では、蓮華部本尊召請呪(om
 ārolīk ehy ehi svāhā)に見られる(前掲『梵字大鑑』, p.715)。尚、善無畏訳『蘇
 悉地羯羅供養法』(大正 No.894, Vol.18, 697a)中にも蓮華部心真言として見られる。
 2) Sh と Y は、viśvavajra(羯磨杵)とするが、Tib に ral gri とあるため、それに
 従った。また、GS, HV の不空成就仏の Family symbol も khaḍga となっている
 (GS, IV-13, HV, II-xi-4)。

ete vajraparyānkino dvibhujaikavaktrāḥ ¹⁾soṣṇīśaśīratuṇḍamūṇḍitāḥ ²⁾
³⁾kāṣāyāvaguṇṭhitā ⁴⁾dvātriṣāḥ ⁵⁾sallakṣaṇāśītyanuvyañjanālaṃkr̥tā ⁶⁾daśabala-
⁷⁾vaiśāradyādiguṇagaṇaikaṇilayāḥ ⁸⁾sauśīryamāṃsāsthīrahītā ⁹⁾darpaṇapra-
¹⁰⁾tibimbopamāḥ ¹¹⁾satyāsatyādisaṃkalpanāpagamavimalapratibhāsamātra-
¹²⁾kasambhogavigrahāḥ ¹³⁾kāyatritayaikarasatāsvābhāvīkākāyam ¹⁴⁾upādāyā-
¹⁵⁾samskṛtatathātātmakadharmakāyakaḥ ¹⁶⁾pitavijñānakāyābhinnā ¹⁷⁾rūpaveda-
¹⁸⁾nāsamjñāsamskāraskandhātmakā ¹⁹⁾vairocanaratnasambhavāmitābhāmo-
²⁰⁾ghasiddhayo ²¹⁾vijñānamātrateti ²²⁾pratipādanāyākṣobhyena ²³⁾mudryanta ²⁴⁾ity
²⁵⁾akṣobhyāṅkitaśīrasaḥ / ²⁶⁾vijñānasya ²⁷⁾naiḥsvābhāvīyasya ²⁸⁾sūnyatākaruṇa-
²⁹⁾yoḥ ³⁰⁾tādātmakatvaṃ ³¹⁾ca ³²⁾pratipādayitum ³³⁾akṣobhyo 'pi ³⁴⁾vajrasattvena
³⁵⁾mudryate / ³⁶⁾etena ³⁷⁾hetuphalātmakaṃ ³⁸⁾bhavanīrvāṇaīkarasatāmātraṃ ³⁹⁾ja-
⁴⁰⁾gād ⁴¹⁾iti ⁴²⁾pratipāditaṃ ⁴³⁾bhavati /

1) N_1 °jaivaktāḥ, N_2 °joraktāḥ, I °jaikavaktāḥ (2—2) N_1 soṣṇīśaśīratuṇḍa°, N_2 soṣṇīśaśīratuṇḍa°, I sosrñīśaśīratuṇḍa° 2') Sh °takāṣā° 3) Sh °tadvā°, N_1 kāṣāvaguṇṭhita°, I kāṣāguṇṭhita° 4) N_2 dvātriṣāḥ° 5) N_2 °anavya°
6) N_1 °guṇagaṇaika°, N_2 °guṇagu(ga)ṇaika°, I °guṇaguṇeka°, Tib yon tan gyi gshir gyur pa 7) Sh N_1 N_2 I Y sauśīrya°, Tib bu ga dañ (8—8) Sh N_1 N_2 °mbopamā na satyāsatyādi°, I °mbopamā na sabhyāsabhyādi°, Tib gzugs brñan lta bu ste / bden pa dañ brdsun pa la sogs paḥi 9) Tib mthaḥ dag (10—10) N_1 N_2 I °gaṃ vimala° 11) I °saṃbhūta°, Tib ḥdus byas paḥi (12—12) *Followed Y.* Sh N_1 N_2 I °tathātmakarmakāya°, Tib de bshin ṅid kyi bdag ṅid chos kyi sku 13) Sh N_1 N_2 I °kāyāvabhinnā (14—14) N_1 °sajñā-saskāra° 15) N_1 °tābhā 'moghe°, N_2 °tābhārmogha° 16) N_1 N_2 °nāyā 'kṣo-bhyeṇa, I °nāyā 'kṣobhyesa (17—17) Sh °nte iti / akṣobhyāṅkitaśīrasi, N_1 N_2 °nta iti / akṣobhyāṅkitaśīrasi /, I °nta iti akṣobhyoṅkitaśīrasi, Y °nte / akṣo-bhyāṅkitaśīrasi (18—18) N_1 N_2 tādātmakaṃ ca, I todātmakaṃ ca 19) I mudr-yante 20) Tib de dag gyis 21) I om. pratipāditaṃ

彼等(四如来)は、金剛結跏座にて坐し、一面二臂にして仏頂を有し、頭髮・ひげを剃り、袈裟をまとっている。(身体は)三十二相・八十種好によって莊嚴され、十力・(四)無所畏等の功德聚の一所住処である。(無用な九)孔・肉・骨がなく、鏡(に写る)影像のようであり、真実とか虚偽等の分別を離れた無垢なるただ顕現に過ぎない報身である。三身が同一味であるということを自性とする身を取り、無為なる真如を本性とする法身と構想された識身とが不可分となっている。毘盧遮那(如来)・宝生(如来)・無量光(如来)・不空成就(如来)は、色・受・想・行の(四)蘊を本性とする(のであるが、)ただ識(蘊)のみに過ぎないものであると理解させるために、(それら四如来は)阿閼(如来)によって刻印されるのである。(即ち)頭が阿閼(如来)によってしるしづけられているのである。識が無自性であるということには、空と悲の同一性(という意味がある)と理解させるために、阿閼(如来)もまた金剛薩埵によって刻印されるのである。このことによって、世間は因果(関係)を本体とし、有(輪廻)と涅槃を同一味とするに過ぎないと理解されるのである。

1) 阿閼と四仏、五蘊の関係について、Advayavajra は、6. 'Pañcatathāgatamudrāvivarāṇa' (Sh No.4) においても言及している(密教聖典研究会(1988), p. (47)–(53))。

2) 阿閼と金剛薩埵の相互関係の記述についても上記前掲作品を参照。

tathā ca

śūnyatākaruṇābhinnam yatra cittaṃ prabhāvyate /
 sā hi buddhasya dharmasya saṃghasyāpi hi deśanā // 3 //
 guḍe madhuratā cāgner uṣṇatvaṃ prakṛtir yathā /
 śūnyatā sarvadharmāṇām tathā prakṛtir iṣyate // 4 //

tathā ca

bhavyasyaiva pariñānam nirvāṇam iti kathyate // 5 //
 āgneyakoṇadale candramaṇḍalopari śuklalāṃkārajā śuklavarnā
 locanā cakracihnā pṛthvidhātusvarūpā tathāgatakulodbhavā moharak-
 tā / asyā bijam /
 om āḥ lām hūṃ svāhā / iti /
 (Sh p. 43) nairṛtyāṃ candramaṇḍalopari kṛṣṇamāmākārabijasam-
 bhūtā māmaki kṛṣṇavarnā kṛṣṇavajracihnābdhātusvabhāvā vajrakulā
 dveṣaraktā / asyā bijam /
 om āḥ mām hūṃ svāhā / iti /
 vāyavyāṃ candramaṇḍalopari pāmākārabijasambhūtā pāṇḍaravāsi-
 nī raktavarnā padmacihnā tejodhātusvarūpā padmakulā rāgaraktā /
 asyā bijam / om āḥ pām hūṃ svāhā / iti /

1) N_1 tatha 2) I citta 3) I so 4) I sagheyepi 5) I deśani 6) N_1 gubhe,
 N_2 I subhe 7) N_1 N_2 I prati 8) N_1 agneyakoṇa°, I asūryakāṇa° 9) Sh Y
 lom, I lā, Tib lam 10) Sh I °varṇa 11) Tib mig 12) Sh I pṛthvi° 13) I
 °rūpi 14) N_1 āsyā 15) Tib sa bon dan shags (16–16) Sh Y om āḥ lom
 hūṃ, I ā lā, Tib om āḥ lam hūṃ 17) N_1 N_2 I nairṛtyāṃ 18) N_2 mom, D
 mam, P lam 19) I sambhavā 20) Y Tib mam 21) Y inserts rakta 22)
 Tib pam 23) N_2 pāṇḍura° 24) Sh N_1 N_2 I insert raktā, Y inserts nāmikā,
 Tib gos dkar mo (D inserts can) shes bya baḥi miñ can 25) Sh °cihñate°
 I cihne 26) I om. pām, Tib pam
 →p. (133)

nirvāṇam ca bhavaś caiva dvayam etan na vidyate /
 pariñānam bhavyasyaiva nirvāṇam iti kathyate //

*Lindtner, *op. cit.* p. 174 では para° とあるが、ミスプリントであろう。

4) Sh , Y によれば、仏眼母の bija を lom とするが、写本 N_1 N_2 の lam, I の lā, Tib
 の lam により、仏眼母の bija を lam とした。また、前掲『梵字大鑑』における写
 真 10. (p. 416) の仏眼母の bija は、lam に見える。

同様にまた、

(3) そこにおいて、心は空悲不可分なるものと示されるものが、
 実に仏・法・僧の教えである。

(4) 砂糖においては甘さが、また火にとっては熱さが本質であるように、
 一切諸法にとって、空性が本質であると認められる。

同様にまた、

(5) 有（輪廻）を遍く知ることこそが、涅槃であると言われる。

東南の隅の花弁には、月輪の上に、白色の LĀM 字より生ずる白色の仏眼母
 が（住しており、）輪を幟幟とし、地界を本質とし、如来部族として生じ、愚癡
 に染着されている。その種字は、

オーン アーハ ラーン フーン スヴァーハー という。

南西には、月輪の上に、黒色の MĀM 字の種字より生ずる摩々枳が（住し
 ており、）黒色で、黒色の金剛杵を幟幟とし、水界を自性とし、金剛部族に属し、
 瞋恚に染着されている。その種字は、

オーン アーハ マーン フーン スヴァーハー という。

西北には、月輪の上に、（赤色の）PĀM 字の種字より生ずる白衣母が（住し
 ており、）赤色（の姿）をとり、蓮華を幟幟とし、火界を本質とし、蓮華部族に
 属し、貪欲に染着されている。その種字は、

オーン アーハ パーン フーン スヴァーハー という。

1) Cf. “Āryaḍākinivajrapañjaratantra” P No. 11, 289b7. この偈は前掲作品 ‘Pa-
 ŋcatathāgatamudrāvīmarāṇa’ においても第 21 偈として引用されている。(Sh p.
 26, 密教聖典研究会 (1988), p. (55)) 尚、別途に島田茂樹氏よりこの箇所のご指摘を
 受けたことを付記し、この場で謝意を表す。

2) Cf. “Bodhicittavivarāṇa” (v. 57) P No. 2665, 45b1-2; P. Patel, ‘Bodhicittaviva-
 raṇa’, “The Indian Historical Quarterly” vol. VIII, NO. 4, 1932, p. 790-793;
 ed. Chr. Lindtner, “Nagarjuniana”, Copenhagen, 1982, p. 180-203; do.,
 “Master of Wisdom, Writings of the Buddhist Master Nāgārjuna”, Oak-
 land, 1986, p. 248-255; 酒井眞典, 「菩提心離相論考」『成田山仏教研究所紀要』第 11
 号, 『仏教思想史論集』I, 1988, p. 116-121.

3) Cf. “Yuktiṣaṣṭikākārikā” (v. 6cd) P No. 5225, 22b8; 山口益『中観仏教論攷』,
 1975, p. 45-46; 瓜生津隆真訳『六十頌如理論』(大乘仏典 14, 龍樹論集) 1978, p. 25;
 Lindtner, *op. cit.* (1986), p. 74-5, p. 174, p. 260. この第 6 偈は次の如くである。

p. (132)→

aiśānyāṃ candramaṇḍalopari śyāmatāṃkārāpariṇatā tāriṇi śyāma-
varṇā nilotpalacihnā vāyudhātusvarūpā karmakulerśyāraktā / asyā
bijam /

om āḥ tām hūṃ svāhā /
etāś catarāḥ ṣoḍaśābdikāsādhāraṇarūpayauvanaśālinyo yathāśo-
bhasamsthita pūrvavat kāyacatuṣṭayātmikā manohlādinyaḥ sakalaji-
naguṇādhārābhūtāḥ pañcatathāgatasvarūpāḥ /
āsāṃ madhya ālisvabhāvā vajrasattvasvarūpiṇi vajradhātviśvari
nāyikā / iyam eva bhagavati tathatā śūnyatā prajñāpāramitā bhū-
takoṭir nairātmyeti vyapadiśyate /
na granthāḥ kṛtikauśalyam āpādayitum eṣa me /
prayatnāḥ kiṃ ca samkṣipyā bodhayeyaṃ śīśūn iti // 6 //
iti vidhivad udīrya sattvahetoḥ
sakalajināgamayuktisamgatam hi /
akhilam iha śubham samāptam
bhavatu tato jina eṣa vajrasattvaḥ // 7 //
iti
pañcākārah samāptaḥ //

1) I eśā° 2) Sh N₁ N₂ I inserts kanaka 3) I tā, P traṃ 4) N₁ N₂ I tāraṇa
5) Sh N₁ N₂ I insert śyāma 6) Sh °rṣā° 7) I tā, P traṃ 8) I ete 9) N₁
N₂ ṣotraśā° 10) I śobhana° 11) N₁ I jinā° 12) Tib rañ bshin du 13) N₁
I asyāṃ, N₂ asyā 14) N₁ nāyikāḥ, I nāyakāḥ (15—15) Tib om. 16) Sh °ko-
tinai°, N₂ nairāt° (17—17) Tib gshuñ ḥdi byas paḥi dge ba rtogs(D; gañ)
phyir ḥbad pa cuñ zad mdor bsdu slob mas rtogs byaḥi phyir / cho ga ḥdir
(D; ḥdi) ni bsdu pas sems can rnam la phan pa yun riñ du rgyal ba kun
gyi luñ dañ rigs pa bldan paḥi phyir / ma lus dge ba ḥdi ni bdag gi(D; gis)
thob pas ḥgro ba rnam ni rgyal gyur cig // 18) N₁ N₂ grantham kṛti°, I
grakṛti° 19) N₁ N₂ °śalam, I °śalas 20) N₁ I aṣa 21) I prayatraḥ 22) I
°āgamamayu° 23) I °sagatā ha 24) Sh Y om. iti

北東には、月輪の上に、暗緑色の TĀM 字より変じた多羅母が（住してお
り、）暗緑色で、青蓮華を幟幟とし、風界を本質とし、羯磨部族に属し、慳悋を
特徴としている。その種字は、

オーン アーハ ターン フーン スヴァーハー（である）。

これ等の四（瑜伽女）は、（いずれも）16歳であり、並みはずれた容姿と若
さを兼ね備えており、実に奇麗な姿をしている。前説のように四身を本性とし、
意を楽しませ、すべての勝者の功德が依持されており、五如来を本質としてい
るのである。

彼女等の中央には、母音を自性とし、金剛薩埵を本質とする主母、金剛界自
在女が（住して）いて、彼女こそ母尊、真如、空性、般若波羅蜜、真實際、無
我と称せられているのである。

(4) 私のこの著作は、著述の巧みさを得るために（著わしたの）ではない。
むしろ、（五如来の形相を）何とか要約して弟子達に理解させるために努力
して著わしたのである。

(7) このようなわけで（本著作は）、人々のために儀軌通りに著わされたので
ある。実に、すべての勝者の教えと道理を集めた善なるものが、ここに残
りなく得られた。この（著作）に基づき、人は勝者たる金剛薩埵となれよ
かし。

『五（如来）の形相』終わり。

（大塚伸夫）

1) これらの四瑜伽女の名称は GS (I, p. 5) や Māyājātantra (北京 No. 102, 62b8)
とも一致する。
2) Advayavajra の説く四瑜伽女と dhātu の対応関係は、GS のそれと一致する (GS,
XVII-51)。
3) 類富氏によれば、金剛界自在女は金剛薩埵の配偶妃としての意味を持つ者であるとさ
れる (Y, p. 152)。また他に、毘盧遮那の配偶妃という説もある (S. B. Dasgupta,
“An Introduction to Tantric Buddhism”, Calcutta, 1958, p. 87, B. Bhatta-
charya, “An Introduction to Buddhist Esoterism”, Varanasi, 1964, p. 136)。
(4—4) Tib では、この箇所が Skt. と多少異なっている。「その中心となす善を理解させ
るために、少分の努力で要約して、弟子が理解するために、長い間、諸の人々を利益
する方法が集められたことによって、すべての勝者の教えと道理が具足されるた
めに、残らずこの善が私によって得られた故に、諸の人々は勝者となれよかし。」

23. Amanasikārādhāra*

namo buddhāya.

amanasikāra ity atra bahavo vipratipannāḥ. tatra kaścid āha,
 “apaśabdo’yam” iti, samāse ³⁾manaskāra ⁴⁾iti bhavitum arhati. ta-
 trocyate, “tatpuruṣe kṛti bahulam” (Pāṇini 6, 3, 14) iti. atra ba-
 hulavacanāt saptamyā’lug iti, aluksamāse kṛte, amanasikāro ⁶⁾’mana-
 skāraḥ, tvacisāraḥ ⁸⁾tvaksāraḥ, yudhiṣṭhiraḥ, ⁹⁾etāni rūpāṇi sampad-
 yante. ato nāyam apaśabdaḥ.

apara āha, hanta lakṣaṇasādhitam evedaṃ vacaḥ kiñ cāsiddham.
 tan na, nānāsūtratantreṣu dṛṣṭatvāt. ¹¹⁾Āryasarvabuddhaviṣayāvatāra-
 jñānālokālāṅkāramahāyānasūtre, amanasikārā dharmāḥ kuśalāḥ, ma-
 nasikārā dharmā akusālāḥ. ¹²⁾tatraiva, ¹³⁾

avikalpitasaṅkalpa apratiṣṭhitamānasa /

asmṛtyamanasikāra nirālamba namo’stu te //

1) *Sh* itatra; *Tib* *zes* bya ba ‘di ni. 2) *Sh* tat; *N*₁ tata (?); *N*₂ tataḥ; *Tib* de la.
 3) *Tib* *P* bsdus pas; *D* sdug pa’i. 4) *Sh* manaskāra; *Tib* yid la mi byed pa.
 5) *N*₁ bhavatum. 6) *Sh* alukasamāse. 7) *Sh* ‘kāra ama°; *N*₁ *N*₂ ‘raḥ /. 8) *Sh* tvaci sārāḥ. 9) *N*₁ *N*₂ ‘ra. 10) *Tib* saṅs rgyas pa’i tshig (*P om.*) ma
 yin no. 11) *Sh* *N*₁ *N*₂ om. buddha. But *Tib* & *Chinese title read* buddha.
 12) *N*₁ ‘h. 13) *N*₁ illegible.

*このタイトルは *N*₁, *N*₂, *Sh* によったものであるが甚だ疑問である (密教聖典研究会 (1988)序文参照。なおDとPの末尾には共に “yid la mi byed pa ston pa bdag med pa gsal ba” とある。)。新しい写本が見つかる等によって確証を得るまで、この仮りのタイトルを立てておく。この小篇の内容は、以下に明らかになるように、“amanasikāra” (不作意) という言葉をめぐっての、文法的・教義的なさまざまな議論・解説である。語義解釈は段階的になされているようであり、最終的には密教的な解釈が結論される。

→p. (137)

- 6) 大正蔵 12 卷 No. 359 『仏説大乘入諸仏境界智光明莊嚴經』, Peking ed. No. 768.
 7) 典拠箇所不明。Advayavajrasaṅgraha 中, Caturmudrānīścaya にも引用される。本書 p. (102) 参照。また磯田前掲論文 p. 109 注 4) 参照。
 8) =大正蔵 12 卷 p. 262c2-3. Advayavajrasaṅgraha 中, Pañcatathāgatamudrāvarāṇa, Caturmudrānīścaya にも引用される。密教聖典研究会 (1988) p. (52) 及び本書 p. (102) 参照。

23. 不作意の依持

仏に帰命する。

「不作意」(amanasikāra) というこの〔語〕に関して、多くの人が誤解している。その中で、ある者は言う——「こ〔の語〕は〔文法上〕誤語である。」と。つまり、複合語としては amanaskāra [という語形] であるはずだ、というのである。〔しかし〕これに関しては、〔パーニニによって〕こういわれている——「格限定複合語 (tatpuruṣa) において、動詞第一次派生語の前でしばしば〔於格がその形で残される〕」と。この〔文〕の中で、「しばしば」なる語があるから、第七格 (於格) [の接尾辞] が [必ずしも] 落ちないのである。だから、格語尾が落ちない複合語 (alukasamāsa) ²⁾が作られた場合、amanasikāra は amanaskāra [と同じ] であり、tvacisāra は tvaksāra [と同じ] であり、yudhiṣṭhira ⁴⁾[なる語も同様で] ある。〔よって〕これらの形が成り立つ。だからこ〔の amanasikāra の語〕は誤語ではない。

他の者が言う——さてこの [amanasikāra なる] 語は [文法] 規則によって成立した [語] にすぎず、[我々によって] 認められる [語] ではない。

(答) そうではない。なぜなら様々な経典・タントラの中に [この語は] 見られるからである。『聖入諸仏境界智光明莊嚴經』⁶⁾に、

不作意の諸法は善であるが、作意の諸法は不善である、⁷⁾

〔と言われ、また〕この同じ〔経典〕に……

思惟が分別されず、無住処の意をもてるものよ、無思念無作意にして無所縁なるおかた、あなたに帰命しよう。⁸⁾

〔とも言われている〕。

- 1) =Pāṇinisūtra, 6, 3, 14 (O. Böhtlingk, Pāṇini's Grammatik, repr. -Kyoto, 1977).
 2) Cf. Pāṇinisūtra, 6, 3, 1-24; J. Wackernagel, “Altindische Grammatik” Bd. II -1 (Göttingen, 1957), §88 (p. 209-212).
 3) 「表皮において優れた」の意から「竹」の意となる。O. Böhtlingk 上掲書の 6, 3, 9 に対する注解参照。
 4) 「戦争において堅固なる」の意から人名となる。O. Böhtlingk 上掲書同箇所参照。
 5) チベット訳では「仏教の言葉ではない」(つまり、他学派の用語であるの意)。

tathā, Avikalpapra¹⁾veśadhāraṇyām, bodhisattvo mahāsattvaḥ²⁾ sarvavikalpanimittāny ākāragatikāny amanasikārataḥ parivarjayati. aparāparāṇi granthavistarabhayān na likhyante.

idānim aparam āha, sautrāntikam evedaṃ vacaḥ, na māntrikam, sūtrānteṣu dr̥ṣṭatvāt. tan na. uktaṃ hi Hevair⁵⁾ Tattvapaṭale⁶⁾ —svārūpeṇa na cittam nāpi cetasaṃ—, tathā, —bhāvya⁷⁾te hi jagat sarvaṃ manasā yasmān na bhāvya⁸⁾te—, arthād amanasikāreṇeti gamyate.

apara āha, tantre'py asti prasajyapratīṣedhasya naño viṣayatvād abhāvo vācyah. tan na. prakrāntasya pratīṣedhaḥ, nāprasajyaṃ pratīṣidhyata iti prasajyapratīṣedhaḥ. yathāsūryampaśyā rājadārāḥ, ayam arthaḥ evaṃ nāma tā guptā rājadārā yat sūryam api na paśyantīti. atra na sūryābhāvah kṛtaḥ. kin nāma rājadārāṇāṃ yat sūryadarśanaṃ prasajyaṃ tan niṣiddham. amanasikāre'pi nañā manasikaraṇaṃ yad grāhyagrāhakādī prasaktaṃ tan niṣiddham. na manaḥ. ato na doṣaḥ.

1) All °veśadhāra°. 2) N₁ °nimitāni. 3) All ākāśa°. N₂ °gatikādini; Tib snañ ba la rtogs (D rtog) pa. 4) Tib mdo sde (P ste) gzan dañ gzan gyi gzuñ mañs kyis dgos (or P dogs) pas 'dir ma bris so. 5) N₁ āhā. 6) Sh sāntikam; N₁ māntikam; Tib śnags kyī..... 7) Tib mdo sde rnam las. 8) Tib om. tattvapaṭale. 9) All °nte; but HV reads bhāvya¹⁰⁾te. 10) Sh ya (smā)n (meter!); Tib gañ phyir; N₁ N₂ yasmāt. 11) N₁ inserts na yathā tathā. 12) All paraprāsajyapratīṣedhanaño; Tib med pa dgag pa ni med pa'i yul yin pa'i phyir ro / dños po' med par brjod par bya'o / de ni ma yin te / yod pa'i dños po'i dgag pa ni med par dgag pa'o // yañ na thal pa med pa'i thal par 'gyur ba 'gog pa'o źes pa ni med pa dgag pa'o // 13) N₁ prakāk.....sya (?). 14) All insert yadi. 15) Tib 'di lta bu mi min zer źes pa yañ is not clear to us. 16) Tib inserts bkag pas (P pa'i). Cf. n. 19 below. 17) N₁ krta. 18) N₁ tān. 19) N₁ nañe?; Sh N₂ naño; Tib om. Cf. n. 16 above.

→p. (139) 注2) つづき

- する蓮華戒の注釈について, cf. L. O. Gomez, "Indian Materials on the Doctrine of Sudden Enlightenment" (Berkeley Buddhist Studies Series 5; "Early Ch'an in China and Tibet", 1983, p. 393-434).
- 3) この sautrāntika なる語 (形容詞, 単数!) は, māntrika に対する語であるから, いわゆる経量部ではないであろう。Tib は, mdo sde pa'i.
- 4) =HV I-v-1: svarūpeṇa.....na cittam nāpi caittikam; I-viii-44: bhāvya¹⁰⁾te hi jagat sarvaṃ manasā yasmān na bhāvya⁸⁾te.
- 5) Cf. YRM, p. 128, 18: manaseti vikalpajñānena yadi na vikalpyante.
- 6) Cf. Ueyama, et al., op. cit., p. 35-37.
- 7) チベット訳参照。

同じく『入無分別総持経』に, 菩薩摩訶薩は, 顕現の状態にある一切分別相を不作意によって排斥する [と云われる]。他の一々の [經典] については, [この] 小編が広大になる恐れから, [これ以上ここでは] 述べない。

この時, さらに [この者は] 言う——この [amanasikāra なる] 語は經典の [言葉] (sautrāntika) であって, 真言的な [言葉] (māntrika) ではなからう。なぜなら, 經典群に [のみこの語が] 見られるから。

(答) そうではない。というのは『ヘーヴァジュラ・タントラ』真実品に [次のように] 言われている——本性としては心はなく, 心所もない。—— [と], 同様に——意によって瞑想されるのではないので, 一切世間が瞑想される—— [と]。[この二つの文は] 意味からいって [「作意がない」 また] 「不作意によって [瞑想される]」 と理解される。

他の者が言う——タントラに [この語が] あるとしても, 「命題否定」が否定辞 (「不」) の対象であるから, [「不作意」の語によっては, 意の単なる] 無存在が示されている。

(答) そうではない。問題となる [命題] (例えば, 作意 manasikāra) の否定が [命題否定] であり, 命題でないものが否定されるというのは「命題否定」ではない。たとえば, 王妃達が asūryampaśyā (Lit. 非日見「太陽を見ない人」) [と呼ばれる] のは, 王妃達は [内室に] 引っ込んでいて太陽をも見ることがない, という意味である。この [asūryampaśyā なる語の内の否定辞 a (=不) によって], 太陽の無が [意味] されているのではない。そうではなく, 王妃達が太陽を見ること = 命題 (prasajya), これが否定されるのである。不作意 [の語] においても, 否定辞 a (=不) によって, 所取能取等の作意 = 当該のもの (prasakta), これが否定されるのである。意 [が否定されるの] ではない。従って, 誤りはない。

- 1) 大正蔵 15 No. 654, Peking ed. No. 810. 大正蔵では経名を「入無分別法門経」というが, D. Ueyama & K. W. Eastmann & J. L. Broughton, "The Avikalpa-praveśa-dhāraṇi: The Dhāraṇi of Entering Non-Discrimination" (龍谷大学仏教文化研究所紀要, 22, 1983) p. 34 に従い, 敦煌本同経の経名を採用。
- 2) Cf. 松田和信 [Nirvikalpa-praveśa-dhāraṇi について] (仏教学セミナー, 34, 1981) p. 47, 17-18 ("bodhisattvo mahāsattvaḥ sarvākāra-vikalpa-nimittāny amanasikārataḥ parivarjayan"); Ueyama, et al., op. cit., p. 39, 14-15 (「菩薩摩訶薩。於如是等諸分別想。由不作意。而能捨之。」); チベット訳 (P. No. 810) 3b1-2 ("byañ chub sems dpa' sems dpa' chen po rnam par rtog pa'i mtshan ma'i rnam pa tham cad yid la mi byed pas yoñs su spoñ ba na"). 大正蔵 No. 654 にはこのように一致する箇所は見出せない。また『入無分別総持経』に対 p. (138)→

yadā kaścid evaṃ vadati, śāśvatocchedalakṣaṇo manasikārah¹⁾
sammato bhagavatā, tadocyate śāśvatocchedādīmanasikārāmanasikā-²⁾
rah³⁾. etena sarvāsaṅgahāniḥ kriyate 'manasikārasabdeneti.⁴⁾

tathā cokatṃ bhagavatāvikalpapraveśadhāraṇyām, "kena kāraṇe-⁵⁾
na kulaputrāvikalpadhātur amanasikāra⁶⁾ ity ucyate, sarvavikalpani-⁷⁾
mittasamatikrāntatām upādāye'ti. etena sarvavikalpasamatikrāmatā⁸⁾
darśitā bhavaty amanasikārasabdeneti.

paryudāsapakṣe 'pi na doṣaḥ. "abrāhmaṇam ānaye'ty ukte
brāhmaṇasadrśasya kṣatriyāder ānayanam bhavati, na tu vijātyasya
kaṭādeḥ. atrāpi niḥsvabhāvavedanasya samsthitih⁹⁾ kṛtā. etena māyo-¹⁰⁾
pamādvayavādasthito bhavet. kuta ucchedavādaprasaṅga iti.¹¹⁾

yadi vātra naño [tha sñad tsam ste, tshig 'di ni gñis brjod
par bya'o. sgyu ma'am yañ dag par grub pa med pas yod pa
'gegs pa ni ma yin te, de med pa yañ ma yin no. rigs pa 'di yis¹²⁾
'gro ba 'gegs pa'i don ni ñams par 'gyur.]¹³⁾ (14-¹⁴⁾

1) *N₁ om. si; Sh N₂ na[si]kā; D yid la mi byed pa.* 2) *N₁ N₂ °nto; Tib sñam sems na.* 3) *Tib om. bhagavatā.* 4) *Sh °ādiḥ manasikāro(°rā N₁ N₂) vā 'manasi°; N₁ N₂ °kārāvā'manasi°; Tib.....la sogs par yid la byed pa yid la mi byed na.* 5) *All °veśādhāra°.* 6) *D yid la byed pa.* 7) *All etc. Tib de dag gis ni.* 8) *D yid la byed pa'i sgra yis so.* 9) *or śakaṭā°? (Tib śiñ rta mkhan); N₁ N₂ kathā°.* 10) *N₁ °tāḥ; Sh N₂ °tā(h).* 11) *Sh °vāda(h) sthito.* 12) *Sh cātra.* 13) *N₁ naño.* 14) *All om. Only Tib reads.* 15) *P par.* 16) *P rig.* →p. (141)

2) Cf. 松田上掲論文 p.47, 21-22 ("kena kāraṇenāvikalpa-dhātur avikalpa ity ucyate / sarva-vikalpa-nirūpaṇa-samatikrāntatām upādāya /"); Ueyama, et al., op. cit., p. 39, 17-18 (「何故无分別界。名无分別耶。越(=超)過一切尋思想故。」); チベット訳 (P. No. 810) 3b4-5 ("ci'i phyir rnam par mi rtog pa'i dbyiñs la rnam par mi rtog pa zes bya ze na, dpyod pa'i rnam par brtag pa thams cad las śin du 'das pa....."); 大正蔵 No. 654, p. 806a2-3 (「善男子, 所言无分別界者以何義故名无分別界, 謂於一切色過諸分別。」)。

3) 上注2所引の典拠の伝承によると, ここは「不作意」ではなく「無分別」(大正蔵本のみは「無分別界」)である。
4) *Tib (śiñ rta mkhan)* によると「戦車造りの人」か?
5) この語に関しては, 宇井伯寿「Advayavajra Tattvaratnāvali」(「大乘仏典の研究」, 再版 1979) 中観派の項, また密教聖典研究会 (1988) p. (50) など参照。

ある者が, 作意とは常〔見〕・断〔見〕とを相とすると世尊によって承認されている, と, このように言う場合, [次のように我々は] 答える——[そのように] 常〔見〕・断〔見〕等〔を作意であるなどとする〕作意をも作意しないのが〔不作意である〕¹⁾。だから「不作意」の語によって, 一切の執着が断ぜられることが意味される。

同様のことが世尊によって『入無分別総持経』で言われている——「善男子よ, どうして無分別界を「不作意」と言うのか, というと, [それは, 不作意は] 一切の分別相を遠離したこと〔の意味〕であることを斟酌してである」と。だから, 「不作意」の語によって一切分別の遠離が示されている, と [いえる]。

[また, 不作意の語が] 否定による肯定 (paryudāsa) であるとする場合でも, [我々に] 過誤はない。すなわち, 「バラモンでない人を連れてこい」と言われた時, [否定による肯定 (paryudāsa) を示しているこの言葉によって] バラモンに似た武士等を連れてくることが意味されており, [バラモンとは] 程遠い⁴⁾ 草等を [持つてくることは意味され] ない。[これと同様に] この〔不作意の語〕においても, [関係のない断見等ではなく] 無自性の認識の肯定が意味されている。従って, [不作意の語によって人は] 必ず幻喩不二論⁵⁾ に住するのである。どうして断〔見〕論に陥ることがあろうか, と [いえる]。

あるいはまたこの〔不作意の語のうちの〕「不」は一般的な用法 (vyavahāra) の〔否定の意味〕にすぎない, というなら, [我々は] この語 (=不) には二種の〔否定の意味〕があると答えよう。つまり, [一つには一般的な意味の否定], そして [二つには] 幻〔の如く〕完全に存するわけではないが存在が〔全く〕無ではないもの〔, の二つである〕。〔後者〕は〔全くの〕無なのではない。以上の道理によって世間の人々は [不作意の語において] 否定の意味は弱めるのである。

1) あるいは他の variant も考慮して, "śāśvatocchedādīmanasikāro vā manasikārah" と読んで, 「あるいは, 作意とは常〔見〕・断〔見〕等〔を相とすると考える〕作意のことである」と解することも可能かと思われる。

vyutpattir atra kriyate.¹⁾ akārapradhāno 'manasikārah. śākapār-
thivavat madhyapadalopī samāsaḥ. etena yāvān manasikārah sar-
vam anutpādātmakam ity arthaḥ. kva nirdiṣṭaṃ bhagavatānutpāda-
kāra²⁾ kō 'kāra iti. tad yathoktaṃ ca Hevajre mantrapāṭale, "akāro
mukhaṃ sarvadharmānām ādyanutpannatvād"³⁾ ity ādi. asyārthaḥ:
sarvadharmānām ādyanutpannatvād akāro mukhaṃ pradhānam iti.
akāra ity anutpannalakṣaṇayogaḥ.⁴⁾

tathā ca Nāmasaṅgītau—

"akārah sarvavarṇāgro mahārthaḥ paramākṣaraḥ /
mahāprāṇo hy anutpādo vāgudāhārarjitaḥ //"⁵⁾ iti.

yadi vā, akāro 'tra nairātmyābijam, tathā ca Hevajre, "āler ādi
nairātmye"⁶⁾ ti. etena sarvamanasikāro 'nātmako 'svabhāva ity uk-
taṃ ca bhavati.

yadi vā,

ādisvarasvabhāvā sā dhiti buddhaiḥ prakalpitā /
saiva bhagavatī prajñā utpannakramayogataḥ //

yadi vā, a iti prabhāsvarapadaṃ, manasikāra ity svādhiṣṭhāna-
padaṃ aś cāsau manasikāras cety amanasikārah. etenāmanasikāra-
dipadair acintyaprabhāsvarasvādhiṣṭhānapadaṃ sūnyatākaraṇabhinnā-
yuganaddhāvayavāhisamvedanam āpāditaṃ bhavatīti.⁷⁾

amanasikārādhārah samāptaḥ.⁸⁾

1) Tib 'dir brjod pa tsaṃ byas pa'o. 2) Tib lo ma'i rgyal po. 3) N₂ madh-
yama°. 4) N₁ masikārah. 5) All °ka. 6) N₁ illegible. 7) Sh ādyanupanna°. 8) N₁ N₂ mukha. 9) Sh akāras tv anutpanna°; N₁ N₂ akārah tyayanu° (N₂
suggests pratyanu°); Tib a śes ma kyes pa'i. 10) Sh °ṇaḥ yo 'grah; N₁ °ṇa
yo 'gra; N₂ °ṇayāgre. But Tib reads sbyar ro. 11) N₁ akāra. 12) °āgrya
(Wayman ed.). 13) Tib khoṅ nas 'byuñ ba. 14) All insert nerādi (Tib om.). 15) Tib a li dañ po ni bdag med ma'o. 16) Tib śes rab brtags. 17) Tib
rdsogs pa'i.....ñid. 18) Tib yid la mi byed pa'i gnas. 19) Tib bdag ñid
(against padam). 20) N₁ °ta. 21) Tib yid la mi byed pa ston pa bdag med
pa gsal ba rdsogs so.

→p. (143) 1963, p.19-20 (v. 28cd-29ab); A. Wayman (ed. & tr.), "Chanting
the Names of Mañjuśrī: The Nāmasaṅgīti, Sanskrit and Tibetan Texts",
Boston and London, 1985, V-v.1cd; 2ab.

5) HV II-iv-20: "āler ādi Nairātmyā Vajrāler dvitīyakam /....."

6) =HV II-iv-41.

この「[不作業]なる語」について[次に]語源解釈がなされる——「不作業」
(amanasikāra)は「不」(“a”)の語を第一構成要素とする[言葉であり]、「野
菜[を好む]王」[の語]のように、中間の語句が省略された複合語である。従
って「一切[事物]は不生を本性とする」と作業するのが[不作業の]内容である。

(問)世尊はどこで、「不」(“a”)の語が「不生」の語であると、説いている
のか? (答)それは次のごとく『ヘーヴァジュラ・タントラ』真実品に説か
れている——「『不』(“a”)の語は、一切諸法の根本(mukha)である。なぜ
なら[一切諸法は]初めより不生であるから」等と。この[引用句の]意味はこ
うである——一切諸法が初めから不生であるから「不」(“a”)の語は門である、
すなわち根源である——つまり、「不」(“a”)の語は、不生の意味で使われ
ている。[不作業はa字本不生を觀ずることである。]

同様に『ナーマサンギーティ』に言われる——

「“a”の語は、一切の音の中で最上であり、偉大な意味を持ち、
最高の音節である。偉大な呼吸であり、不生であり、言葉で語ら
れることは否定される」と。

あるいは「不」(“a”)の語は、ここではナイラートムヤー女尊の種字である。
『ヘーヴァジュラ[タントラ]』にこのように言われる——「母音の最初[の種
字すなわちa]はナイラートムヤー女尊である」と。だから、作業はすべて無
我・無自性のことである、という意味である。

あるいはまた『ヘーヴァジュラ・タントラ』に言われる)

初めの音(=a)を本性とする彼女(=ナイラートムヤー女
尊)は知である、と仏によって思惟された。彼女だけが尊く、般
若(母)であり、究竟次第の実践により[知られる]。

あるいはまた、[不作業の語は]「不」(“a”)というのが清浄の境地(pada)
であり、「作業」というのが自己加持の境地である。そして、不(a)であり作
意である、というのが、不作業[の語]である。だから不・作業等の境地によ
って、不可思議なる光明・自己加持の境地、すなわち空性と慈悲との不可分・
雙運不二の認識が、生じる。

不作業の依持、終わる。

(矢板秀臣)

- 1) 以下の内容から察するに、「不作業」とは「不生作業」(一切は不生であるとの作業)と
いうことであろう(「生」の字が省略された)。
- 2) Tib ("thams cad ni a ste skye ba med pa'i don to")では、「一切はaである、
即ち不生である」である。
- 3) HV I-ii-1: "om akāro mukhaṃ sarvadharmānām ādyanutpannatvāt om āh
hūm phaṭ svāhā". 密教聖典研究会(1988)p.(30)に同文がある。
- 4) Cf. D. D. Mukkerji(ed.) "Āryamañjuśrīnāmasaṅgīti", Calcutta, p.(142)→

24. Sahajaṣaṭka

(Sh p.62, l.18) śāsvatocchedanirmuktaṃ tattvaṃ saugatasammatam /
 prakṛtyājātadharmeṣu vidhyapohau paśor vacaḥ // 1 //
 astīti vadato brūmo nāsti sarvaṃ vicārataḥ /
 nāstīti vadaṭo brūmaḥ sarvaṃ asty avicārataḥ // 2 //
 yathā yathā samāropā jāyante tattvayogināḥ /
 tathā tathā samāropā hanyante tattvayoginā // 3 //
 (Sh p.63) sahaḥo 'kṛtrimo yasmāt tasmāt saṅgo na sāhajaḥ /
 sukhaṃ na sahaḥād anyat sukhaṃ cāsaṅgalakṣaṇam // 4 //
 jñātvā niḥsaṅgatātmānaṃ niveśāgatasatsukham /
 viśvaṃ svasamayaṃ kṛtvā magnaḥ sahasāgare // 5 //
 mantratattvashīto yogī niḥsaṅgārthapraṭiṣṭhitaḥ /
 bhavāṃś cāsau gurūn kṛtvā niḥsaṅgaviśayo bhavet // 6 //

// kṛtir iyaṃ paṇḍitāvadhūtaśrīmadadvajavajrapādānām iti //
 // sahaḥaṣaṭkāḥ samāptāḥ //

1) Sh °da[mityukam ta]ttvaṃ, N₁ °dani[illegible]tvaṃ, N₂ °danirmu(ka)tvaṃ, Tib nes grol ba de nid 2) Tib rañ bzin las skyes 3) N₂ vidhāyādaḥ 4) N₁ °rvvastyavi° 5) Tib rnam par dpyad na 6) N₁ sahañjo, N₂ omits, Tib lhan cig skyes. 7) N₁ N₂ omit tasmāt. Tib gañ phyir..... de phyir 8) N₂ khañca saṅga°, Tib dog pa med mtshan nid 9) N₁ °ṇaḥ 10) Sh reads his ms. nisaṅgatāmanāmnī vedhāgata, and corrects it into niḥsaṅgatāmanāmnī [ni]rbedhāgata°, N₁ nisaṅgatāmanāmnīvesa(?)gata°, N₂ niḥsaṅgatāmanāmnī vaidhāgata°, Tib dogs pa med pa'i bdag // dbyer med rtogs pa 11) N₁ susamayaṃ, Tib rañ rig rtogs 12) N₁ °gna, N₂ °gnaṃ 13) N₁ N₂ °rthaḥ pra°, Tib dogs med don la rab tu gnas 14) Sh bhāvāṃś cāsau, N₁ illegible, N₂ gavāṃścāsau, Tib srid pa yañ 'di 15) Sh reads his ms. nisaṅgovisāyāmbhavet, N₁ nisaṅgaviśayāmbhavet, N₂ niḥsaṅgo viśayāmbhavet(yānsamstaret, Tib dogs pa med pa'i yul gyis ston 16) Sh samāpto 'yaṃ granthaḥ, N₁ N₂ sahaḥa only (the end of fol. 38b of N₁, and N₁ missing the following folios). Tib gives the Skt. and Tibetan titles in the beginning as sa ha dza ṣaṭ ka and lhan cig skyes pa drug pa respectively.

24. 俱生についての六頌

- 1) 真実¹⁾は常断〔の見〕を離れたものである、と善逝〔も〕承認している。本質上不生である諸存在について、肯定とか捨斥とか〔言うの〕は、獸〔の如き輩〕のことでばである。
- 2) 「実在する」と説く者には、微細に観察すればあらゆるものは実在しない、と我々は言う。「実在しない」と説く者には、微細な観察をはなれば、あらゆるものは実在する、と我々は言う。
- 3) 真実〔を知る〕瑜伽行者には、実在しないものについて実在するという考えが生じるのと同じ様に、真実〔を知る〕瑜伽行者は、実在しないものについて実在とする考えを捨て去る。
- 4) 俱生とは作られたものではないので、執着は生得的なものではない。楽は俱生とは別のものではない。そして〔その故に〕楽は無執着を特質としている。
- 5) 無執着²⁾を本体としていると〔自分の身体に〕入り来たった³⁾正しい楽を知り、あらゆるものを自らの象徴⁴⁾と考えて、〔瑜伽行者は〕俱生の大海に沈む。
- 6) マントラの真実²⁾に住する瑜伽行者は、執着のない対象に依止する。そして彼は、もろもろの輪廻的な存在を師となして、無執着を〔行動の〕領域とする者となるだろう。

本〔書〕は、教師・〔脈管〕アヴァドゥーティー〔の実践に通達した者〕・吉祥アドヴァヤヴァジュラ上足の御著作である。『俱生についての六〔頌〕』終り。
 (野口圭也)

- 1) Tib によれば、「本質上生じたものである」。
- 2) ここで Skt. “saṅga” に対する Tib の訳語は “dog pa” あるいは “dogs” “dogs pa” である。これは Skt. “śaṅkā” 「疑惑」の訳か？
- 3) Sh によれば、「無執着であるということを名称の点で洞察するようになった(?)」、Tib によれば、「無執着を本体とし不可分であると理解された」。
- 4) Tib によれば、「自ら知るべきもの」。
- 5) Sh は、偈頌の数を題名中に挙げる著作の題名の gender を No.20 *Madhyakaṣaṭka*, No.22 *Tattvadaśaka* は男性とする一方、No.17 *Tattvavimśikā*, No.18 *Maḥāyānavimśikā* では女性、No.19 *Nirbedhapañcaka*, No.21 *Premapañcaka* は中性としている。

アドヴァヤヴァジュラ著作集

——梵文テキスト・和訳(3)——

THE ADVAYAVAJRASAMGRAHA
— New Critical Edition with Japanese Translation —
Part III

: Annual of the Institute for Comprehensive Studies of Buddhism
Taisho University, No.12.
March 1990.

密教聖典研究会

アドヴァヤヴァジュラ著作集

——梵文テキスト・和訳(3)——

密教聖典研究会

前年度に引き続き今回は、大塚伸夫の担当による 11. “Māyanirukti”, 木村秀明の担当による 15. “Yuganaddhaprakāśa” および 16. “Mahāsukhaprakāśa”, 高橋尚夫の担当による 17. “Tattvaviṣṭikā” および 18. “Mahāyānaviṣṭikā”, 矢板秀臣の担当による 21. “Premapañcaka” を収める。

以下に、引用・関連・参照文献の略号を補足する。

密教聖典研究会(1988): 「アドヴァヤヴァジュラ著作集—梵文テキスト・和訳(1)—」『大正大学総合佛教研究所年報』第10号, 1988。

密教聖典研究会(1989): 「アドヴァヤヴァジュラ著作集—梵文テキスト・和訳(2)—」『大正大学総合佛教研究所年報』第11号, 1989。

Mimaki (1986): 御牧克己, *The Tattvaratnāvali of Advayavajra* (Tibetan Text), 梶山雄一・御牧克己編『経量部 (Sautrāntika) 研究』京都, 1986, pp. 1~20。

Guenther (1969): H. V. Guenther, *Yuganaddha The Tantric View of Life*, Varanasi, 1969.

梅尾祥雲: 梅尾祥雲『理趣経の研究』

それぞれの内容, または使用写本の略号等については, 密教聖典研究会(1988), 及び密教聖典研究会(1989) を参照せられたい。

なお, このたび木村が担当した 16. “Mahāsukhaprakāśa” の北京版 (124 b8~126a2), 同ナルタン版 (Mi 21b1~22b1) の中に, 5. “Tattvaratnāvali” の一節が混入しているのを木村が見出した。この一節は御牧氏上掲テキストに

において、北京版、ナルタン版には欠文とされた部分 (Mimaki (1986) p. 1, l. 20~p. 4, l. 10) に相当する。

最後に、平成元年度の研究会参加者を記す。本研究会では、前回と同様に、各担当者が作成した梵文テキスト・和訳に対して参加者全員で検討を加えた。

指 導：斎藤光純専任講師

研究代表者：大塚伸夫

参加者：木村秀明，白石凌海，鈴木晃信，高橋尚夫，野口圭也，前田崇，
森口光俊，矢板秀臣

(序文担当：大塚伸夫)

作品 No.

11. 大塚伸夫：Māyānirukti p. (52)~(55)
15. 木村秀明：Yuganaddhaprakāśa p. (56)~(59)
16. 同 : Mahāsukhaprakāśa p. (60)~(65)
17. 高橋尚夫：Tattvaviṃśikā p. (66)~(73)
18. 同 : Mahāyanaviṃśikā p. (74)~(79)
21. 矢板秀臣：Premapañcaka p. (80)~(83)

11. Māyānirukti

[Sh p. 44] namo buddhāya ¹⁾ //
 māyeva niḥsvabhāvaṃ ced jagad adhyakṣato budhāḥ /
 kimartham iha muhyanti jānanto ²⁾ 'pi sukhāśayāḥ ³⁾ // 1 //
 māyāvī kurute māyāṃ ⁴⁾ jvaladāgārabhāsvarām /
 kasya cit satyam ābhāti māyā māyaiva tadvidah // 2 //
 māyātuṣṭer ⁵⁾ vinābhogaṃ ye kāmāḥ ⁶⁾ svayam āgatāḥ /
 māyayā tān asau bhūṅkte yad māyā sarvasaṃgatā // 3 //
⁷⁾ alikatām ṛte hanta māyāyāṃ śāśvataṃ vada /
 dharmadhātor ajātatvād na cocchedaḥ prasajyate // 4 //
 dharme 'jātānirodhe vai jaḍatvaṃ nānugacchati ⁸⁾ /
 śūnyato jāyate dharmas tasmād anyā na dharmatā // 5 //
 ata eva hi sārvañīyaṃ buddhasya na vihanyate /
 anāropavaśāt sarvaṃ dharmacakraṃ pravartate // 6 // ⁹⁾

- 1) Sh N₁ N₂ I namaḥ sarvavide, Tib ḥjam dpal gshon nur gyur pa la phyag ḥtshal lo. 2) Sh °kṣa[m] bu°, N₁ I °kṣabu°, N₂ °kṣa-bu° 3) N₁ muhyati, I suhati, Tib grol ma byas 4) Sh °nanto(na) 'pi, N₁ °nananto pi, I °nantajo pi 5) Sh °khāsu yā, N₁ N₂ °khāsuyāḥ, I °khāsayo, T °khāśayā 6) N₂ I māyāvā 7) Sh N₁ N₂ °dākāra°, I °yākāra°, Tib khyim ni 8) N₁ I °raṃ, N₂ °ram 9) N₁ I °tuṣṭar, N₂ °tuṣṭam, T °draṣṭur, Tib mthoñ bas 10) N₁ I kāmāsva°, N₂ kāmāṃ sva° 11) N₁ I °taḥ, N₂ °taḥ(ā) 12) Sh N₁ N₂ I omit. Tib khyod kyis brdsun par ma rtogs par // sgyu ma rtag par smra bar gyis // chos dbyiñs ma skyes pa yi(P pi ḥa) phyir // chad par thal bar mi ḥgyur ro // chos rnamas ma skyes mi ḥgag(P ḥgog) phyir // bems por gyur pa ma yin no // 13) T dharmam 14) N₁ N₂ I sārvañīyaṃ, T sarvañīyaṃ 15) N₁ N₂ I anyaropa°

11. 幻 解 説

仏陀に帰命し奉る。¹⁾

- (1) 世間が幻化の如く無自性であるならば、安樂を願う知者達が観察に基づいて [そのことを] 知っていながら、この世において何のために思い惑うのか。²⁾
- (2) 幻術師は燃え上がる家の光景の幻を顕わす。ある者にとっては、[その] 幻が真実として見えるが、³⁾ それ [が幻である] と知る者には、[ただの] 幻に過ぎない。³⁾
- (3) 努めることなく幻に満足することから自ずと生ずる諸の愛欲、⁴⁾ それ等 [諸の愛欲] をかの者が幻として享受するのである。[何故ならば、] 幻は一切に行きわたるもの故に。⁵⁾
- (4) 汝は [幻が] 虚偽たることを忘れて、何と幻について常と説くことよ。⁶⁾ 法界は不生である故に、断見にもまた陥ることはない。
- (5) [諸] 法が不生不滅であることについて、迷妄さに陥ることはない。⁷⁾ [諸] 法は空なるものより生ずるのであって、法性はそれ以外のものではない。
- (6) それ故にこそ、⁸⁾ 仏陀の一切知者性は [何ものからも] 妨げられない、[仏陀の一切智は] 増益することがない故に、普く法輪を転ずるのである。

- 1) Tib 「文殊師利童子に帰命し奉る。」
 2) Tib 「賢者が安樂の意を以て、この世間をどうして度脱せられなかったのか (mkhas pas bde baḥi bsam pa yis // ḥgro ḥdi ci phyir grol ma byas //)。」
 3) Tib 「賢者は [それを] 幻術師の如く知るのである (sgyu ma mkhan bshin mkhas pas rig //)。」
 4) T によれば、「幻を見るものに」とされ、Tib もそれを支持するが、ここでは Sh に従った。
 5) Tib 「それ [等の愛欲] をすべて幻化とすべし。[何故ならば、] すべてを幻と知る故に (ḥdi la thams cad sgyu ma spyod // gañ kun sgyu mar rtogs paḥi phyir //)。」
 6) Tib 「汝は偽りとは知らずに、幻を常とお説き下さい。」を参照。
 7) Tib; 'chos rnamas' による。
 8) Tib 「一切智により、仏陀は毀損なさることがない (kun mkhyen gyis // sañs rgyas ñams par mi mdsad do //)。」

pādaprasārikā¹⁾ tyaktvā²⁾ kṣiptvā³⁾ mānādikalpanām⁴⁾ /
 caryayā⁵⁾ vicared yogī⁶⁾ susthito⁷⁾ 'sthānayogataḥ⁸⁾ // 7 //
 khānapānaraśaṃ⁹⁾ prāpya¹⁰⁾ śuddham^{11...} udghuṣya^{12...} bhāṣayā¹³⁾ /
 caryām¹⁴⁾ nā vicared yas tu nāsau¹⁵⁾ sambodhibhājanāḥ¹⁶⁾ // 8 //
 vācā¹⁷⁾ vakti janas¹⁸⁾ tattvaṃ¹⁹⁾ caryām²⁰⁾ apy²¹⁾ anumodate /
 vittyanuṣṭhānasampattyā²²⁾ sampanno²³⁾ durlabho²⁴⁾ janaḥ²⁵⁾ // 9 //
 mahī śayyā²⁶⁾ diśo²⁷⁾ vāso²⁸⁾ bhikṣābhaktaṃ²⁹⁾ ca³⁰⁾ bhojanam /
 ajātadharmatākṣāntiḥ³¹⁾ kṛpānābhogavāhini³²⁾ // 10 //
 janaṃ³³⁾ jayanti³⁴⁾ ye dharmā³⁵⁾ jiyante³⁶⁾ te 'pi³⁷⁾ caryayā /
 etat³⁸⁾ phalam³⁹⁾ ihādhyakṣam⁴⁰⁾ āstām⁴¹⁾ tāvad⁴²⁾ anuttaram⁴³⁾ // 11 //
 māyām⁴⁴⁾ vivṛtya⁴⁵⁾ yat⁴⁶⁾ puṇyaṃ⁴⁷⁾ sulabdham⁴⁸⁾ sādhu⁴⁹⁾ cetasā /
 tenādvaitapadaṃ⁵⁰⁾ yāntu⁵¹⁾ lokā⁵²⁾ lokottare⁵³⁾ sthitāḥ⁵⁴⁾ // 12 //
 // māyāniruktiḥ⁵⁵⁾ samāptā⁵⁶⁾ //

- 1) N_1 I °kā, N_2 °Kā(ṃ) 2) N_2 tyantkā, T tyaktā 3) I mādi°
 4) N_2 °nam 5) Tib chos la 6) Sh °taḥ sthā° 7) I yāpā 8) N_1 N_2
 udghuṣma, I udyasma, T udghuṣya 9) I °yo 10) T caryānta
 11) Tib rdsogs paḥi byañ chub spyod 12) T janams 13) N_1 tatvaḥ,
 I tatva 14) Sh N_1 N_2 vallabho, I va 'trabho 15) I vāsā 16) I °ktaca°
 17) N_1 khyāntiḥ, N_2 khyā(kṣā)ntiḥ, I khyātiḥ, Tib bzod pa 18) Sh janajan-
 mani (ja) ye, N_1 janajanmanijaye, N_2 janajanmani ye, I janajananijaye, T janañ
 janayanti ye, Tib chos gañ skye bo las rgyal ba 19) Sh N_2 jāyante,
 N_1 I jivante, Tib rgyal ba 20) Sh ihāpya[sti] kṣamā tā(stā)vad, N_1 N_2
 ihādhyakṣamāstāvad, I ihodhyakṣyasāstāvad, T ihādhyakṣamāstātāvad
 21) Sh anuttarā, N_1 anu (illegible)rām, N_2 anu u-rām, I anutarām
 22) N_1 I T māyāvi°, N_2 māyā(ṃ) vi° 23) T yātu 24) N_1 I omit lokā.
 N_2 (lokā), T loko, Tib ḥjig rten gyis 25) I °resadāsthi°
 26) Sh N_1 N_2 I insert iti.

- (7) 足を伸ばしている〔女性〕を捨て、我慢等の妄分別を投げ捨てて、場所に
 こだわることなく安住した瑜伽行者は行を行はずべし。¹⁾
 (8) 食物と飲物の味を得て、清らかなことを言葉で叫んでも、然しながら、行
 を行じようとするものは、菩提の器²⁾ではない。
 (9) 真実を言葉で語る人は行をも喜ぶが、知と行の完成を備えた人は得難い。
 (10) 〔瑜伽行者にとって〕大地が寢床であり、〔あらゆる〕方位(空間)が衣服
 であり、与えられた施食が食物である。無生法忍は悲愍と無功用とをもたら
 す。
 (11) 人を支配する諸法もまた、行によって支配される。³⁾その結果がこの世にお
 いて見られるが、その限り、〔それが〕無上〔な結果〕であることは言を俟た
 ない。³⁾
 (12) 幻について説き示して、善意〔ある私〕によって福德が正しく得られた。
 この〔福德〕によって世間のものは出世間に住して、不二なる位に至れよか
 し。

『幻解説』終わり

(大塚伸夫)

- 1) Tib 「法を行はずべし (chos la spyod //)。」
 2) Tib 「菩提を行ずるのではない (rdsogs paḥi byañ chub spyod ḥdi min //)。」
 3) Tib を参照。「その結果がこの世において見られる〔が、それが〕無上な結果である
 ことは言を俟たない (de yi ḥbras bu tshe ḥdir ltos // bla med ḥbras bu
 smos ci dgos //)。」

15. Yuganaddhaprakāśa

[Sh. 49] ¹⁾ yā yā sphūrtir asau śuddhā buddhā ced avikāratā ²⁾ ³⁾ /
 vikāraḥ pratyayair jātas te 'pi tair ity ajātātā // 1 //
 rūpe na vidyate rūpaṃ na vā cakṣuṣi vidyate /
 na caitat tajjavijñāne dāruvahnīkathā yathā // 2 //
 manthāne mathaniye vā na vā puruṣahastayoḥ /
 prāksiddho vidyate vahniḥ ⁹⁾ pratityārthaḥ sa jāyate // 3 //
 kiṃ mohaḥ svasutān pūrvaṃ sūte vā sa prajāyate /
⁽¹⁴⁻¹³⁾ suta eva na pūrvaṃ ced atas tasya na vastutā // 4 //

* Corrections of Daṇḍa and Sandhi have been omitted in the notes, except when thought necessary.

- 1) Tib adds ḥjam dpal gshon nur gyur pa la phyag ḥtshal lo.
 2) T cem vavikā° 3) N₂ °kārītā 4) Sh jñānatarpitair, N₁ I jātatepi°, N₂ jāta(jñāna)tapi°, T jātāstēpitair, Tib rkyen (P kyen) las skyes pa de ḥgyur ba // de yañ rkyen las de ma skyes // 5) I cā cakṣuṣa 6) N₂ tajjya°, I taja°
 7) Sh °bahni°. 8) Tib ji ltar gtsub śiñ mi bsten (P mi stan, wrong reading for me bsten?) bshin 9) Tib ḥdi dag bsten (P brten) nas 10) Sh sūte
 11) I se 12) Tib ḥon te (P de) bu las rmoñs par ḥgyur
 13) Sh sūta, T [damaged]ta, I su 14) Tib bu ſnid la ni śnar shen pa

15. 双 運 明 説¹⁾

- (1) もし何であれ顕現するものは清浄であると知るならば、[あらゆるものは] 不変異である。変異は諸縁によって生じる。それら(諸縁)もまたそれら(諸縁)によって[生じたものである]というわけで、[あらゆるものは] 不生なのである。
- (2) 色は色に於て存在するのではなく、あるいは眼に於て存在するのでもなく、またそれ(色)は、それらより生じた識(眼識)に於て[存在するもの]でもない、あたかも薪と火の[関係の]如くに。
- (3) [火は]火切り杵と火切り臼に於て存在するのではなく、[火を起こす]人の両手のうちに存在するのでもない。あらかじめ完成された火が存在するのでもない。縁に従ってそのもの(火)が生じるのである。
- (4) 癡が先に自己の息子を[産むのか]、あるいは息子があるときそれ(癡)が産まれるのか? 先づ息子がないならば、それより、それ(癡)は実在ではない。

1) 樽尾祥雲 pp. 430~431 に於ては、テキスト (Sh に同じ) と共に、本編が『二根交会開説』として和訳されている。尚、Guenther (1969) に於ても p. 135 に第7偈と8偈の英訳とテキスト (Sh にほぼ同じ) とが収められている。Tib はタイトルに続けて「文殊師利童子に帰命し奉る。」を加える。

2) Tib 「あたかも火切り杵が接触しない如くに」に依る。

3) Cf. HV II—iii—37: “tad yathā kāṇḍaṇ ca mathaniyaṃ ca puruṣahastavyāyāmaṇ ca pratityākasmād agnir upajāyate // asāv agnir na kāṇḍe tiṣṭhati // na mathaniye na puruṣahastavyāyāme //”. Prasannapadā (ed. L. de la Vallée Poussin, Mūlamadhyamakakārikās (Mādhyamikasūtras) de Nāgārjuna avec la Prasannapadā Commentaire de Candrakīrti, Bibliotheca Buddhica IV, St. Petersburg. 1903–1913) p. 50: “(uktaṃ cāryavajramaṇḍāyām dhāraṇyām /) tad yathā mañjuśrīḥ kāṇḍaṃ ca pratitya mathaniṃ ca pratitya puruṣasya hastavyāyāmaṃ [ca] pratitya dhūmaḥ prādurbhavatīti, agnir abhinirvartate, sa cāgnisamtāpo na kāṇḍasamñisrito na mathanisamñisrito na puruṣahastavyāyāmasamñisritaḥ //” この『ヴァジュラマノダ陀羅尼』よりの引用文は、Āryavajramaṇḍanāmadhāraṇīmahāyānasūtra (P No. 807) の 304b⁸ ~305a² 及び『金剛上味陀羅尼經』(大正 vol. 21, No. 1344) の p. 851b¹⁸⁻²⁰ に対応する。山口益『月称造中論积一卷』(東京, 昭和43年) p. 75 註17参照。Lalitavistara (ed. S. Lefmann, *Leben und Lehre des Čākya-buddha*, Halle a. S., 1902) p. 177: “araṇiṃ yatha cottarārāṇiṃ hastavyāyāma trayebhi samgati / iti pratityayo 'gni jāyate jātu kṛtārthu laghu nirudhyate // atha paṇḍitu kaści mārgate kutayaṃ āgatu kutra yāti vā / vidiśo dīśi sarva mārgato nāgati nāśya gatiśca labhyate //”

evaṃ pratyayamātravād dharmāṇaṃ niḥsvabhāvātā²⁾ /
 tayaiva viharan yogī nātikrāmati samvaram // 5 //
 hānyādānaṃ na sarvatra vyavahāras tu vartate /
 māyeva niḥsvabhāvo 'sau pratītyotpādabodhataḥ // 6 //
 naiḥsvābhāvīyād ajātatvaṃ pratyayād aniruddhatā /
 bhāvābhāvāv ato na sto yuganaddhaṃ tu bhāsate // 7 //
 śūnyatākṛpayor aikyaṃ vidheyaṃ na svakalpataḥ /
 śūnyatāyāḥ prakāśasya prakṛtyā yuganaddhatā // 8 //
 sarvākāravārodāragambhiranijaśūnyatām /
 sākṣād avaiti buddhānāṃ pūjāṃ kuryāt suyogavān // 9 //
 kāyena manasā vācā sadā pratiṣṭhitaḥ sudhīḥ /
 caryāṃ kuryān na kuryād vā caryācāri sa ucyate // 10 //
 // yuganaddhaprakāśaḥ samāptaḥ //

1) *Sh* N_2 pratyaya[ya]mā°, N_1 pratyamā° 2) N_1 N_2 I °tāḥ 3) N_1 nayaiva
 4) I °raḥ 5) *Sh* bhāvīyā°, N_1 N_2 hāvīyā°, I [illegible]vyā° 6) N_2 I māyaiva
 7) N_1 N_2 T assau, I nau, *Tib* ḥdi dag 8) N_1 N_2 I °tpādatabo°
 9) T na stau, *Tib* ŋams pa(s na), *Guenther* naṣto 10) N_1 °yor ekya, I °yār
 akṣe 11) T omits pra. 12) I °śūnyatā, *Tib* sñiñ po ŋid 13) N_1 T pūjā
 14) *Sh* N_2 ma[na]sā, N_1 masā, *Tib* sems kyis(D kyi) 15) *Sh* 'pra°
 16) N_1 °dhi, N_2 °dhi[ḥ] 17) N_1 T caryā 18) *Sh* kuryyāt na vā kuryyāt,
 N_1 kuryāta na kuryāta vā, N_2 kuryāt na kuryā vā, I kuryyāt vā na kuryyāt
 vā, *Tib* (spyod pa) byed dañ mi byed kyañ 19) N_1 I °śam
 20) *Tib* adds slob dpon a ba dhū tis mdsad pa(P omits) rdsogs so //

- (5) この様にあらゆるものは唯だ縁によってのみ〔存在して〕いるので、〔あらゆるものは〕無自性である。瑜伽行者がそれ（無自性）に住していれば、サンヴァラ（禁戒）を逸脱することはない。
- (6) いかなる場合でも〔何ものをも〕捨てることも取ることもないが、ただ言語活動だけがある。〔あらゆるものは〕縁によって生じることを理解する故に、それ（言語活動）は幻のように無自性である。
- (7) 無自性の故に不生であり、縁〔生〕の故に不滅である。この故に有と非有のいずれもなく、双運が顕現するのである。
- (8) 空性（女性）と悲愍（男性）の合一は、自己の判断に基づいて規定されるべきではない。空性を明らかにする者は、本来、双運である。
- (9) 一切の様相のなかで最上であり広大であり甚深であり生得である空性を、瑜伽をよく行ずる者は、ありありと理解して、諸仏を供養すべし。
- (10) 身と意と語とによって賢者が常に〔双運に〕住していれば、行を為しても為さなくても、彼は行を行ずる者と呼ばれるのである。

『双運明説』終わる

(木村秀明)

1) *Tib* は「これら」即ち複数形であり、習慣的言語とサンヴァラの両者を指すか、又は“あらゆるもの”を意味すると思われる。
 2) *Tib* は「空性と明示とは」とする。
 3) *Tib* は「最勝広大な一切相を有するものの甚深生得の蔵性」とする。
 4) *Tib* は「アヴァドゥーティー阿闍梨は御著作を完成なされた」を加える。

16. Mahāsukhaprakāśa

(A... 1) [Sh 50] vajrasattvaṃ namaskṛtya prajñopāyasvarūpiṇam /
mahāsukhādvayaṃ vakṣye vastutattvaṃ samāsataḥ // 1 //
utpattibhāvanā caikā dvitīyotpannabhāvanā /
ubhayor bhāvanā tasmāt tādātmyam iha kathyate // 2 //
apratityodayo nāsti dharmāṇām iti niścitam /
pratityoditarūpatvāt hūṃjamaṃjau tathā na kim // 3 //
śūnyatābodhīto bijam bijād bimbam prajāyate /
bimbe ca nyāsavinyāsau tasmāt sarvaṃ pratityajam // 4 //
bāhyadvandasamāpattir iti yā deśanā muneḥ /
sāvāntaraprabodhāya spaṣṭam tantreṣu budhyate // 5 //
sukhābhāve na bodhiḥ syād matā yā sukhārūpiṇi /
astitve ca mahān saṅgaḥ saṃsārodayahetukaḥ // 6 //

A) The portion, from the beginning to v. 7c, is missing in T.

- 1) Tib adds saṅs rgyas la phyag ḥtshal lo. 2) Sh N₂ °ya[sva]rū°, N₁ omits
sva. 3) I °te 4) I tasmātādā° 5) Tib omits bdag gis.
6) N₁ N₂ tādātmyeha, I °tādātmyai eha 7) I kadyate 8) supra°
9) N₂ °yor nā° 10) P wrongly inserts a part of the Tattvaratnāvali: gsañ
sñags kyi theg pa shes byaḥo /ḥbriñ po ni saṅs rgyas ñid du ḥgyur
baḥo / (124b⁸~126a²), which should be placed between.....theg pa dan / and
mchog ni bskal pa.....(127a⁸). Mimaki (1986) mentions that this portion is
missing in the Peking and sNar than editions. 11) N₁ I iti ścitam
12) sic 13) Sh °mām̐jau, I °mam̐jā, Tib mam̐ skyes 14) N₂ °tā
15) N₂ viśvam 16) N₁ °jāyate 17) N₂ viśve 18) Sh °nyāsau[sa], N₁
N₂ I °nyāsa, Tib dgod dan de dgod bya 19) N₁ omits m. 20) I yoḥ
21) I sovām̐ta° 22) I yo 23) Tib rgyu(P rgyud) ñid

16. 大 楽 明 説¹⁾

- (1) 般若と方便を自己の本質とする金剛薩埵に帰命して、大楽と不二なる事物²⁾の真理を、私は要約して説こう。
(2) 一つには生起〔次第〕の修習があり、第二には究竟〔次第〕の修習がある。それ故に〔生起次第と究竟次第の〕両者の修習を、私はここで説こう。³⁾
(3) 諸法が縁によらずに生じることが無いということは、確定している。〔諸法は〕縁によって生じるという本質を持つものであるからである。どうして HŪM [等の字] より生じるもの (阿閼等の五仏) や MAM [等の字] より生じるもの (Māmaki 等の四明妃) も同様に〔縁より生じるものでは〕無いと言えようか。
(4) 空性の菩提から種字が生じ、種字から色像が〔生じる〕。また色像に於ても安置と布置とがある⁴⁾。その故に、すべては縁より生じるものである。
(5) “外的な二根の交会”⁵⁾という牟尼の説示があるが、それは内的なものを理解させるために〔あるということが〕諸々のタントラに於て明確に知られる。
(6) 楽を本質とすると考えられている菩提は、楽の無いところにはない。しかし(楽の)実在性に対する大きな執着は、輪廻中に生起する原因となる。

- 1) 梶尾祥雲 pp. 426~429 に於ては、テキスト (Sh に同じ) と共に、本編が『大楽開説』として和訳されている。尚、Guenther (1969) に於ても p. 26 に第 6 偈 ab 句、p. 40 に第 13 偈、p. 180 に第 14 偈 cd 句と第 15 偈の ab 句の英訳とテキスト (Sh に同じ) とが収められている。
Tib はタイトルの後に「仏に帰命し奉る」を加える。
2) Tib は「不二なる」を欠き、「dños po de ñid mdor bsdu pa // bde ba chen po bdag gis bsad //」とする。
3) Tib “de phyir gñi ga bsgom pa ni // de ni bdag gis ḥdir brjod bya //” に従う。
4) Tib は「安置するものと安置されるものがある」とする。地上に実際に造られた曼荼羅及び尊像に、行者が空中に観想した尊像を布置することを指すか？
5) Cf. HV II-iv-50: “anayā guhyasamāpatyā bāhyadvandvaṃ nirdarśitam //”
6) Tib “nañ” による。Skt. では「中間」である。

¹⁾ ādisāntasukhaṃ viddhi yat sukhaṃ pratyayodbhavam /
 avastukam ato brūmo na sukham asti nāsti ca // 7 //
 tattvaṃ tāvad ^(3...) anutpādo ^(3...) dharmāṇāṃ ⁽⁴⁾ paramārthataḥ /
 sātālikaparakāśā ⁽⁵⁾ tu vijñeyā śuddhasaṃvṛtiḥ // 8 //
 satyadvayam idaṃ ⁽⁶⁾ śuddhaṃ śūnyatā yogisaṃvṛtiḥ /
 dvayor advayatā ⁽⁷⁾ sādhyā ⁽⁸⁾ kṛtvānarthavisarjanam // 9 //
 mantrasaṃsthānayogātmā ^(9...) sāte ⁽⁹⁾¹⁰⁾ majjati ⁽¹¹⁾ dhidhanaḥ /
 māyopamaṃ tato 'dvaitaṃ viśvaṃ paśyati tādrśam // 10 //
 bhūtakoṭiṃ tato viṣṭo ⁽¹²⁾ yuganaddhapadaṃ ^(13...) gataḥ ^(14...) /
 yuganaddhasthito ⁽¹⁵⁾ yogi ^(16...) sattvārthaikaparo bhavet // 11 //
 sātacid ^(16...) devatākāraṃ ⁽¹⁶⁾ viśvacakram upāyakam /
 prajñā ⁽¹⁷⁾ ca śūnyatā ⁽¹⁸⁾ proktā sādhyatādātmyam iṣyate // 12 //
 prajñopāyātmakaṃ ⁽¹⁹⁾ tattvaṃ ⁽²⁰⁾ bāhyābhyantaraśuddhitaḥ /
 buddhvā samāsato mantriḥ ⁽²⁰⁾ sukhito 'sthānayogataḥ // 13 //

- 1) *Sh N₁ I* ādisānta°, *P* bzod nas shiñ baḥi 2) *Sh N₁ N₂ I* sukham ato
 3) *P* skyes pa 4) *N₁* °tpāyos dha°, *N₂* °tpādān dha° 5) *Sh N₂* °śāt tu
 6) *Sh* satyadva[ya]m idaṃ, *N₁* satyaṃ dvam idaṃ, *N₂* satyaṃ dvaṃ [dva]m
 idaṃ, *I* sṛtyadvaṃ midam, *Tib* bden pa ñid ḥdi (*D* ni) 7) *I* °yamā
 8) *T* kṛtvā 'narthakisarjanam, *Tib* don dam rnam (*P* omits) par spañs byas so
 9) *I* °yogaśītmāto 10) *Sh* śāto, *N₁ N₂* sāto 11) *N₂ T* dhimataḥ, *Tib* blo ldan
 12) *Sh* °koṭiḥ, *N₁ N₂ I T* °koṭi 13) *Sh* viśtvā yuga°, *N₂ I* viṣṭā yuga°, *T*
 vi[damaged]ga, *Tib* ḥjug ciñ // zuñ..... 14) *N₁ N₂ I* °padasañ gataḥ, *T*
 °prasañgataḥ, *Tib* go ḥphañ rtogs par ḥgyur 15) *T* °naddhe sthito
 16) *Tib* lha yi rnal ḥbyor pa 17) *T* tu 18) *T* sādhyantādātmmam, *Tib* de ni
 bdag ñid bsgrub byar 19) *Sh* °tmyakaṃ 20) *N₁ I* manti, *N₂* mantri[yogi],
Tib omits.

- (7) 楽は本来寂靜であると知るべし、何故ならば楽は縁より生じるものであるから。この故に、私は〔楽を〕実体の無いものと呼ぶ。楽は存在するものでもなく、存在しないものでもない。
- (8) 先づ、勝義の立場では、諸法が不生であることは真理である。一方、悦楽を虚偽であると明らかにするのが、清浄なる世俗〔諦〕であると知るべきである。
- (9) この〔勝義と世俗の〕二諦は清浄であり、瑜伽行者にとって世俗〔諦〕は空性である。勝義〔に執着すること〕を放棄してから、両者（勝義諦と世俗諦）の不二性が完成されねばならない。
- (10) 真言と形相の瑜伽を本質として持つ賢者は悦楽に沈潜する。次に、一切は幻の如く不二であると、その様に彼は見る。
- (11) その後、真実際にに入った〔瑜伽行者は〕、双運位へ至る。双運〔位〕に住する瑜伽行者は、衆生の利益を第一とするものとならん。
- (12) 悦楽の心を持ち尊格の姿を持つ種々の輪は方便である。また、般若は空性であると説かれる。〔そして〕成就されるべきもの（般若と方便）が同一な性質を持っていることが認められる。
- (13) 外的なものと内的なものの清浄〔なる本質〕に基づいて、真理は般若と方便を本質とするのである。〔この様に〕要約して理解してから、無住処の瑜伽によって、真言行者は喜樂する。

- 1) *Tib* による。Skt. によれば「無益なことを放棄して」か。
 2) *Tib* は「尊格の瑜伽者」とする。
 3) *Tib* は「それが本性として成就されるべきものである」とする。
 4) *Tib* “ḥdi ltar” による。

pratityotpādamātratvān naiva sattvaṃ na śūnyatā /
 sphūr¹⁾tiś ca devatākārā niḥsvabhāvā svabhāvataḥ // 14 //
 yathā yathā bhavet sphūr²⁾tiḥ sā tathā śūnyatātmikā /
 dvaitādvaitamano yac ca tatra tad vāsanāphalam // 15 //
 herukāhamkṛtir yogī herukārthapra³⁾tiṣṭhitāḥ /
 bhāvāṃś cāsau gurūn kṛtvā keśarīva bhramen mahīm // 16 //
 śuddhaṃ śuddhyā jinānāṃ parita iha sadā viśvam ābhāti yasya
 jātaṃ nādaḥ na ruddhaṃ svaparavigaṇanākālpakoṭiprahīṇam /
 sātālikam prakāśam bhavaśamasamatādvaitarūpaṃ hi nūnaṃ
 cakre cakrādhipo 'sau jinagaṇanīlayo vajradāko munindraḥ // 17 //
 // mahāsukhaprakāśaḥ samāptaḥ //

- (14) [諸法は] 唯だ縁によって生ずるにすぎないので、存在しているということも空ということもない。尊格の姿の顕現も本性上無自性である。
 (15) どの様な顕現であれ、それはそのまま空性を本質としている。それに対して、二であるとか不二であるとかという意識があるが、それは習気の結果である。
 (16) 瑜伽行者は、ヘールカの自我を持ち、ヘールカの義に住する。彼は諸存在を師となして、獅子の如く地上を徘徊せん。
 (17) ある者（瑜伽行者）には、諸々の勝者（諸仏）の清浄〔なる本質〕によって、この世に於て普く常にあらゆるものが清浄として現れる。〔あらゆるものは〕本初に於て生じたのではなく、妨げられず、自他の分別を一億劫の間退けている。〔あらゆるものについてまた〕悦楽が虚偽であると明らかにする、何故ならば実には有（輪廻）と寂浄が平等不二の自性を持つからである。その者は、〔曼荼羅〕輪においては輪の主導にして勝者（仏）の徳を宿すヴァジュラダーカ牟尼尊である。

『大楽明説』 終わる

(木村秀明)

- 1) N_1 sphūr¹⁾tiś ca, I [damaged] tiś ca 2) Tib lha yi rnal ḥbyor
 3) N_1 °kāḥ 4) T yamca 5) Tib de yi bag chags ḥbras (D bral)
 6) T tatra va[damaged]lam 7) Sh I °rhte pra° 8) P he ru ka yi rnam
 byed pas // *only*, D rnal ḥbyor he ruḥi ṅa rgyal byed // he ru ka don la rab
 gnas // 9) N_1 N_2 T bhāvās cāsau, I bhāvārtho sau
 10) Sh N_1 N_2 I mahi, Tib sa steṅ (P steṅs) 11) N_1 jinām pa°, N_2 ji[nā]-
 nām pa° 12) P rnam pa sna tshogs, D sna tshogs *only* 13) D bden pa
 14) T °majñādvai° 15) N_1 nyūmaṃ ca°, N_2 nyūmaṃ[nūmaṃ] ca°, I nyu-
 maṃ ca 16) I °gunanīlayā, P yon tan du gyur, D yon tan *only*
 17) N_2 °bhāko 18) T adds mahān. 19) I °kāśasa°
 20) Tib adds slob dpon a va dhū ti(P ti) pa dpal gñis su med paḥi rdo rjes
 mdsad pa rdsogs so //

1) Tib は「尊格の瑜伽（者）」とする。

2) P は「その習気の果である」とする。 D は「その習気を遠離する」とする。

3) Tib は「アヴァドゥーティーバ阿闍梨・吉祥なる不二金剛は御著作を完成なされた。」を加える。

17. Tattvaviṃśikā¹⁾

[Sh. p. 52] namaḥ sarvajñāya²⁾ //

prajñā citraṃ vipākāś³⁾ ca vimardaś ca vilakṣaṇam /
 asyās⁴⁾ tattvam ato viddhi⁵⁾ yenāsi jagato vibhuḥ // 1 //
 prajñā bhavaḥ samaś cāsau trikāyaṃ tu triyānakam⁶⁾ /
 saiva cakram sukhopāyam yoginī⁷⁾ tad ahaṃ param // 2 //
 mañjuvajro mahāmāyā vajraḍākas⁸⁾ tathāpare⁹⁾ /
 prajñai¹⁰⁾va bhedato bhāti muktiḥ¹¹⁾ saiva jinātmikā // 3 //
 acintyaṃ cintitaṃ caiva advayaṃ dvayaṃ eva ca /
 sarvākāra¹²⁾varopetaṃ bhāvābhāvau grahāgrahau // 4 //

1) *N*₁ omits the title, *Tib* tā ttwa ma hā yā na bim sa (*D* śa) ti

2) *T* namo buddhāya

3) *N*₁ vipākāś ca

4) *T* asmāt (?)

5) *N*₁, *N*₂ vidhi

6) *T* °yānaka

7) *Sh* yoginā, *N*₁, *N*₂ yoginya, *T* yo 'nyam, *Tib* rnal ḥbyor

8) *T* °ḍāka

9) *Sh* tathā 'pare

10) *T* yuktiḥ

11) *N*₁, *N*₂ °kāḥ

12) *P* sems dpaḥ

17. 真実に関する二十頌¹⁾

一切智あるものに帰命す

- (1) 般若とは、莊嚴・果報・作観・離相〔の四刹那²⁾〕である。汝は世間の主なるが故に、その〔般若の〕真実を以下のように知るべし。
- (2) この般若は有（現世的存在）であり、また、平等である。また、〔法・報・応の〕三身であり、三乗（声聞・縁覚・菩薩）である。また、それ（般若）こそは、快樂〔を獲得するための〕手段たるチャクラである。瑜伽女であり、それであり、我であり、また、他者である。
- (3) 文殊金剛であり、大幻化であり、金剛ダーカであり、また、外の〔諸尊〕である。〔このように〕区別されても同じ般若として現れる。その〔般若〕こそ勝者の本体であり、解脱である。
- (4) 〔般若は〕まさに、不可思議にして可思議である。不二にして二である。一切の様相の最勝を備えたものであり、有にして非有であり、得にして不得³⁾である。

1) *Tib* には「大乘の真実に関する二十」とあるも大乘は不要か。梵文タイトルは“Tattvaviṃśakā”あるいは“Tattvaviṃśatikā”と考えられるが、“Tattvaviṃśati”が妥当であろう。

2) 四刹那とは *Evam* 字の秘義によって表される四歡喜に対応する四段階である。HV 並びに YRM によれば次のように説明される。「莊嚴とは抱擁や接吻などであり、果報とはそれによって引き起こされる大樂の智を知覚することである。作観とは直後の観念であり、また、智が現前することで、快樂を享受することである。離相とは前の三とは別のもので、食・非食すなわち、輪廻と涅槃とを離れることである」HV II—iii—6~8, YRM p.142, アドヴァヤヴァジュラ『四印決定』密教聖典研究会 (1988) 参照。

3) *Tib*: gzun dan ḥdsin 「所取にして能取」

(68)

vijñānāpagataṃ cittaṃ nirālambam anuttaram /
 śāntam śuddhaṃ nirābhāsaṃ vittih²⁾ prajñeti kirtitā³⁾ // 5 //
 praveśāś ca bhaved asyāṃ⁴⁾ vispaṣṭo mantrāṇāṃ tataḥ /
 nānā yasmād⁶⁾ upāyo 'tra mṛdumadhyādhimātrataḥ⁷⁾ // 6 //
 karmasamayamudrābhyāṃ cakraṃ niṣpādyā bhāvitaḥ⁸⁾ /
 dhyāyanti mṛdavo bodhiṃ śuddhatattvabāhirmukhāḥ⁹⁾ // 7 //
 jñānamudrāsamāpannaṃ mañjuvajrādināyakam /
 na satyaṃ na mṛṣākāram ātmānaṃ madhyayoginaḥ // 8 //
 svādhiṣṭhānapadaṃ jñātum ye śaktās tattvato na hi /
 mārgo 'yaṃ deśitas¹⁴⁾ teṣāṃ kramato bodhisiddhaye // 9 //
 devatābhiniveśāś ced¹⁵⁾ vāsanātra kathaṃ na hi /
 vāsanaiva viśuddhā cet sarvatraiva tu sā tathā // 10 //

1) *Sh* vijñāya-, *N*₁ vijñāya-, *N*₂ vijñāya-2) *T* vittī3) *T* °tāḥ4) *Sh*, *N*₁, *N*₂ asya, *T* asyā, *Tib* ḥdi la5) *Sh*, *N*₂ vidhyaṣṭamanasāṃ tataḥ, *N*₁ vidhyaṣṭamanasāṃ tataḥ, *T* vispaṣṭam
mantraśāstra traḥ6) *Sh* dharmmād7) *N*₁, *T* mṛda-8) *Sh* °madhyādi-9) *Sh*, *N*₁, *N*₂ bhāvataḥ, *T* bhāvitaḥ10) *D* mthaḥ maḥi11) *T* °bahi-12) *T* °ādhi-13) *Sh* °ktāḥ, *N*₁ °ktā14) *Sh*, *T* mārgopadeśitas, *N*₁ mārgo upadeśitas15) *T* cid16) *Sh* vāsanā 'tra, *N*₂ vāsamātraṃ

- (5) 般若とは認識を離れた心〔そのもの〕であり、無所依であり、無上である。寂靜であり、清淨であり、無相であり、明であると言われる。
- (6) その〔般若〕に遍入するものは、それよりマントラについて明るい者となるであろう。それについて、下・中・上の種々な手段があるので〔以下に示そう〕。
- (7) 羯磨と三昧耶の二印によって、チャクラを成就せんと修習する者たちは下根の者たちであり、清淨な真実に顔を背け、〔その二印によるチャクラの成就が〕菩提であると考え¹⁾る。
- (8) 中根の瑜伽者たちは、智印（智薩埵）によって成就した文珠金剛などの主尊を真実〔在〕でもなく、虚偽の形相でもなく、自身であると〔考える〕。
- (9) 自加持の位を真に知ることができない人々、彼らに対し、〔彼らが〕次第に菩提を成就するために、この道が示された。
- (10) 本尊の遍入があるならば、そこにどうして習気（本尊の残像）が無いであろうか。〔必ず習気はある。〕まさに〔その〕習気が清淨であるならば、すべての場合にも、その〔習気〕は同様に〔清淨である〕。

1) *Tib*: tha maḥi byañ chub bsam gtan te // dag paḥi de ñid kha phyir ltas
(D bltas) // 「劣った菩提を考えて、清淨な真実に顔を背ける」

[Sh. p. 53]

dr̥ṣṭatattvaḥ punar yogī mahāmudrāparāyaṇaḥ /
 sarvabhāvasvabhāvena vihared¹⁾ uttamendriyaḥ // 11 //
 prakṛtau yat sukhaṁ²⁾ labdhaṁ sarvasaṃkalpavarjitam /
 tad evedaṃ jagad³⁾ yasmāt tasmāt sarvam anāvilam // 12 //
 bāhyaṃ⁴⁾ vastu manogrāhyaṃ bhrāntaṃ na bhāsate yataḥ /
 svapnāṅganevā⁵⁾ vispaṣṭaṃ cinmātram arthakāri tat // 13 //
 cittamātraṃ bhaved⁶⁾ bodher mataṃ⁷⁾ cittam acittakam /
 svasaṃvittir acittaṃ ca vittir gurum apekṣate // 14 //
 śūnyatā⁸⁾ sarvavastūnāṃ⁸⁾ kasya nāma na saṃmatā /
 sarvabhāvasvabhāvo 'sau kaṣṭhā pratyātmavedyataḥ // 15 //

1) Sh vihareṭ

2) Sh śubham

3) T jajagad

4) T bāhya

5) T °ganaiva

6) Sh bhavet

7) N₂ metac

8) D dños med kun gyi ño bo fiid

- (11) さらに、最上根の瑜伽者は真実を達観し、大印を最高の目的として、一切の存在の自体として住すべし。
 (12) 一切の妄分別を離れて獲得された本性上の安楽、それこそがこの世間である。それゆえ一切は無垢である。
 (13) 外的な事物は意によって捉えられるものであり、虚妄なるものとしては顕現していないのであるから、それは鮮明であり、心だけのものであるが、夢に〔現れた〕女のように効果的作用をもたらすものである。¹⁾
 (14) 菩提にとっては心のみがある。〔その〕心は心的作用を伴わないものであると考えられる。また、〔その心は〕自証であり、無心である。覚智は師を観待する。
 (15) 誰にとって一切の事物は空であると同意されないであろうか。〔誰でも一切は空であると理解できる。〕それ(空性)は一切の存在の自性であるが、個々に知られるべきものとしては困難である。²⁾

1) *Vimśatikā Vijñaptimātratāsiddhi* (ed. S. Lévi, *Vijñaptimātratāsiddhi*, Paris, 1925) 4 ab; svapnopaghātavat kṛtvākriyā……「夢精のごとく、効果的作用を引き起こす……」参照。

2) Tib は次の一句を加える。thams cad dños poḥi rañ bshin ḥdi // 「それは一切存在の自性である」

analādisahāyena bhaktaṃ yatheha taṇḍulāḥ /
 tathāṭayā²⁾ tathā śuddhā avidyā yāti vidyatām³⁾ // 16 //
 yasya cintā⁴⁾ bhaved dhyānaṃ tasyācintyaṃ⁵⁾ bhaved na kim⁶⁾ /
 acintyātmā⁷⁾ bhaved⁸⁾ yogī buddhair jagadudāhṛtaḥ // 17 //
 cakram asau bhaved yogī mahāmudrā sa eva hi /
 dharmasambhoganirmāṇaḥ sarvākāraḥ¹⁰⁾ sa eva hi // 18 //
 kṛtakṛtyo nirāśāś¹¹⁾ ca sarvāsaṅgabahirmukhaḥ /
 caturīryāpathair yukto buddho¹⁴⁾ 'yaṃ buddhasaṃmataḥ // 19 //
 advayenādvayaṃ kṛtvā¹⁵⁾ yad āsādi¹⁶⁾ śubhaṃ mayā /
 jagad advayam adyaiva bhūyāt¹⁷⁾ tena mahāsukham // 20 //
 // tattvaviṃśikā samāptā¹⁹⁾ //

- 1) *Sh*, *N*₁, *N*₂ anilādi-, *Tib* de (*wrong reading for me?*) la sogs
 2) *Sh* tathatayā, *N*₁, *N*₂ tathatāmā
 3) *T* śuddhatām
 4) *N*₁ cittā
 5) *T* °tyām
 6) *N*₁ kaṃ
 7) *Sh* acintātmā
 8) *T* tato
 9) *Sh*, *N*₁, *N*₂ buddher ja
 10) *Sh* °ākāra[ḥ], *N*₂ °ākāra, *T* °ākārā
 11) *N*₁ nirāśaṃś *T* nirāśāś
 12) *Sh* °vahir-
 13) *T* iryāṃ pa-
 14) *Sh* buddhā
 15) *Sh*, *N*₁, *N*₂ advayena dvayaṃ
 16) *Sh* (saṃ)kṛtvā, *N*₁, *N*₂ saṃkṛtvā
 17) *Sh*, *N*₁ asādi
 18) *N*₁ bhūyām
 19) *N*₁, *N*₂ °pteti

- 16) 世間では、火などの助力によって、米が食物となるように、そのように真如〔の力〕から、〔本来〕清浄なる無明は明となる。
 17) その人の思が静慮となった時、その人にとって何が不可思議でないであろうか。〔すべて不可思議である〕。瑜伽者は不可思議を体とするものであると諸仏は世間の人々に説いた。
 18) かの瑜伽者はチャクラである。何故ならば彼こそ大印であるが故に。〔彼はまた〕法・報・応〔の三身〕である。何故ならば一切の相を持つものであるが故に。
 19) 所作已弁であり、欲がなく、一切の執着物に顔を背け、四威儀をそなえ、悟った彼は仏陀と認められる。
 20) 不二なる〔瑜伽〕によって、〔仏陀と〕不二になり、私は善を得たが、それによって世間は今こそ、大楽と不二になれかし。

『真実に関する二十頌』終わり

(高橋尚夫)

- 1) *Tib*: de la bsam mi khyab kyi min // 「彼に不可思議なものはない」
 2) *Tib*: ḥdi ni ḥkhor loḥi rnal ḥbyor yin // 「彼はチャクラの瑜伽者である」

18. Mahāyānaviṃśikā¹⁾ //

[Sh. p. 31] nijakāyam²⁾ ahaṃ vande³⁾ asaṃskṛtam alakṣaṇam /
 sarvākāravāropetaṃ yuganaddhapadasaṃgatam⁴⁾ // 1 //
 dharmasaṃbhoganirmāṇā yan⁶⁾ nijam⁵⁾ tat svabhāvataḥ /
 tad asya darśanaṃ yuktaṃ samyaksaṃbodhisiddhaye // 2 //
 darśanaṃ ca bhaved asya anāropād vipaśyanā /
 mantrayānānusāreṇa tad idaṃ vakṣyate 'dhunā // 3 //
 na nedaṃ⁷⁾ śāśvataṃ⁸⁾ viśvaṃ na cocchedisamihitam /
 śāśvatocchedi⁸⁾ no yugmaṃ nānubhayaṃ vinobhayaṃ // 4 //
 catuṣkoṭivirmuktaṃ tattvaṃ tattvavido viduḥ /
 catuṣkoṭiviśuddhaṃ tu catuṣkoṭisamāśritam⁹⁾ // 5 //
 khasamam¹⁰⁾ asamaṃ śāntam ādimadhyāntavarjitaṃ /
 acintyaṃ cittaṃ caiva sarvabhāvasvabhāvakaṃ¹¹⁾ // 6 //

1) Tib ma hā yā na bīṃ śa ti

2) Sh jina-

3) N₁ vandhe4) Sh yuga[na]ddha, N₁, N₂ yugaddha

5) Sh pada(sa)ṅgatam

6) N₁, N₂ nija7) N₁ netam8) N₁ śāśva-9) Sh ca[tu]ṣkoṭi-, N₁ caṣkoti-10) N₁ -samāśritam11) N₂ -svabhāvataḥ18. 大乘に関する二十頌¹⁾

- (1) 双運位²⁾に到達し、勝れた一切相を備え、無相にして、無為なる生得の身あるものに我は敬礼す。
- (2) 法・報・応〔の三身〕は自性からして生得なるものである。それ故、その〔生得なるもの〕を見照することが、正等正覚の成就にふさわしい。
- (3) そこで、その〔生得なるもの〕の見照は付度ではないので観となろう。そこで、真言乗〔の教え〕に従って、今、その〔生得なるもの〕が語られる。
- (4) それは、常でもなく、全でもない。また、断を主張するものでもない。常と断が対になったものでもなく、双方ともないのではなく、双方ともあるものでもない。
- (5) 真実とは、四句〔分別〕を離れたものであると真実を知るもの達は知っている。しかしながら、〔真実は〕四句〔分別〕によって清浄にされ、四句〔分別〕に依ってでしか〔顯されない〕。
- (6) 〔真実〕とは、虚空に等しく、無等なるものである。寂靜であり、初・中・後を離れたものである。また、不可思議であり、かつ心的なものであり、一切の存在〔を存在たらしめている〕自性である。

1) “Tattvaviṃśikā”と同様に“Mahāyānaviṃśati”あるいは“Mahāyānaviṃśatikā”とするのが妥当と思われる。なお、Tib に帰敬あり。「胎藏身 (sñiñ po [D po]i) sku) に帰命す」

2) 双運についてはアドヴァヤヴァジュラ『双運明説』(本書p. 56~59)を参照。

Sekoddesāṭikā p. 57 (P No. 2068, 320a⁸⁻⁴) GOS. No. XC 1941 BARODA
 samastabuddhadharmasvabhāvatayā caitad eva ca satyadvayāvaidhī-
 bhāvasvabhāvaṃ yuganaddhākhyam ucyaṭe / tasmād yuganaddhakāya
 eva dharmakāyaḥ / sām̄bhogikasvābhāvīkābhyaṃ pr̄thagbhūto yogipra-
 tyātmavedyaḥ //

「一切諸仏の法を自性とすることによって、それはまさに〔真俗の〕二諦と無二無別を自性とするものであり、双運と称するものであるといわれる。それ故まさに双運身こそが法身である。報〔身〕と自性〔身〕の二として個別に現れ、瑜伽者によって個々に知られるものである」

jagadekarasaṃ buddhvā prabhāsvarāṃ anāvilaṃ /
 sarvasaṃkalpaniḥśaṃkā viharadhvaṃ¹⁾ yathāsukhaṃ // 7 //
 na kleśā²⁾ bodhito bhinnā na bodhau kleśasaṃbhavaḥ /
 bhrāntitaḥ kleśasaṃkalpo bhrāntiḥ prakṛtinirmalā³⁾ // 8 //
 iryā ca kāyikaṃ karma vācikaṃ dharmadeśanā⁴⁾ /
 samādānaṃ manaḥkarma nirvikalpasya dhimataḥ // 9 //
 jagan māyety asau māyā māyā māyeti mā kṛthāḥ /
 māyā moho mahābhrāntir bhrāntir⁶⁾ bhāti⁷⁾ satāṃ matā // 10 //

[Sh. p. 53]

vijñāyaivaṃ yathārūpaṃ buddhādināṃ samāsataḥ /
 bhūñjānaḥ⁸⁾ sarvathā sarvaṃ tattvavedī prasidhyati // 11 //
 dharmaskandhasahasreṣu badhyatāṃ nāma śūnyatā⁹⁾ /
 baddhā nāsau parāmarśād¹⁰⁾ vināśārthaṃ¹¹⁾ bhaved guroḥ // 12 //
 sarvākārāḥ sukhaṃ tattvaṃ saṃkalpoparateḥ¹²⁾ sataḥ /
 śūnyatā na sukhaṃ tattvaṃ nācintyaṃ¹³⁾ na sukhaṃ¹⁴⁾ sukhaṃ // 13 //

1) Sh viharaddham

2) N₂ kleśo

3) N₁ -malāḥ

4) N₂ kāmyi-

5) Sh, N₁, N₂ omit these two words, supplied from Tib. ḥgro ba sgyu ma
 sgyu ma ḥdi // sgyu mas sgyu ma mi bya ste //

6) N₁ bhrānti

7) N₂ bhrāntiḥ, Tib ḥkhrul pa

8) N₁ bhūñjāna

9) N₁ śūnyatāḥ

10) Sh -rśāt

11) N₁, N₂ vināṃ artham

12) Sh sa te, N₁, N₂ sate, Tib skyes bu

13) Sh N₁ na cintyam

14) N₁ mukhaṃ

- (7) [真実とは] 世間と一味であり、輝けるものであり、無垢なるものであると知って、汝等は一切の分別にかまうことなく、意のままに過ごすべし。
- (8) 煩惱は菩提と別ではなく、菩提に於いては煩惱の発生はない。迷妄から煩惱という妄分別がある。[しかしながら]、迷妄は自性無垢である。
- (9) 妄分別なき賢者にとって、身体に関する行為は威儀であり、言葉に関する行為は法の説示である。心に[関する]行為は正受である。
- (10) 世間は幻であるという[場合]、この幻とは、幻だからといって幻なのだというふうには考えるなかれ。幻とは痴であり大迷妄であり、[その]迷妄が光り輝くのである、[と]正しい人は考える¹⁾。
- (11) このように仏陀などについて、簡潔にあるがままに知って、真実の智を持つものは、あまねく一切を享受しつつ成就する。
- (12) 千の法蘊に空性が結び付けられているが、結び付けられたこの[空性は]師にとっては執着の滅を目的とするものではない。
- (13) 分別の停止にもとづいて、賢者にとっては、一切の形相は、安楽であり、真実である。空性という[考えは]安楽でも真実でも無い。安楽でないとも、安楽であるとも考えられないことはない。

1) Tib: ḥkhrul ḥgyur ḥkhrul pa dam paḥi lugs // 「迷妄となるものは迷妄である」というのは正しい人の見解である」

2) Tib: skyes bu rnam rtog bral ba ni // 「分別を離れた賢者は」

yena buddham anāropam na dṛṣṭam paramārthataḥ /
 adr̥ṣṭe yujyate tasya vṛttam paścād yathā tathā // 14 //
 na dvayaṃ nādvayaṃ yasya na bodhiḥ sadvilakṣaṇā /
 nirāśo 'sau mahāyogī sarvākāragatiṃ gataḥ // 15 //
 ādikarma yathoddiṣṭam⁵⁾ kartavyaṃ sarvayogibhiḥ⁶⁾ /
 śūnyatākaraṇābhinnam yad bodhau jñānam iṣyate // 16 //
 kṛpāyāḥ śūnyatā nānyā karuṇā paranāmikā⁷⁾ /
 samskr̥tya na vayaṃ brūmo brūmaś ced yuganaddhataḥ // 17 //
 ghatāder grahaṇair yasya dhyānasātatyayogataḥ /
 bhaved asau mahābuddhaḥ sarvākāraikavigrahaḥ // 18 //
 asaṃskṛtamanā⁸⁾ dharmo bodhaḥ saṃbhogalakṣaṇaḥ /
 tad eva nirmitaś citraḥ nijaḥ sarvasvabhāvakaḥ¹⁰⁾ // 19 //
 yad anena samāsādi puṇyaṃ puṇyavatā mayā /
 tenāstu sakalo loko buddhabodhiparāyaṇaḥ // 20 //
 // mahāyānaviṃśikā samāptā¹¹⁾ //

1) N_2 adr̥ṣṭair2) Sh -cāt3) N_2 bodhis ca dvilakṣaṇā4) N_1 -āśau5) Sh yathoddiṣṭam6) Sh, N_1, N_2 -yonibhiḥ7) Sh kharāṇāyikā, N_1 paraṇāyikā, N_2 paranāyika, Tib miñ gshan8) Sh -ta[ma]nā, N_1, N_2 -tanā9) N_1 sabhoga-10) Sh, N_1, N_2 -bhāvataḥ, Tib kun gyi rañ bshin no //11) N_1 samāptaḥ

- 14) 彼によって付度のないことが悟られたが、〔それは〕勝義からすれば見えない。彼の行為は不見にかなっている。後にいかなる仕方をとろうとも同様に正しい。
- 15) その人にとって二はなく、不二もない。悟りというものは両の相を持つものでもないからである。そういう人は欲望を離れた偉大な瑜伽者であり、一切の形あるものの真理趣を理解している。
- 16) 総ての瑜伽者は所説の通りに初行を為すべし。空性と悲とが不可分なるもの、それが菩提に於ける智であると認められる。
- 17) 空性は悲愍とは別のものではない。悲とは〔悲愍の〕別名である。我々は作為的には説かない。もし〔説くならば〕双運より説く。
- 18) ある人が壺などの〔対象〕を把握することなどによって、静慮の連続の瑜伽〔を為せば〕、その人は一切の相を一身に〔集めた〕偉大な仏陀となるであろう。
- 19) 法〔身〕とは不作意のものであり、覚者は報〔身〕を相とするものである。同様に、化〔身〕とは種々様々であり、生得〔身〕とは一切の自性なるものである。
- 20) 〔もともと〕福德あるこの私は、〔この作品を著したことから、さらなる〕福德を得た。それによって、一切の世界は仏菩提に向かうものであれ。

『大乘に関する二十頌』終わり

(高橋尚夫)

21. Premapañcaka

pratibhāso varaḥ kāntaḥ pratityotpādamātrakaḥ /
 na syād yadi mṛtaiva syāc chūnyatā kāmīni matā // 1 //
 sūnyatātivarā kāntā mūrtyā nirupamā tu yā /
 pṛthag yadi kadācit syād dagdhaḥ¹⁾ syāt kāntanāyakaḥ // 2 //

1) *All baddhaḥ*

21. 愛についての五頌

- (1) 顯現(男)はすぐれた恋人だが、因縁生にすぎない。〔彼が〕もし存しないなら、〔彼を〕恋する女であると考えられる空性(女)はすでに死んでいる。
- (2) 空性(女)は特にすぐれた恋人であり、具体的に喩えようとしても喩えるものがない。万一或る時別れたならば、愛する夫は〔すぐに〕燃えつきてしま¹⁾うだろう。

1) *baddhaḥ* として「別れたとしても、夫は〔なお〕結ばれているのである」と訳すことも可能か? *dagdhaḥ* は *T₂* から推測した。

〈Premapañcaka チベット訳〉

T₁: P 3091; D 2246. [密教聖典研究会 (1989), p. (87)参照]

T₂: P 3082; D 2237.

- (1) *T₁*: rab tu snañ ba'i mchog rtse ba / rten ciñ 'brel bar 'byuñ
 ba tsam /
 gal te med gyur 'chiñ 'gyur ñid / stoñ ñid yod pa'i 'dod
 tsam ma //
- T₂*: snañ ba mchog tu bcugs¹⁾ pa ni / rten ciñ 'brel 'byuñ tsam
 ñid de /
 med par 'gyur na stoñ ba ñid / 'dod pa mo dños 'chiñ
 bar 'gyur //
- 1) *D gcugs*
- (2) *T₁*: stoñ ñid śin tu mchog rtse ba'i / gañ giś¹⁾ lus ni dpe med pa /
 gal te brgya la tha dad gyur / rtse ba'i gtso bo tha dad
 'gyur //
- T₂*: stoñ ñid śin tu mchog gyur ba'i / mdza' bo dpe med gzugs
 ldan gañ /
 de dañ brgya la byed na ni / dga' bde'i gtso bo brlag par
 'gyur //
- 1) *D gi*, 2) *P rgya*

dampati śaṅkitau¹⁾ tasmād guror upasthitau²⁾ puraḥ /
 nijapṛītyā³⁾ tayos tena⁴⁾ sāhajaṃ⁵⁾ prema kāritam // 3 //
 vāyu sadgurupāṇḍityaṃ⁶⁾ mahākauśalam idṛśam /
 nijābheda⁷⁾ nirālabhāv ubhau jātāv anuttarau // 4 //
 sarvalakṣaṇasampūrṇāv⁸⁾ antadvayavivarjitau /
 sarvabhāvasvabhāvau ca niḥsvabhāvau sadoditau // 5 //

- 1) N_2 saddhitau
 2) N_2 gurorūpaṃ sthitau
 3) N_2 -pṛītyās
 4) N_1 tayās
 5) N_1 teśa
 6) *All om.* ṃ
 7) N_1 & N_2 -vedha-; *Sh -bedha-*.
 8) N_1 & *Sh* catur- (*for* anta-); N_2 -pūrṇau caturdvayāvavarjitau

- (3) 従って、[お互いに] 疑っている夫婦は、聖師の前になれば、二人の生来の愛情により [二人に] 俱生の愛が彼によって作られる。
 (4) ああ、このように聖師の学識は大変巧みである。[二人は] 生来的に無異・無境なる、無上の二人として生まれ [かわる]。
 (5) 二人は、一切の相を円満し、二極を離れ、一切諸物の本性であり、無自性である、と常にいわれる。

『愛についての五頌』終わる

(3) T_1 : de phyir dogs pa khyo śugs¹⁾ gñis / bla ma dam pa'i spyan
 sñar gnas /
 gñug ma'i rtse ba de dañ de'i / lhan cig skyes pa'i brtse²⁾
 bar mdzod //
 T_2 : de phyir dogs pas khyo śugs¹⁾ gñis / bla ma dam pa'i spyan
 sñar gnas /
 de yis de dag sñon bñin du / dga' bas lhan cig bcugs par³⁾
 mdzad⁴⁾ //

- 1) D śug 2) D rtse 3) D gcugs 4) D mdzod

(4) T_1 : e ma'o bla ma dam pa mkhas / ño mtshar 'di 'dra'i thabs
 mkhas pa /
 gñug ma dbyer med dmigs pa med / bla na med par gñis
 ka skye¹⁾ //
 T_2 : e ma'o bla ma mchog mkhas ni / 'di lta bu la mkhas pa
 mtshar /
 rañ bñin gñis med dmigs pa med / bla na med par gñis ka
 skyes //
 1) D bla na med pa gñi ga ste

(5) T_1 : mtshan ñid thams cad yañ dag rdzogs / mtha' gñis dag ni
 rnam par spañs /
 dños po kun gyi rañ bñin ni / rañ bñin med par rtag tu śar¹⁾ //
 T_2 : mtshan ñid thams cad yañ dag rdzogs / mtha' gñis rnam
 par spañs pa te /
 dños po kun gyi ño bo ñid / rañ bñin med par rtag tu śar //
 1) D pa

(矢板秀臣)

大正大学総合佛教研究所年報 第13号

平成3年3月20日 抜刷

*Advayavajrasamgraha - New Critical Edition
with Japanese Translation (4) -*

アドヴァヤヴァジュラ著作集

——梵文テキスト・和訳(4)——

*"Annal of the Institute for
Comprehensive Studies of
Buddhism, Taisho University"*

No.13 March 1991

密教聖典研究会

アドヴァヤヴァジュラ著作集

——梵文テキスト・和訳(4)——

密教聖典研究会

前年度に引き続き今回は、野口圭也担当による 7. “Sekanirdeśa”, 大塚伸夫担当による 12. “Svapnanirukti”, 白石凌海担当による 13. “Tattvapra-kāśa” および 14. “Apratiṣṭhānaprakāśa”, 鈴木晃信担当による 19. “Nirvedhapañcaka” および 20. “Madhyamaṣaṭka”, 矢板秀臣担当による 22. “Tattvadaśaka” を収める。”

以下に写本・引用・関連・参考文献の略号の補足と改正を挙げる。

I₂: IASWR (The Institute for Advanced Studies of World Religions) フィルム所蔵本 George 目録 I-108.

……“Sahajasiddhisamgraha” の title の下, “Jñānasiddhi” 等の成就書が収められている中に、本書所掲の 7. “Sekanirdeśa” に同定されるものが、第 6 番目に “Sekanirṇaya” (53a⁷-55b⁵) の名で収められている。また、全体で 63 folio あるが完本ではない。

密教聖典研究会 (1988): 「アドヴァヤヴァジュラ著作集—梵文テキスト・和訳(1)—」『大正大学総合仏教研究所年報』第10号, 1988。

密教聖典研究会 (1989): 「アドヴァヤヴァジュラ著作集—梵文テキスト・和訳(2)—」『大正大学総合仏教研究所年報』第11号, 1989。

密教聖典研究会 (1990): 「アドヴァヤヴァジュラ著作集—梵文テキスト・和訳(3)—」『大正大学総合仏教研究所年報』第12号, 1990。

宇井伯寿 (1952): 宇井伯寿, Advayavajra Tattvaratnāvali, 『名古屋大学文学部研究論集Ⅲ, 哲学 I』, 1952。再録『大乘仏典の研究』東京,

1963, 再版1979。

磯田熙文 (1978): 磯田熙文, 「Pāramitāyāna と Mantrayāna」, 『東北大学文学部研究年報』28号, 1978。

高田仁覚 (1953): 高田仁覚, 「不二金剛の灌頂決定論について」, 『印仏研』2-1, 1953。

Pathak (1961): Sunitikumar Pathak, The Madhyamaṣaṭka of Me-tri, *The Adyar Library Bulletin* vol. 25, 1961, p. 539-549.

[20. “Madhyamaṣaṭka” の校訂サンスクリット語テキスト, 及び英語訳]

それぞれの詳細または使用写本の略号等については、密教聖典研究会 (1988), 密教聖典研究会 (1989), 密教聖典研究会 (1990) を参照せられたい。なお、本研究会は、前回と同様に各担当者が作成した梵文テキスト・和訳に対し、参加者全員で検討を加え、原稿に整えるという形式で作業を行った。

最後に、平成二年度の研究会参加者を記す。

指 導 齋藤光純専任講師

参加者 本研究所研究員: 大塚伸夫, 木村秀明, 白石凌海, 鈴木晃信,

野口圭也, H. van der Veere

本学講師: 高橋尚夫, 前田 崇, 森口光俊, 矢板秀臣

7. SEKANIRDEŚĀ¹⁾

[Sh p. 28] om namaḥ śrīvajrasattvāya²⁾
 evaṃkāraṃ namaskrumo yaś catuḥkṣaṇākāraṇaḥ /
 ānandā yatra jāyante bhedato bodhisiddhaye // 1 //
 citraṃ tato vipākaḥ syāt tṛṭiye tu vilakṣaṇam /
 vimardaś ca tato jñeyo haṭhayoganirākṛteḥ // 2 //
 ālocanaṃ vimardaś cet tṛṭiye katham iṣyate /
 yat tatrālocanaṃ naiva bhaved vittir alakṣaṇā // 3 //
 vilakṣaṇam ato yuktaṃ.....tṛṭiyake /
 svasaṃvittir bhavet siddhir āgamārtho 'pi saṃgataḥ // 4 //
 cumbanālingane citraṃ ghrṣṭau vipākanāmakam /
 maṇau vilakṣaṇam yeṣāṃ te ca duḥsekasaṃvidāḥ // 5 //
 ratnagarbhe tu yā vittih saiva tattvaṃ bhaved yadi /
 śaivavedaṃ bhavet tattvaṃ na hy etad bauddhasaṃmatam // 6 //

* Since ms. I₂ (IASWR MBB I-108. Cf. preface p. (47) above) is newly made use of, ms. I (IASWR MBB I-50) is listed as "I₁" in this note.

- 1) *ShN*₃ °nirṇaya. Cf. p. (62), note 22)
- 2) *ShN*₁*N*₂*I*₁ namo buddhāya, *Tib*. 'jam dpal g'zon nur gyur pa la phyag 'tshal lo
- 3) *N*₂ °ra[m], *N*₃*I*₁*I*₂ °ra 4) *Sh* ya[h] sattvaḥkṣaṇa°, *N*₁ yasvatteḥ kṣaṇa°, *N*₂ yaḥ svataḥ kṣaṇa°, *I*₁ ya svantaḥ kṣaṇa°, *I*₂ yaś caturū(?)ṇa°, *Tib* skad cig ma bzi'i rgyur gyur gaṅ 5) *ShN*₁*N*₂*I*₁*I*₂ °ṇaṃ 6) *Tib* gaṅ las
- 7) *N*₂ cittaṃ 8) *N*₃*I*₂ omit ḥ. 9) *N*₂ °śca, *I*₁ °śce, *I*₂ °ścyat
- 10) *Tib* gaṅ phyir 11) *N*₃*I*₂ caiva
- 12) *N*₂ °veccittira°, *N*₃*I*₂ °veditira°, *Tib* mtshan ŋid med par rig par 'gyur
- 13) *Sh* hantum roddhum, *N*₁ hantu roddhu, *N*₂ hantu bodham, *N*₃ hantu yoddhutṛ°, *I*₁ hūmtu voddhum, *I*₂ hantatathāddhu, *Tib* de phyir gsum pa de ŋid yin 14) *ShN*₃ °vitter, *N*₁*N*₂*I*₂ °vitte, *I*₁ °vitta
- 15) *N*₁*I*₁ °martho° 16) *N*₁ °gabbhe, *N*₃*I*₂ °gardbha, *Tib* rin chen dkyil du
- 17) *ShN*₁*N*₂*I*₁ ca 18) *N*₂ °tadvo°, *N*₃*I*₂ °tadvu°, *I*₁ °tadvi°

7. 灌頂説示

オーム 吉祥金剛薩埵に帰命す。

- (1) 四刹那を生みだすものであり、菩提のためにそこに於て〔四種に〕区分して歓喜が生ずる evaṃ 字に我々は帰命する。
- (2) 〔四刹那のうち第一に〕「多様」〔があり〕、次いで「異熟」があるべし。第三には「離相」である。その後に「圧碎」が〔あると〕、ハタヨーガ〔の説〕を退けることより、知るべきである。
- (3) もし「圧碎」が観照〔ということ〕であるなら、どうして〔それが〕第三番目に〔あると〕認められるだろうか。〔というのは〕知覚〔そのもの〕は特相をもたない〔のだから、自分が快楽を享受したという〕観照はここ〔すなわち第三の段階〕には決してないだろうからである。
- (4) 従って、「離相」が第三番目に〔置かれるのが〕理に適っている²⁾。〔その場合は観照すなわち〕自己認識が成就〔そのもの〕となるだろう。〔これなら〕アーガマの意味も適切である。
- (5) その者の〔見解では〕接吻と抱擁〔の意味〕で「多様」があり、こすること〔の意味〕で異熟という名の〔刹那〕があり、宝珠〔の意味〕で「離相」がある、そういう者たちは悪しき灌頂の知識を持つ者である。
- (6) もし仮に、宝石の胎における知覚こそが真実であるとするならば、シヴァ派の知識が真実であることになってしまう。〔だが〕これは仏教徒の承認するところではない。

- * 本篇に対しては、アドヴァヤヴァジュラの弟子である Rāmapāla の注釈 "Sekanirdeśaṇjika" が西藏大蔵経中に遺されており (大谷 No. 3098, 東北 2253), さらにその梵文写本も、Leningrad の Public Library に現存する旨が報告されている (塚本・松本・磯田篇著『梵語仏典の研究Ⅳ 密教経典篇』京都, 1989, p. 364-365)。また既に、高田仁覚、磯田熙文の両氏により内容研究もなされている (高田仁覚 (1953), 磯田熙文 (1978))。訳出にあたっては両先学の研究成果と『ラーマバーラ注』とを十分に参照すべきであるが、紙面の都合上、訳文下部の訳注には、これらを参照した内容面についての注記を一切省き、チベット語訳との対照や出典の所在等最小限度の記述にとどめた。内容面の注記は本篇末尾に一括して付しているが、『ラーマバーラ注』は、梵文写本が未入手であり、ほとんど参照し得なかったのは誠に遺憾であった。なお、ヴェーダーンタ派に言及する12偈から18偈については、東海大学の正信公章氏より多くの御教示を頂いた。第17偈が "Mahābhārata" からの引用であることも同氏の御教示により知り得たものである。ここに氏の御厚情にあらためて厚く御礼申し上げる次第である。
- 1) "vimarda" の訳語は、Snellgrove は "consummation", 頼富本宏氏は「滅息」, 磯田氏は「摩滅」, HV 漢訳は「作観」である。cf. 頼富 p. 360.
 - 2) ab 句は梵文を再構成し得なかった。Tib. によれば「従って形相がないというのが妥当である。従って第三は、それ〔離相〕に他ならない。」

tathā ca ¹⁾Devīparipṛcchā²⁾śivanirṇādatantre
 ratnapuram idaṃ devi kiñjalke jalatāṃ vrajet /
 rudro yugmaḥ śivaḥ śreṣṭhaḥ śaktiḥ saiva parāt parā⁸⁾ // 7 //
 lakṣyalakṣaṇanirmuktaṃ vāgudāhāravarjitam /
 śivaśaktisamāyogāj jāyate cādbhutaṃ sukham // 8 //
 na santi tattvato bhāvāḥ¹⁰⁾ śaktirūpeṇa bhāvitāḥ¹¹⁾ /
 śaktis tu śūnyatādrṣṭiḥ sarvāropavināśini // 9 //

Ucchuṣmatantre 'pi

śivaśaktisamāyogāt satsukhaṃ paramādvayam /
 na śivo nāpi śaktiś ca ratnāntargatasamsthitam // 10 //

[Sh p. 29] Yogādhyāye 'pi

jñānāmṛtena tṛptasya kṛtakṛtyasya yoginaḥ /
 naivāsti kiṃcit kartavyam asti ced na sa tattvavit // 11 //

- 1) $ShN_1N_2I_2$ °vi° 2) ShN_1N_2 °cchasi saiva°, N_3I_2 °cchāsiva°, I_1 °cchasiseva°
 3) *Tib* pa dma'i ze
 4) ShI_1 jvalatāṃ, N_3I_2 jalatā, *Tib* 'bru źu bar 'gyur
 5) $N_1I_1I_2$ °gma, N_2 °gma[h], N_3 °gme 6) N_3I_2 Śiṣṭhaḥ 7) $N_1I_1I_2$ °kti
 8) $N_1N_2I_1$ °rāḥ 9) N_1 °ktiḥ, N_2 °kti(h) 10) $N_1N_2I_1$ °vā 11) N_1I_1 °tā
 12) ShN_1N_2 °śa° 13) I_1 °ma°
 14) N_2 °rdhāna°, I_1 °ryata°, *Tib* rin chen dkyil du
 15) *She reads Ms. as* cet manu sa. N_1 cetamanusa, N_2 cet manusa, N_3 cenṛ /
 nasa, I_1 cetamanu tatva°, I_2 cet na sa, *Tib* yod na de fid rig ma yin
 16) N_2I_2 tatvacit

すなわち, “Devīparipṛcchāśivanirṇādatantra”¹⁾ に [次の様に説かれている]。

- (7) この宝の町を, 女尊よ, [女の] 花芯にて水の状態となせ。恐ろしいシヴァは, [女尊と] 対になって [はじめて] すばらしい。[シヴァの] シャクティ (明妃) は, 彼女こそ [どんな] すぐれたものよりも勝っている。
 (8) 特徴づけられるもの, 特徴づけるもの, という [二元性を] 離れ, ことばによる説明を捨て去ったすばらしい快樂が, シヴァとシャクティの交合により生じる。
 (9) 諸存在は真実よりすれば実在しない [のだが] シャクティの姿で [仮に] あらしめられている。シャクティとは, 空性の見解であり, 一切の増益を減するものである。
 [また] “Ucchuṣmatantra”²⁾ にも [次の様に説かれている]。
 (10) シヴァとシャクティの交合より, 最上にして不二なる正しい快樂が [生じる]。[真実としては] シヴァはいないし, シャクティもまたいない。[真実は] 宝石の中にかくされてある。
 “Yogādhyāya”³⁾ にも [次の様に説かれている]。
 (11) 知識という甘露に満足し, なすべきことをなし終えた瑜伽者には, [もはや] なさねばならぬことは何もない。もし [そういうものが] あったとしたら, その者は真実を知る者ではないのである。

- 1) シヴァ派のタントラであろうが, どのようなものか不明。
 “Ucchuṣmatantra” の名は, “Brahmayāmala より抽出された Picumata” なる書物の第36章に対する colophon に現われる, とされる (T. Goudriaan and S. Gupta: “Hindu Tantric and Śakta Literature”, History of Indian Literature vol. II, 2, Wiesbaden, 1981, p. 42, note 42)。同書によれば, śiva と śakti の同一性を示す語である yāmala という語に基く, “Yāmala” と総称される古いタントラの一群があり, その中で最も古く, 最重要であるのが, この “Brahmayāmala” である。この文献は, A. D. 1000 年より前の成立とされている (ibid. p. 39-42)。
 2), 3) どのような文献であるのか, 不明

Vedāntavādinō ¹⁾ 'pi

atindriyam avittīś ca jñānaṃ Bhāskarasaṃmatam /
⁴⁾ vittir ānandamātraṃ ca bhagavadvādisādhanam // 12 //
⁵⁾ śaktisaṃgamasamkṣobhāc ⁶⁾ ⁷⁾ chaktyāveśāvasānikam /
⁹⁾ yat sukhaṃ brahmatattvasya tat sukhaṃ svakam ucyate // 13 //
¹²⁾ duḥkhānām āgamo nāsti sukhaṃ tatra niranataram /
¹³⁾ ānandaṃ brāhmaṇo rūpaṃ tac ca mokṣa iti bhanyate // 14 //
¹⁶⁾ yad yad vai dṛṣyate kiṃcit tat tad brahmeti kalpayet /
¹⁸⁾ tato nānyagataṃ cittaṃ brahmaṇy evāvatiṣṭhate // 15 //
²⁰⁾ priyādarśanam evaikam kim anyair darśanāntaraiḥ /
²²⁾ prāpyate yena nirvānaṃ sarāgeṇāpi cetasā // 16 //
²³⁾ tyaja dharmam adharmaṃ ca · ubhe satyāṅṛte tyaja /
²⁴⁾ ²⁵⁾ ubhe satyāṅṛte tyaktvā yena tyajasi tat tyaja // 17 //

- 1) Tib. rig byed kyi mtha' gsañ bar smra ba las
 2) N_3 °vipatti°, I_2 °vimatti°, Tib tshor min pa'i ye śes
 3) Tib g'zun gis 'dod 4) $N_3I_1I_2$ citti° 5) D dus for nus
 6) N_1 °saṅgamamasyābhācchaktyā°, N_2 °saṅgama (samkṣobha) cchaktyā°, N_3 °saṅgatasamkṣobhāttusaktyā°, I_1 °saṅgamasakhyābhochakti°, I_2 °saṅgamasamkṣobhāt saktyā°, Tib phrad ciñ sbyor ba las 7) P nub for nus
 8) N_2I_1 °vamāni°, Tib mthar gyur pa 9) Tib tshañs pa'i bde ba de ñid
 10) Tib bde des 11) ShN_2 brāhmamucya°, N_1 bāhmamucya°, N_3 svamkimucya°, I_1 vā[omitted one letter]mucya°, I_2 svakimucya°, Tib mñon sum grol bar 'gyur 12) I_1 nirutaraḥ 13) ShN_1N_2 °ndo, I_1I_2 °nda
 14) N_3 tattu, I_2 tu, Tib de la 15) Sh mokṣeti bhanyate (read Ms. bhajyate), N_1N_2 mokṣe bhibhanyate, N_3I_2 mokṣo bhivyajyate, I_1 mokṣo bhibhanyate, Tib thar ba źes brjod do 16) N_1 yadyata vai, N_2 yadyattu, N_3I_2 yadyaddrīya°, I_1 yadyatenedrīya, Tib gañ dag gañ 17) Sh kiñcit [tat] tad bra°, N_1 kiñci-[illegible]dvra°, N_2I_2 kiñcittatradvra°, I_1 kiñcidvra°, Tib cuñ źig...de dañ de ni
 18) Sh 'nyagatacittam [tu], N_1N_2 nyagatancittam, I_1 'nyagatacittam, Tib sems ni g'zan mi 'gyur 19) ShN_1 °hmaṇaivā°, $N_2N_3I_2$ °hmaṇovā°, I_1 °hmamevā°, Tib tshañs pa ñid la 20) I_1 °mekaikaṃ
 21) Sh °nyaddarśa°, I_1 °nye darśa°, Tib mthoñ ba g'zan gyis ci źig bya
 22) Sh svarā°, Tib chags pa chags pa'i 23) N_1I_1 °to, N_2 °to (te)
 24) N_3I_2 °tam, I_1 tyajayita, Tib de yan 25) N_1I_1 °jah

ヴェーダーンタ派の者たちもまた [次の様に述べている]。

- (12) 超感官的な[絶対者]は知覚[されるもの]ではないが、知識[として存在]する、[ということが] パースカラによって承認されている。¹⁾ [一方、絶対者は] 知覚[されるもの] である [が、その知覚は] 歓喜のみである、²⁾ というのが、バガヴァット論者の定説である。
- (13) シャクティとの交合による衝撃にはじまり、³⁾ シャクティの遍入に終る、ブラフマンなる真実の快樂、それが自分自身の快樂と言われる。
- (14) そこでは快樂が途絶えることがない [ので] 苦が訪れ来ることはない。歓喜[こそ] がブラフマンの形態なのであり、そしてそれが解脱と言われる。
- (15) およそ何であれ見られる (経験される) もの、それをブラフマンとみなすべきである。心がそれ以外のものに至ることはなく、ブラフマンのみにとどまる。⁴⁾
- (16) 愛しき女性を見ることのみが唯一[の手段である]。他の経験によって何が [得られようか]。食欲を伴った心をもってさえも、それによって涅槃が得られるのである。
- (17) 正義、不正義を [ともに] 捨てよ。真実・虚偽の両者を捨てよ。真実・虚偽の両者を捨てた後、それによって汝が [真実・虚偽の両者を] 捨てる、⁵⁾ そういう [自我意識] も捨てよ。

- 1) チベット語訳によれば、「パースカラの教義によって認められている」。
- 2) チベット語訳によれば、「バガヴァット論者の教義によって認められている」。
- 3) Sh と N_2 写本の、「ブラフマンの快樂 (sukhaṃ brāhmaṃ)」は採用し難い。チベット語訳によれば「この快樂により目のあたりに解脱する」。
- 4) 同じ偈が、アドヴァヴァジュラ著 “Tattvaratnāvalī (TRĀ)”, Sh p. 19 (宇井 p. 4, 第23偈) にある。そこでは、有形象論者の陥る、ヴァガヴァット論ヴェーダーンタ派の考えの例として挙げられている。
- 5) “Mahābhārata (Poona 批判版)” 12. 316. 40=12. 318. 44. そこでは d 句の tat が tam になっている。しかしながら、Śaṅkara による引用 (『Gitā 注解』 ad 3.1) 中では tat である。以上は、前述の如く、正信公章氏のご教示による。

Bhagavadgītāyām (2-16) api

- ¹⁾nāsato vidyate bhāvo nābhavo vidyate sataḥ /
^{4...}ubhayor api ^{5)...}dr̥ṣṭo 'nto hy anayos ⁶⁾tattvadarśibhiḥ // 18 //
⁷⁾kiṃ ca ⁸⁾grāhyādīśūnyam cec cittam akṣobhyam ucyate /
⁹⁾bādhā ¹⁰⁾svāgamato vajrasattvamudrāviyogataḥ // 19 //
^{12...}kimartham ^{13...}niyamenaitad ¹⁴⁾deśakair eva ^{15...}diśyate /
¹⁶⁾idaṃ ^{17...}tathāgatāśvāsadhīyā ¹⁸⁾pūrvaṃ ¹⁹⁾prakāśyate // 20 //
²⁰⁾bolagarbhe ca ²¹⁾sākāraṃ ²²⁾nirākāraṃ ²³⁾tadagrataḥ /
²⁴⁾madhyamā ²⁵⁾varṇayanty eke ²⁶⁾neti no ²⁷⁾gurudarśanam // 21 //
 [Sh p. 30] ²⁸⁾vajragarbhe ²⁹⁾tadagre ³⁰⁾vā ³¹⁾patitaṃ ³²⁾vā ³³⁾kapālake /
³⁴⁾na ³⁵⁾ceṣṭam ³⁶⁾antarāle 'pi ³⁷⁾tattvaṃ ³⁸⁾vittau ³⁹⁾guror ⁴⁰⁾mukhāt // 22 //
⁴¹⁾vicitraṃ ⁴²⁾vividhaṃ ⁴³⁾khyātam ⁴⁴⁾ityādi ⁴⁵⁾susthitaṃ ⁴⁶⁾katham /
⁴⁷⁾maṇyantargatam ⁴⁸⁾ityādi ⁴⁹⁾sadguroḥ ⁵⁰⁾suṣṭhu ⁵¹⁾saṃgatam // 23 //

1) *Tib* bden pa 2) *Tib* dños 3) *Tib* mi bden

4) *Sh* °yorapi dr̥ṣṭo ['ntaḥ] hyanayosta°, *N*₁ °yorapyanto dr̥ṣṭo hyanayo ta°, *N*₂...°pyantedr̥ṣṭo°..., *N*₃ °yorapyanto dr̥ṣṭo 'nayosta°, *I*₁...°dr̥ṣṭvā hyanayā ta°, *I*₂ °yorapyatto dr̥ṣṭo 'nayo ta°. Cf. "Bhagavadgītā (ed. Sh. K. Belvalkar, Poona, 1968)": ubhayor apy dr̥ṣṭo 'ntas tv anayos

5) *Tib* de yis 6) *Tib* inserts zes 'byuñ ba dañ / gzan yañ /

7) *N*₃*I*₂ kiñcidgrā°, *I*₁ kiñcāgrā°, *Tib* gzan yañ / gzuñ ba...

8) *Tib* gzuñ ba gzugs 9) *Sh* bādhāsvā°

10) *P* luñ gi gnod pa, *D* luñ gis gnod pa 11) *Tib* ldan par

12) *N*₃ °yate tadde°, *I*₂ °yaje terdde°, *Tib* 'di ltar ñes pa ru

13) *Sh**N*₁*N*₂ °kairathadeśya°, *N*₃ °kairavedi°, *I*₁...dr̥ṣya°, *I*₂ °kairavedityamte

14) *N*₃ °tāmsvāmadhiyā, *I*₂ °tāśvāmadipā 15) *N*₃ vālairabhinnamākāraṃ

16) *N*₃ cirā°, *I*₂ virā° 17) *Tib* dbu mar gnas zes gañ smra ba

18) *Tib* de mi 'dod 19) *Tib* omits darśanam.

20) *N*₂ °rbha, *N*₃ vālagarbhe, *I*₂ vālagarbhe 21) *I*₁ °taścā°

22) *Tib* thod pa'i nañ du 23) *N*₃ °ntamrale, *I*₂ °ntulale 24) *N*₂ cittau

25) *N*₂ guru(ro)rmu° 26) *Tib* dga'ba 27) *N*₃*I*₂ °dhā

28) *Sh* susthitaṃ *N*₂ mutthitaṃ, *N*₃ stusthitaṃ, *I*₂ stusthitaṃ, *Tib* legs gnas pa

29) *I*₁ °ñyāmnta°, *I*₂ °ñyata° 30) *Sh* reads his Ms.(*N*₁) as sadgurorusuḥ.

*N*₁ sadgururoḥ suḥ, *N*₂...sukha, *I*₁...saḥ, *Tib* bstan pa

31) *Tib* inserts ji ltar here. 32) *N*₃ sadgrāt, *I*₂ sadrāt, *Tib* sbyar

“Bhagavadgītā” (2-16) にもまた [次の様に説かれている]。

- 19) 真実在でないものが [永久に] 存在することはないし、真実在であるものが存在しなくなることもない。実にこの両者の究極は、真実を見る者が見るのである。
- 19) さらに、もし、所取 [能取] 等のない心は揺れ動かない、と言うならば、[それでは] 金剛薩埵の印を離れているから、[我々] 自身の経典からは否定される。
- 20) 一体何のために、このことが定則として教師達によって示されているのか。このことは、如来 [が衆生を] 慰撫 [するための] 慧によって、既に明らかにされているのである。
- 21) [菩提心は精液となって] 男性器の胎内では有形象、その先端では無形象として [生ずる]、と、ある中観派の一派は述べる。[しかし] 「そうではない」というのが、我々の師の見解である。
- 22) [精液の形での菩提心は] 男性器内であろうが、その先端に於いてであろうが、カバーラに落ちたものであろうが、また [女性器の] 中に於てであろうが、真実とは認められない。[真実は] 師の口から [のみ] 知られるのである。
- 23) 『「多様」とは種々様々なこと、と言われる』云々⁶⁾というの、⁷⁾ どうして、[四刹那の順序が] 正しく位置していようか。『宝珠の内にある』云々⁸⁾というの、正しき師の高く賞讃された [説として、経典と] 斉合する。

1) 辻直四郎訳『バガヴァッドギーター』の訳注によれば (辻: 『バガヴァッド・ギーター』東京, 1980, p. 292) によれば、「変化し、有限なる肉体」を指す。

2) 辻, op. cit., p. 293 によれば、「不変にして無限なる自我、すなわち個人の本体ブルジャ」を指す。

3) チベット語訳では「金剛薩埵の印を持って」。

4) チベット語訳に “skye” があることによる。

5) チベット語訳では「中に住する説を述べるのは」。

6) HV II-iii-7a.

7) チベット語訳の如く “ji ltar” を d 句に置くと、後半の「宝珠の内にある」とする説を否定することになる。

8) ナーガールジュナ著『四印決定』(密教聖典研究会 (1989), p. (98)) に “samvrti-bodhicittamaṇyantargatam” とあるが、これを指しているのかどうか、判然としない。

hasitā¹⁾divisuddhyā²⁾ yad³⁾ ācāryādisamihitam /
 utpatt⁴⁾yā⁵⁾ tad⁶⁾ vyavastheyam^{7... 7)} na⁸⁾ cotpannasvabhāvataḥ^{9) 10)} // 24 //
 citratvāc¹¹⁾ citram¹²⁾ āghrṣṭe¹³⁾ sukhāt¹⁴⁾ pāko¹⁵⁾ maṇeḥ¹⁶⁾ puraḥ /
 guros¹⁷⁾ tattvaṃ¹⁸⁾ vijāniyād¹⁹⁾ vimardād²⁰⁾ viratau^{21... 22)} ramaḥ // 25 //
 karmamudrāṃ^{23... 24)} samāsādyā²⁵⁾ dharmamudrāṃ²⁶⁾ vibhāvayet /
 tasyā²⁷⁾ ūrdhvaṃ²⁸⁾ mahāmudrā²⁹⁾ yasyāḥ³⁰⁾ samayasambhavaḥ³¹⁾ // 26 //
 ānandāḥ³²⁾ prātimudraṃ^{33... 34)} syuḥ³⁵⁾ mahāmudrāṃ³⁶⁾ vinā³⁷⁾ punaḥ /
 āgamāc³⁸⁾ ca³⁹⁾ svasaṃvitteḥ⁴⁰⁾ sadguror⁴¹⁾ upadeśataḥ // 27 //
 vicitraṃ⁴²⁾ karmamudrāto⁴³⁾ vipāko⁴⁴⁾ jagadātmatā /
 sthairyam⁴⁵⁾ vilakṣaṇaṃ⁴⁶⁾ tatra⁴⁷⁾ vimardo⁴⁸⁾ jagadikṣaṇam // 28 //
 sarvasminn⁴⁹⁾ apratiṣṭhānaṃ⁵⁰⁾ mahāmudreti⁵¹⁾ kīrtyate /
 vimalatvāt⁵²⁾ svasaṃvitter⁵³⁾ vicitrāder⁵⁴⁾ na⁵⁵⁾ sambhavaḥ // 29 //

- 1) *ShN₁N₂I₁* sityā° 2) *N₁* yata, *N₂* yet, *N₃I₂* yāt 3) *N₃I₂* samāhi, *Tib* 'dod pa
 4) *N₁I₁* °tyo, *Tib* bskyed rim (*P* rims) la 5) *Tib* de yi
 6) *N₃* tadavamveyam, *I₂* taṃdavasthiyam 7) *Tib* rdzogs pa'i rim pa
 8) *ShN₁N₂* °ṣteḥ, *I₁* °ṣtaḥ, *Tib* mgrin 9) *N₁N₂I₁* °ne, *N₃I₂* °ne, *Tib* nor bu'i
 10) *Tib* rtser 11) *Sh* °ro[h], *N₁I₁I₂* °ro ta° 12) *I₁* °rddhvā°
 13) *N₃* °ttā, *I₁* °to, *I₂* °tā 14) *I₁I₂* °drā
 15) *I₁* samājñāya, *P* brten nas, *D* bsten nas 16) *I₁* °drā
 17) *N₂* tasmādū°, *N₃I₂* omit. 18) *N₃I₂* °syo, *I₁* °syā 19) *I₁* °yaḥ
 20) *N₂* °saṃstavah 21) *Sh* reads *Ms. as* mudrasyā and says it may be
 mudraṃ syuḥ or mudrāḥ syuḥ. *ShN₂* mudrāsyāḥ, *N₁* mudrāmyāḥ?, *N₃I₂* mud-
 rāsyāḥ *I₁* mudrasyāḥ *Tib* phyag rgya (*D* rgyas) so so la 22) *N₁* vinya
 23) *N₃* āgamācumvasaṃvitti, *I₂* āgamācumvasaṃcittim 24) *I₁* °vitaḥ
 25) *I₂* °śakaḥ, *P* man naḡ gi for man naḡ gis 26) *N₃I₂* citrakāmamu°
 27) *N₂* °drānto, *N₃* °drāstā, *Tib* phyag rgya nid 28) *I₁* bhagavanmatā
 29) *N₁* °rya, *I₁* °ryya, *P* bstan pa nid, *D* brtan pa nid 30) *P* de las for de la
 31) *N₂* °rdājja[doja] 32) *N₃I₂* saṃśadikṣaṇam, *I₁* jarādikṣaṃ, *Tib* 'gro ba
 rnam lta ba 33) *N₁N₂I₁* °sminpra°, *Tib* rab tu mi gnas
 34) *N₃* nti[letters missing], *I₁* kirtitaṃ, *I₂* ki[letters missing]
 35) *Sh* °tteḥ vi°, *I₁I₂* °tte vi
 36) *N₁N₂* °trādrerna°, *I₁* °citrārddhana, *I₂* °trāde na

- 20 「笑い」などの清浄〔なる本質〕により、「阿闍梨」など〔の灌頂〕におい
 て〔各々の段階で獲得することが〕望まれているもの、それを生起〔次第〕
 によって確立すべきである。究竟を本性とする〔次第に〕基いてではない。
 25 多様性により「多様」〔の刹那〕がある。こすった際の快樂により「〔異〕
 熟」〔の刹那〕がある。宝珠の街〔が離相の刹那〕である。師より眞実を知
 ることにより「圧碎」〔の刹那〕によって、〔性的な〕喜びを離れた喜びがあ
 る。
 26 羯磨印を達成して法印を修習すべし。その〔法印の〕上に、そこより三昧
 耶〔なる印〕が生じるところの大印がある。
 27 各々の印ごとに〔四種の〕歡喜があることになろう。然るに大印は除く。
 聖經より、また自内証知により、〔また〕正しい師の説示により、〔このこと
 が知られる〕。
 28 羯磨印より「多様」〔の刹那〕がある。世間を本体としていることが「異
 熟」〔の刹那〕である。そこにおいては平静堅固であることが「離相」〔の刹
 那〕である。世間の觀察が「圧碎」〔の刹那〕である。
 29 どこにも依止しないことが大印と言われる。無垢であり自内証知であるか
 ら、「多様」等の〔四刹那のどれもそこには〕あり得ない。

1) チベット語訳により補い得る。

2) チベット語訳では「多様性による mgrin(?) が『多様』である。快樂が『〔異〕熟』
 である」。

3) Cf. 『四印決定』 p. (102): “mahāmudrāyācintyasvarūpayā samayamudrākhyā-
 phalam jājate”.

anābhogaṃ¹⁾ hi yaj jñānaṃ²⁾ tac cācintyaṃ³⁾ pracakṣyate /
 saṃcintya⁴⁾ yad acintyaṃ⁵⁾ vai tad acintyaṃ⁶⁾ bhaven⁷⁾ na hi // 30 //
 tathatāṃ⁹⁾ ye tu paśyanti¹⁰⁾ madhyamārthānusārataḥ /
 te vai tattvavido¹¹⁾ dhanyāḥ¹²⁾ pratyakṣaṃ¹³⁾ yadi samvidāḥ // 31 //
 yāvat¹⁴⁾ sarvasamāropaḥ¹⁵⁾ sa sarvaḥ¹⁶⁾ sarvathā na hi /
 madhyamārtho¹⁷⁾ nirāropas¹⁸⁾ tatrāpohavidhī¹⁹⁾ kutaḥ // 32 //
 jñānajñeyasamāropo²⁰⁾ manyunā²¹⁾ tatra nānyathā /
 sarvas²³⁾ tathā yathāpūrvam²⁴⁾ yathā buddhis²⁵⁾ tathā na hi // 33 //
 yenājātam²⁶⁾ jagad buddhaṃ²⁷⁾ buddhiḥ²⁸⁾ śuddhaiva bodhataḥ /
 niyaṃ²⁹⁾ tasya jagat satyam³⁰⁾ anābhogena dhimataḥ // 34 //
 [Sh p. 31] avibhāvitasambandho³¹⁾ vikalpo³²⁾ 'sau pratityajaḥ /
 tad eṣa eva³³⁾ nirvāṇaṃ³⁴⁾ notkrṣās³⁵⁾ cittavibhramam // 35 //
 pratipakṣe³⁶⁾ sthito naiva³⁷⁾ tattvāsakto 'pi naiva yaḥ /
 gārddhyaṃ³⁶⁾ naiva phale³⁷⁾ yasya mahāmudrāṃ sa vindati // 36 //

- 1) N_1I_1 °ga, N_2 °ge 2) N_3I_2 °cityaṃ 3) $ShN_2I_1I_2$ °kṣate 4) N_1I_1 saci°
 5) N_3 °ntyam, I_2 °ntyupada° 6) I_2 °cityaṃ, *Tib* bsam med byed
 7) N_1 °tudaci° 8) N_3 °cintaṃ bha°, I_1 °cityam bha°, I_2 °cita bha°
 9) $ShN_1N_2I_1$ °thatā 10) N_3I_2 dharmmamāthānu° 11) I_2 śavai
 12) $N_1I_1I_2$ °kṣa 13) $ShN_1N_2I_1$ °dā, I_2 savidāḥ
 14) ShN_1N_2 yo vitsa°, N_3I_2 yogavānsa°, I_1 yovatsa°, *Tib* ji sñed
 15) N_3 °paṃ, I_2 °pa 16) N_1I_2 °rvva, I_1 °rva
 17) N_3I_2 °mātho, *D* dbu ma'i don, *P* dbu ma'i don gyi rjes
 18) ShN_2 °vidhi. N_1 °viddhī, I_1 °rope vidhi, *Tib* dgag sgrub
 19) $ShN_1N_2I_1$ °yā° 20) *Tib* miñ 'dogs pa
 21) $ShN_1N_2I_1$ manyanā, N_3 °ropamunmanā, I_2 °ropam manyanā, *Tib* sñam pa
 22) *Tib* de ni 23) N_2 °rvamta°, N_3I_2 sadrṭttathā, I_1 °rvanta°
 24) N_3I_2 yenājātam 25) I_1 vuddhiṃ, N_3 vuddhyaṃ, I_2 vuddhya, *Tib* nes
 bstan? 26) *Tib* sañs rgyas kyis? 27) *Tib* 'dren 28) *Tib* 'bad med par
 29) N_2 °ndo (ndho) 30) N_2 °tyajaḥ (yaḥ)
 31) ShN_1 °rvvāṇe, N_2 °rvāṇa (ṇe), I_1 °rvāṇa
 32) Sh no krṭhāḥ, N_1I_1 nokrṭhā, N_2 notkrṭhā, N_3I_2 mākrṭhāsci°, *Tib* ma byed cig
 33) $N_3I_1I_2$ °kṣa 34) I_2 °tām
 35) $ShN_1N_2I_1$ °sakto, I_2 sakemnaiva yaḥ *Tib* mi chags pa
 36) ShN_1N_2 gārddham, N_3 sārddhan, I_1 sārddham I_2 gārddhan, *Tib* 'dod pa
 37) *P* de yi for de yis

- 90 無功用なる知識〔こそ〕が不可思議なるものと呼ばれる。〔単に〕思議して
 も思議し得ないものは、〔真の〕不可思議なるものではないだろう。²⁾
 91 中の義に随順して真如を見る者たちは、もし、ありありと〔真如を〕知る
 のであれば、真実を知る、富める者であろう。
 92 凡そあるかぎりの一切の増益、それらはすべて、どのようにしても〔実在
 し〕ない。中の義は増益がない。ここ（中の義）においてはどのようにして捨斥や
 肯定があろうか。⁴⁾
 93 知識とか知識の対象とかいった増益は、思考によって〔つくり出される〕。
 他の仕方によってではない。すべては昔からの〔薫習〕に従って〔あらわれて
 て〕いる。知覚そのままに〔ものごとは〕あるのではない。
 94 世界は不生であると了解し、〔そのこと〕を了解したことによって知覚が
 ひとえに清浄である、そういう賢者にとっては、無功用であるので、世界は
 本来的に真理〔そのまま〕なのである。⁶⁾
 95 〔分別内容と分別対象との〕関係が定かではないこの分別は縁によって生
 じたものである。従ってこれこそが涅槃なのであり、心の迷乱を引き出すも
 のではない。
 96 〔この見解と〕反対の立場には決して立たず、真理に執着すること〔も〕決
 してなく、果報を望むこと〔も〕決してない、そういう者は大印を獲得する。

- 1) チベット語訳では、「思議してから、思議されないものとなすのは (bsams nas gañ
 žig bsam med byed)」。
 2) TRĀ に同じ偈がある (Sh p. 20, 宇井 p. 5, 第30偈)。
 3) チベット語訳北京版では、「増益のない中の義に従い」。
 4) TRĀ に同じ偈がある (Sh p. 20, 宇井 p. 5, 第29偈)。宇井は a 句 “yāvat” を “yo
 vit” とする。
 5) チベット語訳では、「知識とか知識の対象とか名づけるのは」。
 6) TRĀ に同じ偈がある (Sh p. 20, 宇井 p. 5, 第31偈)。

yathaiva karmamudrāyām¹⁾ ānandādivyavasthitiḥ²⁾ /
 tathā samāyamudrāyām³⁾ vajrācāryaprasādataḥ // 37 //
 vicitraṃ karmamudraiva dharmamudrā⁴⁾ vipākajā⁵⁾ /
 vilakṣaṇaṃ mahāmudrā vimardaḥ⁶⁾ samayo bhavet // 38 //
 mahāmudrām ajānānāḥ karmamudraikasādhanāḥ⁷⁾ /
 āmnāyatattvato bhraṣṭā rauravaṃ yānti yoginaḥ // 39 //
 mudrās tāvaṃ na budhyante¹¹⁾ catasraś ca catuḥkṣaṇāḥ¹²⁾ /
 yāvaṃ na śavareśasya spr̥śyante¹³⁾ pādapāṃśavaḥ¹⁴⁾ // 40 //
 samyak sekaṃ vidhāyaitad dhaṭhaduḥsekavarjitam¹⁵⁾ /
 yat sādhitam¹⁶⁾ mayā puṇyaṃ tenāstu jagataḥ sukham // 41 //
 // Sekanirdeśaḥ¹⁷⁾ samāptaḥ¹⁸⁾ //

- 1) N_3I_2 °drāyā ā° 2) N_1I_1 °ti, N_2 °ti(h), N_3I_2 °taḥ
 3) $ShN_1N_2I_1$ °drāyā va°, N_3 °drām, I_2 samāyamudrāmā, Tib phyag rgya la
 4) I_1 karmma° 5) N_3 °jaḥ, I_2 dharmamudreva dharmamudrāvikajāḥ
 6) N_1 rddā, N_2I_1 rda, P rnam par śes pa 7) N_3I_2 °yā
 8) $ShN_1N_2I_1$ °draiva sā°, Tib phyag rgya gcig 9) $ShN_1N_2I_1$ °nā
 10) D de ŋid la for de ŋid las 11) $ShN_1N_2N_3I_1I_2$ °drā, Tib phyag rgya bži
 12) Sh buddhyante, N_3I_2 buddhyanti 13) ShN_1N_2 ...spr̥śanti, N_3 sarvarasasya
 pr̥ṣenti, I_1 śavareśasyaśanti, I_2 savarasasya spr̥ṣartti
 14) Tib gtso bo ri khrod pa'i 15) ShN_2 pādapotsavaḥ, N_1I_2 pādapātsavaḥ,
 I_1 pāda[one letter missing]yotsavaḥ, Tib žabs kyi rdul la
 16) D inserts mgon po chos ŋid ji lta bu // chos rnam thams cad rnam dag
 pa // ji lta bur ni rfid 'gyur gsuṅs // chos rnam kun gyi ŋo bo ŋid //
 17) $N_1N_2I_1$ °ka, I_2 °kka? 18) ShN_2 °yaitat, N_1 °yaitata, N_3 °yaitām I_1 °yai-
 tate, I_2 °yait, Tib cho (P mcho) ga'i don 19) N_2 °ḥśe°, N_3 °ḥkhai°, I_2 °ḥṣyai°
 20) N_1I_1 yadaśādhitam mayā, N_2 yad sādhitam mayā, N_3 padaṃ sādīmathā,
 I_2 padūsādīmathā, Tib bdag gis gaṅ byas (P byas pa'i)
 21) N_3 °nirṇaya, I_2 °nirṇaya, Tib dbaṅ bskur ba ŋes par bstan pa [transliterate-
 rated as šekanirdeśa at the beginning of the text]
 22) N_3 inserts kṭtir iyaṃ śrīmatpīṇḍitāvadhūtādvayavajrapādānām. I_2 inserts
 katir iyaṃ śrīryatpīṇḍitāvadhūtādvayavajrapānā. Tib inserts slob dpon rgyal
 ba mai (P me) tri pas mdzad pa rdzogs so.

- 37) 羯磨印に〔最初〕歓喜等の〔四歓喜の〕配置があるのと全く同様に、金剛
 阿闍梨の恩恵により、三昧耶印に〔も四歓喜の配置がある〕。
 38) 「多様」〔の刹那〕は羯磨印に他ならない。法印は「異熟」〔の刹那〕にお
 いて生じる。「離相」〔の刹那〕は大印である。〔とすれば〕「庄砕」〔の刹那〕
 が三昧耶〔印〕となろう。
 39) 大印を知ることなく、羯磨印のみを成就の手段となし、正統の真実より惑
 乱している瑜伽者は、叫喚〔地獄〕に至る。
 40) 〔師〕 Śavareśa の足の塵に触れないうちは、四印も四刹那も理解されない。
 41) 正しく〔四〕灌頂を〔四歓喜・四刹那・四印に〕配当して、以上の様にハ
 タ〔ヨーガ〕の悪しき灌頂〔説〕は斥けられた。私によって達成された〔こ
 の〕福德により、世間の人に安楽あれかし。

『灌頂説示』終り。

(野口圭也)

- 1) チベット語訳テリゲ版では、40偈と41偈の間に、次の1偈の挿入がある。「主は、法
 性のままに清浄なる一切諸法をあるがままに得よ、と仰せられた。〔これが〕一切諸法
 の本性である。」この偈がどこから混入したのかは不明。
 2) あるいは「灌頂を授け」か。チベット語訳では、「正しい灌頂儀式のために」。
 3) 本篇の題名は、 N_1 , N_2 , Tib に従い、Sh の “Sekanirṇaya” を改め “Sekanirdeśa”
 とした。『ラーマバーラ注』も “Sekanirdeśapañjikā” であるので、“Sekanirdeśa”
 が妥当と考えられるが、本篇の内容が、灌頂と対応される四刹那の順序を決定するこ
 とを旨としていることを考慮すると、“Sekanirṇaya” も必ずしも不可能ではない。
 TRĀ 中でも本篇を “Sekanirṇaya” と述べている (Sh p. 21, 宇井 p. 6)。
 4) N_3I_2 は、本篇の著者を補い、「吉祥なる教師アヴァドゥータ・アドヴァヤヴァジュラ
 上足」とし、また Tib では「勝者マーイトリーバ阿闍梨」としている。アドヴァヤヴァ
 ジュラに付されるアヴァドゥータ (avadhūta) の語を、先に、密教聖典研究会 (1989)
 p. (121), p. (145) に於いて、「〔脈管〕アヴァドゥーティー〔の實踐に通達した者〕」と
 訳出したところ、奥山直司氏より、そのように限定して訳出する必要があるのか、と
 いうご指摘を頂いた。正しく奥山氏の仰られる通りであり、何らかの伝承等の根拠が
 あるわけではないので、このような限定的な訳は不適切と言える。橋本泰元・坂田貞
 二氏「中世インドにおける宗教家と旅と思想形成」『歴史学研究』582号 (1988), p. 44
 に、16世紀ベンガル地方の用例として、“avadhūt”=「遊行僧」ということばが挙げら
 れている。時代的な隔りはあるが、「遊行僧」もしくは「修行者」といった訳語がより
 適切であろう。

『灌頂説示』補注

本篇は、ナーガールジュナ著『四印決定』（密教聖典研究会(1989)所収）と同様、HVに説かれる四刹那説の第三番目と第四番目の順序について論じ、かつ非仏教の説を斥ける、という形で、性的実践に対し否定的な見解を示している点に特色がある。特に TRĀでも見られた如く、ヴェーダーンタ説を大きくとりあげているのは興味深い。また、四刹那と四印の対応を論じる中、TRĀとの共通項も見出される。TRĀの末尾に近く、「これ（真言の教え *mantraśāstra*）に関して、我々は『灌頂決定』という名の書物を著した (*kr̥tāś cāsmābhir atra sekanirṇayo nāma granthah*)」(Sh p.21, 宇井 p.6) と述べ、アドヴァヤヴァジュラの教相判釈について、密教以外は TRĀで、密教については本篇で述べている、ということを用意しているようである。

先述の如く、本篇に対してはラーマパーラによる注釈があり、また、高田仁覚、磯田照文両氏のご研究が既にあり、本来ここでは、それらを詳細に紹介、検討しつつ本文を理解してゆくための注記を記すべきであるが、紙数の関係で、先学の研究成果の紹介は大幅に割愛せざるを得ず、また『ラーマパーラ注』も準備と能力の不足のため、ほとんど参照し得なかった。後日、資料を整えた上で、別の機会を得て、この不備を補う所存である。

第1偈 “*evam*” 字については『四印決定』p.(92)にも言及されている。これは『四印決定』p.(93) 訳注にも記されている通り、HV II-iii-2以下に依る記述である。ここでも同様に、HV II-iii-5ab 「そこ（中央を *vaṁ* 字=男性器に飾られた *e* 字=女性器）に、刹那の区別により〔四種に〕区別された〔四〕歓喜が生ずる (*ānandās tatra jāyante kṣaṇabhedena bheditāḥ*)」というくだりとの関連が推定される。

「四刹那」とは、性交の段階を密教教理と対応させて、両者の類推によって、真理に到達する過程を説明したものであろう。頼富氏は「四歓喜の段階とその各々の特徴の一端を抽出したものと考えられる」とするが、さらに、“四刹那は HV 独自の教義であったようで、他の母タントラにもその直接的表現は見当らなく、四歓喜ほどは後世に影響を与えなかったようである”としている（頼富, p.361）。しかし、本篇ならびに『四印決定』では、四刹那の順序について考察して HV 本文とは異なる説を提出しているのは興味深い。

第2～6偈 HV II-iii-6～7 偈に以下の如く、四刹那の順序とその内容を述べ、それを四歓喜と対応されている。

vicitra—接吻と抱擁—*prathamānanda*

vipāka—楽の知識の享受—*paramānanda*

vimarda—自分が快楽を享受したという観照 (*ālocana*)—*vīramānanda*

vilakṣaṇa—上の3つとは別の、貪、離貪を離れたもの—*sahajānanda*

ところが HV の Dharmakīrti 注では *vimarda* が、「この3つ以外」で第四、

vilakṣaṇa が「観照」で第三に置かれ、Snellgrove はこれに基いて両者をいれかえている (Snellgrove, *op. cit.*; pt I, p.94~95)。YRM は HV と同じ順序である。この HV の挙げる順序が本篇で言うハタヨーガ説と同じものであろう。但し、『四印決定』には、*vimarda* と *vilakṣaṇa* をいれかえるのがハタヨーガ説としているくだりがある (p.(94))。他にアドヴァヤヴァジュラ『真実に関する二十頌』（密教聖典研究会(1990) p.(66)）では HV と同じ順序である。これをまとめると

vimarda→*vilakṣaṇa*=HV, YRM, 『真実に関する二十頌』1, 『灌頂説示』ハタヨーガ説

vilakṣaṇa→*vimarda*=HV Dharmakīrti 釈, 『灌頂説示』, 『四印決定』

なお、磯田氏は HV では *vimarda*→*vilakṣaṇa* の順序であることを述べたうえで、四歓喜については *paramānanda*—*sahajānanda*—*vīramānanda* という順番もあることを指摘している (*op. cit.*, p.115, 125)。

ここでは、第3偈～4偈に見られるように、アドヴァヤヴァジュラの認識論に基いて順序を設定している点が興味深い。先述 HV の各刹那の定義に基いているわけだが、アドヴァヤヴァジュラの趣旨としては、*vipāka* において、「楽の知識の享受」があるならば、「自分が快楽を享受したということを観照」する前に、そのような観照内容の形相を持たない (= *vilakṣaṇa*) 知覚そのものがあるはずだからそれが「観照」より前に来て、しかる後に「観照」すなわち自己認識が起こり、それが「成就」（認識の完成かつ悟り）である、ということであろう。但し、アドヴァヤヴァジュラはこのような HV の内容説明を踏襲した上で順序をいれかえているのであり、HV Dharmakīrti 釈の説とは順序は同じであっても意味するところは異なっていることになる。

第12～18偈 ここに述べられるヴェーダーンタ説については正信氏より多くのご教示を頂いている。担当者がそれを十分に理解し和訳に反映し得たか、となると甚だ心許なく、正信氏に申し訳なく感じている次第である。ここでは、氏のご教示を紹介することはできないが、機会を改めて『ラーマパーラ注』とも対比させつつ、十分に考察したいと考えている。第12偈では、バースカラ説とバガヴァット論者の説を対比させている。この対比は TRĀにも説かれている (Sh p.19, 宇井 pp.4~5, 21.27) が「バガヴァット論者」が具体的に何者を指すのかは判然としない。中村元『初期のヴェーダーンタ哲学』（東京, 1950, repr. 1981）p.155~159に挙げられる「ヴェーダーンタ学派の諸名称」の中にはこの呼称はない。なお中村氏は同書の増補の部分で TRĀのこの部分を取りあげている（「特論第三 バースカラと唯識説」pp.648~650。同氏の *Bhāshara, The Vedāntin, in Buddhist Literature, ABORI XLVIII and XLIX, 1968, pp.119~122* とほぼ共通）。そこでは “*bhagavataḥ samsthitavedāntavadi[n]*” を「主神によって立てられたヴェーダーンタ論者」と訳している。

第19偈 a b 句について高田氏は「恐らくギシュヌ系のサンヒターに説かれる不動の神

我と思われるもの」と述べるが (op. cit., p. 259 下), いかかなものであろうか。

第20偈 磯田氏は, 「如来の安息」とは「毘盧遮那(色)・宝生(受)・阿弥陀(想)・不空成就(行)の四如来を阿閼(識)が刻印することであるから, 識によって理解すべきであるというのである」と, 『ラーマパーラ注』に拠って述べている (op. cit., p. 112)。阿閼の象徴する識蘊が他の四蘊＝四如来の上位に立つことについては, アドヴァヴァジュラ『五如来印についての解説』(密教聖典研究会 (1988), p. (47)f.) 参照。ただし, そこではこの識蘊 (=阿閼) もまた, 金剛薩埵に刻印されるものとされる。

第22偈 「真実は師の口から知られる」とは, タントラ仏教にあっては第四灌頂またサハジャ思想の行法否定主義の文脈中にしばしば見出される表現である。e. g. “Hevajrasekaprakriyā (ed. L. Finot, JA, Juil-Septbre, 1934)” p. 31, 1.4: gurūpadeśāc caturthasekaṃ labdhvā. また野口「Indrabhūti の sahaja 説」(『豊山教学大会紀要』15号) p. (36), 他に “Samputodbhavantra” I-iii (テキスト未校訂) にも “guruvaktrāt tal labhyate” という句がある。アドヴァヴァジュラのサハジャ説がどのようなものか, 『俱生についての六頌』といった著作を見ても必ずしも明確ではない。磯田氏の「真実とはこのような執着をまったく離れたものであり……」という解説 (op. cit., p. 112) が『ラーマパーラ注』に拠るものであるなら, 分別や努力を伴う実践を斥けるインドラプーティのサハジャ説と通じるものがあることになる。21～22偈の性的な実践を否定する趣旨とも合致する。

第24偈 HV II-iii-11 に, 『笑み』などの清浄〔なる本性〕によって阿閼梨〔灌頂〕があり, 同様に, 『見つめあうこと』に秘密〔灌頂〕が〔配当され], 『手をとること』に般若〔智灌頂〕が〔配され], そして『両当の交合』に, さらに〔同様の〕それ〔第四灌頂〕が〔配される〕 (hasitādīsuddhyā tv ācārya ikṣaṇe guhyakas tathā / prajñā hi pānyavāptau ca tat punar dvandvatantrake//) とあるのに依拠したものである。性行為の段階を四灌頂に配当したものが, 本篇ではこれを究竟次第によってではなく生起次第によって確立すべき, としていることが注目される。実際の性的実践ではなく, 瞑想によって行なうもの, との意に解すれば, アドヴァヴァジュラが性的実践に対して消極的な立場をとっていたと考えることができる。なお, 性行為の段階立ては, HV II-iii-54 には, 第三番目に pānyavāpti に代わり, 「抱擁 (ālīṅga(na))」を置く例もある。これらは “Abhidharmakośa” III-69cd “dvandvālīṅganapānyavāptihasitekṣitamāithunāḥ” という「六種の欲の享受」と共通するものである (“Abhidharmakośabhāṣya” の Pradhan 本1975年版では °hasite° を °vasite° としているが, これは誤りであり, 1967年版 °hasite° が正しい)。ここで, 第一段階の灌頂(「笑み」に対応する)を「阿閼梨灌頂」としているが, アドヴァヴァジュラ自身の用語では, 第一段階の灌頂の総称には「瓶灌頂 (kalasābhīṣeka)」の語を『灌頂主旨綱要』(密教聖典研究会 (1989) p. (108)) において用いている。こ

こでは典拠である上述の HV の記述に基いたものであろう。なお上記 HV では第四灌頂を単に “tat punar” の語のみで表現しているのは興味深い。

第28偈 磯田氏は d 句を「摩滅は世間に観待する」と訳す (op. cit., p. 113)。

第29偈 高田氏は「四印や三妙楽に就ての解釈は, 漢訳(施護訳・成一・七五左)金剛頂経初会に出ているのと順序は異なる外は殆ど一致している」と述べている (op. cit., p. 260 下)。

第29～38偈 磯田, 高田両氏とも29～36偈を大印の説明に配当する。このことは, 記述からも理解されるが, 38偈にもあるように, 四印の順序は, 羯磨印—法印—大印—三昧耶印である。すなわち大印よりも三昧耶印の方を高次に置いている。本文訳注にも記した通りこの大印の説明中, 30, 32, 34偈が TRĀ に於て, 中観派の「一切法無住論者 (sarvadharmāpratīṣṭhānavādin)」の説を述べる偈と共通している。この中観派一切法無住論は TRĀ の教相判釈では, 大乘の波羅蜜理趣中最高の位にあるものだが, TRĀ ではさらにその上に最高の立場として真言理趣 (mantranaya) を立てている。そして, その説明は TRĀ では説かず『灌頂説示』を著したのだと述べている (Sh p. 21, 宇井 pp. 6, 21～22, 27～29)。三昧耶印はこの真言理趣に対応するものとして, その中に四歡喜が配されるものとされているのであろう。ここでは刹那の順序中第三と第四を交替させたために, それに対応する四印の順序も三昧耶印と大印がいれかわり, 三昧耶印が最高の段階となった。そこであたかも大印が最高の境地を示すかの如き説明を加えつつ, 三昧耶印がそれ以上の段階であることを示すために, 大印を波羅密乘 (=頭教) 中最高の立場, 三昧耶印をそれに勝る真言理趣 (=密教) の立場と配当したものであろう。37偈の「金剛阿閼梨の恩恵により」の語は, このような背景を示唆するものと思われる。27偈では, 大印以外の三種の印ごとに四種の歡喜があるとされるが, 大印をここで省くのは上記のように波羅密乘の最高の立場に充てていることと関連するかもしれない。なお HV には, 直接, 四印を, 四刹那—四歡喜—四灌頂と対応させる記述はなく, 四分法を列挙する I-i-23 以下でも, 四印は挙げられていない。HV にはそもそも四印の記述がなく, 元来, 四歡喜—四刹那と, 四印とは, 系統を異にする考え方であったと言えるかもしれない。そして HV 以後, アドヴァヴァジュラ以前に HV の四刹那の順序で羯磨—法—三—大の順序で四印と対応させた例があったことが推測される。

第30偈 c 句の磯田氏の訳「思惟してから思惟を滅する」は Tib に基くものであろう。

第39偈 「中観派一切法無住論を正しく理解せずに, 性的実践のみにふける者は, 地獄に落ちる」との主旨か。

第40偈 “śavareśa” を磯田氏は「主, śavareśa」とし (op. cit., p. 113), 高田氏は「山地未開人」の意に解している (op. cit., p. 260下)。“śavara” の語には, 高田氏の解するように「デカン高原の山間部族 (後には「野蛮人一般」)」の意味があるが, それ

だと、“śavareśa”は「山間部族の首領」となり、その「足の塵に触れているうちは」ならば意味が通じなくもない。しかしながらここでは八十四成就者の一人 Śavarapāda を指していると考えべきである。アドヴァヤヴァジュラの伝記を記した“Yathāśrutakrama” (ed. G. Tucci, A Sanskrit Biography of the Siddhas and some question connected with Nāgārujuna, OPERA MINORA, parte 1, Rome, 1971, p. 222~223. 初出は, *Journal and Proceeding of the Asiatic Society of Bengal*, XXVI, 1930) に、アドヴァヤヴァジュラが Śavareśvara を訪ねて弟子となることが述べられている。彼が本篇の Śavareśa に相当すると見てよいだろう。すなわち、アドヴァヤヴァジュラの師にあたる。『ラーマパーラ注』にも「Śavara は精髓を有する。吉祥なる Śavarapāda の成就を得る。残余の部分は理解しやすい (ri khrod pa ni sñiñ po can te / dpal ri khrod pa'i žabs kyi dños grub thob pa'o // lhag ma ni go sla'o //, (sDe dge 160b2, 北京 175b4)」とある。なお、“Yathāśrutakrama” については、密教聖典研究会における共同研究に基き、森口光俊の担当による新テキストと和訳が用意されている。

第41偈 これまで灌頂についての言及がなかっただけに a 句は極めて唐突な印象がある。本篇では、四刹那について各項の内容は HV の記述を踏襲しつつ第三と第四の順序をいれかえた訳だが、四印との対応から推測して、四歓喜・四灌頂も四刹那に合わせて第三と第四をいれかえていると考えられる。すると四灌頂の中で第三の般若智灌頂と第四灌頂が入れかわることになるが、第四灌頂を第三に置くことは不合理であるし、『灌頂主旨綱要』でもこの順序はいれかえていないので、四灌頂のみは順序は HV のままで、四歓喜、四刹那との対応のみ入れかえていることになろう。すなわち

3. 般若智灌頂—俱生歡喜—離相

4. 第四灌頂—離喜歡喜—圧碎 (cf. 第25偈)

筆者は HV の第四灌頂はサハジャ思想と密接な関係を持つと考えているが、アドヴァヤヴァジュラはここで HV の伝統を継承しているかのように見せつつ、それを離れた別途の体系を構成しようとしているようにも見うけられる。性的実践に対する否定的な姿勢はその一つであろうし、本篇34偈や、他の著作でしばしば言及される「無功用瑜伽 (anābhogayoga)」は、サハジャ説の展開形と言えるかもしれない。一方で HV の聖典性を保持しつつ、HV の記述を読み変えてゆく、というのが、本篇の主題の一つであろう。

12. Svapnanirukti¹⁾

[Sh p.45] namaḥ sarvajñāya²⁾ /
 (3... ..3)
 vinaye cābhidharme ca sūtreṣu jinapuṅgavaiḥ /
 dharmāḥ svapnopamāḥ khyātā vispaṣṭam tat prakathyate // 1 //
 (4... ..4)
 svapnaṃ satyam asatyaṃ vā ciccitraṃ vā cid eva vā /
 (5) (6... ..6)
 māyā vāthāpratiṣṭhānaṃ satāṃ kim iha sammatam // 2 //
 (7) (8)
 svapnaṃ satyam abodhena tad bodhe yāty alikatām /
 (9) (10) (11)
 prathame śāsvatajñānaṃ dvitiye nāstitā bhavet // 3 //
 (12... ..12)
 prabodhāt kalpitāpohe nānubhūtir apohyate /
 (13) (14) (15... ..15)
 (16... ..16) (17)
 saccicctraprakāśātmā yad asty anubhavo mahān // 4 //

- 1) Tib °nir de śa 2) T samajñāya, Tib sañs rgyas la
 3) Sh °yeṣvabhi(suvā)dharmeṣu, N₁ °yesucābhidharmeca, N₂ °yesuvābhi(sva-
 bhi)dharmeca, I °yesurābhidharmaica. We follow T at present.
 4) Sh N₁ N₂ I °ṣṭārthaṃ tat ka° 5) T °na
 6) Sh N₂ vā [----] videva, N₁ I vāvideva, T vāciccitraṃ vācideka, Tib sna
 tshogs sems sam rnam med sems
 7) Sh yathā prati°, N₁ (illegible) thāprati°, N₂ yathāprati°, I tathāprati°, Tib
 ḥam yañ na 8) Tib omits. 9) Sh N₂ °na[h], N₁ °na 10) I bodhi
 11) Sh N₂ yā(va)tyali°, N₁ yāvatyali°, I yāvattalyi°
 12) Sh °me [tu] svata[h] jñā°, N₁ I °me svatajñā°, N₂ °me(tu)svatajñā°, T
 °me śāsvataṃ jñā°, Tib rtag par śes bya ste
 13) T prayodhāt 14) Sh °tā yohe, N₁ °tāpahe, N₂ °tā peha, I °tāyaphe
 15) N₁ N₂ I °bhūrirayohyate
 16) Sh N₁ I saccitrprakāśā°, N₂ saccitrprakāśā°, Tib sems bcas sna tshogs sel
 17) Sh yadya[da]styanu°, N₁ N₂ I yadyastyanu°

12. 夢 解 説¹⁾

一切知者に帰命し奉る。²⁾

- (1) 律と論と經〔の三藏〕において、最勝者達は諸法が夢の如きものであると
 説いた。明かにそのことを〔ここに〕説く。
 (2) 夢とは、(①) 真実であるのか或は(②) 虚偽であるのか、或はまた
 (③) 心の多様さであるのか或は(④) 心そのものであるのか、(⑤)
 幻であるのか或はまた(⑥) 無住であるのか。この点について、どれが賢
 者達の見解であるのか。
 (3) 目覚めていなければ夢は真実であるが、目覚めた時はその〔夢〕は虚偽と
 なる。第一の場合〔即ち目覚めていない時は〕、〔夢はその人によって〕常住
 と知られるが、第二の場合〔即ち目覚めた時は〕、〔夢は〕実在しないであろ
 う。
 (4) 〔夢から〕目覚めたあとに妄想されたものが消え去っても、〔夢の中で〕感
 受〔されたこと〕は取り除かれはしない。何故ならば、³⁾ 実在する心が様々に
 顕れることを本質とする強い感受があるからである。

1) 密教聖典研究会 (1988) p. (6) において記した如く、Tib 語音写タイトルは 'sva-
 pnanirdeśa' とあるが、-nirukti が妥当であると考え。また、この『夢解説』にお
 いてアドヴァヤヴァジュラは、「夢 (svapna)」なる語を中性名詞として扱い、以下の
 解説を展開していると考え。それ故、テキスト中ではこの語をその如く扱った。

2) Tib 「仏陀に帰命し奉る (sañs rgyas la phyag ḥtshal lo //)。」

3) Tib 「心とともに様々な〔姿〕を取り除くことを本質とする (sems bcas sna
 tshogs sel bdag ŋid //)。」

kṣaṇadhvaṃsyālayād¹⁾ maulāt²⁾ pravṛttibhyo vicitratā /
 tāś ca tatra tadākārās cid evaitat tad iṣyate // 5 //
 svapnāt svapnaṃ yadaiva³⁾ syāc ciccitrālikatā tadā /
 naiva⁴⁾ satyam asad vitter⁵⁾ na cocchedaḥ prakāśataḥ // 6 //
 kim anāmnī kṛtaṃ⁶⁾ nāma nāmnī māyeti vā kṛtaṃ /
 nāmnī na yujyate nāma na pratiṣṭhā tv anāmani // 7 //
 ṣaṭsv iha dvitayaṃ heyam⁷⁾ catvāro bodhaye matāḥ /
 svapnatulyam idaṃ viśvam ittham uktaṃ jinottamaiḥ // 8 //
 kiṃ cāsthānamato viddhī buddhasarvasvam uttamam /
 saṃvittiyā sadguror yatnāc caryayā ca viśeṣataḥ // 9 //
 // svapnaniruktiḥ samāptā¹⁸⁾ //

- 1) *D* kun gshig 2) *T* molāt 3) *Tib* de
 4) *P* rnam par brtag, *D* rnam par gnas
 5) *Sh* ciddeśitaṃ, *N*₁ *N*₂ cideśitat, *I* videśitan
 6) *Sh* *N*₁ *N*₂ *I* yadeva 7) *I* saca 8) *Tib* ḥjug(*vṛtter ?)
 9) *Sh* *N*₁ *I* anyanni°, *N*₂ anyam ni°
 10) *Sh* nāma [nā]mni, *N*₁ nāmamni, *I* nāma-
 11) *Sh* *N*₁ *N*₂ nāma aprati°, *I* nāmatyapрати° 12) *Tib* miñ ni
 13) *Sh* ṣaṭnivahadvitayaṃ [ca], *N*₁ *N*₂ ṣaṭnivahadvitayaṃ, *I* yatnivahadvita-
 yetta, *T* ṣaṭsvihadvitiyaṃ heyam, *Tib* ḥdir ni drug las gñis der byos
 14) *N*₂ matā 15) *N*₁ uktaji° 16) *I* jinnotamai 17) *I* buddhi
 18) *Sh* *N*₁ *N*₂ *I* insert iti.

- (5) 刹那に滅する根本阿頼耶〔識〕からの諸の転変より、〔夢〕の多様性がある。
 また、それ等〔諸の転変〕がその〔夢〕において、その〔夢〕の諸の形相と
 してあるのであって、心そのものがこの〔夢〕であると是く認められる。
 (6) 夢の後に〔別の〕夢が起ころうとする時、〔夢が〕心の多様さ〔の顕れであ
 るということ〕が虚偽となろう。〔夢は〕真実在でもなく、非実在でもない。
 〔形相を〕顕す〔作用〕がある故に、意識が断絶することはない。
 (7) どうして〔本来から〕名がないものに名が付けられるのか、或はまた〔夢
 という〕名に幻と〔名が〕付けられるのか。〔夢という〕名に〔幻という〕
 名は不合理であり、また、〔本来から〕名がないものには所住がないのであ
 る。
 (8) ここでは、〔第二偈で述べた〕六つのうち二つ〔の見解 (③, ⑤)〕が斥け
 られるべきであり、〔残りの〕四つ〔の見解〕が菩提のために考えられたの
 である。このすべては夢に等しい、と是く最勝者達によって言われた。
 (9) 更にまた、汝は〔夢が〕無住であるという考えが覚者の最上なる全財産で
 あると、正しい師の知識によって努力して、また特に行〔をなすこと〕によ
 って知れよかし。

『夢解説』終わり

(大塚伸夫)

- 1) Tib 「刹那に転変する根本阿頼耶〔識〕が様々に顕れて諸の転変がある。それとそ
 において、分別されたもの (D 安住したもの) が心そのものであると是く認められる
 (skad cig ḥjug pa kun gshi rtsa // sna tshogs snañ ba ḥjug pa rnam // de
 dañ der ni rnam par brtag (D gnas) // sems ḥdi fiid ni de ltar ḥdod //)。」
 2) Tib 「夢が夢そのものとしてあって (gal te rmi lam rmi lam fiid //)。」
 3) Tib 「〔夢は〕実在するものとして起こるのでもなく、実在しないものとして起こ
 るのでもない。顕現している間は断絶することはない (yod dañ med pa ḥjug med
 pa // gsal ba la ni chad pa med //)。」
 4) Tib 「名が幻そのものであると気遣うのか (miñ ni sgyu ma fiid du dogs //)。」
 5) Tib 「名は無住である (miñ ni mi gnas pa yin no //)。」なお、「無住」に関する
 アドヴァヤヴァジュラの見解については下記を参照されたい。宇井伯寿 (1952) p. 28~
 29, 36~37. 磯田熙文 (1978) p. 119~120. 密教聖典研究会 (1988) p. (51)~(53). 本
 稿, “Apratiṣṭhānaprakāśa” p. (80)~(83).
 6) Tib 「自らの知識と師の言葉と殊勝なる聖教によって知れ (rañ rig dañ ni bla
 maḥi bkaḥ // luñ gi khyad par gyis śes so //)。」

13. Tattvaprakāśa¹⁾

[Sh p. 46] // namo buddhāya²⁾ //
 prajñopāyātmakam vande buddhatrikāyarūpiṇam /
 prabhāvāj jāyate yasya bhavanirvāṇam uttamam // 1 //
 keṣoṇḍukam yathākāśe taimiro manute janaḥ /
 tathāvidyātamaśchanno jagad atyantabāliśaḥ // 2 //
 śuddhadrṣṭer yathā keśā bhrāntair ākāśalakṣitā /
 bhāvā bhānti tathā sarve yoginaḥ śuddhadarśinaḥ // 3 //
 keṣoṇḍukam ahaṃ vakṣye hantākāśanirikṣyatām /
 śuddhadrṣṭis tadā bhūyān neti bhrāntā matis tavaḥ // 4 //
 taimirabhrāntypohāya prṣṭo nety uktavān asau /
 prakāśetarasūnyatvād vidhyapohau na tattvataḥ // 5 //

1) P °pragasa, D °prakasa, 2) T namo vajrasattvāya, Tib 'jam dpal g'zon
 nur gyur pa la phyag 'tshal lo.

3) N₁ vandhe, N₂ vandha . 4) Sh N₁ baddha° 5) Sh °vāt, N₁ I °vā, N₂ °vo

6) Sh N₁ N₂ jñāyate 7) N₂ T I bhavo° 8) Sh N₁ °ṇḍūkam 9) N₂ temiro

10) Sh N₁ N₂ I omit these passages, supplied from T and Tib. The lines in the
 following verses reconstructed by Sh may all be mismatched.

11) T daty[anta?] (one letter damaged, illegible) bāliśaḥ

12) Tib de b'zin ma rig mun sgribs pa'i / byis pa rnam ni 'gro sñam sems /

13) T °drṣṭe 14) T illegible, half damaged, supplied from Tib.

15) Tib 'khrul pas mkha' la mtshon pa yis[D yi] / skra la dag pa'i mig gis
 lta / 16) T bhrānti is corrected to bhānti in the MSS.

17) Tib mthoñ ba dag pa'i rnal 'byor pas / srid pa thams cad de ltar rtogs /

18) T vikṣye? 19) Sh N₁ N₂ °nirākṛtām 20) N₁ I yān, T Tib brūyān

21) N₂ nati 22) I °nto 23) N₂ T °va 24) N₂ tenira° 25) I °hāye

26) Tib phyi nas (prṣṭha) 27) N₁ T vidhyāpohau, N₂ °pohā

13. 真実明説

「仏陀に帰命し奉る。」¹⁾

- (1) その威力によって、最勝なる有（輪廻）と涅槃が生じるころの、般若と方便を本体とし、三身仏の姿をした〔お方に〕、私は、敬礼する。
- (2) あたかも翳眼の〔病を持つ〕人が、空中に〔実在しない〕髪網なる〔幻影〕を知覚するように、無知の闇に覆われた極めて愚かな者は、世間を〔実在すると思っっている。〕
- (3) 健全な眼を持つ者にとって、髪〔網〕は迷乱者が空中に見ている〔のにすぎない〕ように、清浄な眼を持つ瑜伽行者には、全ての存在は〔迷乱によって〕現われる〔にすぎない、と知る。〕
- (4) なんと空中に髪網が見えると私が思うとき、健全な眼を持つ者は、そうではない、汝の知覚が迷乱しているのである、と言う。
- (5) 翳眼という迷乱を取り除くために問われた。〔そこで〕彼〔の健全な眼を持つ者〕は、〔網髪〕はない、と説いた。〔しかし〕真実には、顕現も不顕現も〔共に〕空であるから、肯定も否定もないのである。

1) Tib 「文殊師利童子に帰命し奉る。」

2) Cf. *Laṅkāvatārasūtra* (ed. B. Nanjo, *The Laṅkāvatāra Sūtra*, Bibliotheca Otaniensis. Vol. I, Kyoto, 1923, p. 168.) keṣoṇḍukam yathā mithyā grhyate taimirikair jñanaiḥ / tathā bhāvavikalpo 'yaṃ mithyā bālair vikalpyate // 同偈は、*Prasannapadā* に引用されている。(ed. L. de la Vallée Poussin, *Mūlamadhyamakakārikās (Mādhyamikasūtras) de Nāgārjuna avec la Prasannapadā commentaire de Candrakīrti*, Bibliotheca Buddhica IV, St. Petersburg, 1903–1913, p. 262.) Cf. *Vimśatikā vijñaptimātratāsiddhi* (ed. S. Lévi, *Vijñaptimātratāsiddhi*, Paris, 1925, p. 3.) yathā taimirikasyāsatkeśacandrādidarśanam / Cf. *Triṃśikā vijñaptiprakaṛaṇa* (ed. S. Lévi, *op. cit.*, p. 16.) tadyathā taimirikasya keṣoṇḍukādy upacāra / 3) Tib 訳では atyanta を欠く。

4) Tib 訳による。 5) Tib 訳による。

6) Cf. “14. Aprastiṣṭhānaprakāśa” 2 偈, 本書 p. (78).

evam anāśravād¹⁾ dharmāt²⁾ sattvārthas tu pravartate /
bhoganirmāṇakāyābhyām pratityapraṇidhānataḥ // 6 //
tau ca tasmād na bhinnau ca tayos tu tatsvabhāvataḥ /
tādātmyam³⁾ nijam⁴⁾ siddham⁵⁾ syād bhedaś citsaṅgahānaye // 7 //
neṣyate yady anutpādo bhinno vyāvṛttito bhavet /
yogācāramatād⁶⁾ anyo madhyamārthaḥ⁷⁾ kathaṃ bhavet // 8 //
catuṣkoṭiprahānyā cet madhyamārtho viśiṣyate /
vijñāne 'pi prasaṅgaḥ syāt tāsām atrāpi hānitaḥ // 9 //
catuṣkoṭivirmuktaṃ jñānam vastu sadadvayam⁹⁾ /
kalpaśūnyam anālambaṃ vidur vijñānavādinaḥ // 10 //

1) $N_1 N_2$ ānāśravād, T °śravā

2) T °rmā

3) I tadā°

4) T °ja

5) $N_2 I$ bhedacit°

6) N_1 teṣyate

7) Sh °matā[da]nyo, N_1 °matā[one blank letter space]nyo, I yosobhyarakhatā
[illegible]nyo?

8) N_2 °mīrthaḥ

9) Sh °samucchrayam, N_1 sa[one letter damaged]dvayam, $N_2 I$ samadvayam,
Tib mtha' bzi las ni rnam grol ba'i / śes pa gñis med rdsas bden pa /

10) Sh °mbyam

- (6) 斯くの如く無漏なる法〔身〕に基づいて、受用身と変化身により、そして縁と誓願により、衆生利益が起こるのである。
- (7) その両者〔受用身と変化身〕は、それ〔法身〕と異なるものではない。しかも、その両者はそれ〔法身〕を自性としているから、本来的に同一性が成就しているのである。〔しかしながら〕心の執着を滅する為に〔その〕区別があるのである。¹⁾
- (8) もし不生が認められないのであるならば、差別に基づいて〔法身と受用身・変化身〕区別されたものになってしまうであろう。〔このような場合〕瑜伽行派の考えとは別に中〔観論者〕の義がどうしてあろうか、〔ありはしない。〕
- (9) もし四句〔分別〕を遠離することによって、中〔観論者〕の義が勝れているとするならば、〔唯〕識〔論者〕においても、同じことになってしまうであろう。〔なぜならば〕そこ〔識〕においてもまた〔四句分別を〕離れているからである。
- (10) 四句〔分別〕を離れた智は、真実と不二なる実在であり、分別がなく所縁がない、と〔唯〕識論者達は知る。²⁾

1) 法身と二色身との関係については、“6. Pañcatathāgatamudrāvivarāṇa”密教聖典研究会 (1988), p. (47) を参照されたい。

2) Cf. “20 Madhyamaṣaṭka”, 本稿 p. (88), catuṣkoṭivirmuktaṃ jñāna[m] vastusad advayam / kalpaśūnyam anālambaṃ viduḥ sākāravādinaḥ // 1 //

ここでは有形象論者 (sākāravādin) に拘る説示となっている。ここでは中観論者との関係で同偈が引用されていることから、唯識論者一般を指す vijñānavādin と置き換えられたものと思われる。

bhūtakoṭer ato viśvaṃ pratīyaivā¹⁾ prajāyate /

vastuśūnyam ajātaṃ tu kevalaṃ nāmamātrakam // 11 //

^(2...) bhedenākhyāya sarvajñaḥ^{...2)} svādhiṣṭhānaprabhāsvarau /

[Sh p.47] yaḍ³⁾ ekam anayor brūte tenocchede nirākṛtaḥ // 12 //

phalatattvavipakṣeṣu yasya⁴⁾ saṅgo na vidyate /

tasyānābhogayogena^(5...) bauddhaṃ^{...5)} niṣpadyate padam // 13 //

āryanāgārjūnair iṣṭaṃ⁶⁾ buddhadharmānusārataḥ /

dharmatattvam anutpādo^(7...) vyākṛtas te tathāgataiḥ^{...7)} // 14 //

kṛtvā tattvaprakāśaṃ^(8...) yat puṇyam āsāditam mayā^{...8)} /

tenāstu sakalo loko yuganaddhasya bhājanaḥ // 15 //

// Tattvaprakāśaḥ samāptaḥ⁹⁾ //

- (11) それ故に、真實際からすれば、全ては、縁によって生じ、実在性はなく、不生であり、ただ単に名前だけにすぎない。
- (12) 一切智者は、自加持と光明を区別して説いて、その兩者のうち的一方を説くことは、それ故に断〔見〕¹⁾であると論駁された。
- (13) 果と真実と対治に対する執着が存在しないもの、そのものには無功用の瑜伽によって仏陀の位が成就する。
- (14) 聖なるナーガールジュナによって〔も以下のことが〕仏法に従って認められている。不生が法の真実である。〔そしてこれが〕諸如来によって汝のために授記されているのである。
- (15) 『真実明説』〔なる書物〕を著して、私は功德を得た。それ〔功德〕によって一切の世間は、瑜伽双運の器であれかし。

「真実明説、終わる。」²⁾

(白石凌海)

1) N_1 pratātaiva, N_2 I pratītaiva

2) Sh °khyā[na]sarvajñaḥ N_1 N_2 I °khyāsarva°, Tib dbye ba ksun mkhen gyis gsuñs pa /

3) T yady

4) T yasyā

5) Sh bodhād..., N_1 bodhan..., N_2 bodham..., I bodhaniṣyate, Tib sañs rgyas...

6) Tib bstan pa'i

7) T °kṛtāste, N_2 °kṛtas tais

8) N_1 yadmāsāditam, I yatanomādita? omīḥ puṇya

9) N_2 adds iti

1) Tib 訳参照 (chad par rta ba)。

2) Tib 訳ではこの後「阿闍梨アドヴァヤヴァジュラ著し畢んぬ。」を加える。

14. Apratiṣṭhānaprakāśa¹⁾

[Sh p. 48] // namo buddhāya²⁾ //
 vitter yad apratiṣṭhānam³⁾ bauddhasarvasvam iṣyate /
 kiṃ cānābhogayogena yadi sattvārthakāritā // 1 //
 yady apohavidhī jātau tadocchedavidhisthitīḥ /
 sadājātāniruddhe tu janmocchedau paśor vacaḥ // 2 //
 svasaṃvittir atho mānaṃ vitteḥ⁸⁾ sattvaṃ tad iṣyate /
 sarvollekhavihinatvāt⁹⁾ sattvaṃ tatra na peśalam¹⁰⁾ // 3 //
 prṣṭhe yadiṣyate¹²⁾ sattvaṃ¹³⁾ vastu tadā na hi /
 pratijñocchedabādhārtham¹⁴⁾ anulekhaṃ tadocyate // 4 //
 vedanaṃ vidyate maule¹⁵⁾ prṣṭhe¹⁶⁾ tadavabhāsanāt /
 nirvikalpaṃ bhaved ādau jñānaṃ¹⁷⁾ tad grāhakaṃ tataḥ // 5 //

- 1) *P* aprasahaprakasa, *D* aprasahaprakāśa
 2) *Tib* 'jam dpal g'zon nur gyur pa la phyag 'tshal lo.
 3) *N*₁ *I* baudha°, *N*₂ bodha°, *Tib* sañs rgyas pa...
 4) *N*₁ *N*₂ *I* yadipoha° 5) *N*₂ jāto 6) *Sh* *N*₁ *N*₂ *I* tato°
 7) *Sh* *N*₁ janmacchedo, *N*₂ °do 8) *Tib* sems can
 9) *Sh* *N*₂ sarvālekhyā°, *N*₁ sarvōlekha°, *I* sarvālekha°, *Tib* snañ ba thams cad...
 10) *T* sarva, *Tib* sems can 11) *Tib* bden pa
 12) *T* °vāhyārtham, *Tib*...gnod pa'i don.
 13) *T* anullekham, *Tib* rjes su btags[*D* rtag?] pa
 14) *Sh* tad ucyate, *T* tadocyatām, *I* tadāmate
 15) *Sh* maulau, *N*₂ mau[one letter illegible], *I* maula
 16) *T* prṣṭu 17) *I* taṃ

14. 無住処明説

「仏陀に帰命し奉る。¹⁾

- (1) 智が無住処であり、さらにまた無功用の瑜伽によって衆生利益を為すものであるならば、〔それが〕仏教徒の全財産であると認められる。³⁾
 (2) もし否定とか肯定といった〔分別が〕生じるならば、その場合には断〔見あるいは〕常〔見〕に住することになる。常に不生であり不滅であるものについて、生滅〔を云々するの〕は、畜生〔の如き人〕の言葉である。⁵⁾
 (3) 自証が正しい認識手段であり、それ〔自証〕が智の本質と認められよう。〔智は〕全ての顕しだされた姿を欠いているから、その場合には〔智の〕本質は、人為的に形づくられたものではない。
 (4) もし〔智の〕本質が後に認められるならば、その場合には、本質は確かに〔本来的には〕実有ではない。〔かかる〕主張の断〔見〕を取り除く為に次のような教説が説かれる。
 (5) 後に、その顕現があるから、根本に感受が存在する。〔それと同様に〕先ず最初に無分別な智があり、その後それ〔無分別な智〕が能取となる。⁶⁾

- 1) *Tib* 「文殊師利童子に帰命し奉る。」
 2) *Tib* 訳参照 (śes par rab tu mi gnas pa)。「無住」に関するアドヴァヤヴァジュラの見解は、“*Tattvaratnāvali*” *Sh*. p.19-20. 宇井伯寿「*Advayavajra Tattvaratnāvali*」『大乘仏教の研究』東京, 1979, p.28-29, 36-37. を参照されたい。また智が無功用である記述は、“*Tattvaratnāvali*” *Sh*. p.20. にも見られる。
 3) Cf. “12. Svapnanirukti” 9 偈, 本書 p. (72).
 4) Cf. “*Tattvaratnāvali*” *Sh*. p.20. 宇井前掲書 p.7. 及び本書 “13. *Tattvapra-kāśa*” 5 偈, p. (74).
 5) Cf. “24. *Sahaśaṣṭaka*”, 密教聖典研究会 (1989), p. (145).
 prakṛtyājātadharmeṣu vidhyapohau paśor vacaḥ // II-cd //
 6) 根本に識があり他は後得である、とする論議については、“6. *Pañcatathāgatamu-drāvivarāṇa*”, 密教聖典研究会 (1988), p. (49) を参照されたい。

atitānāgatādīnām cittānām¹⁾ sthityasambhavāt /
 (2... 3) 4) (2) naiḥsvābhāvyam atas teṣām jagāda jagatām prabhuḥ // 6 //
 utpāda⁵⁾ eva dharmānām acintyo⁶⁾ nijasaṃvidā /
 (7... 7) 8) sa eva sūnyatā proktā nānyocchedānugāmini // 7 //
 apratiṣṭhānato bijād apratiṣṭhaṃ bhavet phalam /
 tāyinām tad varam tattvaṃ kṛtrimāt kṛtrimam^{9... 9)} yathā // 8 //
 dhyānam āsti na cety evaṃ na brūmo 'saṅgacāriṇām¹⁰⁾ /
 pratityotpādato yasmāt sadodeti yathā rasaḥ // 9 //
 (11) 12) (13) pratityotpadyate yad yad tad tac cīc citram advayam /
 (14... 15) (15... 15) (14) bhedas tu sūnyaciccitrair dharmasambhoganirmitaiḥ // 10 //
 apratiṣṭhām vidhāyaitad yad alābhi śubhaṃ mayā /
 tenāpratiṣṭhatām¹⁸⁾ yātu jagat sarvopabhogataḥ // 11 //
 // Apratiṣṭhānaprakāśaḥ samāptaḥ //

- 1) N_2 cintānām
 2) I naiḥsvābhāvyagata teṣām gādajamatām[one blank letter space]ta
 3) Sh °svabhāvyam 4) N_1 ataḥ 5) Sh N_1 N_2 I °dam
 6) Sh °ntyā, N_1 T °nto, N_2 °ntā 7) I sasava
 8) Sh N_1N_2I nānucchedā°, Tib cad pa'i rjes 'gro ma yin no
 9) N_1 kṛtimāt kṛtimam, N_2 kṛtitām kṛttimām, T kṛti[damaged] kṛtimam, I kṛtinocchatimam, Tib bcos ma'i bcos ma
 10) Sh aṅga°, N_1 N_2 I 'ṅga°, Tib chags med sbyor la
 11) T °tpadato, a separate hand corrected to °tpadyato.
 12) T yasmā 13) N_1 I °sa, Tib ṅams myoñ
 14) I pratityotpādadyate yad yatataḥ cicitam advaya
 15) Sh [cet]vittam, N_1 citum, N_2 ciccittam
 16) N_1 ddhadharma°, T ddharma° 17) N_1 I vidhāyētatar
 18) T °ṣṭhitam

- (6) 過去や未来などの心が〔現在に〕止まることがあり得ないので、それ故に、
 〔その心は〕無自性である、と世間の支配者は説いた。
 (7) 生得の知識によれば、諸法の生起こそが不可思議である。〔そして〕それ
 「生起」こそが空である、と言われるけれども、他者〔が批判する〕断〔見〕
 に従うものではない。
 (8) 無住処なる種子から無住処なる果が生じる。それが諸仏の最勝の真実であ
 る。〔それはあたかも〕所作から所作が〔生じる〕如くである。
 (9) 静慮は存在すとか〔存在し〕ないとか、このように我々は無執着なる行
 者に対しては説かない。それは何故ならば、縁起生のものであるからである。
 味わいが常に生じる如くである。
 (10) 何であれ縁によって生じたるものは、不二にして種々なる心である。また
 空にして多様な心によって、法〔身〕、受用〔身〕そして変化〔身のそれぞ
 れ〕に分けられる。
 (11) 私は、無住処を説いて善を得た。この〔善〕によって、世間の人々は全て
 を享受して無住処たれ。

「無住処明説、終わる。」

(白石凌海)

- 1) Tib 訳参照 (bdag gis mi gnas brjod pa las / dag ba bsags pa pañ yod des/).
 2) Tib 訳ではこの後に「阿闍梨アドヴァヤヴァジュラ著し畢んぬ」を加える。

19. nirvedhapañcaka¹⁾

buddhaṃ buddhaṃ jagac chuddhaṃ buddhabodhena bandhunā /
 ādiśuddha mahābuddha kiṃ buddhaṃ buddhaśāsane // 1 //
 idaṃ nivṛttapratipakṣatattvaphalavikalpasya sahanirvedhabhāḥ
 svābhāvikaṃ vacaḥ /
 jñānam anāvilam⁸⁾ śūnyam anābhogakṛpātmakam /
 pratītya jāyate tac ca svabhāvābhāvavarjitam // 2 //
 anena nirvedhapratirūpaṃ¹⁰⁾ ākhyāti /
 dharmāṇāṃ śūnyatā vāyu¹¹⁾ kṛpā¹²⁾ vāyu gariyasi /
 vāyu saṃvarasāmarthyam¹³⁾ vāyu śuddhā¹⁴⁾ ca saṃvṛtiḥ¹⁵⁾ // 3 //

1) nirvedha, which is usually translated into Tib. as nes par 'byed pa, is translated with the words mi phyed pa or dbyer med (pa) (=nirbheda). Tib. adds sañs rgyas la phyag 'tshal lo //

2) Sh. N₂. dvandvabodhe na vandhanāḥ (N₂. omits ḥ), N₁. bandhanāḥ for bandhunā.

3) Tib. sañs rgyas rtogs na 'gro ba dag / sañs rgyas rtogs pa can rtsa lag //

4) Tib. e ma 'o sañs rgyas gzod nas dag suggests the reading ādiśuddham aho buddhaṃ (or ādiśuddho ahobuddhaḥ, or ādiśuddha aho buddha), Sh. N₁. N₂. ādiśuddho mahābuddhaḥ (N₁. -buddha, N₂. -buddhaṃ)

5) Tib. sañs rgyas bstan pa ji ltar rtogs suggests the reading buddhaśāsanam.

6) Sh. N₁. N₂. add / 7) N₁. sahaḥ nirvedha-, Sh. N₂. sahaṃ nirvedha-

8) N₁. N₂. omit ṃ 9) Tib. dños po (=bhāva) for svabhāva

10) Tib. dbyer med rtogs pa'i rañ bñin for pratirūpaṃ. pratirūpa is usually translated with the word 'tsham pa (cf. Mhvy. No. 7021).

11) N₂. Sh. vāyur (ḥ), Tib. ya mtshan che

12) Sh. N₂. vāyur, Tib. ño mtshar che 13) Sh. vāyuh, Tib. mtshar

14) Tib. 'khor lo sdom pa'i nus pa (=cakrasaṃvarasāmarthyam)

15) Tib. śin tu mtshar 16) Sh. vāyusuddhā.

19. 決択についての五偈

(1) 仏陀の菩提と結びつくことによって、悟りを得た世間は清浄である。偉大なる仏陀よ、原初より清浄なるものよ！ 仏陀の教説に於いて、何が悟られるのか。

これは、対治と真理と果の妄分別を捨離した者で、生来決択を伴う者の、自然な言葉である。

(2) 無垢であり、空であり、無功用的憐憫を本質とする智は、縁って生じる。そしてそれは、自らの有と無を離れたものである。

この〔偈〕によって、決択の説明が述べられる。

(3) 諸法の空性は不可思議なるかな。憐憫はより不可思議なるかな。律儀の力は不可思議なるかな。そして、清浄なる世俗〔もまた〕不可思議なるかな。

1) 或いは「仏陀を悟った」。

2) Tib. 「悟りを得た世間は清浄である。悟りを有する者は親戚 (rtsa lag) である。嗚呼、仏陀よ、原初より清浄なる者よ。仏陀の教説は如何に悟られるのか」。

3) Tib. は「自らの」を省く。

ane[35ka]na nirbharasahajodgāram¹⁾ udgirati²⁾ -
 hā kiṃ brūmaḥ³⁾ katham⁴⁾ brūmo brūmo vā kva nu te janāḥ /
 buddhāvṛttir⁴⁾ bhaved yeṣāṃ³⁾ anābhogārthaśālīnī⁵⁾ // 4 //
 etena karuṇayā⁷⁾ 'pratiṣṭhitanirvacaniyā⁷⁾ dharmagambhīranayādhi-
 muktikapuruṣadurlabhatām⁸⁾ āvedayati /
 svakarmasūtrabijād⁹⁾ dhi marmacchedi phalaṃ mama /
 nāparebhyo¹⁰⁾ mayā himsro⁽¹²⁻¹¹⁾ 'py evaṃ saḥite^{...12)} *** // 5 //¹³⁾
 anena svakarmasūtragrathitopahatamatisakalāsattvaparigrahaṃ¹⁴⁾
 kurvāṇo¹⁵⁾ bodhisattvānāṃ hṛdayam ācaṣṭe /
 // nirvedhapañcakaṃ samāptam¹⁶⁾ //

- 1) *Sh.* udbhāram for udgāram
 2) *Sh.* udgirati. *Tib.* 'dis ni śin tu 'juṅs pas lhan cig skyes pa'i mthu bśad pa'o
 3) *Tib.* omits te...yeṣāṃ
 4) *Sh.* N₁. vaddhāvṛttir. *Tib.* suggests the reading buddhvā avṛ or buddhe 'vṛ-
 5) *Sh.* N₁. -arthaḥ for -artha-
 6) *Tib.* ha ci brjod pa ji ltar bśad // bśad na skye bo su yi go // rtogs par
 gyur na mi 'gyur ŋid // lhun gyis grub pa ŋid du snañ //
 7) *Sh.* N₁. nirvacanāya, *Tib.* omits nirvacaniya
 8) *Tib.* chos zab mo'i tshul reads -gambhiradharmanaya- for -dharma-gambhī-
 ranaya- 9) *Sh.* sakarma- for svakarma
 10) *Tib.* g'zan la, N₂. *Sh.* nāparādhyo, N₁. is uncertain.
 11) N₂. ty for 'py 12) *Skt.* omits three syllables.
 13) *Tib.* rañ gi las kyi sa bon skud // gnad gcod pa yi 'bras bu gañ // bdag
 gis g'zan la mi gtse ste // e ma'o de ŋid kyi ni bzod //
 14) *Tib.* bkris pa'i (=upagūḍha) for upahata
 15) kurvāṇānāṃ(?) 16) N₁. samāptaḥ

- この〔偈〕によって、深く生得的な感嘆(?) (udgāra) を述べる。¹⁾
 (4) 嗚呼、我々は、何を語り、如何に語るのであろうか? 或いは、その者達
 にとって、対象を得ることが容易であり、覚が生起しないところのその人々²⁾
 はいったい何処にいるのかと我々は語ろうか?³⁾
 この〔偈〕で、悲心をもって、無住で、語られるべき〔対象であること〕を⁴⁾
 絶した法の甚深なる理趣を信ずる衆生の得難きことを説く。
 (5) 私の〔業の〕果は、自業の〔相統〕の糸の種子から断ち切られているから、
 私は、他に対して害することさえもない。⁵⁾ 嗚呼、私は、そのものを耐える。⁶⁾
 この〔偈〕によって、〔彼は〕、自らの業の〔相統の〕糸に結び縛られた心を⁷⁾
 持つすべての衆生の守護を為しながら、菩薩達の心を明らかにした。

決択についての五偈〔という著作〕を終わる。

(鈴木晃信)

- 1) *Tib.* 「この〔偈〕で、まったくの寛大によって^{a)}、生得的力が述べられる」。
 a) śin tu 'juṅs pas は「過度の貪欲によって」という意味であるが、密教系テ
 キストのチベット語では逆の意味になりえる。(Lama Choedak 氏, The
 Australian National University, による)
 2) 或いは「生起する」。
 3) *Tib.* 「嗚呼、述べられたことを如何に我々は、説こうか? もし(それが) 説かれ
 たとしても、いったい誰が理解しようか? もし理解されたなら、(理解) されなかつ
 たもの (mi 'gyur ŋid) は、自ら成就したもの (grub pa ŋid) とみられよう」。
 4) *Tib.* は「語を絶した」を省く。
 5) 或いは「私によって、他から害されることもない」。
 6) *Tib.* に従って訳す。或いは、「まさにそれ故に、忍耐せよ」。
 7) *Tib.* に従って訳す。Skt. 「害せられた」。

20. madhyamaṣaṭka¹⁾

catuṣkoṭivīnirmuktaṃ^(2...) jñāna[m]^{...2)} vastusad advayam /
kalpaśūnyam anālambaṃ viduḥ sākaravādināḥ // 1 //³⁾ ⁴⁾
svasaṃvitter anucchedān nilādinām abhāsanāt /⁵⁾ ⁶⁾
nimittānām anutpādān madhyamā pratīpan matā // 2 //⁷⁾ ⁸⁾
catuṣkoṭivīnirmuktaḥ⁹⁾ prakāśo 'likalakṣaṇaḥ¹⁰⁾ /
māyopamādvayaś caīṣa siddhānto mānasaṅgataḥ // 3 //¹¹⁾
vastuśūnyā tu yā vittir nirākārā nirañjanā /
madhyamā pratīpat saiva tatprṣṭhe śuddhasaṃvṛtiḥ // 4 //¹²⁾
prakāśo vāprakāśo vā tattvato nopalabhyate /¹³⁾
sarvathā^(14...) jātarūpatvān^{...14)} madhyamām apare viduḥ // 5 //¹⁵⁾
catuṣkoṭivīnirmuktaḥ¹⁶⁾ prakāśo devatātmakaḥ /
śātādvayasvabhāvaś ca pratīyotpādamātrakaḥ // 6 //¹⁷⁾ ¹⁸⁾
// madhyamaṣaṭkaḥ samāptaḥ //¹⁹⁾
/ kṛtir iyaṃ mahāpaṇḍitāvadhūtaśrīmadadvayavajrapādānām iti //²⁰⁾ ²¹⁾

- 1) *Skt.* madhyakaṣaṭka, *Tib.* rgya gar skad du / ma-dhya-ma-ṣa (*D.śu*)-ṭa / bod skad du / dbu ma drup pa / . *Tib.* adds sañs rgyas la phyag 'tshal lo //
2) *Tib.* śes pa skad cig ma yod de. *N*₁. is uncertain, *N*₂. *Sh. Pathak.* jñāna-vastu sad advayam / 3) *Sh. Pathak.* anālambyam
4) Cf. 13. Tattvapraśāsa v.10: catuḥkoṭivīnirmuktaṃ jñānaṃ vastu sadadvayam. (*Tib.* mtha' bzi las ni rnam grol ba'i / śes pa gñis med rdzas bden pa /) kalpaśūnyam anālambaṃ vidur vijñānavādināḥ //
5) *N*₁. omits -r a- 6) *Tib.* snañ ba (=ābhāsa) 7) *Tib.* adds de ni
8) *Tib.* chad pa ma yin rañ rig ni // sñon po la sogs par snañ ba // de ni mtshan ñid kyes ma skyes // dbu ma pa yi lam du 'dod //
9) *N*₁. *N*₂. nirmuktaṃ 10) *N*₁ (*in the reduplicated text*). *Sh.* prakāśalikalakṣaṇaḥ, *N*₂. prakāśalokalakṣaṇaḥ. 11) *Pathak.* māyopamo [']dvayamaś
12) *eva is omitted in N*₁ (*in the reduplicated text*). 13) *Tib.* de ñid la ni
14) *N*₁ (*in the reduplicated text*). ajātavāt
15) *After this verse, N*₁. *N*. repeat the 3rd, 4th and 5th verses
16) *N*₁. vimuktaḥ for vīnirmuktaḥ 17) *N*₁. śātā- for śātā-, *Pathak.* śātā-. *Tib.* gñis med mchog tu bda ba'i dños 18) *N*₁. omits ti of prati-, *N*₂. -mātrakaḥ for -mātrakaḥ 19) *N*₁. *N*₂. *Sh.* madhyakaṣaṭkaḥ (*Sh.* omits ḥ)
20) *N*₁. omits da of -śrīmadadvaya-
21) *Tib.* adds bla ma ba dzra pa' ñi dañ nag tshos bsgyur ba'o //

20. 中〔道〕についての六偈¹⁾

- (1) 四句〔分別〕を離れた知は、実在があり、不二であり、分別を離れ、無依であるとする有形象論者は考える。²⁾ ³⁾ ⁴⁾
(2) 自内証智は不断であるから、青等は顕現するのではないから、〔そして、〕諸々の迷乱の因 (nimitta) が生じないから、〔それが、〕中道であると考えられる。⁵⁾ ⁶⁾ ⁷⁾ ⁸⁾ ⁹⁾
(3) 四句〔分別〕を離れた顕照は、虚偽の相を有し、幻の如く不二であると云うこの学説は、基準たりうる。¹⁰⁾ ¹¹⁾
(4) しかしながら、実在がなく、無形象であり、汚れの無い認識そのものが中道であり、その後、清浄な世俗がある。¹²⁾ ¹³⁾
(5) 表象であれ、無表象であれ、真実〔在〕としてあるのではない。すべての点で不生を本質とするから、と他の者達は中道を考える。¹⁴⁾
(6) 四句〔分別〕を離れた表象は、尊格そのものであり、歓喜と不二なる自性を有し、単に縁起生のものである。¹⁵⁾
中〔道〕について六偈〔という著作〕を終わる。

これは、大学者であり、哲人である聖なるアドヴァヤヴァジュラ上足の著作である。¹⁶⁾

(鈴木晃信)

1) 本章のサンスクリット語のタイトルは、madhyakaṣaṭka となっているが、中道 (madhyamā pratīpat) が、述べられているので、チベット語訳、そして、David Seyfort Ruegg (A History of Indian Literature, p.107), Pathak 両氏に従って、madhyamaṣaṭka とする。

さて、中道は仏教の根本的思想であり、中道が述べられていることによって、それが直ちに中観派の思想であるとは確定されない。しかし、中道が中観派が強調した思想であることも事実である。^{a)} 本章では、認識論を中心とした種々の中道説が説示されているのであるが、それらが、チベット語文献で見られる中観派の分類に相応すると考えられるものの、後期仏教の認識論では中観派の思想に、瑜伽行派、経量部との共通部分があり、本章の記述だけでは特定できない。

a) Cf. 宮本正尊『根本中と空』p.18-19.; P. L. Vaidya, Études sur Āryadeva et son Catuḥśataka, Paris, p.34.; 長尾雅人「中辺分別論の題名」『結城教授頌寿記念仏教思想史論集』; 早島理「Ratnākaraśānti の中道思想—madhyamālamkāropadeśa における—」『印度学仏教学研究』(IBK), Vol.26, No.2, 1978. また、18. Tattvapraśāsa の第八偈に neṣyate yady anut-

pādo bhinnno vyāvṛttito bhavet / *yogācāramatād anyo madhyamā-rthaḥ katham bhavet* // という用例が見られ、「瑜伽行」と「中」が対比されているが、これが即、後期大乘仏教において学派としての「瑜伽行唯識派」と「中観派」を指すかどうか、不明である。madhyamaka等の意味用法および、中観派との関係について、斎藤明「〈初期〉中観派とブッダパーリタ」『仏教学』、No. 24, 1988. ; 八力広喜『「中論」と中観派』、IBK. Vol. 29, No. 2, 1981. 参照。

2) 「四句〔分別〕を離れた」(catuṣkoṭivirmukta) は第 1, 3, 6 偈で用いられている重要な言葉である。ここでその用例を考察する。

1. アドヴァヤヴァジュラの著作に見られる用例

na san nāsan na sadasan nacāpy anubhayātmakam /
catuṣkoṭivirmuktaṃ tattvaṃ mādhyamikā viduḥ //

[Tattvaratnāvalī v. 25, 幻喩不二派の教理の説明の中で用いられている。また、同一の偈が Jñānasārasamuccaya v. 28 にある]

catuṣkoṭivirmuktaṃ tattvaṃ tattvavido viduḥ /
catuṣkoṭivirmuktaṃ tu catuṣkoṭisamāśritam //

[18. Mahāyāmaviṃśikā v. 5. 密教聖典研究会 (1990), p. (74)-(75)]

catuṣkoṭiprahāṇyā cet madhyamārtho viśiṣyate /
vijñāne 'pi prasaṅgaḥ syāt tāsām atrāpi hānitaḥ //

[13. Tattvapraṅkāśa v. 9. 本稿]

13. Tattvapraṅkāśa v. 10 (本テキスト注 4 に引用) を参照。そこでは、vijñānavadin に関して述べられている。

2. その他の著作に見られる用例

atas tattvaṃ sadsadubhayānubhayātmakacatuṣkoṭivirmuktaṃ śūnyam eva /
[Abhyankar, ed. "Sarvadarśanasamgraha", Poona 1924. p. 29. Sarvadarśana-samgraha の中観派の説明、桂紹隆「ダルマキールティにおける「自己認識」の理論」p. 4 参照]

na san nāsan na saḍasan na cāpy anubhayātmakam /
catuṣkoṭivirmuktaṃ tattvaṃ mādhyamikā viduḥ //

[Bodhicaryāvatārapañjikā p. 177. (Buddhist Skt. Texts). Cf. Jñānasārasamuc-chaya v. 28]

「[真実は、瑜伽行派の説くように] 存在ではない。[順世派 Lokāyata の説くように] 非存在ではない。存在・非存在 [を超越した第三者] ではない。また [存在・非存在の] 両者を本性とするものでもない。従って、四極端を離れ賢明なる中観派にとって [四極端を離れた空性こそが] 真実である。」

[桂紹隆「ダルマキールティにおける「自己認識」の理論」p. 9 より引用]

na san nāsan na sadasan na cobhāhyām vilakṣaṇam /
catuṣkoṭivirmuktaṃ tattvaṃ mādhyamikā viduḥ //

[Sarvasiddhāntasamgraha III. 7]

以上の用例から、catuṣkoṭivirmukta が、Tattvapraṅkāśa v. 10を除いて、中観思想の真実に関係していると思われる。

catuṣkoṭi に関しては、梶山雄一『仏教の思想 3・空の論理〈中観〉』pp. 15~; 江島恵教『中観思想の展開』pp. 30-32, pp. 240-248. 参照。

3) この vastusat は第 4 偈の vatuśūnyā に対応するものであろう。Sautrāntika-Svātantrika に属すると考えられている^{a)}バヴィヤの『中観宝灯』に「われわれ中観者は世俗として仮立されたる唯事 (vastumātra) は有る、とする^{b)}」という記述が見られる。

a) Cf. 一郷正道「瑜伽行中観派」『講座大乘仏教』Vol. 7, p. 187.

b) Cf. 長沢実導『瑜伽行思想と密教の研究』p. 456.

4) advayam (Tib. (śes pa) gñis med) は、advayajñāna を意味するのであろうか? チベット語訳では「不二」を skad cig ma yod と訳している。Pathak は、これを akṣaṇika と還梵し、Vijñānavādin-s の akṣaṇikanityajñāna と関連づけているが、skad cig ma を kṣaṇa, yod を sat etc. の訳語と見るべきであろう。Advayavajra の高弟である訳者 Vajrapāṇi は、『Guruparamparakramopadeśa』のなかの経量部説の説明で、「極微は非顕現であるが、現前の有相の認識知は対象によって生じているから、その存在が推知される。それによって生じた認識知は刹那 (滅) である。」[磯田照文 (1978), p. 117] と述べている。外界の対象の存在を認める経量部の思想と関連があるのであろうか?

5) じかに対象を認識する直接知覚 (pratyakṣa) を意味しているのであろうか?

6) 13 Tattvapraṅkāśa 第 10 偈と同じ記述で「有形象論者」が「[唯] 識論者」に代えられている記述が見られる (テキスト注 4 参照)。このことは、この記述が、有形象論者で、[唯] 識を説く思想であることを伺わせる。ただし、チベット語訳は、異なる。

7) この偈は第一偈と関連した有形象説の説明であると思われるので、abhāsanāt という記述は不自然である。チベット語訳 (snañ ba) によると abhāsanāt あるいは、bhāsanāt であるべきであるが、ミーターの関係上不可である。

8) āryalaṅkāvatāre / bhrāntim vidhūya sarvām hi nimittaṃ jāyati yadi / saiva tasya bhaved bhrāntir aśuddham timiraṃ yathā //

[6. Pañcatathāgatamudrāvivarāṇa v. 16, 密教聖典研究会 (1988), p. (55)] という引用が見られることから、nimitta を「迷乱の因」と訳す。

9) チベット語訳は、「不断の内証智が青等として顕現する [のであるが]、それらは、迷乱の因 (nimitta) によって、生じたのではない。それが、中道であると考えられる。」であり、第一偈と独立している。

10) mantrasamsthānayogātmā sāte majjati dhidhanaḥ /
māyopamam tato 'dvaitam viśvaṃ paśyati tādrśam //

[16. Mahāsukhapraṅkāśa v. 10. 密教聖典研究会 (1990), p. 303] を参照。

māyopamādvayavādin については、Tattvaratnāvalī 中観派の項参照。また本注 2 も参照。白岩顯成氏によると、Jitāri は「最高の真実としては、無形象の心識に迷乱として顕現する」と考える無形象有垢の立場をとり、無形象中観有垢派であるとし、また、彼がアドヴァヤヴァジュラが Tattvaratnāvalī で述べている幻喩不二派であるという^{a)}。それに従うならば、この偈は無形象中観有垢派の説を意味しているのであろうか?

a) 白岩顯成「Sugatamatavibhaṅgabhāṣya 第四章 中観派の教義和訳」『南都仏教』No. 55, 1986, pp. 13-20. 参照。

11) 無相唯識派のラトナーカラシャーントンティ Ratnākaraśānti (10-11 A. D.) は『般若波羅蜜多論』Prajñāpāramitopadeśa で次のように述べている。

「ところで、外界実在論と有形象知識論者との中観二派は、經典や論書や正しい認識

手段 (pramāṇa) から逸脱しているから、すでに否定されている。無形象知識論者で唯心を主張する (中観派) だけが残っているが、かれらは、なにゆえ、心の輝き (prakāśa) を虚偽 (alika) であると主張するのか。(Prajñāpāramitopadeśa, Pek. ed. vol. 114, 244, 2⁴⁻⁵) [一郷正道「瑜伽行中観派」『講座大乘仏教』Vol. 7, p. 208, n. 4より引用; 松本史朗「Ratnākaraśānti の中観派批判 (下)」, p. 156.; 桂紹隆「ラトナーカチャーレンティ再考」IBK. Vol. 30, No. 1, 1981. 参照] ここで述べられている外界実在論の中観派と第1偈^{a)}, 有形象知識論の中観派と、第2偈^{b)}との対応が問題となる。

a) 注3, 4, 6 参照。

b) チベット語訳に従う。

- 12) Cf. rūpam asya matam svaccham nirākaraṃ nirañjanam / [Tattvaratnāvali v. 20a, 無相唯識派の説明]
- 13) Pathak (1961) 同様, チベット語訳 rjes thob dag pa'i kun rdzob yin を考慮するなら, 「後得清浄世間智」を意味するのであろう。
- 14) śātādvaya という語は, Tattvaratnāvali v. 20 の前にみられる。
- 15) sātacid devatākāraṃ viśvacakram upāyakam /
prajñā ca śūnyatā proktā sādhyatādātmyam iṣyate //
- [16. Mahāsukhaprakāśa v. 10. 密教聖典研究会 (1990), p. 303] において, sāta (=śāta), devatā が用いられている。
- 16) Tib. は, 「ヴァジュラパーニ (Vajrapāṇi) と Nag tsho によって [訳] された」を加える。

* 本章の第5偈までで述べられた思想と中観各派や唯識派の各思想との具体的対応は, 稿を改めて考察したい。

Nirvedhapañcaka & Madhyamaṣaṭka 訂正表

| | 誤 | 正 |
|-------------|--|--|
| | 偈 | → 偈 |
| p.255, 1.18 | ahobuddhaḥ | → aho buddhaḥ |
| " 1.24 | Mhvy | → Mahāvuyutpatti |
| p.253, 1.2 | ṣ | → (s...) |
| " 1.4 | -nirvacaniya dharmā- | → -nirvacaniyadharmā- |
| " 1.14 | avṛ | → avṛ- |
| " 1.20 | svakarma | → svakarma- |
| p.251, 1.4 | anucchedān ^ṣ | → ṣ anucchedān |
| " 1.11 | sarvathā jāta- | → sarvathājāta- |
| " 1.20 | catuḥ- | → catuṣ- |
| " 1.21 | mtha' bzi | → mtha' bzi |
| " 1.30 | N _r N _r repeat ... | → N _r N _r repeat ... |
| p. 250 1.15 | 中 [道] について六... | → 中 [道] についての六... |
| " 1.20 | A History of Indian Literature | → The Literature of the Madhyamaka School of Philosophy in India, A History of Indian Literature Vol. VII, No.1, 1981, Wiesbaden |
| " 1.32 | 18. Tattvaparakāśa | → 13. Tattvaparakāśa |
| p.249 1.11 | naçāpy | → na cāpy |
| " 1.17 | 18. Mahāyānaviṃśikā | → 18. Mahāyānaviṃśikā |
| " 1.19 | tāsām | → tāsām |
| " 1.21 | vijñānavādin | → vijñānavādin |
| " 1.24 | atas tattvaṃ sadasadubhayā- | → atas tattvaṃ sadasadubhayā- |
| " 1.26 | 「自己認識」の理論 p.4 参照 | → 「自己認識」の理論, 「南都仏教」23号, 1969, p.4 参照 |
| " 1.31 | Jñānasārasamucçhaya | → Jñānasārasamuccaya |
| " 1.37 | cobhāhyām | → cobhāhyām |
| " 1.39 | III. 7 | → III. 7, 桂紹隆前掲書, p.38, n. 47. 参照 |
| p.248 1.1 | vaṭuṣūnyā | → vastuṣūnyā |
| " 1.17 | 13. Tattvaparakāśa | → 13. Tattvaparakāśa |
| " 1.23 | bhrāntiṃ | → bhrāntiṃ |
| p.247 1.18 | 16. Mahāsukhaprakāśa v. 10 | → 16. Mahāsukhaprakāśa v. 12 |

22. Tattvadaśaka

1. sadasadyogahināyai tathatāyai namo namaḥ /
anāvilā yataḥ saiva bodhato bodhirūpiṇī //
2. na sākārā²⁾ nirākārā³⁾ tathatā⁴⁾ jñātum icchataḥ /
madhyamā⁵⁾ madhyamā caiva guruvāganalaṅkṛtā //
3. bodhir⁶⁾ asau bhaved bhāvaḥ saṅgaṃ⁷⁾ tyaktvā⁸⁾ svabhāvataḥ /
āsaṅgo bhrāntito⁹⁾ jāto bhrāntir¹⁰⁾ asthānikā matā //
4. kiṃ tattvaṃ vastuno rūpaṃ rūpaṃ cārūpakam yataḥ /
arūpaṃ ca bhaved rūpaṃ phalāhetusvabhāvataḥ //
5. evam ekarāsā¹¹⁾ dharmā nirāsaṅgā nirāspadāḥ /
prabhāsvarā¹²⁾ amī sarve yathābhūtasamādhinā //

- 1) *T* °ni. 2) *N*₁ *N*₂ *Sh* °ra-. 3) *T* °rām; *N*₁ ra(?); *N*₂ *Sh* °re.
- 4) *N*₂ *Sh* °tām. 5) *N*₁ °mī(?); *Sh* madhyamā 'madhyamā.
- 6) *T* bodhaurasau(?). 7) *T* °gan; *N*₁ om. m. 8) °ttkā(?)
- 9) *T* bhrātito. 10) *Sh* yāto; *Tib* med 'gyur.
- 11) *N*₁ *N*₂ *Sh* eva rasā; *Tib* ro gcig. 12) *T* ?mī.

Tibetan text:

1. yod dañ med pa'i sbyor bas kyañ / spañs pa gañ žig dri med pa /
byañ chub rañ bžin rtogs pa gañ / de bžin ŋid de phyag 'tshal 'dud //
 2. de bžin ŋid ni šes 'dod pas / rnam bcas ma yin rnam med min //
bla ma'i ŋag gis ma brgyan pa'i / dbu ma'añ 'brin po tsam ŋid do //
 3. dños po 'di ni byañ chub 'gyur / chags pa spañs pa'i rañ bžin ŋid /
'khrul pa las ni chags med 'gyur / 'khrul pa'añ gnas pa med par 'dod /
 4. de ŋid ci na dños rañ bžin / dños po dños med gañ yin pa'o /
dños po med pa'añ dños por 'gyur / rgyu dañ 'bras bu'i rañ bžin gyis /
 5. de lta chos rnam ro gcig ste / thogs pa* med ciñ gnas med par /
ji lta ba yi tiñ 'dzin gyis / 'di dag thams cad 'od gsal te //
- (* *D* thog ma)

22. 真実についての十偈*

- (1) 存在する・存在しないという〔言葉の〕使用を離脱している真如に帰命頂礼します。なぜならそれ(=真如)こそは清浄であり、悟られているお方の悟り(=菩提)を本質¹⁾としているからである。
- (2) 〔真如を〕知ろうと欲する者にとっては真如は有相でもなく無相でもない。²⁾〔真如は〕中庸であり、それも〔それを修飾するどんなに〕立派な言葉によっても飾られることはない中庸以外ではない。
- (3) 自己本質から執着を捨て去ることにより、かの菩提という状態が生じよう。³⁾執着は錯乱より生じる。錯乱は固定的なものではないと考えられる。
- (4) 真実とは何か。実在物の本質³⁾である。すなわち色は無色のものであり、無色は色であるのである。⁴⁾因果〔性〕を本性とするから。
- (5) このように、これら一切の諸法は等味であり無執着であり無住であり、そして如実三昧により光り輝くのである。

* この Tattvadaśaka には Sahajavajra による長い注釈がある (Tattvadaśakaṭīkā. P No. 3099; D No. 2254)。しかし今回は諸事情によりこの注釈を十分に参照することができなかった。

- 1) Tib: rañ bžin.
- 2) *Sh* と *N*₂ の読み (na sākāranirākāre tathatām jñātum icchataḥ) に従えば、「真如を知ろうと欲する者にとっては有相〔識〕も無相〔識〕もない」となろうか。しかし c 句の madhyamā との対立関係、そして蔵訳を考慮して解釈した。
- 3) Tib: rañ bžin.
- 4) 般若心経の色即是空・空即是色を想起させる。

6. yathābhūtasamādhiś ca bhavet prasthānacittataḥ /
 ajasraṃ jāyate tattvaṃ yasmāt tatpadavedinām¹⁾ //
7. jñānajñeyavihināṃ ca jagad evādvayaṃ matam /
 dvayahinābhimānaś²⁾ ca tathaiva hi prabhāsvaraḥ³⁾ //
8. etat tattvābodbodhena yena tena yathā tathā /
 vivṛtākṣo bhramed yogī keśariva samantataḥ⁴⁾ //
9. lokadharmavyatīto 'sau unmattavratam āśritaḥ /
 sarvaṃ karoty anālambdaḥ svādhiṣṭhānavibhūṣitaḥ⁵⁾ //
10. uktam anāvilāṃ tattvam advayaṃ yac ca bhāṇyate⁶⁾ /
 samāsamam ato hitvā jñātum arhanti dhidhanāḥ⁷⁾ //

- 1) Sh tat pada-. 2) N₁ N₂ om.; Sh [tu]. 3) T N₁ om. m.
 4) T °bhimāna??? tathaiva; N₁ N₂ °bhinopaśca; Sh °bhiropaśca; Tib(D) rlom
 pa! 5) N₁ N₂ Sh °varodhena. 6) N₁(?) N₂ °te.
 7) T °tta??tam; N₁ utmattavratam; Tib spyod pa. 8) N₁ om. m.
 9) Sh -bibhūṣitaḥ. 10) Sh bhanyate. 11) T dhimatāḥ.

Tibetan text:

6. ji lta ba yi tiñ 'dzin yañ / rab tu 'jug pa'i sems ñid kyis /
 gañ phyir de yi* gnas rig pas / de ñid rgyun mi 'chad las skyes /
 (* D yañ)
7. śes dañ śes bya rnam bral ba'i / 'gro ba ñid ni gñis med 'dod /
 gñis dañ bral ba* rlom pa** yañ / de ltar 'od gsal ba ñid do //
 (* D bar. ** P rlob pa.)
8. de lta'i de ñid ñes rtogs na / ji lta de ltar gañ de na /
 rnal 'byor mig ni rgyas 'gyur bas / kun tu señ ge ji bzin no /
9. 'jig rten chos la rnam log 'dis / smyon pa'i spyod pa la brten nas /
 bdag byin brlab pas rnam brgyan nas / dmigs pa med par thams cad byed /
10. dri med de ñid gañ bstan ciñ / gñis su med par* gañ smras pa /
 mñam dañ mi mñam 'di spañs nas / blo chen rnams kyis rtogs bya'i rigs /
 (*D pa.)

- (6) また如実三昧は必ず発趣心より起こる。というのは、その〔如実三昧の〕境地を知悉した者達に真実が絶えず生じるのである。
- (7) そして〔彼らにとっては〕世界は実に知と所知を離れ、不二であると考えられている。そして、慢が二を離れた者は、全く同様に(=不変に)光り輝く。
- (8) それは真実の覚知によって〔可能となるの〕である。そ〔の覚知〕によって〔彼は〕あるがままに〔存するので〕ある。〔すなわち〕完全に開眼した瑜伽者はさすらい歩くのである、獅子のように。
- (9) 彼は世間の法を捨て、瘋狂な行為に身をまかせる。自加持に飾られて〔護られ〕、依処なく、一切〔の行為〕を行なう。
- (10) 不二と説かれるものが、清浄な真実であると言われるものである。それゆえ、智を持つ者たちは平等・不平等を離れて〔その真実を〕知ることができる。

(矢板秀臣)